

# 大釜遺跡 金山古墳群

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第7集—

1983

群馬県教育委員会  
群馬県埋蔵文化財調査事業団



おお がま 遺 跡  
かな やま 金 山 古 墳 群

— 関越自動車道（新潟線）地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第7集 —

1983





16号住居址床下土壌セクション



16号住居址床下土壌セクション  
('貼り床2'層を掘り込んでいる。上面には'貼り床1'が貼られている)



19号住居址「貼り床1」層除去後  
(床面貼り替え前の状態)



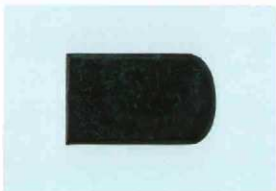
19号住居址掘り方セクション



大釜遺跡出土円面硯



大釜遺跡出土円面硯



大釜遺跡出土陀尾(表)



大釜遺跡出土陀尾(裏)



## 序

関越自動車道新高線も、新高までの全線開通をめぐして、本格的な工事にかかりはじめました。静かな山村のたたずまいをみせていた月夜野町師地区では、インターチェンジの設置が決まり、大きな時代の流れの中で、地域は確実に変ぼうをとげようとしています。

ここに報告します二つの遺跡は、このインターチェンジの近くで発見されたものです。大釜遺跡では奈良時代から平安時代にかけての多くの竪穴住居跡を調査するとともに、金山古墳群では、横穴式石室をもつ4基の古墳を調査し、利根川上流地域における古墳時代から平安時代にかけての、人々の生活の一端を知るための貴重な資料を得ることができました。

これら遺跡の報告書をここに刊行する運びとなりましたのも、日本道路公団東京第二建設局の関係者をはじめとして、現地で調査にあたった職員と地元の方々、整理作業にたずさわっていただいたの方々等陰に陽に御協力をいただいた多くの人々の御理解と御援助の賜物であります。ここに厚く感謝の意を表します。

多くの人々の力が結集されてつくられた本報告書が、今後広く、有効に活用され、後の世に生かされていくことを願い序といたします。

昭和58年3月25日

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎





## 例 言

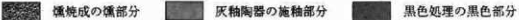
1. 本書は関越自動車道建設工事に伴い事前調査された沼田市大釜町・堀廻町地内に所在する大釜遺跡及び、月夜野町大字師字金山地内に所在する金山古墳群の調査報告書である。
2. 事業主体 日本道路公団東京第二建設局
3. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
4. 発掘調査期間 大釜遺跡 昭和56年4月20日～昭和56年9月28日  
金山古墳群 昭和56年9月14日～昭和56年12月26日
5. 大釜遺跡・金山古墳群の発掘調査担当者は次のとおりである。  
坂口 一 (群馬県埋蔵文化財調査事業団)  
石北 直樹 ( 同 上 ・現 沼田市教育委員会)  
大西 雅広 ( 同 上 )
6. 本書の執筆者は次のとおりである。文責については目次に姓を記した。  
坂口 一 石北直樹 大西雅広 小野和之 山口逸弘(群馬県埋蔵文化財調査事業団)  
金山古墳群出土人骨に関しては聖マリアンナ医科大学教授森本岩太郎氏より玉稿をいただいた。  
土器の胎土分析に関しては花岡社一氏(群馬県工業試験場)に依頼した。
7. 本書の作成及び資料整理の担当は次のとおりである。  
鈴木 幹子 土器接合・復元、遺構トレース、遺物・遺構写真版下作成  
青木 静江 同 上 、遺物実測・トレース、遺構・遺物版下作成  
高橋 順子 同 上 、 同 上 、 同 上 、拓本、原稿浄書、  
佐藤 元彦 遺物写真撮影  
浜野和宗作 金属器保存処理、金山古墳群出土人骨パラフィン含浸処理  
伊能 敬司 同 上 、 同 上  
関 邦一 同 上 、 同 上  
大西 雅広 遺物観察表、編集
8. 石器・石製品の石材鑑定は田中宏之、飯島静男両氏にお願いした。
9. 本書作成にあたって次の方々の御協力・御教示をいただいた。(敬称略)  
大江 正行 小川 貴司 鈴木 徳雄 谷藤 保彦  
中沢 悟 原 雅信 前沢 和之 水田 徳  
綿貫 邦男 月夜野町教育委員会 沼田市教育委員会
10. 発掘調査及び本書作成時の事務担当は次のとおりである。  
小林起久治 沢井良之助 白石保三郎 井上 唯雄  
松本 浩一 近藤 平志 国定 均 山本 朋子  
柳岡 良宏 笠原 秀樹 吉田 有光 吉田 笑子  
吉田 恵子 並木 綾子 野島のふ江 今井もと子

11. 大釜遺跡・金山古墳群の発掘調査作業員は次のとおりである。(敬称略)

阿倍登志子	上原 末枝	生方 幸男	生方 玉枝	大島 寿幸	大島 はる
大島むつみ	小川 政之	小野里あき	小野里さく	金井浦太郎	河合 博子
河合 禅龍	川端千恵子	川端 操	小林アイ子	板井 イシ	島田 えい
七五三木康三	関 まき	関 もと	高橋 満枝	高橋ミヨコ	田中 光枝
田村 茂子	近岡 一郎	角田 静枝	富沢 つね	外山きみ子	中村ヒサエ
馬場さち江	馬場ひこ江	羽島 みつ	林 いち	林 巴	林 ふで
原 とく	笛木 栄子	保坂 ムツ	増田 寿助	宮崎くら子	

12. 出土遺物は現在埋蔵文化財調査センターに保管している。

## 凡 例

1. 遺構挿図中に記した断面基準線は海拔で表わした。
2. 遺構実測図の縮尺は住居址堀・カマド堀を原則とした。他は不統一である。
3. 遺構挿図中の方位は大釜遺跡は磁北を、金山古墳群は座標北を示す。なお、月夜野町後閑周辺の磁針方位は西偏約7°00'である。(国土地理院発行2万5千分の1地形図による)
4. 遺構挿図中のスタリントーンは地山を示す。遺物挿図中のスタリントーンは次のとおりである。  
 煨焼成の礫部分    灰釉陶器の施釉部分    黒色処理の黒色部分
5. 土器実測図は凡に統一した。他の遺物は不統一である。  
遺構写真図版の縮尺は任意である。遺物写真図版は約写を原則とし、他のものは実測図の縮尺に近づけた。なお墨書土器の墨書部位写真は赤外線写真であり、縮尺は任意である。
6. 土器実測図上の矢印はロクロの回転方向を示す。土器実測図中心線の破線は残存率1/4以下のものを復元実測したことを示す。また土器実測図外面の実線は回転ヘラ削りの開始及び終りを示し、一点鎖線は回転ヘラ削り後ナゲ調整を行っていることを示す。
7. 大釜遺跡出土遺物の観察は表組を原則とし、金山古墳群出土遺物の観察は本文記述を原則とした。
8. 遺物写真図版中の番号は遺構名と遺物番号である。
9. 本書の記述は調査時に付した遺構番号順を原則とした。



# 目 次

序 文  
例 言  
凡 例

## 大 釜 遺 跡

第1章	発掘調査に至る経過 (坂口)	1
第2章	発掘調査の方法 (坂口)	1
第3章	発掘調査の経過 (坂口)	1
第4章	遺跡の立地と周辺の遺跡 (大西)	3
第5章	検出された遺構と遺物 (大西)	5
第1節	住居址・住居址出土遺物	5
第2節	その他の遺構と遺物	134
1.	土 壙	134
2.	井戸状遺構	136
3.	ピット群	139
4.	配石遺構	142
5.	入道塚	144
6.	石 器 (小野)	144
第6章	化学分析	
土器の胎土分析 (花岡・大西)		146
第7章	まとめ (大西)	153

## 金 山 古 墳 群

第1章	発掘調査に至る経過と発掘調査の経過 (石北)	157
第2章	発掘調査の方法 (石北)	158
第3章	遺跡の立地と環境 (石北)	158
第4章	検出された遺構と遺物	161
第1節	古墳と出土遺物 (石北、遺物のみ大西)	161
1.	第1号古墳	161
2.	第2号古墳	168
3.	第3号古墳	179
4.	第4号古墳	188
第2節	その他の遺構と遺物	195

1. 住居址(坂口)	195
2. 土  墳(大西)	198
3. 第2号古墳東側基地表採遺物(大西)	198
4. 石  器(小野)	199
5. 縄文式土器(山口)	203
第5章 金山古墳群第2号古墳出土人骨について(森本)	207
第6章 考  察(石北、遺物のみ大西)	210

お大 がま釜 遺 跡





## 第1章 発掘調査に至る経過

この遺跡は関越自動車道（新湯線）の建設事に伴う事前調査として発掘調査が実施された。関越自動車道の建設予定地は昭和48年8月に県内の路線が正式発表され、以来、藤岡一洪川間で下郷遺跡をはじめとして多くの遺跡が確認されていた。さらに昭和53年10月、県教育委員会が実施した沼田地区における同自動車道建設予定地内の埋蔵文化財分布調査によって、この遺跡を含む10箇所に遺構の存在が予想され、続く昭和54年10月、分布調査によって遺跡の存在が予想された10箇所についての試掘調査が実施された。この試掘調査の結果、三峰山の南麓を中心にした4箇所に遺構が確認されて遺跡として認定されるとともに、遺構の分布範囲を限定することが可能となり、本調査に向けての基本的資料が整った。この分布調査及び試掘調査の所見に基づいて、県教育委員会と日本道路公団東京第二建設局との協議の上、県埋蔵文化財調査事業団が本調査の委託を受け、昭和56年度事業として調査を実施するに至ったものである。

## 第2章 発掘調査の方法

遺跡の周辺は地表面から関東ローム層までの深さが50cm程で、標準土層は概ね、Ⅰ 耕作土層 Ⅱ 黒褐色土層（榛名山二ヶ岳起源の降下軽石F Pを含む） Ⅲ ローム漸移層 Ⅳ ローム層の4層に区別できる。試掘調査の結果によれば、遺構の底面はⅣ層まで達し、黒色土とF Pの混り土で埋没している。掘り込み面はⅡ層と考えられるが、この面で平面的に遺構を検出することは困難であり、指頭大のF Pが平面精査の支障となることも考慮して、本調査では確認面をⅢ層の上面に定め、Ⅰ、Ⅱ層は重機によって除去した。

一方、関越自動車道の建設予定地は沼田の台地を北上し、三峰山の南麓を迂回して利根郡月夜野町に向う。このため沼田地区周辺では路線幅80mで東西に細長い調査区域を呈している。この遺跡は、分布調査によって予想された遺構のひろがりや南北80m、東西240mの範囲に及んだ。試掘調査ではこの範囲を20mの区画に分割し、各交点に合計33本のトレンチを設定した。この結果、竪穴住居跡の分布は東西240mのうち中央部の100mに集中し、その両側は希薄な分布を示すことが判明した。この試掘調査に基づいて、本調査の対象区域は当初予想した240mより60m短縮した180mに限定して調査を実施した。調査区は道路建設工事に設定された100m間隔の中心枕に従って、東側からA・B・C地区に分け、さらにその中を2mの区画に分割した。

## 第3章 発掘調査の経過

発掘調査は昭和56年4月20日より開始した。前述したとおり、遺構が集中的に分布する範囲は東西180mの調査区域のうち、中央部の100mであることが試掘調査によって予測されていた。しかしこの部分を調査するには、重機によって除去する約4000m<sup>2</sup>の土砂置場を確保する必要がある。このため調査地域西側の、遺構が希薄な分布を示すC地区より発掘に着手し、中央部の土砂はこの区域に運んだ。開始以来1ヵ月後の5月末、調査はいよいよ中央部の舌状台地に移った。試掘調査の予測どおり舌状台地の頂上部に住居は集中して分布し、精巧に積まれた石組の礎を伴う竪穴住居跡や、生活面を二重に確認できる特徴的な住居の検出をみた。これによって遺跡の中心部は周囲の地形的状況と併せてこの部分であることが判明した。調査は雨期を過ぎた夏の盛りにピークを迎え、山間部のこの地に秋風の立つ9月28日、当初の計画どおりに全工程を終了した。

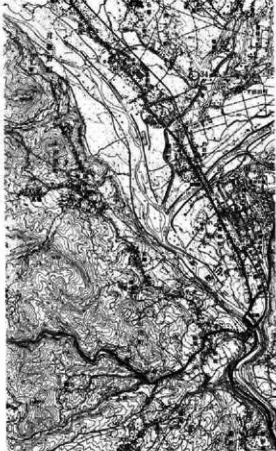
第4章 遺跡の立地と周辺の遺跡

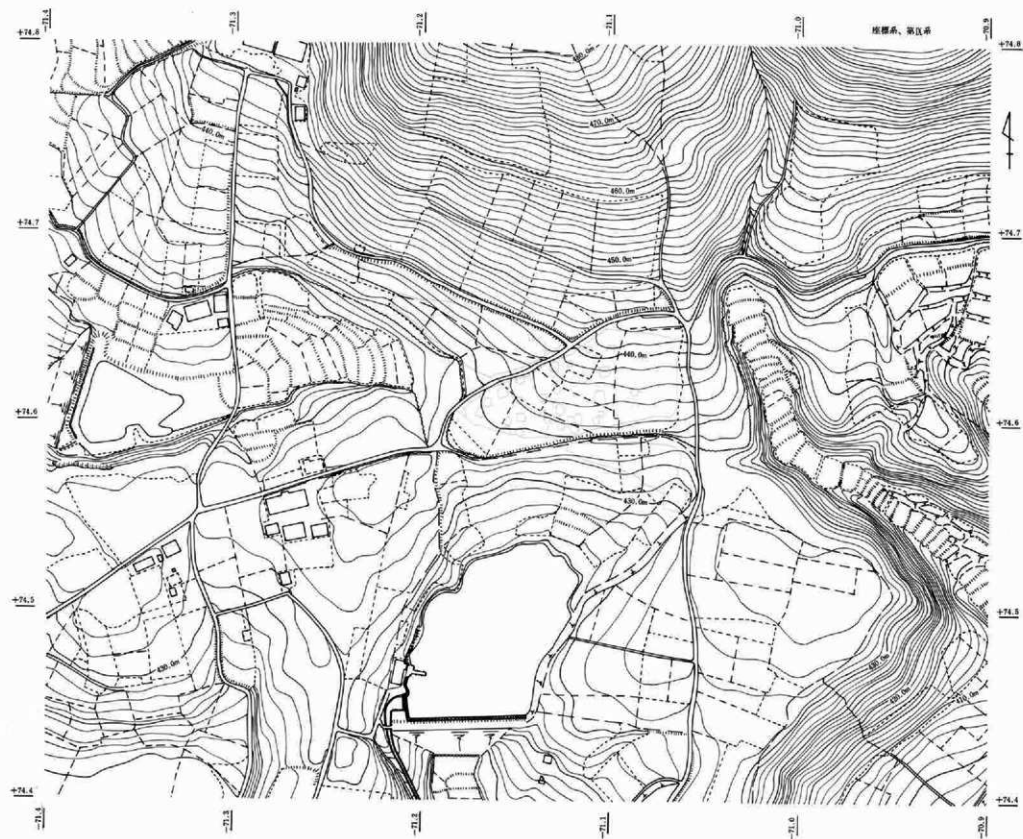


- 1 大釜遺跡 2 金山古墳群 3 後田遺跡 4 師B遺跡  
 5 丸山古墳 6 三峰神社裏遺跡 7 普上遺跡 8 門前遺跡  
 9 八束野河原遺跡 10 高平遺跡 11 大竹遺跡 12 小竹遺跡  
 13 宮地遺跡 14-20 月夜野古塚址群 (14 真沢A 支群、15 水沼  
 A 支群、20 岡A 支群) 21 型の水平遺跡 22 小川城址 23 前中  
 原遺跡 24 紙田東遺跡 25 河遺跡 26 深沢遺跡 27 都遺跡  
 28 大坂遺跡 29 十二坂遺跡 30 三後沢遺跡 31 城平遺跡  
 32 名胡城址 33 塚原古墳群 34 諏訪平遺跡 35 真庭・政所古墳群  
 36 後開駅跡内遺跡 37 神田古墳群

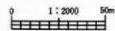


第1図 周辺の遺跡





第2図 大釜遺跡周辺の地形図





## 第4章 立地と周辺の遺跡

### 立地 (図1・2、図版1)

越後山脈に源を発する利根川は浸蝕谷をつくりながら流下し、兩岸のやや開けた月夜野・沼田市付近では兩岸に河岸段丘を形成している。沼田市大釜町・樺廻町地内に所在する大釜遺跡(1)はこの段丘を見おろす三峰山西南麓と最上位段丘面との傾斜変換線付近に立地する。標高は434m~440mで、河床との比高差は100m以上にもおよんでいる。このため三峰山西南麓は谷の開削が進んでおり、最上位段丘面は所謂舌状台地が多く並列して認められる。間越自動車道建設に伴い付近の並列する舌状台地の試掘調査が行われているが遺跡は確認されていない。しかし師付付近に広がる小規模な扇状地形上には後田遺跡(3)・三峰神社裏遺跡(6)・善上遺跡(7)・丸山古墳(5)などが立地している。またこの東縁に沿って金山古墳群(2)が立地する。やや北方にも同様な緩傾斜地があり、門前遺跡(8)や樽田古墳群(37)が立地している。このような遺跡分布は扇状地形の緩傾斜地が遺跡の立地条件として良好であったことを示している。中位・下位段丘面では諏訪平遺跡(34)・師B遺跡(4)・後閑駅構内遺跡(36)・政所・真庭古墳群(35)がある。

これに対し大釜遺跡の立地する傾斜変換線付近は、南北約60m・東西約200mと狭く、傾斜もきついため遺跡の立地条件としては良好ではない。

### 周辺の遺跡

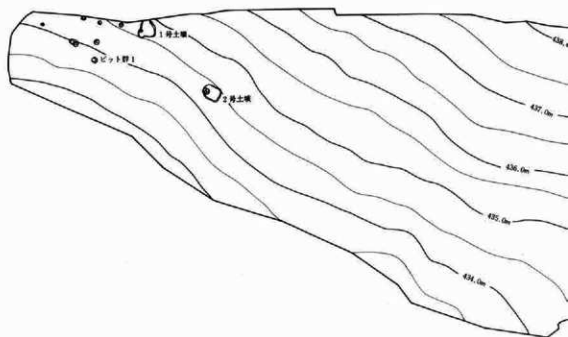
奈良・平安時代以前の遺跡は全国屈指の規模を有する先土器時代の後田遺跡<sup>(1)</sup>がある。縄文時代では梨ノ木平遺跡(21)の敷石住居址<sup>(2)</sup>、深沢遺跡(26)の配石遺構<sup>(3)</sup>が著名である。弥生時代の遺跡としては中期の八東原洞窟遺跡(4)が古くから知られており、サルボウ貝やオオツノハタ貝製の腕輪<sup>(4)</sup>は特筆に値する。古墳時代の遺跡は主に後期のものであり、大規模な集落も出現する。後田遺跡では240軒前後、師B遺跡<sup>(6)</sup>では約70軒の住居址が検出されている。これらの集落や古墳群に見るように、この地域では古墳時代後期にかなりの人口増加があったようである。

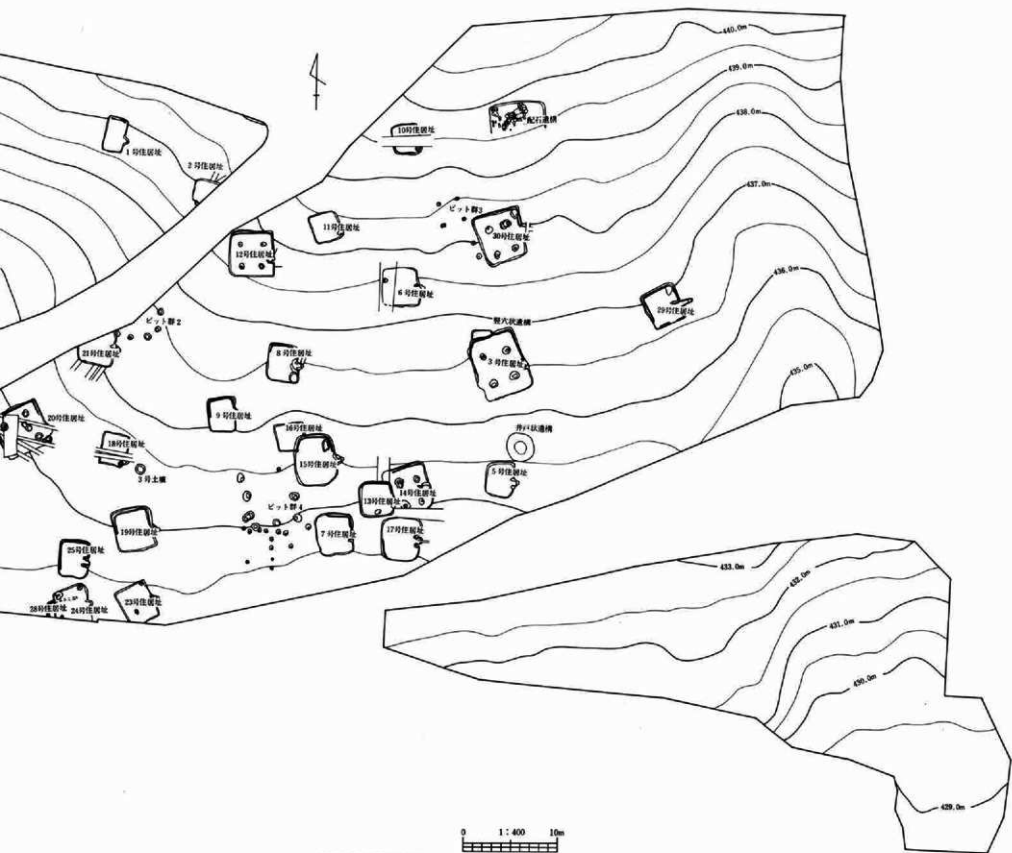
奈良・平安時代では現在までのところ大規模な集落は発見されておらず、小規模なものが多く見られる。またこの時期には月夜野古窯址群が生産を開始している。この古窯址群に近い洞遺跡<sup>(7)</sup>では約85棟の掘立柱建物址や「須恵製の鳥の頭部」が検出され、藪田東遺跡<sup>(8)</sup>では粘土採掘坑や住居址が検出されており注目される。また利根川左岸の後田遺跡では上毛野氏一族が用いた文様意匠を有する8世紀の軒瓦丸が出土しており、月夜野周辺に上毛野氏の力が及んでいたことを示している<sup>(9)</sup>。

### 註

- (1) 『後田遺跡見学会資料』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- (2) 能登 健・下城 正 『梨ノ木平遺跡』群馬県教育委員会 1979
- (3) 佐藤 謙志 『深沢遺跡』『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報—Ⅱ—』群馬県教育委員会 1978
- (4) 『古馬牧村史』月夜野町誌編纂委員会 1971
- (5) 外山和夫 『八東原洞窟の弥生時代炊身具』『博物館だより—No 8—』群馬県立歴史博物館 1982
- (6) 平野道一 『師B遺跡』『年報—1—』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- (7) 須田 茂他 『洞窟遺跡』『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報—Ⅱ—』群馬県教育委員会 1980
- (8) 原 繁信他 『藪田東遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- (9) 註(1)に同じ

第5章 検出された遺構と遺物





第3図 遺跡全体図





## 第5章 検出された遺構と遺物

## 第1節 住居址・住居址出土遺物

## 1号住居址 (図4~7、表1、図版2・3・51)

**位置** 中央住居址群の北端に位置する。地山は黒褐色を呈する水成土壌で、発掘時には湧水が多くみられた。東側8m付近より地山は風成ロームとなり、その境には2号住居址がある。

**平面形・規模** 南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、カマド付近の壁はやや内側に入る。規模は長軸3.7m、短軸2.1mを測り、方位はN-22°-Eを示す。重複はない。

**壁** 確認壁高は北壁40cm・南壁3cmを測る。

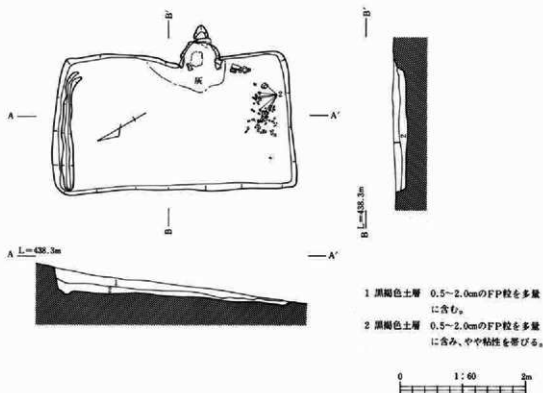
**周溝** 壁よりやや離れて、北壁側のみ検出された。

**柱穴・ピット** 柱穴は検出されていない。

**掘り方・床** 湧水によるため軟弱で凹凸が多い。掘り方はほぼ水平で凹凸は少ない。

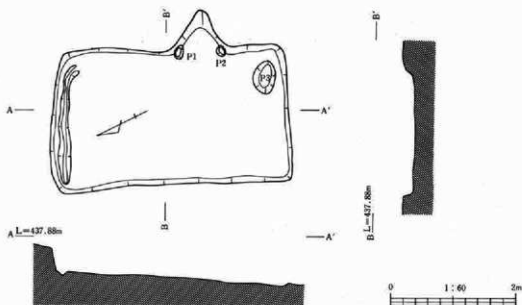
**カマド** 東壁南よりに壁を63cm掘り込んで設置する。壁の延長線上に1対の石が残存しており、その間には焼土が認められ、焚口部には扇状に炭化物が残存していた。煙道部入り口部には、天井の石材が1枚残存しており、カマド内には構築材と考えられる石が散在していた。

**出土遺物** カマド火床面直上より甕の底部(1)が出土している。また南壁中央部床面からは、同一個体と考えられる甕の破片が多数出土したが28片のみが接合可能であった(2)。

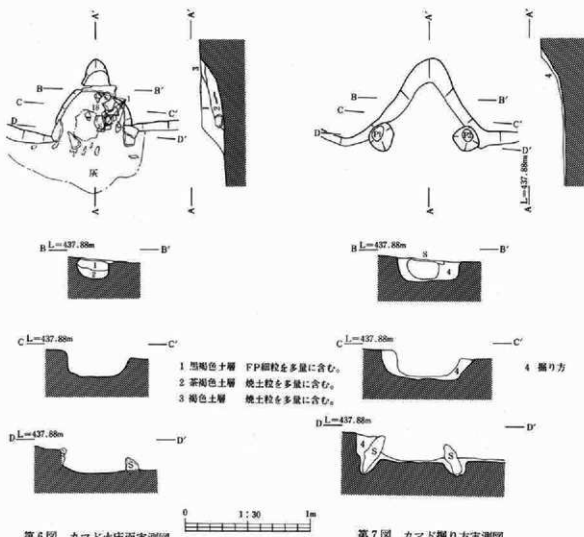


第4図 1号住居址床面実測図

第5章 検出された遺構と遺物

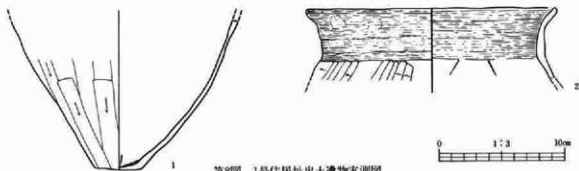


第5図 1号住居址掘り方実測図



第6図 カマド火床面実測図

第7図 カマド掘り方実測図



第8図 1号住居址出土遺物実測図

表1 1号住居址出土遺物観察表

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①粘土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロクロ回転 ⑤その他
1	甕	② 4.0	①細砂多く含む。黒色 鉱物粒含む。 ②橙色 ③軟質	内底は平底ではなく、 尖り気味。	内面ナゲ調整。外面縦 位へラ削り。外底へラ 削り。	①胴部下位の片残存 ②カマド内 ③土師 ④外面スス付着
2	甕	① 18.5-20.1	①細砂多く含む。黒色 鉱物粒含む。 ②橙色 ③軟質	口縁部「コ」の字状を 呈する。頸部器壁やや 厚い。	口縁部内外面、頸部内 面ココナゲ。頸部外面 ココナゲは薄。	①口縁部一頸部完存 ②床面 ③土師

## 2号住居址 (図9・10・表2・図版3・51)

**位置** 1号住居址の東約5mに位置し、水成土壌と風成ロームとの境付近に構築されている。この付近より東は標高がやや高くなり、地山は風成ロームとなる。道路を隔てて12号住居址・約9m東に11号住居址がある。

**平面形・規模** 南東約半分は未発掘であるが、東西方向に長軸を持つ隅丸長方形と考えられる。主軸方位、重複は不明。

**壁** 確認壁高は北壁35cm・南壁は擾乱のため不明。

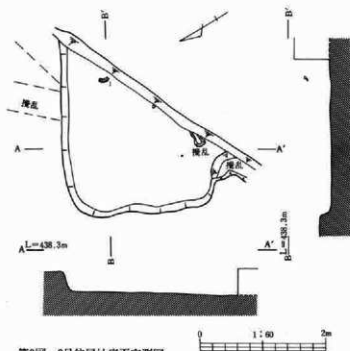
**周溝** 検出されない。

**柱穴・ピット** 検出されない。

**掘り方・床** 掘り方はなく、地床と考えられる。

**カマド** 道路下に存在すると考えられる。

**出土遺物** 覆土中より須恵器台付壺の台部(1)が出土している。



第9図 2号住居址床面実測図



第10図 2号住居址出土遺物実測図

表2 2号住居址出土遺物観察表

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④コナ回転 ⑤その他
1	台付壺	②(22.2)	①細砂含む。緻密 ②灰色 ③硬質	高台は外反し、端部は器厚を増して小さく折り返す。	粘付高台、回転コナ調整。	①残存 ②フタ土 ③須恵 ④不明

3号住居址 (図11-18、表3-6、図版4・5・51・63)

位置 東側住居址群中央に位置し、約4.5m南に井戸状遺構・約10m西に14号住居址がある。

平面形・規模 南北に長軸を持つ隅丸長方形で、西壁は60cm程小さく張り出す。規模は長軸6.7m・短軸5.2mを測る。方位はN-12°-Wを示す。竪穴状遺構と重複し、重複関係は本住居址が新しい。

壁 確認壁高は北壁45cm・南壁2cmを測る。

周溝 カマド北側から西壁中央までの北半を「コ」の字状にめぐらる。

柱穴・ピット 主柱穴は4本検出され、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>は南に、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>は北にそれぞれ傾斜している。掘り方において2ヶ所ピットが検出されており、深さはP<sub>5</sub>57cm・P<sub>6</sub>39cmを測る。

掘り方・床 掘り方は東壁を除く三方の壁際を巾60cm～80cm・深さ10cm程で「コ」の字状に掘り窪める。床は窪んだ部分を埋めた後、全体に10cm程土を入れて床を構築している。床面は柱穴に囲まれた部分が硬い。

カマド 東壁南寄りに壁を約20cm掘り込んで設置する。火床面・袖は床面上に設けている。

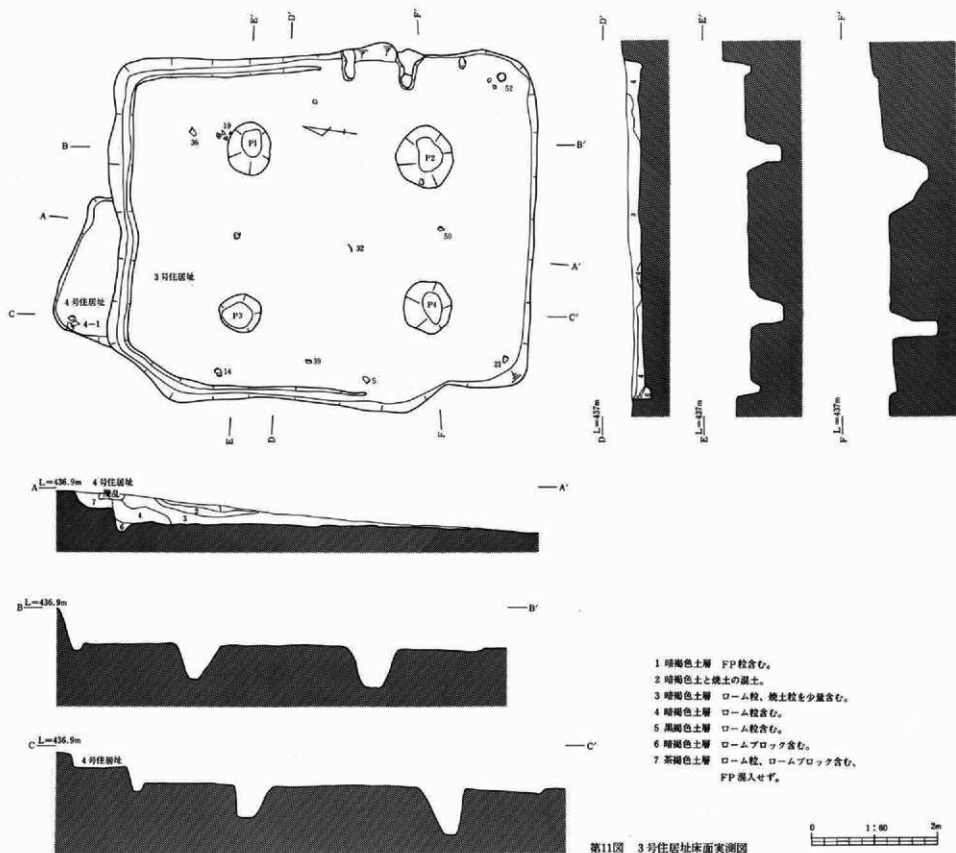
出土遺物 遺物の出土量は多く、掘り方より出土したもの(2・3・21)や他の遺構より出土した土器と接合したものもある。その接合関係は、井戸状遺構(26・41・井戸-10)と14号住居址(14住-14)にある。墨書を有する壺(23)と蓋(32)が出土しており、「産」と判読できる。これらは胎土・色調・焼成共に類似しているため、セットの可能性はある。本住居址に伴わない遺物は(42)であり、後述する竪穴状遺構に伴うものと考えられる。

竪穴状遺構(4号住居址) (図11・12・18、表6、図版5・52)

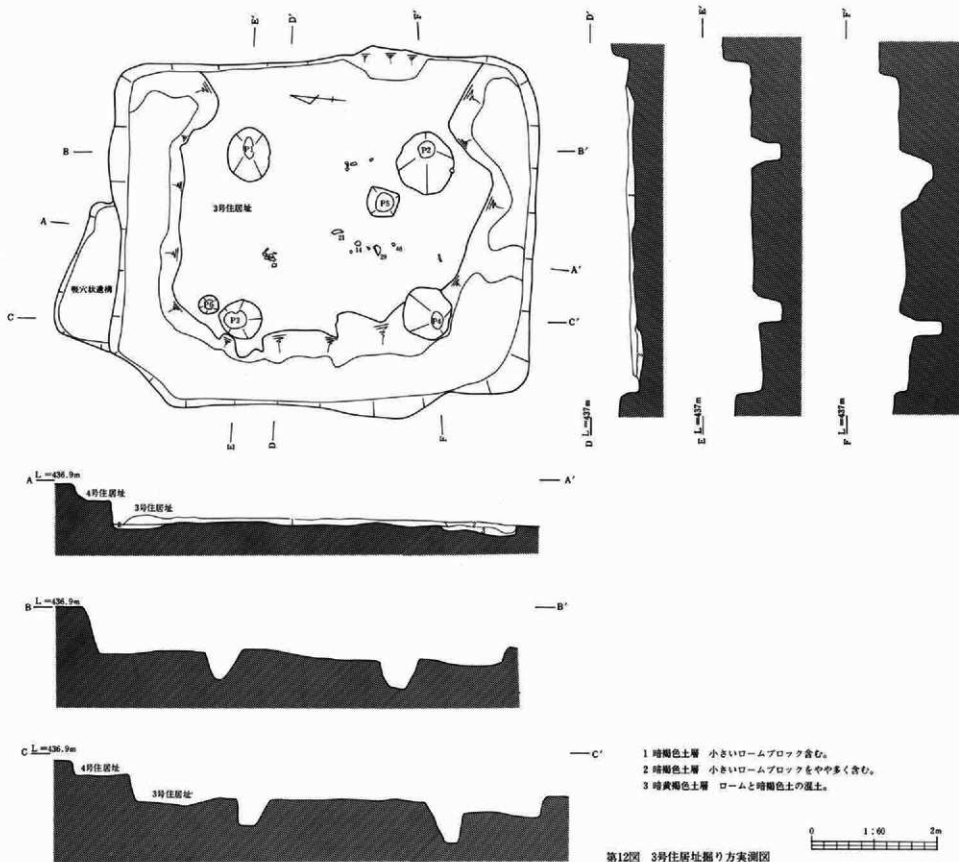
位置 3号住居址の北壁西側に位置する。

平面形・規模 前述の3号住居址に破壊されているため、平面形・規模は不明である。調査時には住居址と考えていたが、1辺が2.2mと小さく、底面も軟弱で凹凸が多いため、竪穴状遺構と考えたい。

出土遺物 壁際より弥生後期の壺(1)が出土している。



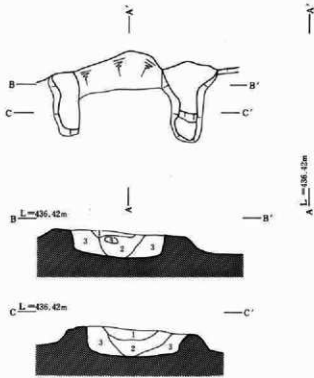




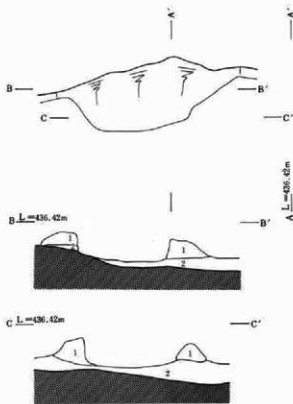
第12図 3号住居址掘り方実測図







第13図 カマド火床面実測図



第14図 カマド掘り方実測図

3号住居址カマド土層註

- 1 暗褐色土層 F P細粒・焼土少量含み、白色粘土を含むため、よくしまり、土質はきの細かい。
- 2 褐色土層 F P細粒少量含み、焼土粒ローム粒多量に含む。
- 3 赤褐色土層 焼土粒主体、F P細粒少量含み、しまりはあまりなくバサバサしている。
- 4 ロームブロック

3号住居址カマド掘り方土層註

- 1 カマド軸材
- 2 住居址貼り床

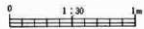
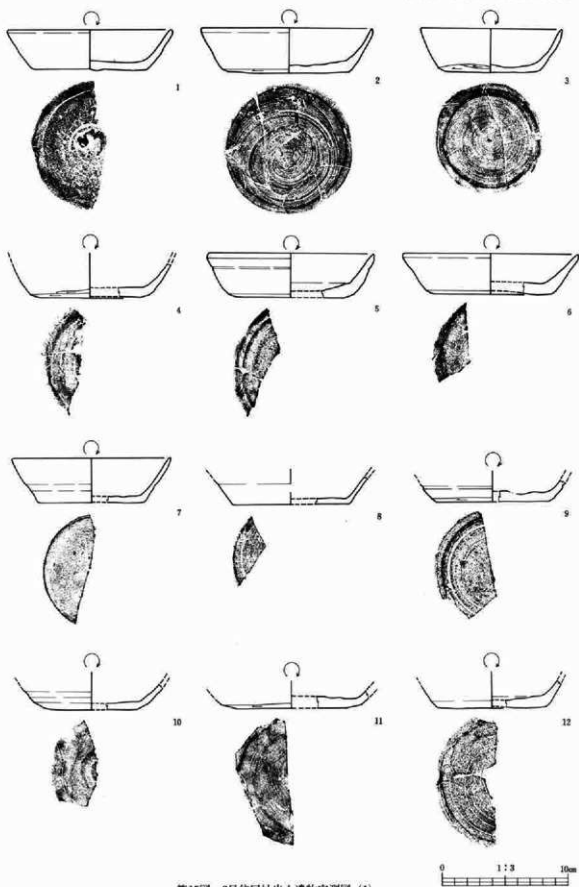


表3 3号住居址出土遺物観察表(1)

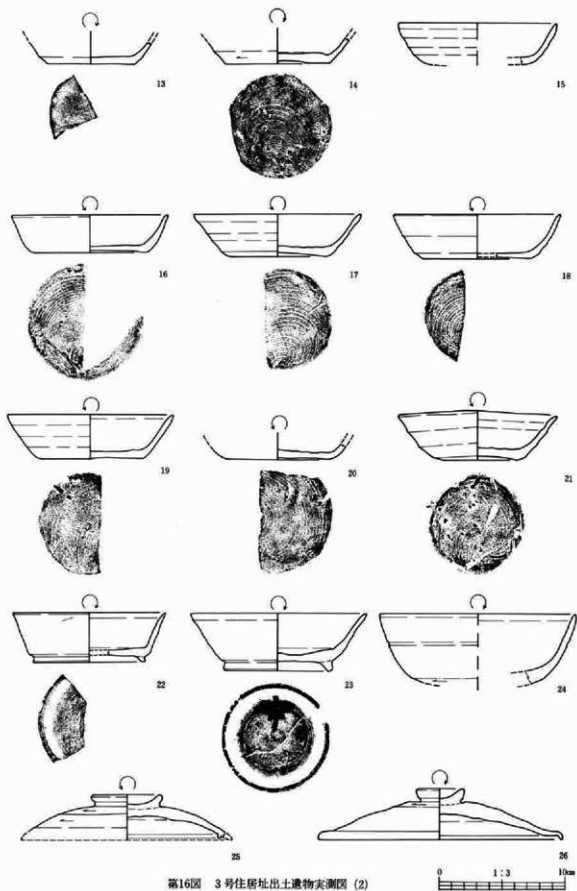
NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③検別④ヨコヨ回転 ⑤その他
1	坏	① (13.3) ② (9.0) ③ (3.3)	①細砂含む。黒色鉱物 粒含む。②灰色 ③硬質	体部、口縁部内湾気味 口唇部厚い。	底部回転ヘラ切り。	①底部片、口縁部片 ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤黒色鉱物吹き出す
2	坏	① 13.8 ② 9.4 ③ 3.5	①細砂、礫含む。石英 粒少量含む。 ②灰白〜にぶい褐色 ③軟質、酸化焙	体部から口縁部に至る にしたがいうすくなる。 口縁部内湾。	底部種々な回転ヘラ削り。 切り難し技法不明。 体部下端回転ヘラ削り。	①底部完、口縁部片 ②廻り方 ③須恵 ④右
3	坏	① 11.0 ② 7.0 ③ 3.4	①細砂少量含む。 ②灰白、西面灰白色。 ③やや軟質	小型の坏で、体部、口 縁部は内湾気味。	底部全面回転ヘラ削り。 切り難し技法不明。 体部下端回転ヘラ削り。	①ほぼ完形 ②フタ 土・廻り方 ③須恵 ④右
4	坏	② (8.4)	①細砂含む。軽石粒少 量含む。酸化鉄粒含む。 ②灰褐色 ③軟質	体部上位器壁堅うすい。	底部全面回転ヘラ削り。 体部下端回転ヘラ削り。 切り難し技法不明。	①底部片。②フタ土 ③須恵 ④右
5	坏	① (13.6) ② (8.8) ③ (3.5)	①細砂・粗砂・礫含 む。石英粒微量含む。 酸化鉄粒含む。 ②灰白色。③硬質	体部、口縁部器壁厚い。 口唇部外面に平坦面を 持つ。	底部全面回転ヘラ削り 後ナデ調整。切り難し 技法不明。	①口縁片、底部片 ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤No.6と同一 個体か？
6	坏	① (14.0) ② (9.6) ③ (3.2)	①細砂・粗砂・礫含 む。石英粒微量含む。 酸化鉄粒含む。 ②灰白色。③軟質	体部、口縁部器壁厚い。 口唇部外に平坦面を持 つ。	底部全面回転ヘラ削り 後ナデ調整。切り難し 技法不明。	①口縁部片、底部片 ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤No.5と同一 個体か？
7	坏	① (12.7) ② (4.6) ③ (3.5)	①細砂・粗砂含む。酸 化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	底部と体部の境は鋭い 稜をなす。体部外湾。 口縁部内湾。 全体に器壁うすい。	底部全面回転ヘラ削り 後回転ヨコナデ調整。 切り難し技法不明。	①底部片、口縁部片 ②フタ土 ③須恵 ④右
8	坏	② (9.4)	①細砂・粗砂含む。酸 化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	底部と体部の境は鋭い 稜をなす。内底は底部 と体部の境明確。体部 外湾。	底部切り難し技法、回 転ヘラ削り不明。	①底部片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
9	坏	② (9.0)	①細砂・粗砂含む。石 英・軽石少量含む。 ②灰色 ③硬質	体部一帯の凹縁めぐる。	底部全面回転ヘラ削り。 体部下端回転ヘラ削り。	①底部片 ②フタ土 ③須恵 ④右
10	坏	② (7.4)	①粗砂含む。軽石・石 英粒含む。②灰色 ③硬質		底部回転ヘラ切り無調 整。	①底部片 ②フタ土 ③須恵 ④右
11	坏	② (11.2)	①細砂・粗砂少量含 む。軽石少量含む。 ②灰色 ③硬質		底部全面回転ヘラ削り。 切り難し技法不明。	①底部片 ②フタ土 ③須恵 ④右
12	坏	② (8.6)	①粗砂・礫含む。軽石 粒含む。酸化鉄粒含む。 ②灰白色 ③硬質		底部全面回転ヘラ削り。 切り難し技法不明。	①底部片 ②フタ土 ・廻り方 ③須恵 ④右



第15図 3号住居址出土遺物実測図(1)

表4 3号住居址出土遺物観察表(2)

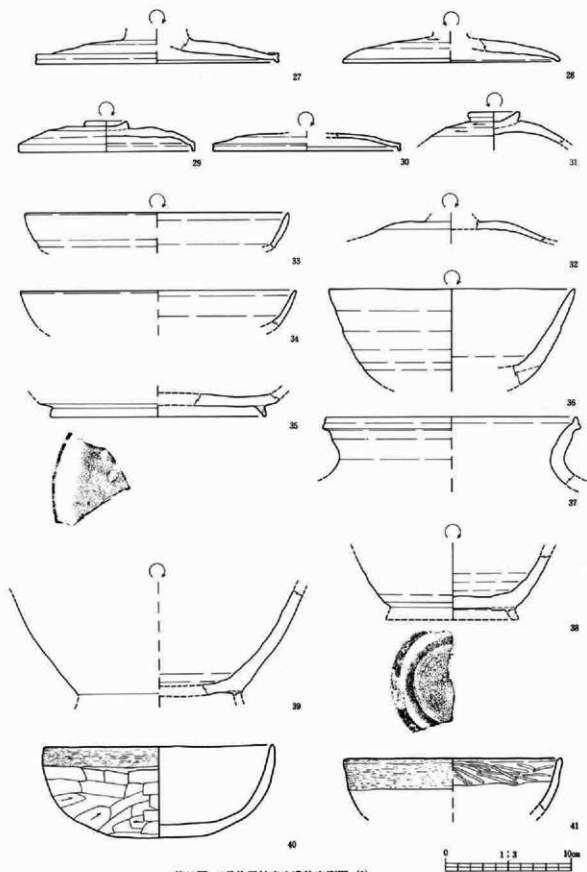
NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種類④ロケロ回転 ⑤その他
13	坏	② ( 7.0)	①粗砂を含む。石英・軽石粒少量含む。 ②黒灰色 ③硬質	底径小さい。	底部手持ちへつ削り。切り難し技法不明。	①底部片 ②フタ土 ③須恵 ④右
14	坏	② 8.4	①細砂・礫含む。酸化鉄粒含む ②灰色 ③硬質		底部回転糸切り後周縁回転へつ削り調整。 体部下端回転へつ削り。	①底部完 ②フタ土 ③須恵 ④右
15	坏	① ( 12.9) ② ( 3.2)	①細砂含む。②外面黒色。内面、断面灰黄褐色。③軟質		底部切り難し技法、底部調整不明。	①口縁部-底部片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
16	坏	① 12.7 ② 9.0 ③ 2.9	①細砂含む。粗砂・礫少量含む。②灰黄褐色 ③軟質	体部内湾気味。口縁部ゆるく外反。	底部回転糸切り無調整。	①口縁部-底部片 ②フタ土 ③須恵 ④左
17	坏	① ( 13.0) ② 8.2 ③ 3.3	粗砂・礫含む。石英粒少量含む。②灰白色 ③やや軟質	口縁部外反する。底部石はぜによる亀裂あり。	底部回転糸切り無調整。	①口縁部片、底部片 ②フタ土 ③須恵 ④左
18	坏	① ( 13.3) ② ( 8.4) ③ ( 3.5)	①粗砂・礫含む。 ②灰白色 ③軟質	体部内湾気味。口縁部小さく外反。	底部回転糸切り無調整。	①口縁部片、底部片 ②フタ土 ③須恵 ④左
19	坏	① ( 13.0) ② ( 8.4) ③ ( 3.5)	①粗砂・礫含む。石英粒少量含む。 ②灰白色 ③硬質	体部直線的に延びる。	底部回転糸切り無調整。	①口縁部、底部片 ②フタ土 ③須恵 ④左
20	坏	② ( 8.0)	①粗砂含む。礫少量含む。石英粒少量含む。 ②にぶい・黄褐色③硬質		底部回転糸切り無調整。	①底部片 ②フタ土 ③須恵 ④左 ⑤酸化焙
21	坏	① 12.2~12.8 ② 6.0 ③ 3.7	①粗砂含む。礫少量含む。軽石粒含む。②にぶい・褐色 ③硬質	体部内湾気味。口縁部小さく外反。 口縁部少し灣け歪む。	底部回転糸切り無調整	①ほぼ完 ②フタ土 攪り方 ③須恵 ④左 ⑤酸化焙
22	坏	① ( 12.2) ② ( 9.0) ③ 3.9	①粗砂少量含む。非常に断片。②灰色。断面赤灰色。③硬質	体部は底部より屈曲し直線的に延びる。口縁部小さく外反。	付け高台。底部全面回転ヨコナダ調整。底部回転糸切り?	①底部片、口縁部片 ②フタ土 ③須恵 ④右?
23	埴 (墨書)	① 14.3 ② 8.9 ③ 4.6	①粗砂少量含む。 ②外面灰色。内・断面灰白色 ③軟質	体部ゆるく内湾。口縁部ゆるく外反。	付け高台。底部全面回転へつ削り後周縁回転ヨコナダ。	①底部完、口縁部片 ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤墨書「龍」
24	埴	① ( 15.8)	①細砂・粗砂多量に含む。軽石粒含む。粗い ②灰色 ③硬質	体部ににぶい・凹線一条めぐる。口縁部少し灣け歪む。	体部下端回転へつ削り後回転ヨコナダ。	①口縁部-体部片 ②攪り方 ③須恵 ④右
25	蓋	① ( 16.9) ③ ( 3.6)	①細砂含む。粗砂少量含む。酸化鉄粒多く含む。②灰色 ③硬質	天井部-口縁部内湾する。小さい返りを有する。つまみ大きい。	つまみ貼り付け。天井部回転へつ削り。	①つまみ、天井部片 ②フタ土 ③須恵 ④左
26	蓋	① ( 19.4) ③ ( 4.1)	①細砂・粗砂・礫含む。②灰色 ③硬質	天井部直線的に延びる。口縁部水平に屈曲する。口唇部下方に折り返す。	つまみ貼り付け。天井部回転へつ削り後回転ヨコナダ。	①天井部片、口縁部片 ②フタ土、天井フタ土。③須恵④右



第16図 3号住居址出土遺物実測図(2)

表5 3号住居址出土遺物観察表(3)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種類④ロケ目回転 ⑤その他
27	蓋	①(19.4)	①粗砂・少量含む。 ②灰白色 ③軟質	器高低く、口縁部は下方に折り返す。	天井部回転ヘラ削り後回転ココナデ	①天井部-口縁部④ ⑤床直⑥須恵⑦右
28	蓋	①(17.4)	①粗砂・少量含む。 ②灰白色③やや軟質	器高低く、口唇部非常に小さく折り返す。	天井部回転ヘラ削り後中心部回転ココナデ。	①天井部-口縁部④ ⑤フタ土⑥須恵⑦左
29	蓋	①14.0 ②2.4	①粗砂含む。 ②灰色・断面赤灰色 ③硬質	器高低く、口縁部下方に屈曲する。口唇部下方に折り返す。	天井部回転ヘラ削り。	①④⑤握り方⑥須恵 ⑦右⑧天井部状がかり器面異なる。
30	蓋	①(15.0)	①粗砂含む。石英粒含む。 ②灰白色③軟質	器高低い、器壁すい。	天井部回転ヘラ削り後回転ココナデ。	①口縁部④⑤握り方 ⑥須恵⑦右
31	蓋		①粗砂・粗砂含む。石英粒含む。②褐灰色 ③軟質	器高高い。	つまみ貼り付け。天井部回転ヘラ削り。	①つまみ完、天井部一部②フタ土③須恵 ④左⑤酸化塩
32	蓋 (墨書)		①粗砂含む。石英粒含む。 ②外面灰色、内断面灰白色③軟質	天井部下方へ屈曲する。口縁部水平に屈曲する。	天井部回転ヘラ削り後中央部回転ココナデ。	①④⑤フタ土 ⑥須恵⑦右⑧墨書部位内側、「龍」?
33	盤	①(21.0)	①細砂・粗砂含む。 ②灰色③硬質			①④⑤フタ土 ⑥須恵⑦右
34	盤	①(22.0)	①粗砂含む。石英粒含む。酸化鉄粒含む。 ②浅黄褐色③軟質			①④⑤フタ土 ⑥須恵⑦不明 ⑧酸化塩
35	盤	②(17.2)	①粗砂含む。石英粒含む。 ②灰白色、断面にぶい褐色③硬質	高台内湾気味。	底部全面回転ココナデ。底部中央部指頭圧痕状の凹凸あり。	①底部④⑤フタ土 ⑥須恵⑦不明
36	埴	①(19.6)	①粗砂・練含む。石英粒含む。酸化鉄粒含む。 ②にぶい褐色③硬質		ロケ目幅広い。体部下位布目圧痕3ヶ所あり。	①④⑤床直⑥須恵 ⑦右⑧酸化塩
37	台付埴		①粗砂含む。石英粒含む。粗い。②外面灰色内断面灰白色③軟質		付け高台。底部全面、体部下端回転ヘラ削り後周縁・体部下端回転ココナデ。	①④ ⑤フタ土 ⑥須恵 ⑦右
38	壺	①(20.0)	①粗砂少量含む。石英粒含む。酸化鉄粒少量含む。 ②灰色③硬質	口唇部上下に折り返す。		①④⑤フタ土 ⑥須恵⑦不明
39	壺		①細砂・粗砂少量含む。 ②灰色 ③硬質		付け高台。底部全面回転ココナデ、高台周辺強い回転ココナデ。	①④⑤フタ土 ⑥須恵 ⑦右
40	埴	①(18.5) ③(7.2)	①細砂・粗砂含む。酸化鉄粒含む。粗い。 ②にぶい褐色③硬質	口縁部はゆるく内湾気味に立ち上がる。体部強く内湾し、丸底風。	内面粗いヘラミガキ。口縁部外面ココナデ。以下はヘラ削り。	①④ ⑤フタ土 ⑥土師
41	埴	①(17.4)	①金灰母・石英・粗砂含む。②にぶい褐色	口縁部ゆるく外湾。	口縁、体部外面粗いヘラミガキ。他はナデ。	①④⑤フタ土、井戸フタ土⑥土師



第17図 3号住居址出土遺物実測図(3)

## 第5章 検出された遺構と遺物

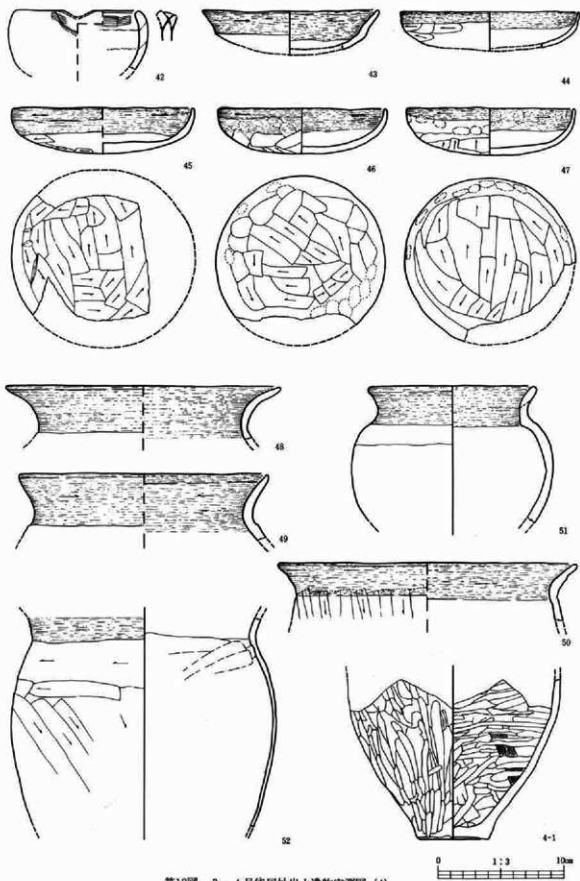
表6 3号住居址出土遺物観察表(4)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種類④ロクロ回転 ⑤その他
42	片口碗	①(10.0)	①細砂含む。石英粒含む。 ②にぶい褐色。	口縁部を外方につまみ出し、片口とする。	口縁部内面横位へハメ片口部外面へハメ成形後粗いヘラミガキ。内外面粗いヘラミガキ。	①1/4 ②フタ土 ③弥生? ④3号住居には伴わないと考えられる。
43	杯	①(14.2)	①細砂含む。 ②にぶい褐色	底部より縁をなして口縁部外反する。口唇部内側に丸く折り返す。	口縁部ヨコナデ。底部手持ちへラ削り。内底ナデ。	①1/4 ②フタ土、井戸フタ土。③土師
44	杯	①(14.2)	①細砂含む。黒色鉱物石英粒含む。 ②にぶい褐色	口縁部ほぼ直立する。体部内湾する。	口縁部ヨコナデ。底部手持ちへラ削り。内底ナデ。	①1/4②フタ土、掘り方 ③土師
45	杯	①(14.5) ③(3.6)	①細砂含む。 ②にぶい赤褐色	口縁部直立する。体部内湾し、底部ゆるい丸底。	口縁部ヨコナデ。底部手持ちへラ削り。内底ナデ。	①口縁部1/4、底部完 ②フタ土 ③土師
46	杯	①13.6 ③3.5	①細砂含む。 ②にぶい褐色。	口縁部直立する。体部内湾し、底部ゆるい丸底。	口縁部横ナデ。体部外面指頭圧痕残る。底部手持ちへラ削り。	①口縁部一部欠失 ②灰直、掘り方 ③土師
47	杯	①13.4 ③3.7	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。 ②明赤褐色	口縁部直立する。体部内湾し、底部ゆるい丸底。	口縁部ヨコナデ。口唇部、体部指頭圧痕あり。底部手持ちへラ削り。	①口縁部1/4欠失 ②灰直 ③土師
48	壺	①(22.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒多量に含む。 ②にぶい褐色	口縁部外反する。	口縁部ヨコナデ。	①1/4 ②掘り方 ③土師
49	壺	①(20.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。	口縁部外反する。	口縁部ヨコナデ。	①1/4 ②フタ土 ③土師
50	壺	①(23.8)	①細砂含む。金雲母含む。 ②器表黒褐色。断面にぶい褐色。	口縁部外反する。	口縁部ヨコナデ。胴部縦位へラ削り。	①1/4 ②灰直 ③土師
51	壺	①(13.1)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。②褐色	口縁部外反する。胴部はあまり歪らず、最大径は口縁部に存すると考えられる。	口縁部ヨコナデ。胴部胴部内面ナデ。胴部横位へラ削り。胴部縦位へラ削り。	①1/4 ②フタ土 ③土師
52	壺	①(13.4)	①粗砂含む。石英粒・酸化鉄粒含む。 ②外、断面灰黄褐色 内面黒褐色	口縁部ゆるく外反する。口唇部丸くおさめる。最大径胴部中位。	口縁部ヨコナデ。胴部内外面丁字ナデ。	①口縁部1/4、胴部1/4 ②灰直 ③土師

竪穴状遺構出土遺物観察表

1	壺	②6.2	①細砂含む。靑石粒含む。酸化鉄粒含む。 ②にぶい褐色	平底。胴部はあまり歪らず長胴である。胴部下位は丸味を持たず直線的に底部に至る。	内底ナデ。胴部内面粗い横位へラミガキ。胴部外面縦位へラミガキ。	①底部完、胴部1/4 ②灰直③弥生 ④胴部外面煤付着
---	---	------	-------------------------------	---	---------------------------------	----------------------------------





第18圖 3・4号住居址出土遺物実測圖(4)

5号住居址 (図19-23, 表7, 図版6・7・53)

位置 東側住居址群の南端に位置する。約40cm北東に井戸状遺構、約6.5m北に3号住居址、約5.5m西に14号住居址がある。

平面形・規模 南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈するが、各壁とも直線的ではない。規模は長軸3.6m・短軸2.9mを測る。方位はN-14°-Eを示す。重複はない。

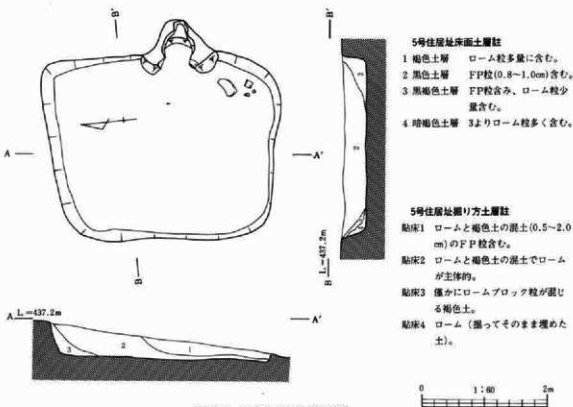
壁 確認壁高は北壁46cm・南壁14cmを測る。各壁とも直線的ではなく、立ち上がりの角度も一様ではない。周溝 検出されない。

柱穴・ピット 柱穴は検出されない。掘り方においてピットは9個検出され、P<sub>9</sub>は床下土壌で深さ10cm-15cmである。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>はカマドに伴うものであろう。深さはP<sub>1</sub>10cm・P<sub>2</sub>25cm・P<sub>3</sub>28cm・P<sub>4</sub>19cm・P<sub>5</sub>10cm・P<sub>6</sub>11cm・P<sub>7</sub>9cm・P<sub>8</sub>31cmである。なおP<sub>9</sub>の床下土壌は床面から掘り込んでいる。

掘り方・床 掘り方はカマド付近を除く住居址南半を20cm程掘り込んでおり、その底面は凹凸が多い。床は北半が地床であったと考えられ、南半は掘り方をほぼ水平に埋め戻して構築している。

カマド 東壁やや南寄りに壁を60cm程掘り込んで設置する。袖は掘り方より構築し、掛け口部をとりまくように残存している。焚口部側面には1対の石を立てている。覆土中層には天井石が中央で折れて落下しており、カマド前面にも加工痕を残す天井石と考えられるものが落下していた。

出土遺物 瓦が多く出土しており、坏・埴は少ない。7が掘り方より出土し、11は床面直上と、カマド内出土破片が接合したものである。4は器形・胎土・焼成が他のものとは異なり、本住居址に伴うか否かは不明であるが、平安時代に属するものであろう。



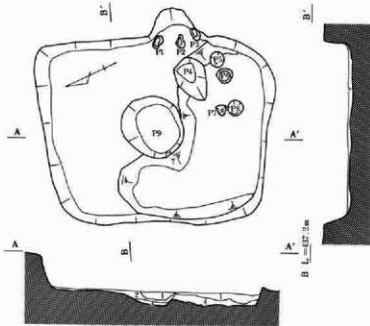
第1節 住居址・住居址出土遺物

5号住居址カマド土層註

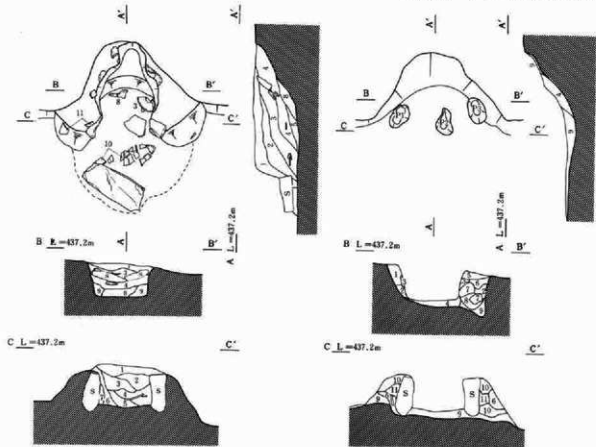
- 1 黒褐色土層 FP微粒、ローム粒少量含む。
- 2 暗褐色土層 ローム粒多量に含む。
- 3 暗褐色土層 2層に比してローム粒少量含む、FPほとんど含まず。
- 4 茶褐色土層 焼土多量炭化物少量含む、ローム粒含む。
- 5 褐色土層 ローム粒・細石・焼土少量含む。
- 6 赤褐色土層 焼土多量に含む。
- 7 黄褐色土層 ロームの礫れ、焼土少量含む。
- 8 赤褐色土層 焼土、土質は粗くサラサラする。
- 9 褐色土層 焼土粒が少量、きめ細い。

5号住居址カマド掘り方土層註

- 1 暗褐色土層 FP粒微量含む。
- 2 暗褐色土層 ローム粒含む。
- 3 茶褐色土層 焼土粒多量含む。
- 4 焼土
- 5 黒褐色土層 ローム粒少量含む。
- 6 暗褐色土層 ローム粒多量含む、FP粒も含む。
- 7 黄褐色土層 褐色土と白色粘土の混土。
- 8 暗褐色土層 ローム粒多量に含む、白色粘土微量含む。
- 9 黄褐色土層 ロームと暗褐色土の混土。
- 10 明褐色土層 ローム粒少量とFP粒微量含む。
- 11 褐色土層 ローム・焼土・炭化物の混土。



第20図 5号住居址掘り方実測図



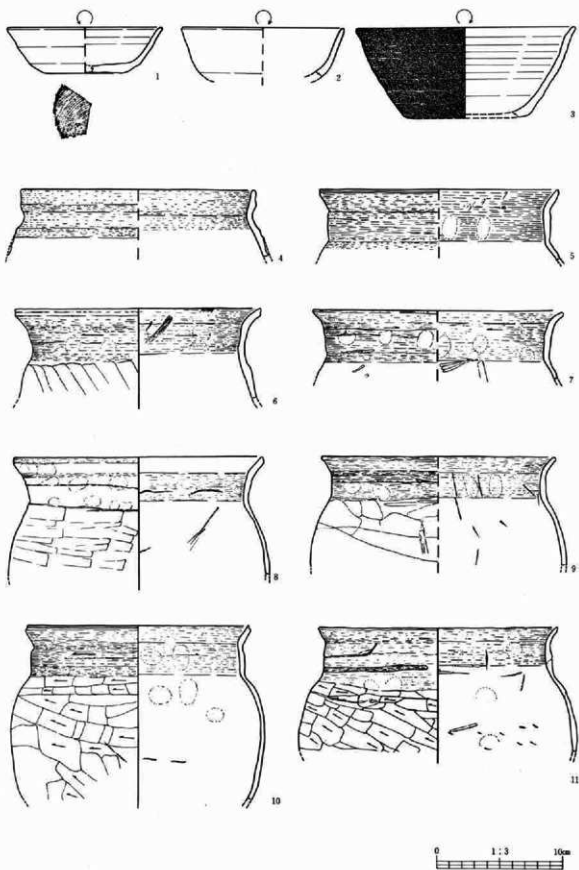
第21図 カマド火床面実測図

第22図 カマド掘り方実測図

## 第5章 検出された遺構と遺物

表7 5号住居址出土遺物観察表

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロク⑤回転 ⑥その他
1	坏	① (12.5) ② (6.0) ③ (3.6)	①粗砂含む。石英・軽石粒含む。②灰色 ③硬質	口縁部小さく外反する。口縁部焼け歪む。	底部回転糸切り無調整	①口縁部写、底部写 ②フタ土 ③葉巻 ④不明
2	坏	① (13.0)	①粗砂含む。酸化鉄粒含む。粗い。 ②灰色 ③硬質	体部ゆるく内湾する。口縁部ゆるく外反する。		①写 ②フタ土 ③葉巻④右
3	埴	① (17.5) ② (10.0) ③ (7.0)	①粗砂・糠多量に含む。石英粒多量に含む。粗い。②褐色 ③軟質	体部直線的に立ち上がる。口縁部外反する。ロケ目幅狭い。	底部切り難し技法、調整不明。	①口縁部写、底部写 ②フタ土、カマド内 ③葉巻 ④右
4	甕	① (19.0)	①粗砂少量含む。石英黒色鉱物・酸化鉄粒含む。②褐色	口縁部はほぼ直立する。肩部凹線めぐる。	口縁部丁寧なヨコナデ。肩部丁寧なナデ。	①写②フタ土、カマド内③土師④胎土、焼成共に他とは異質
5	甕	① (19.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒、酸化鉄粒含む。②褐色	口縁部「コ」の字状。頸部指頭圧痕により張り出す。口唇部外面小さい凹線めぐる。	口縁部ヨコナデ。歪曲部外面強いヨコナデ。頸部内面指頭圧痕。肩部傾位ヘラ削り。	①写 ②カマド内 ③土師
6	甕	① (19.6)	①細砂含む。黒色鉱物・石英粒含む。②褐色	口縁部「コ」の字状。口唇部外面浅い凹線めぐる。口唇部上方に小さく折り返す。	口縁部ヨコナデ。歪曲部外面強いヨコナデ。頸部外面ヨコナデ一部有く。	①写 ②カマド内 ③土師
7	甕	① (20.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。②褐色	口縁部「コ」の字状。口唇部外面に平坦面を有する。	口縁部ヨコナデ。歪曲部強いヨコナデ。頸部内外面、指頭圧痕、外面ヨコナデ一部有く。	①写 ②掘り方 ③土師
8	甕	① (20.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。②褐色	口縁部「コ」の字状。頸部凹線やややすい。	口縁部ヨコナデ。歪曲部強いヨコナデ。頸部外面弱いヨコナデ。頸部内外面指頭圧痕。	①写 ②カマド内 ③土師
9	甕	① (18.6)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。②褐色	口縁部「コ」の字状。口唇部丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ。歪曲部強いヨコナデ。頸部外面弱いヨコナデ。	①写 ②フタ土 ③土師
10	甕	① (18.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。酸化鉄粒含む。②褐色	口縁部「コ」の字状。口唇部外面凹線めぐる。最大径胴部上位。	口縁部ヨコナデ。歪曲部強いヨコナデ。頸部内外面指頭圧痕。ヘラ削り横、斜め、縦。	①写 ②フタ土、カマド内 ③土師
11	甕	① (19.0)	①細砂含む。黒色鉱物少量含む。酸化鉄粒含む。②褐色	口縁部「コ」の字状。口唇部丸くおさめる。最大径胴部上位。	口縁部ヨコナデ。歪曲部強いヨコナデ。頸部内外面指頭圧痕。ヘラ削り横、斜め、縦?	①写 ②床直、カマド内 ③土師



第23図 5号住居址出土遺物実測図

6号住居址 (図24~28, 表8, 図版8・9・53・54)

位置 東側住居址群の西に位置する。約7m北東に29号住居址、約6m北西に11号住居址、南東約7mに3号住居址がある。

平面形・規模 西壁が破壊されているため詳細は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。規模は南北4.1m・東西(3.8)mで、方位はN-1°-Eを示す。重複はない。

壁 確認壁高は北壁53cm、南壁10cmを測る。立ち上がりの角度は各壁ともにはほぼ同一である。

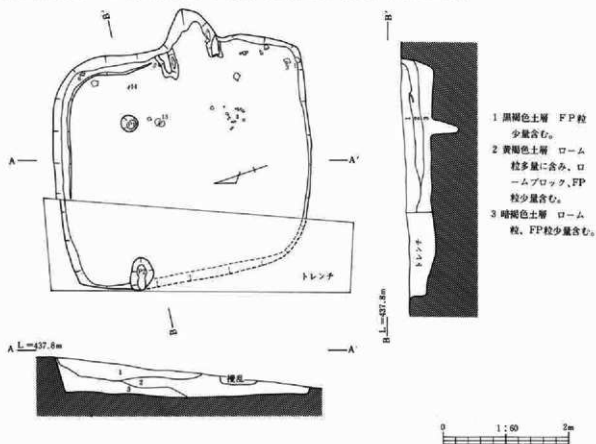
周溝 カマド北側から、北壁中央まで検出されている。

柱穴・ピット 床面で2個のピットが検出されており、深さはP<sub>1</sub>45cm・P<sub>2</sub>33cmを測る。掘り方面では、カマドに伴うP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>と床下土壌(P<sub>3</sub>)が検出されている。床下土壌は、掘り方面より掘り込んでいる。

掘り方・床 掘り方は住居址の南半を、深さ10cm~20cm掘り込んでおり、その底面は凹凸が多い。床面は北半が地床で、南半は、北半と水平になるように掘り方を埋め戻して構築している。

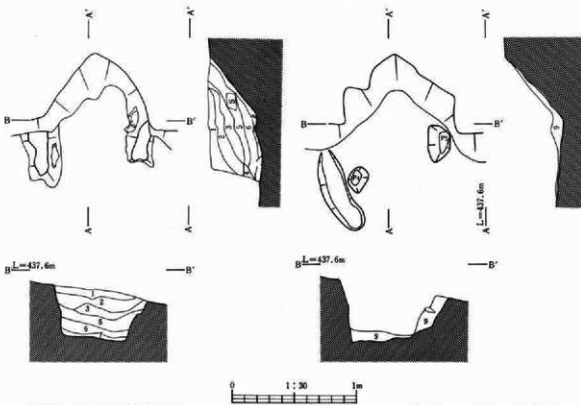
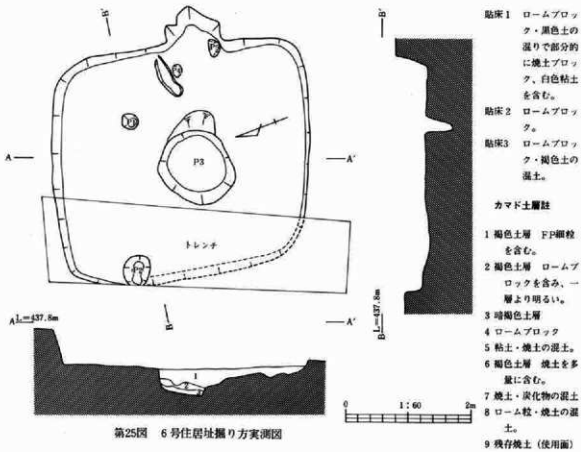
カマド 東壁ほぼ中央に、壁を50cm程掘り込んで設置する。煙道部の傾斜はきつく、比高差も50cmと大きい。P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>は焚口・焼成部の内側に立てた石の掘り方であり、P<sub>4</sub>の北にある深さ1cm~2cmの浅い溝状の掘り込みは、袖を安定させるためのものであろう。

出土遺物 須恵器杯(1)・須恵器埴(3)が南東コーナーの壁際より出土しており、土師器甕(9)は掘り方とカマド内出土の破片が接合したものである。13は、床面直上の出土で他の土師器と胎土が異なり、内面は黒色を呈している。内面調整から判断すると羽釜とは考えられず器形は不明。



第24図 6号住居址床面実測図

第1節 住居址・住居址出土遺物

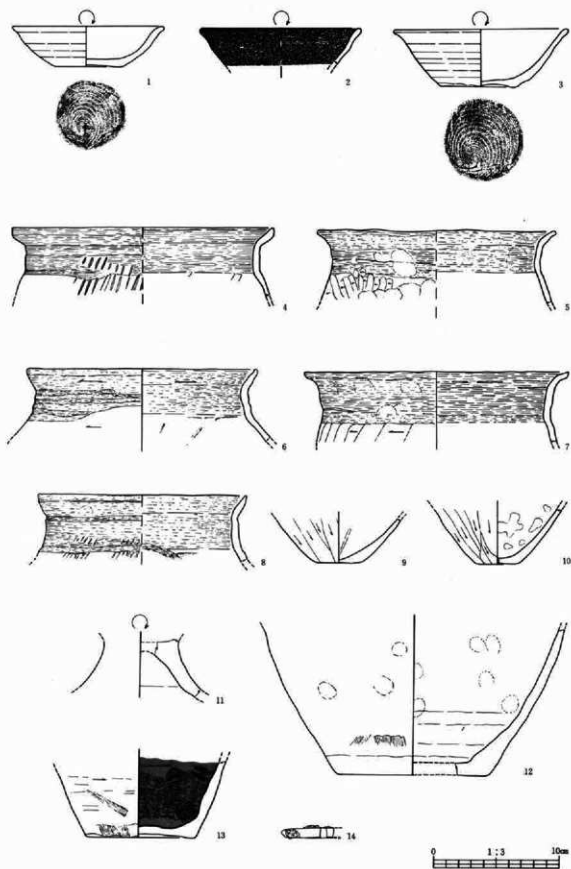


第27図 カマド掘り方実測図

表8 6号住居址出土遺物観察表

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種類④ヨコ回転 ⑤その他	
1	坏	① 12.2 ② 5.2 ③ 3.0	①粗砂・雑多量を含む。石英粒多量を含む。 ②灰黄色③軟質	器高低い。体部内湾。 口唇部外方に開く。	底部回転糸切り無調整	①完②フタ土 ③須恵 ④右	
2	坏	① (13.0)	①粗砂多量を含む。石英粒多量を含む。②黒色。断面灰白色③軟質	口縁部外反。 口唇部肥厚する。		①完②フタ土 ③須恵 ④右	
3	埴	① 14.0 ② 6.0 ③ 4.5	①粗砂・雑多量を含む。石英粒多量を含む。 ②灰白色③軟質	体部内湾。 口縁部外反。	底部回転糸切り無調整	①口縁部一部欠失 ②フタ土 ③須恵 ④右	
4	甕	① (21.0)	①細砂少量含む。黒色鉱物粒少量含む。酸化鉄粒含む。②褐色	口唇部ヨコナデにより平相面を走る。 器壁厚い。	頸部以下横位へラ削り。 器肩部外面強いヨコナデ。	①片 ②カマド内 ③土師	
5	甕	① (19.0)	①細砂少量含む。黒色鉱物粒含む。酸化鉄粒含む。②褐色	口唇部小さく折り返す。口唇部平相面を持つ。器壁厚い。	器肩部やや強いヨコナデ。 器肩部内面ハケ状工具による横位ナデ。	①片 ②フタ土 ③土師	
6	甕	① (18.4)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。酸化鉄粒含む。②褐色	口唇部ヨコナデにより上方にゆるく屈曲。器壁厚い。	頸部以下横位へラ削り。器肩部外面工具による強いヨコナデ。	①片 ②フタ土 ③土師	
7	甕	① (21.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒少量含む。酸化鉄粒少量含む。②褐色	口縁部短かい。 器壁厚い。	頸部以下横位へラ削り。器肩部外面強いヨコナデ。	①片 ②掘り方、カマド内 ③土師	
8	甕	① (16.8)	①細砂含む。黒色鉱物粒・石英粒少量含む。②褐色	口唇部外面平相面を持つ。器壁厚い。	頸部器肩部外面強いヨコナデ。頸部外面へラ削り痕残る。	①片 ②フタ土 ③土師	
9	甕	② (3.8)	①細砂含む。黒色鉱物粒・石英粒少量含む。②褐色	内底丸味を持つ。	体部下位縦位へラ削り。内底へラ状工具による成形の後ナデ。	①片 ②カマド ③土師	
10	甕	② (3.4)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。②褐色	内底丸味を持つ。	体部下位縦位へラ削り。内底へラ状工具による成形の後ナデ。	①片 ②フタ土 ③土師	
11	高 坏		①粗砂少量含む。 ②灰白色 ③硬質	袖部は屈曲して開く。		①片 ②フタ土 ③須恵	
12	甕	② (12.0)	①粗砂含む。②内、断面灰白色。表面にぶい黄褐色。③硬質。	平底。体部はゆるく内湾して立ち上がる。	継造り。後回転ヨコナデ。	①片 ②フタ土、床直 ③須恵	
13	甕	② (9.0)	①細砂少量含む。②内面黒色。外、断面にぶい黄褐色一黒色。	平底。体部は直線的に立ち上がる。	継造り。外面横位へラ削り。体部下端ナデ。内面横位ナデ。	①体部下位一底部完 ②床直 ③土師	
14	鉄製品	断面長方形を呈する鉄製品で、一方を欠失する。床面より出土。					

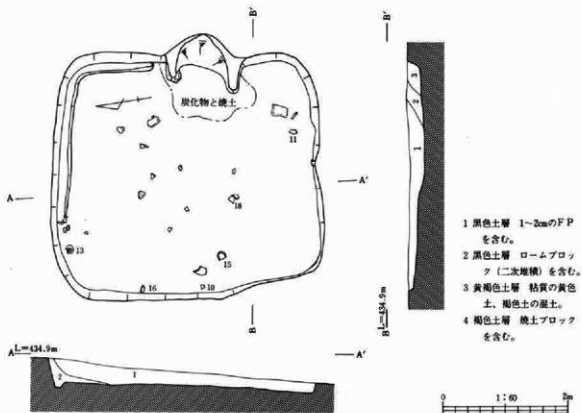




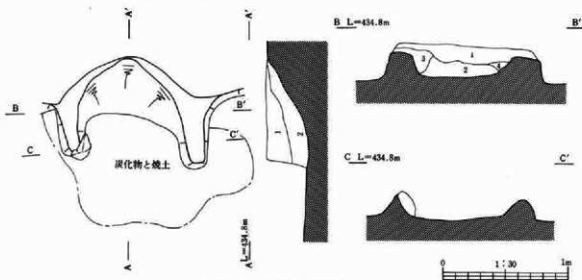
第28図 6号住居址出土遺物実測図

7号住居址 (図29~32, 表9・10, 図版10・11・54)

**位置** 中央住居址群の南に位置する。約2.5m東に17号住居址・約1m北東に13号住居址がある。  
**平面形・規模** 長軸4.2m・短軸3.9mを測る隅丸長方形を呈する。方位はN-1.5°-Eを示す。重複はない。  
**壁** 確認壁高は北壁37cm・南壁16cmを測る。  
**周溝** 巾10cm-15cm・深さ10cmで、カマド北側より北西コーナーまで確認された。



第29図 7号住居址床面実測図



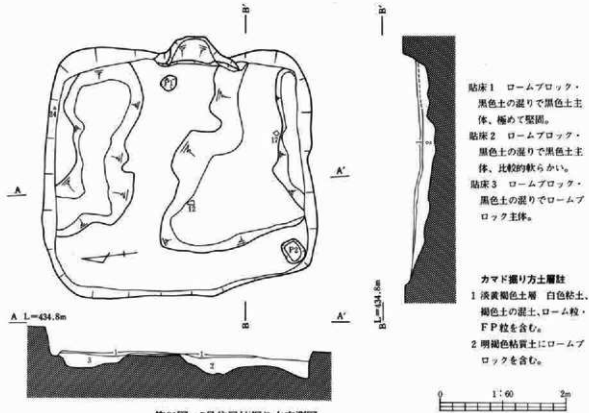
第30図 カマド火床面実測図

柱穴・ピット 柱穴は検出されない。ピットは掘り方面において、カマド袖下、南西コーナーにそれぞれ1個検出された。深さはP<sub>1</sub> 8cm・P<sub>2</sub> 12.5cmである。

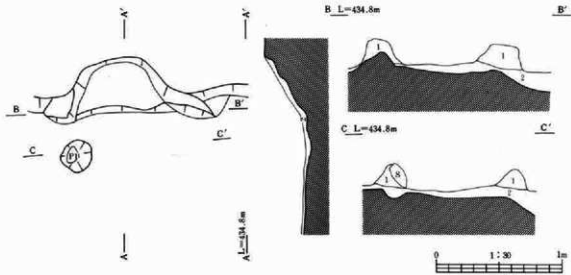
掘り方・床 掘り方は、西壁付近巾70cm～100cm・カマドから北西コーナーにかけて巾70cm～110cm程の部分を残し、他を深さ10cm～25cm掘り込んでいる。底面は凹凸が多い。床は掘り方の低い部分を埋め、ほぼ水平にした後、うすく土を貼り床面を構築する。床面はかなり硬い状態であった。

カマド 東壁南寄りに壁を約30cm掘り込んで設置する。袖は床面より構築している。

出土遺物 須恵器杯(6)・同蓋(12)・土師器甕(17)・石製紡錘車(24)が掘り方より出土している。



第31図 7号住居址掘り方実測図

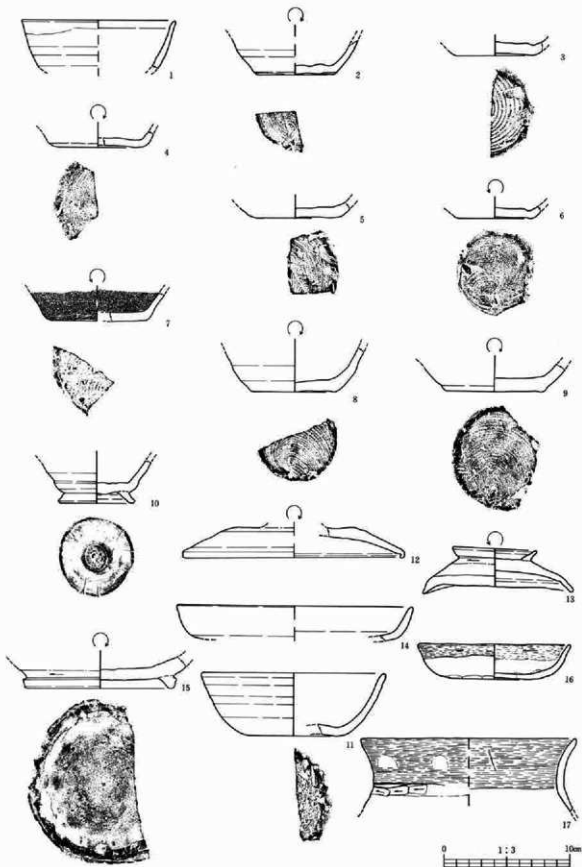


第32図 カマド掘り方実測図

第5章 検出された遺構と遺物

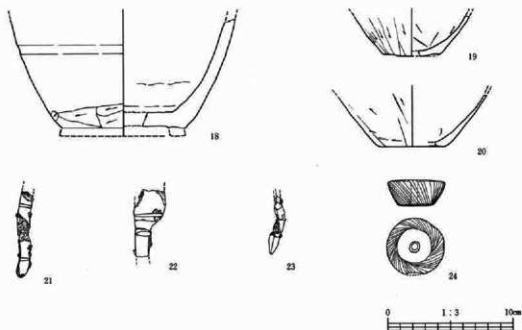
表9 7号住居址出土遺物観察表(1)

NO	器形	①口径 ②底径 ③器高(1推定)	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④コナデ回転 ⑤その他
1	坏	①(12.2)	①練含む。②灰白色。 ③硬質	口縁ゆるく外反。		①ㄥ②フタ土 ③須恵④不明。
2	坏	②(6.0)	①粗砂少量含む。 ②灰白色。③硬質	体部ゆるく内湾。	底部回転糸切り無調整	①ㄥ②フタ土 ③須恵④右
3	坏	②6.0	①粗砂少量含む。 ②灰白色。③硬質		底部回転糸切り無調整	①ㄥ②フタ土 ③須恵④不明
4	坏	②(7.0)	①細砂含む。②灰白色 ③やや硬質		底部回転糸切り無調整	①ㄥ②フタ土 ③須恵④右
5	坏	②(6.2)	①粗砂含む。②褐色 ③軟質		底部回転糸切り無調整	①ㄥ②フタ土③須恵 ④不明⑤酸化腐
6	坏	②6.0	①細砂含む。②灰白色 ③硬質		底部回転糸切り無調整	①底部完②握り方 ③須恵④右
7	碗	②(7.6)	①細砂含む。②黒色、 断面灰白色。③軟質		底部回転糸切り無調整	①ㄥ②フタ土 ③須恵④右
8	碗	②7.0	①細砂含む。②外面黒色、 内断面褐色③軟質	体部内湾して立ち上がり。 体部器壁厚い。	底部回転糸切り無調整	①ㄥ②フタ土 ③須恵④右
9	碗	②8.2	①練含む。②褐色 ③硬質		底部回転糸切り無調整	①ㄥ②フタ土 ③須恵④右
10	碗	②6.0	①細砂含む。②灰色 ③硬質	高台高く、開く。体部 下端丸く張り出す。	底部回転糸切り後高台 貼り付け。	①完②フタ土 ③須恵④不明
11	碗	①15.0 ②8.0 ③5.0	①練少量含む。石英少 量含む。酸化鉄粒少量 含む。③軟質	体部下位内湾。	底部回転糸切り無調整	①ㄥ②床直 ③須恵④不明
12	蓋	①(18.0)	①粗砂少量含む。 ②灰色③硬質	口唇部下方に折り曲げ る。	天井部回転ヘラ削り後 中心部回転コナデ。	①ㄥ②握り方 ③須恵④右
13	蓋	①12.4 ③3.0	①練・酸化鉄粒含む。 ②灰色③硬質	つまみ外方に開く。口 縁部斜め下方に屈曲。	つまみ内側全面回転コ ナデ。	①口縁部一部欠 ②床直③須恵④左
14	盤	①(19.0)	①粗砂少量含む。 ②灰色③硬質	口縁部焼けシミあり。		①ㄥ②フタ土 ③須恵④不明
15	台付蓋	②12.0	①細砂少量含む。酸化 鉄粒、黒色鉱物粒吹き 出す。②灰色③硬質	高台幅広く、外方に開 く。	底部全面回転ヘラ削 り。内底指線圧痕多く 残り、調整粗い。	①ㄥ②床直 ③須恵④右
16	坏	①(12.2) ②(7.0) ③(2.8)	①細砂含む。金葉母・ 酸化鉄粒含む。 ②褐色	平底。底部周縁内湾し 体部に至る。口縁部外 反する。	底部ヘラ削り、底部周 縁指線圧痕残り。口縁 部強いコナデ。	①ㄥ②フタ土 ③土師
17	甕	①(17.0)	①細砂含む。黒色鉱物、 酸化鉄粒含む。 ②に・い・褐色	口縁部外反。	口縁部コナデ。肩部 横位ヘラ削り。	①ㄥ②握り方 ③土師④器壁摩滅



第33圖 7号住居址出土遺物実測図(1)

第5章 検出された遺構と遺物



第34図 7号住居址出土遺物実測図(2)

表10 7号住居址出土遺物観察表(2)

NO	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④回転 ⑤その他
18	台付壺		①礫少量含む。酸化鉄粒含む。②灰色、断面褐灰色。③硬質	体部ゆるく内湾。	底部全面回転コナダ。体部下端ヘラ状工具による強いナデ。	①ㄥ②フク土 ③須磨④不明
19	壺	② (4.8)	①細砂含む。黒色鉱物、酸化鉄粒含む。 ②褐色	内底丸味を持つ。	体部下位縦位ヘラ削り。底部ヘラ削り。内底ヘラ状工具による成形後ナデ。	①ㄥ ②フク土 ③土師
20	壺	② 5.2	①細砂含む。黒色鉱物、酸化鉄粒含む。 ②褐色	内底丸味を持つ。	体部下位縦位ヘラ削り。底部ヘラ削り。内底ヘラ状工具による成形後ナデ。	①ㄥ ②カマド内 ③土師
21	鉄製品	断面二等辺三角形を呈する。端部は屈曲した後丸味を持って終わっている。一方は欠失。				
22	刀子	基部木質接着する。刃部は欠失している。刀身もほとんど欠失。				
23	鉄製品	断面正方形を呈するもので用途不明。				
24	紡錘車	側面に削り痕を残すもので、重さは47.5gである。				

8号住居址 (図35~39, 表11, 図版11・12・54)

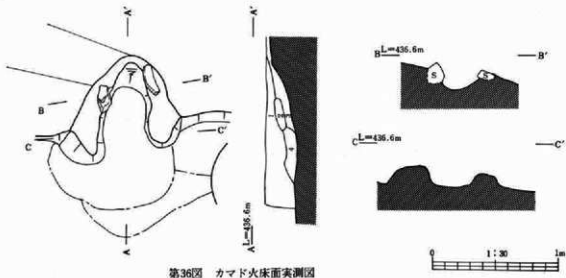
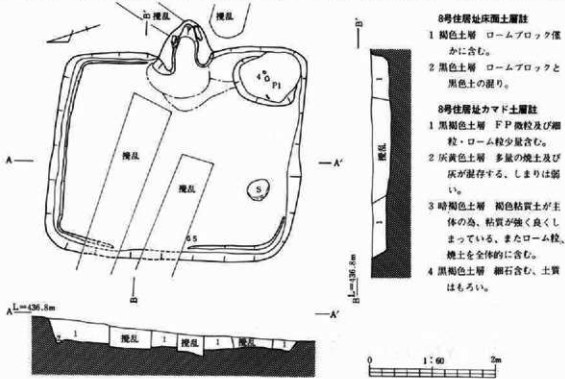
位置 中央住居址群の中央に位置する。約8m南東に7号住居址・約4m南に17号住居址がある。

平面形・規模 南北に長軸をもつ隅丸方形を呈する。規模は長軸4m・短軸3.3mを測り、方位はN-9°-Eを示す。重複はない。

壁 確認壁高は、北壁33cm・南壁16cmを測る。西壁は2ヶ所覆乱により破壊されている。

周溝 巾5cm~10cm、深さ5cmで、カマド北側から南西コーナーまで検出された。

柱穴・ピット 柱穴は検出されない。床面において、カマド右側に、深さ23.5cmの不整円形のピットが確



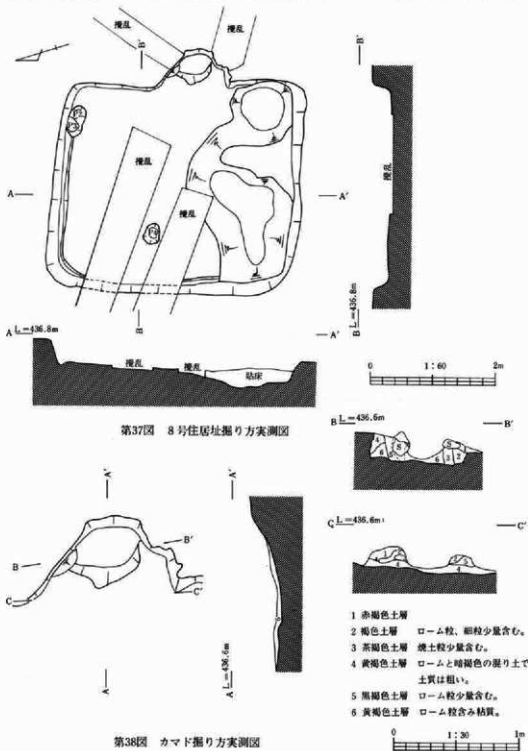
第5章 検出された遺構と遺物

認されている。掘り方面では小ビットが3個認められ、深さはP<sub>2</sub>15.4cm・P<sub>3</sub>14cm・P<sub>4</sub>26.8cmである。

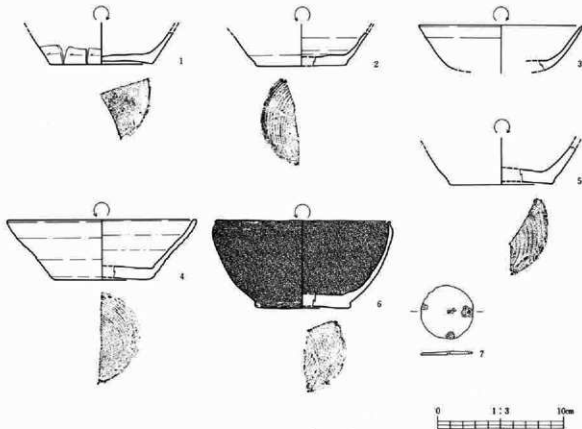
**掘り方・床** 掘り方は南半を10cm～30cm程掘り窪め、底面は凹凸が多い。床面は南半を厚さ10cm～30cm埋め戻して床を構築する。北半は地床である。

**カマド** 東壁中央に壁を約50cm掘り込んで設置する。掛け口部は壁外に存在したと考えられ、袖は壁外より壁内に内湾気味に延びる。

**出土遺物** 須恵器環(4・5)が床面直上より、鉄製品(7)がカマド袖部より出土している。







第39図 8号住居址出土遺物実測図

表11 8号住居址出土遺物観察表

NO	器形	①口径 ②底径 ③器高( )釐定	①粘土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロクロ回転 ⑤その他	
1	坏	② (8.2)	①細砂含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色③硬質		底部回転糸切り後全面弱いなで調整。体部下端へフ削り。	① $\frac{1}{2}$ ②フク土 ③真想④右	
2	坏	② (7.2)	①細砂含む。酸化鉄粒含む。 ②灰白色③硬質	体部中位外湾	底部回転糸切り無調整	① $\frac{1}{2}$ ②フク土 ③真想④左	
3	坏	① (13.0)	①織含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色③硬質	口唇部小さく外反。		① $\frac{1}{2}$ ②カマド内 ③真想④右	
4	坏	① (15.2) ② (7.8) ③ (4.7)	①細砂含む。②器表灰色、断面灰白色 ③軟質	体部外湾。口縁部厚を増し、内湾。口唇部内側に平坦面を持つ。	底部回転糸切り無調整	①口縁部 $\frac{1}{2}$ 。底部 $\frac{1}{2}$ ②床直 ③真想④左	
5	埴	② (8.2)	①織含む。②灰色 ③硬質	器壁やや厚い。	底部回転糸切り無調整	① $\frac{1}{2}$ ②床面 ③真想④右	
6	埴	① (14.0) ② (7.4) ③ 6.9	①細砂含む。石英粒含む。 ②器表黒色。断面褐色	底部器壁厚い。	体部内湾。口唇部器壁うすい。	①口縁部 $\frac{1}{2}$ 。底部 $\frac{1}{2}$ ②フク土 ③真想④左	
7	鉄製品	直径4 cm、厚さ1 mmを測り、中心と周囲の2ヶ所に直径1~2 mmの孔が認められる。					

9号住居址 (図40~44, 表12, 図版12~14・54・64)

位置 中央住居址群の西に位置する。本住居址の北側は、住居址の密度は粗であり、南側は密である。約4m北東に8号住居址・約3.5m南東に17号住居址がある。

平面形・規模 南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈する。規模は長軸3.6m・短軸3.0mを測り、方位はN-4°-Eを示す。重複はない。

壁 確認壁高は北壁28cm・南壁10cmであり、本遺跡では低い部類に属する。北と南の壁高差は小さい。

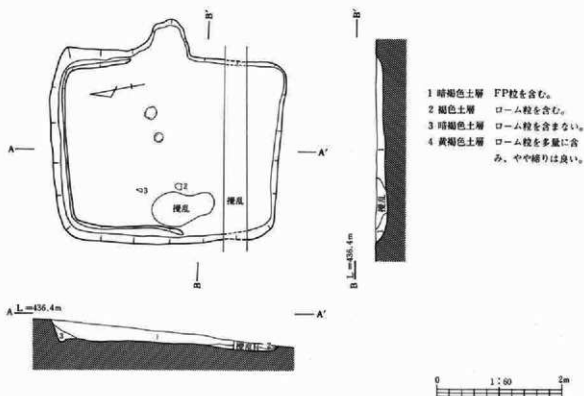
周溝 巾5cm~15cm・深さ5cm程で、カマド北側より西壁中央まで検出された。

柱穴・ピット 柱穴は検出されない。掘り方面において検出された小ピット(P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)は、カマドに付随するものであろう。

掘り方・床 掘り方は全体を3cm~20cm掘り窪めている。底面は凹凸が多く、住居址中央カマド寄りの部分が浅く南側が深い。床面は南側がやや低い状態で検出された。

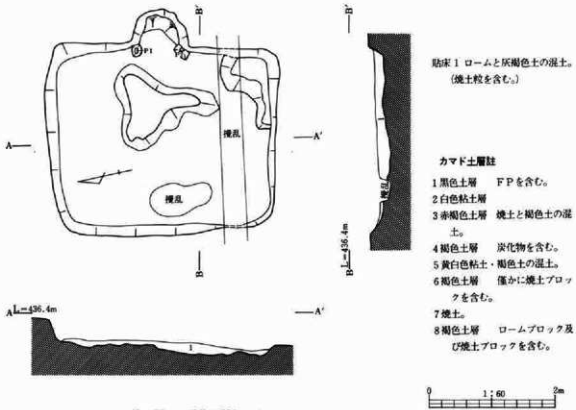
カマド 東壁やや北寄りに壁を53cm掘り込んで設置する。遺存状態は悪く、焼成部北壁の焼土や袖は残存していない。燃焼部内側に当たる部分に小ピット(P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)が検出されている。深さは3cm・4cmであり、石材の掘り方と考えられる。

出土遺物 床面直上より底部全面ヘラ削りの須恵器坏(3)が、覆土中より墨書土器(1)が出土している。須恵器の坏で実測可能なものは3個体あり、そのうち2個体がロクロ左回転である。

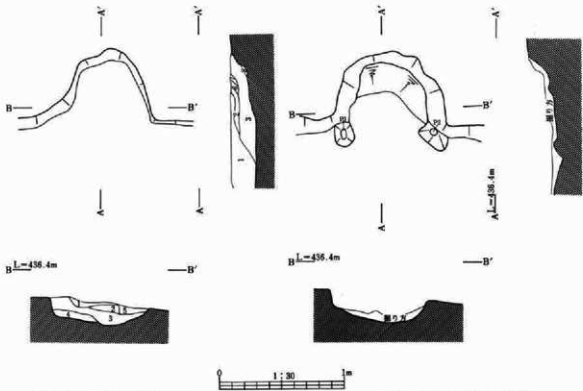


第40図 9号住居址床面実測図

第1節 住居址・住居址出土遺物



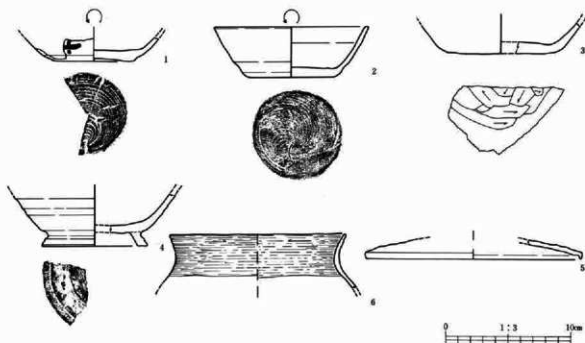
第41図 9号住居址掘り方実測図



第42図 カマド火床面実測図

第43図 カマド掘り方実測図

第5章 検出された遺構と遺物



第44図 9号住居址出土遺物実測図

表12 9号住居址出土遺物観察表

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高 ( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロタロ回転 ⑤その他
1	坏 (壺蓋)	② 6.2	①細砂含む。 ②灰白色 ③軟質		底部回転糸切り無調整	①残 ②フタ土 ③須恵 ④左 ⑤墨 書料読不可能
2	坏	① (12.4) ② ( 6.8) ③ ( 4.0)	①細砂少量含む。石英 粒少量含む。 ②灰白色。口縁部外面 灰色。③硬質	体部下位凹縁状に凹 む。口唇部ゆるく外反。	底部回転糸切り無調整	①口縁部片・底部片 ②フタ土 ③須恵 ④左
3	埴	② (8.5)	①細砂含む。軽石・酸 化鉄粒含む。 ②灰白色。③硬質	体部下位ゆるく外反。	底部全面へラ削り。 切り難し技法不明。	①片 ②床面 ③須恵 ④不明
4	埴	② (8.4)	①細砂・礫含む。酸化 鉄粒含む。粗い。 ②灰色。③硬質。		内底の調整は丁寧。 底部回転糸切り後高台 貼り付け。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
5	蓋	① (17.0)	①細砂少量含む。 ②灰色・断面赤灰色 ③硬質	口縁部内外面凹縁状に 凹む。口唇部下方に折 り曲げる。	天井部回転へラ削り後 回転コナダ。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
6	壺	① (14.0)	①細砂含む。黒色鉱物 粒含む。②内面黒褐色 外面褐色。	頸部より外湾して口縁 部に至る。口唇部丸く おさめる。	口縁部コナダ。 肩部横位へラ削り。	①片 ②フタ土 ③土師

## 10号住居址 (図45-47, 表13, 図版14・15・54)

**位置** 東側住居址群の北端に位置する。本住居址の北側道路部分に傾斜変換線があり、道路以北は急な傾斜となる。したがって奈良・平安時代の住居址は本住居址以北には存在しないと考えられる。約9m南西に11号住居址・約9m南東に29号住居址がある。

**平面形・規模** やや南北に長い隅丸方形を呈する。規模は長軸3.2m・短軸2.9mを測り、方位はN-10°-Eを示す。重複はない。

**壁** 確認壁高は北壁32cm・南壁9cmを測り、壁の立ち上がり角度はかなり急である。東壁・西壁は、共に巾1.2mの擾乱により中央が破壊されている。

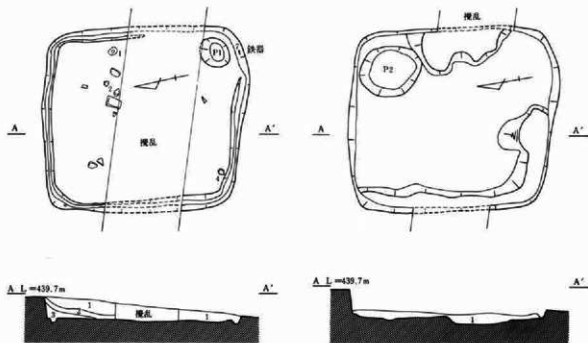
**周溝** 巾10cm-20cm・深さ5cm-10cmで、南東コーナーを除き全周すると考えられる。

**柱穴・ピット** 柱穴は検出されない。床面において、南東コーナーに深さ24cmの貯蔵穴(P<sub>1</sub>)が確認されている。また掘り方面においては、深さ5cmのP<sub>2</sub>が確認されている。

**掘り方・床** 掘り方は東壁中央部は浅く、2cmしか掘り込まず、他の部分は10cm-16cm掘り込んでいる。底面は、凹凸が多い。床面はやや硬く、小さい凹凸がみられた。

**カマド** 擾乱のため不明であるが、掘り方の状況から考えて東壁中央に存在した可能性が高い。

**出土遺物** 壁際の床面直上より須恵器杯(1)・(4)が出土している。



- 1 黒褐色土層 FP粒を含む。  
2 暗褐色土層 FP粒を含む。  
3 暗褐色土層 FP粒を含まない。

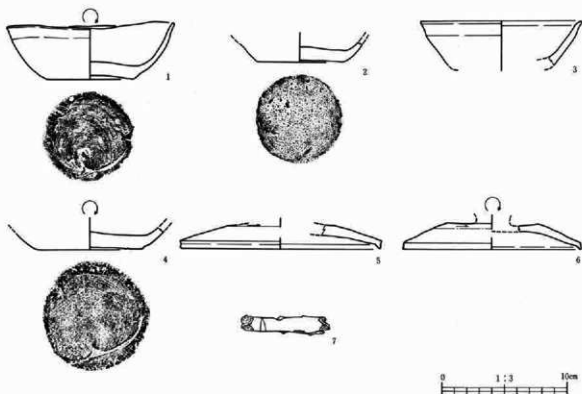
貼床1 ロームブロックと黒土の混土。



第45図 10号住居址床面実測図

第46図 10号住居址掘り方実測図

第5章 検出された遺構と遺物



第47図 10号住居址出土遺物実測図

表13 10号住居址出土遺物観察表

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種類④フタ回転 ⑤その他
1	杯	① 13.5 ② 6.8 ③ 4.0	①粗砂・糠含む。石英 軽石粒含む。 ②灰色・③硬質	体部内湾。口縁部ゆる く外反。全体に焼け至 む。	底部回転糸切り無調整	①口縁部一部欠失 ②床直 ③須恵 ④右
2	杯	② 7.2	①細砂・粗砂含む。 ②灰色 ③硬質	体部下位外反。	底部回転糸切り無調整	①底部完 ②フタ土 ③須恵 ④不明 ⑤外底降灰
3	杯	① 12.8	①粗砂含む。酸化鉄粒 含む。②灰色。 ③硬質	口縁部器壁を減じ外 反。		①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明 ⑤外面一部降灰
4	碗	② 8.3	①細砂含む。 ②にぶい・橙色 ③軟質		底部回転糸切り無調整	①完 ②床直 ③須恵 ④右 ⑤酸化焰
5	蓋	① (16.0)	①粗砂少量含む。 ②灰色。③硬質	口唇部後を持ち、下方 に屈曲する。	天井部回転ヘタ削り。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
6	蓋	① (14.0)	①細砂含む。②灰色 ③硬質	口唇部小さく下方に屈 曲する。	天井部回転糸切り後回 転コナゲ。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
7	刀子	断面二等辺三角形を呈し、両端は欠失している。刀子の身と考えられる。				

11号住居址 (図48~53, 表14, 図版16・17・54・55)

位置 中央住居址群の北東に位置する。約4m西に12号住居址・約5.5m南東に6号住居址がある。

平面形・規模 1辺3.2mを有する隅丸方形を呈する。方位はN-6.5°-Eを示す。重複はない。

壁 確認壁高は、北壁43cm・南壁10cmである。

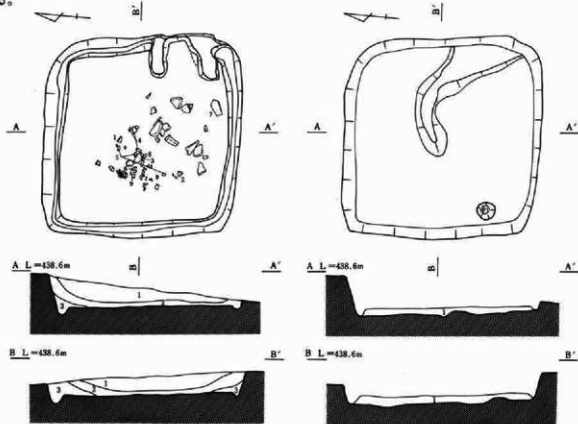
周溝 巾4cm-15cm・深さ5cm-13cmで、カマド部分を除き全周する。周溝の巾、深さは一定ではなく、場所によりかなり異なっている。

柱穴・ピット 柱穴は検出されない。掘り方面においてピットと思われるものが南西コーナーで確認されたが、掘り方底面の凹凸が多いため不明である。深さは10cmを測る。

掘り方・床 掘り方はカマド部分より中央にかけての細長い範囲を5cm・他の部分を7cm-17cm掘り窪めている。底面は凹凸が多い。床面はゆるやかな凹凸があるが、水平であった。

カマド 東南コーナーに位置し、壁への掘り込みはみられない。火床面・袖は床面上に構築し、煙道部は壁を削り残して傾斜をつけている。

出土遺物 住居址中央より比較的多く出土している。(8・9)を除き、他はすべて床面直上より出土している。カマド前面には石が多くみられ、焼成を受けたものも存在した。カマド構築材の可能性のある。



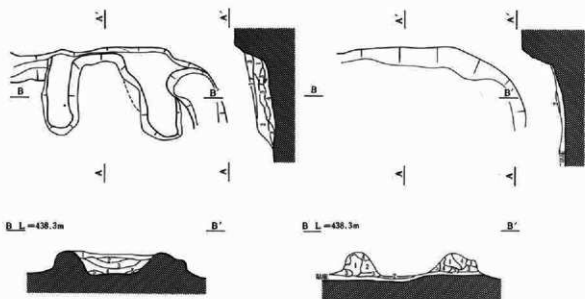
- 1 黒色土層 0.5-2.0cmのFFP粒を多量に含む。
- 2 褐色土層 細かいロームブロック含む。
- 3 黒色土層 ロームブロック含む。

貼床1 ロームブロックと褐色土の混土。

第48図 11号住居址床面実測図

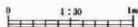
第49図 11号住居址掘り方実測図

第5章 検出された遺構と遺物



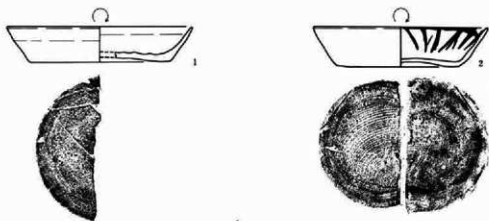
- 1 灰褐色土層 ローム粒少量含む。
- 2 灰褐色土層 ローム粒、焼土粒含む、しまりが無い。
- 3 灰褐色土層 2層より焼土を少し多く含む、しまりが無い。
- 4 灰褐色土層 3層より焼土多く含む、しまりの良い土。
- 5 灰褐色土層 ローム粒含む。

- 1 白色粘土層 焼土粒少量含む。
- 2 焼土 粘性がある。
- 3 ロームと黒色土の混土。
- 4 灰褐色土層 焼土粒含む、粘質。
- 5 灰褐色土層 4層より焼土多く含む。
- 6 黏床



第50図 カマド火床面実測図

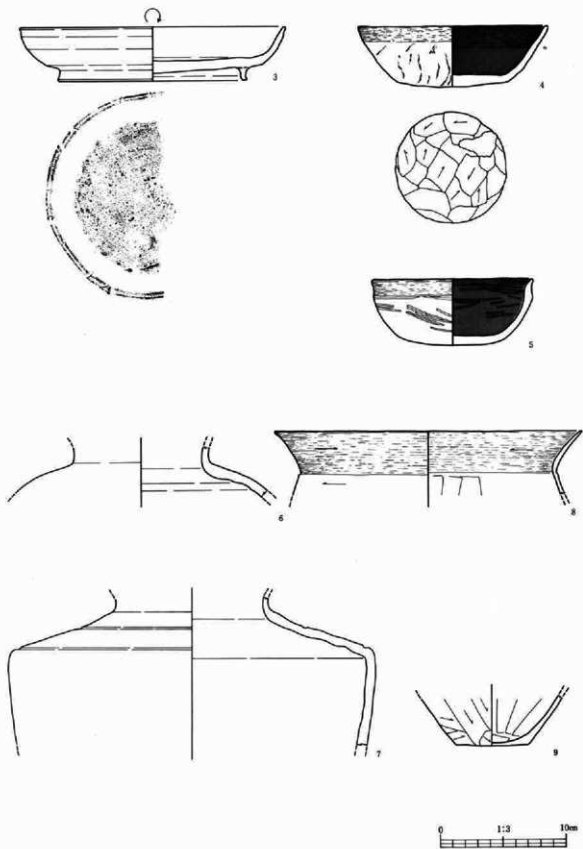
第51図 カマド掘り方実測図



第52図 11号住居址出土遺物実測図(1)







第53図 11号住居址出土遺物実測図(2)

第5章 検出された遺構と遺物

表14 11号住居址出土遺物観察表

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種類④ロケツト回転 ⑤その他
1	坏	① (14.8) ② (11.2) ③ ( 2.9)	①粗砂・礫含む ②外面黒色。断面器壁付近灰白色。断面灰褐色。③軟質	器高低い。体部より器壁を減じ口唇部に至る。	底部回転ヘラ削り。底部ナデ調整か？	①片 ②床直・フタ土③須恵 ④石
2	坏	① 14.0 ② 9.8 ③ 3.1	①粗砂含む ②褐色～灰褐色 ③硬質	体部・口縁部直線的に延びる。	底部回転糸切り後周縁回転ヘラ削り。	①片 ②床直 ③須恵 ④右 ⑤内面火障。内底焼成前ヘラ掻き記号。
3	甕	① (21.2) ② 15.0 ③ 4.2	①細砂含む。石英粒含む。②灰白色 ③軟質	体部内肉。口唇部器壁を減じる。高台ほぼ直立。	底部全面回転ヘラ削り後全面回転ココナデ。	①片 ②床直・フタ土③須恵 ④右
4	埴	① (15.1) ② 9.3 ③ 4.9	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。 ②内面黒色。外・断面褐色。	底部平底。体部直線的に延びる。	底部粗いヘラミガキ。内面ナデ。口縁部強いココナデ。	①底部完。口縁部片 ②床直・フタ土 ③土師
5	埴	① (12.8) ② 9.0 ③ 5.8	①細砂含む。酸化鉄粒含む。②内面黒色。外断面褐色。	口唇部器壁を減じ、小さく外反。体部内肉。平底気味。	口縁部強いココナデ。底部粗いヘラミガキ。内面ナデ。	①底部完・口縁部片 ②床直・フタ土 ③土師
6	広口壺		①粗砂・礫含む。石英・軽石粒少量含む。 ②灰色 ③硬質	頸部強く外湾し口縁部に至る。		①片 ②床直 ③須恵 ④不明
7	広口壺		①粗砂・礫多く含む。石英・軽石粒含む。 ②外面灰褐色。内面暗灰色。断面暗赤灰色。 ③硬質	肩部強く屈曲する。屈曲部・肩部中央凹縁状に凹む。繋げ歪む。		①片 ②床直 ③須恵 ④不明
8	壺	① (24.5)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。 ②赤褐色	口縁部「く」の字に外反する。	口縁部ココナデ。口縁部中位外面ココナデ弱い。肩部横位ヘラ削り。	①片 ②フタ土 ③土師
9	壺	② 5.7	①細砂含む。金雲母・黒色鉱物粒含む。 ②赤褐色	底径やや大きく、器壁厚い。内底少し丸味を持つ。	底部ヘラ削り。外面斜位・横位ヘラ削り。内底ヘラ成形後ナデ。	①片 ②フタ土 ③土師

## 12号住居址 (図54~59, 表15・16, 図版18・19・55)

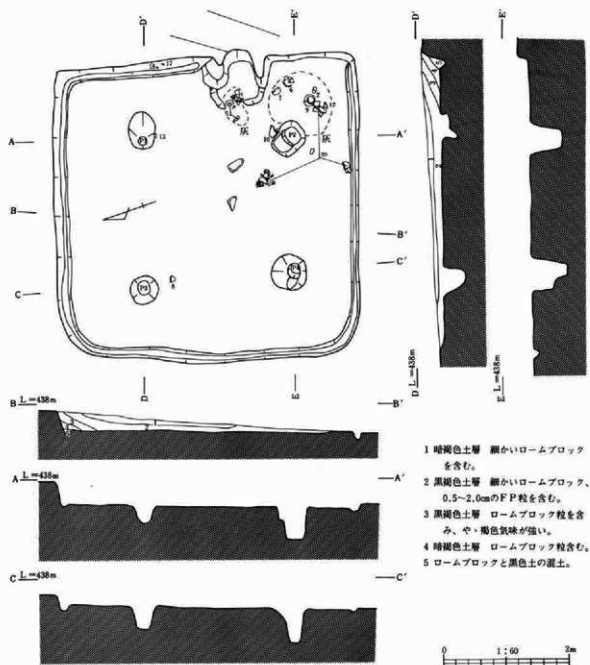
位置 中央住居址群の北に位置する。道路を隔てて2号住居址・約4m東に11号住居址がある。

平面形・規模 1辺4.9mの方形を呈する。方位はN-6.5°-Eを示す。重複はない。

壁 確認壁高は南壁36cmで、北壁は遺存していない。

周溝 巾10cm-18cm・深さ6cm-10cmで、カマド部分とカマド南側を除き全周すると考えられる。

柱穴・ピット 4本の支柱穴が確認された。深さはP<sub>1</sub>23cm・P<sub>2</sub>52cm・P<sub>3</sub>33cm・P<sub>4</sub>53cmを測る。掘り方面において6ヶ所の落ち込みが確認されている。深さはP<sub>5</sub>10cm・P<sub>6</sub>30cm・P<sub>7</sub>19cm・P<sub>8</sub>12cm・P<sub>9</sub>



第54図 12号住居址床面実測図

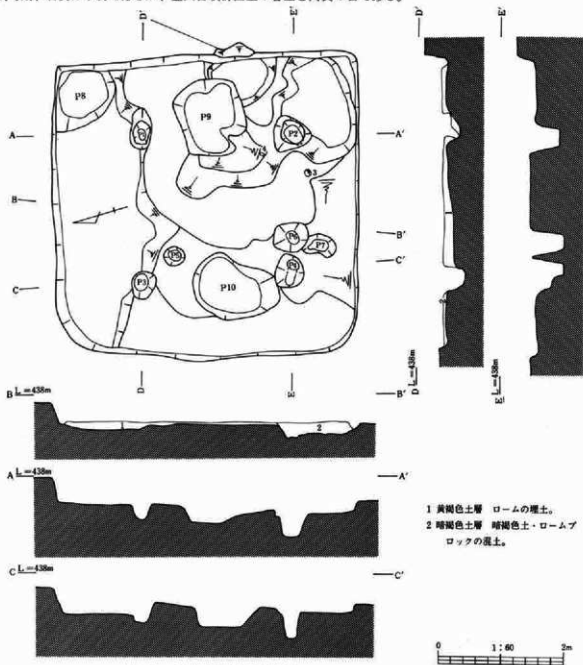
第5章 検出された遺構と遺物

55cm・P<sub>10</sub>37cmである。このうちP<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>は、掘り方より掘り込まれた床下土塊と考えられる。

**掘り方・床** 掘り方は床下土塊を除き、4cm～18cm掘り込む。底面は凹凸が多く、比高差も大きい。床下土塊は東西の柱穴間に確認された。いずれも掘り方からの掘り込みで、深さはP<sub>9</sub>26cm・P<sub>10</sub>37cmを測る。床面は比較的硬い状態であった。

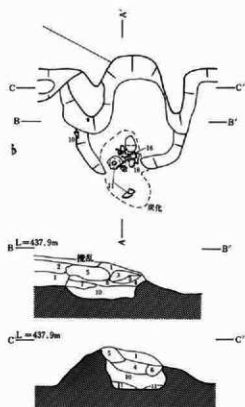
**カマド** 東壁南寄りに壁を16cm掘り込んで設置する。煙道は壁上半を削り傾斜をつけている。火床面・袖は床面上に構築する。

**出土遺物** 掘り方出土の遺物は、須恵器杯(1・3・5)、同蓋(12)がある。また床面より土師器甕(20)が出土している。特殊遺物として、砥痕が認められるにぶい緑色を呈した石が掘り方より出土している。所屬時期、石質は不明であるが、金山古墳群出土の管玉と同質の石である。

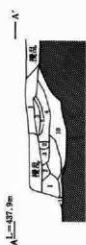


第55図 12号住居址掘り方実測図

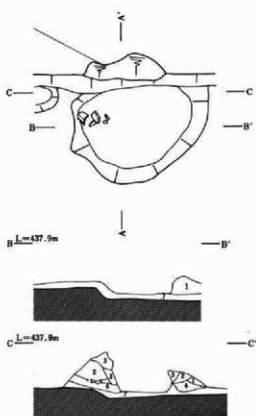
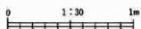
第1節 住居址・住居址出土遺物



第56図 カマド火床面実測図



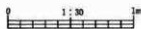
- 1 灰褐色土層 ローム粒を含む。
- 2 灰褐色土層 1層よりローム粒が少ない。
- 3 灰褐色土層 ローム粒を主体とした中に灰褐色土を少量含む(焼土粒微量含む)
- 4 ローム粒、灰色土の混土。
- 5 淡灰褐色土層 灰褐色土・ローム粒・焼土粒の混土。
- 6 灰褐色土層 1層よりローム粒多量を含む。
- 7 灰褐色土層 1層に焼土を含む。
- 8 灰褐色土層 ローム粒・焼土粒微量を含む。
- 9 灰褐色土層 粘質、焼土粒を少量含む。
- 10 焼土中に灰褐色土を含み、かたい焼土粒を含む。
- 11 灰褐色土層 焼土粒を含み、粘性。



第57図 カマド掘り方実測図



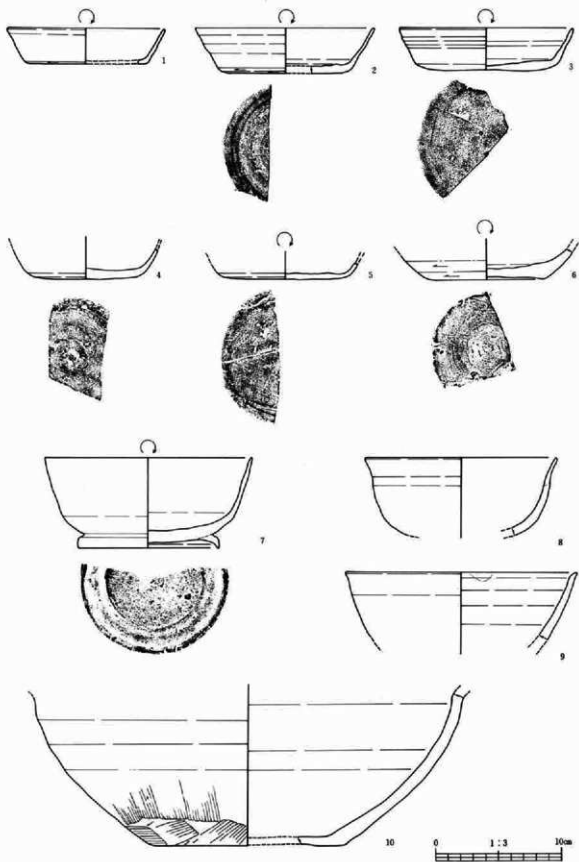
- 1 白色粘土
- 2 灰白砂質土
- 3 焼土 かたい。
- 4 黄褐色土層 ローム土に灰色砂質粘土を含む。
- 5 暗黄褐色土層 4層に黒色土を含む。
- 6 暗褐色土層 灰色砂質粘土・焼土・黄色粘土の混土。
- 7 ローム・FPを含む黒色土の混土(踏み床)



## 第5章 検出された遺構と遺物

表15 12号住居址出土遺物観察表(1)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロケロ回転 ⑤その他
1	坏	① (12.6)	①細砂含む。 ②灰黄褐色、断面黒灰色。 ③軟質	口径やや小さい。口縁部器壁うすくなり、口唇部は少し肥厚する。	底部へら削り。回転か手押かは不明。	①片 ②攪り方 ③須恵 ④右
2	坏	① (14.3) ② (9.0) ③ 3.6	①細砂含む。酸化鉄粒含む。 ②外面灰色、内・断面灰白色 ③硬質	体部→口縁部器壁うすい。口縁部小さく外反。	底部全面、体部下端回転へら削り。	①底部片、口縁部片 ②味直 ③須恵 ④右
3	坏	① (13.0) ② (11.0) ③ 3.3	①細砂含む。②内面灰色、断面赤灰色。外面黒灰色。 ③硬質	体部小さく外湾。口縁部小さく内湾。	底部全面へら削り。	①口縁部片。底部片 ②攪り方 ③須恵
4	坏	② (8.0)	①細砂少量含む。 ②灰黄褐色 ③軟質		底部回転へら削り？ 体部下端回転へら削り？	①片 ②攪り方 ③須恵 ④不明 ⑤器表摩滅。
5	坏	② 10.0	①粗砂少量含む。 ②灰白、断面灰白色。 ③軟質		底部全面へら削り。	①片 ②フク土、攪り方。 ③須恵 ④右
6	埴	① (15.3)	①粗砂・炭少量含む。軽石・石英粒少量含む。 ②灰色 ③硬質	体部内湾。口縁部大きく外湾。		①口縁部片、体部片 ②味直 ③須恵 ④不明
7	台付壺	① (16.5) ② 11.2 ③ 7.1	①粗砂・炭含む。酸化鉄・軽石粒含む。 ②灰色 ③硬質	高台外方に開いた後下方に屈曲する。壺付幅狭い。体部外方に開いた後部曲し、上方に延びる。体部→口縁部器壁うすい。	底部全面回転へら削り後周辺高台貼り付け時の回転ヨコナデ。	①片 ②床面 ③須恵 ④右
8	埴	② (8.8)	①粗砂含む。 ②外面黒色。内・断面灰白色。 ③硬質	底部中央器壁厚く、周縁部器壁を増す。	底部全面回転へら削り	①片 ②味直 ③須恵 ④右
9	鉢	① 18.5	①粗砂含む。 ②灰白色。 ③軟質	口唇部小さく外反。		①口縁部一部欠失 ②味直。③須恵 ④不明。⑤器壁摩滅
10	鉢	② (15.2)	①細砂含む。酸化鉄粒含む。 ②灰白色 ③硬質	底部器壁うすい。体部下位直線的に延びる体部下位内湾する。口縁部外反する。	体部下端、へら削り後タタキ目状のカキ目。体部下位部位カキ目後回転ヨコナデ。内底ナデ。	①片 ②味直 ③須恵 ④右



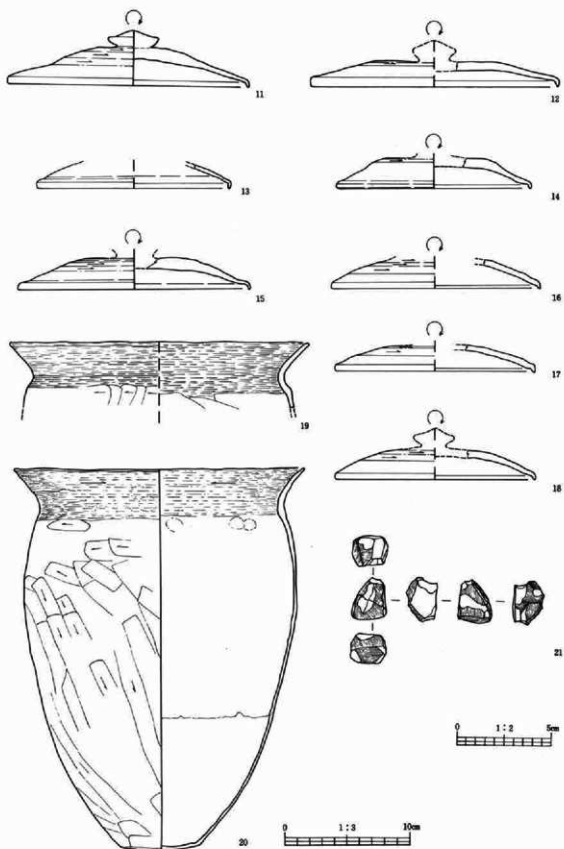
第58図 12号住居址出土遺物実測図(1)

第5章 検出された遺構と遺物

表16 12号住居址出土土遺物観察表(2)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①粘土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④コナノ回転 ⑤その他
11	蓋	① (19.2) ② (4.4)	①粗砂・雑含む。石英・酸化鉄粒少量含む。 ②にぶい褐色 ③軟質	扁半球状つまみ。天井部ゆるく屈曲し、口縁部直線的に延びる。口唇部下方に折り返す。	天井部回転ヘラ削り後回転コナナデ。	①口縁部④、天井部完。②床直 ③須恵 ④右
12	蓋	① (19.5)	①粗砂少量含む。 ②灰黄褐色。 ③軟質	天井部屈曲し、口縁部に至る。口唇部下方に長く折り返す。つまみを有すると考えられる。	天井部回転ヘラ削り後中央部回転コナナデ。	①④ ②攪り方 ③須恵 ④右
13	蓋	① (15.5)	①細砂少量含む。 ②灰白色 ③軟質	器壁うすい。口唇部下方に折り返す。		①④ ②床直 ③須恵 ④不明
14	蓋	① (15.5)	①細砂含む。 ②外面灰色。内・断面灰白色。 ③軟質	天井部屈曲し、口縁部に至る。口縁部水平に屈曲した後小さく下方に折り曲げる。	天井部回転ヘラ削り後中央部つまみ貼り付け時の回転コナナデ。	①④ ②フタ土 ③須恵 ④右
15	蓋	① (18.5)	①粗砂含む。石英・酸化鉄粒少量含む。 ②灰白色 ③軟質	天井部屈曲し、口縁部に至る。口縁部水平に屈曲した後内湾させるように折り曲げる。	天井部回転ヘラ削り後全面つまみ貼り付け時の回転コナナデ。	①④ ②フタ土 ③須恵 ④右
16	蓋	① (16.5)	①粗砂含む。酸化鉄粒含む。 ②灰白色 ③軟質	天井部内湾気味に延び、口縁部ゆるく外湾した後、口唇部小さく折り曲げる。	天井部回転ヘラ削り。	①④ ②床直 ③須恵 ④右 ⑤器壁摩滅。17、18と同一個体か。
17	蓋	① (16.0)	①粗砂少量含む。 ②外面灰色。内・断面灰白色。 ③軟質	天井部内湾気味に延び、口縁部ゆるく外湾した後、口唇部小さく折り曲げる。	天井部回転ヘラ削り、後中央部つまみ貼り付け時の回転コナナデ。	①④ ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤器壁摩滅
18	蓋	① (16.0)	①粗砂少量含む。 ②外面灰色。内・断面灰白色。 ③軟質	天井部内湾気味に延び、口縁部ゆるく外湾した後、口唇部小さく折り曲げる。	天井部回転ヘラ削り、後中央部つまみ貼り付け時の回転コナナデ。	①④ ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤16、17と同一個体か。
19	壺	① (24.0)	①粗砂多く含む。黒色紅物多く含む。酸化鉄粒含む。 ②にぶい褐色	口縁部「く」の字に外反。	口縁部コナナデ 肩部外面横位ヘラ削り 肩部内面ナデ	①④ ②カド内 ③土師 ⑤器壁摩滅
20	壺	① 23.4 ② 6.3 ③ 30.3	①細砂多く含む。黒色紅物・金雲母含む。 ②にぶい褐色	口縁部「く」の字に外反。最大径は口縁部にある。底径はやや大きく、内底は平坦。器壁うすい。	口縁部コナナデ。 肩部外面横位、肩部下方位斜め、胴部以下縦位ヘラ削り。底部ヘラ削り。	①口縁部一底部一部欠失。 ②床直 ③土師
21	未製品			不整形を呈し、全面に粗い砥痕が残っている。原石はあまり大きくなかったようであり、自然面が残っている。おそらく未製品であろう。住居址に伴うものかどうかは不明。攪り方出土で石質は不明。金山古墳群出土の碧玉と同質の石である。		





第59圖 12号住居址出土遺物実測図(2)

13号住居址 (図60~65, 表17・18, 図版20・21・56)

位置 中央住居址群南東部の住居址が最も重複・近接する場所に位置する。本住居址は14号住居址と重複し、南東に存在する18号住居址とは20cm・南西に存在する7号住居址とは1mと近接している。約2.5m北西には15号住居址がある。

平面形・規模 1辺3.6mの隅丸方形を呈する。方位はN-2.5°-Eを示し、14号住居址と重複する。重複関係は本住居址が新しく、後述する14号住居址が古い。

壁 確認壁高は北壁38cm・南壁11cmを測る。

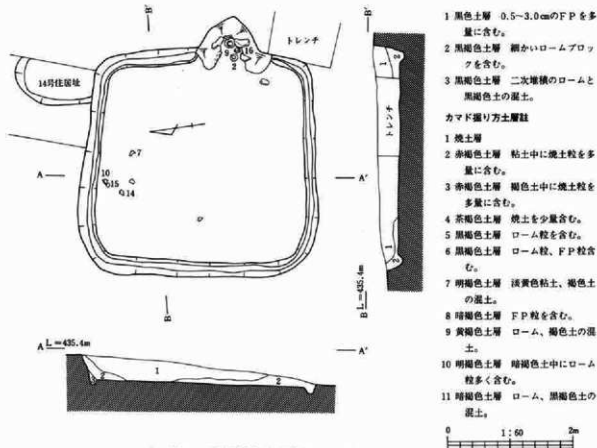
周溝 カマド部分を除き全周する。巾は10cm~20cm・深さは8cm~10cmである。

柱穴・ピット 柱穴は確認されない。ピットは掘り方面において8ヶ所確認されている。深さはP<sub>1</sub>21cm・P<sub>2</sub>18cm・P<sub>3</sub>15cm・P<sub>4</sub>7cm・P<sub>5</sub>28cm・P<sub>6</sub>12cmである。

掘り方・床 掘り方はピットを除き、2cm~20cm掘り込んでいる。底面は凹凸が多く、南に傾斜している。床面は小さい凹凸が多く、やや硬い状態であった。

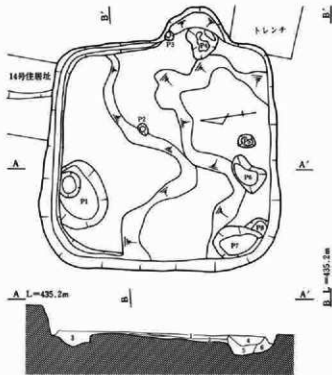
カマド 東壁南寄りに位置する。火床面は一旦深く掘り方を掘った後、黒褐色土で埋め戻して構築している。掛け口付近の火床面はやや窪み、煙道部は急な傾斜を有する。袖は壁の掘り込み内より構築し、住居址内に短くつき出る。掛け口付近の袖高は35cmを測る。

出土遺物 須恵器坏(3)が掘り方より、須恵器坏(2)・同鉢(9)・同小型壺(16・19)がカマドより出土している。なお(16・19)は同一個体の可能性がある。



第60図 13号住居址床面実測図

第1節 住居址・住居址出土遺物

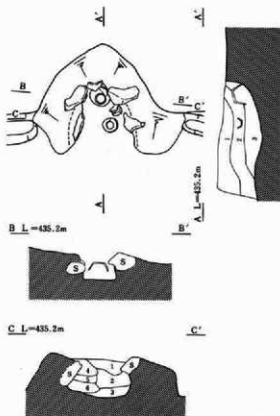
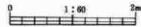


第61図 13号住居址掘り方実測図

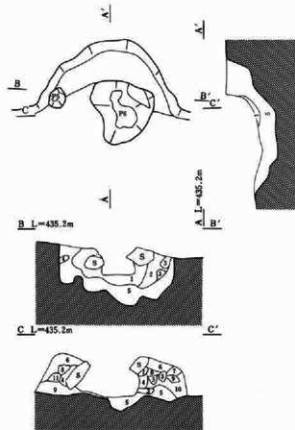
- 1 黒褐色土層 ロームブロックを含む。
- 2 黄褐色土層 黒色土を含むがロームブロックが主体。
- 3 ローム サラサッとして土質はもろい。
- 4 黒褐色土層 ロームブロックを含む。
- 5 暗褐色土層 7層よりロームブロック多い。
- 6 ローム。

カマド土層註

- 1 黒褐色土層 FP微粒～粗粒が多く含まれ若干焼土粒を含み、土質は粗くよくなっている。
- 2 暗褐色土層 1層に比してFPを含む量は少なく、R Bを若干含む。
- 3 明褐色土層 層下部に多量の焼土また全体的に焼土粒が多い、FP粗粒を少量含む。
- 4 明褐色土層 FP微粒を少量含み、褐色粘質土を多量に含んでいる為しり粘性に富んでいる。
- 5 赤褐色土層 焼土層である。
- 6 褐色土層 焼土粒、炭化物を少量含むがFPは含んでいない。



第62図 カマド火床面実測図

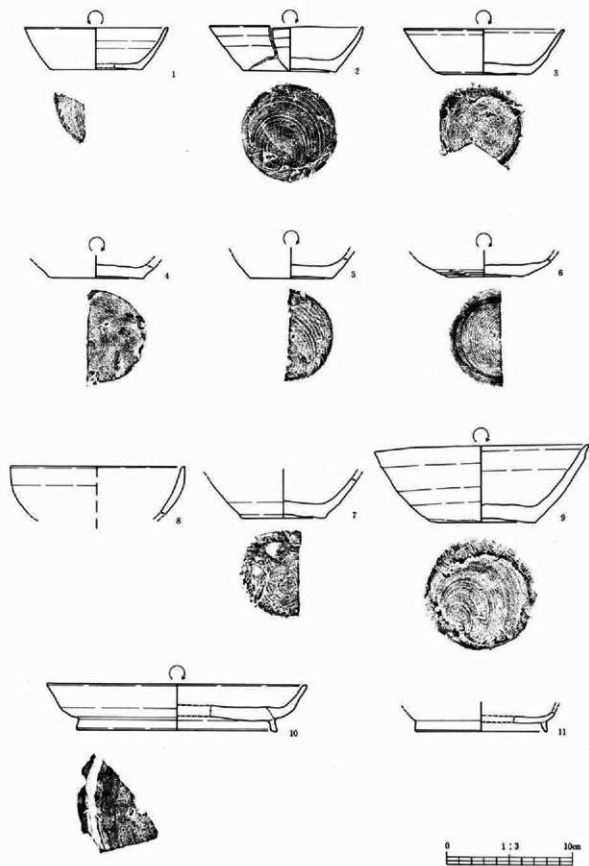


第63図 カマド掘り方実測図

第5章 検出された遺構と遺物

表17 13号住居址出土遺物観察表(1)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①粗土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種類④リコ回転 ⑤その他
1	坏	① (11.5) ② ( 7.3) ③ ( 3.3)	①細砂少量含む。酸化鉄粒含む。 ②にぶい褐色 ③軟質	器高低い、内底と体部の境明瞭。体部ゆるく内湾。	底部回転糸切り無調整	①片 ②フタ土 ③須恵 ④左。⑤酸化塩
2	坏	① 12.0-12.3 ② 7.5 ③ 3.5	①砂少量含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	口縁部小さく内側に屈曲する。焼成時のひび割れあり。	底部回転糸切り無調整。	①完 ②カマド内 ③須恵 ④右
3	坏	① (12.8) ② 6.7 ③ 3.6	①砂少量含む。軽石粒含む。 ②灰白色 ③硬質	口縁部ゆるく外反。	底部回転糸切り無調整	①底部片。口縁部一部。 ②掘り方 ③須恵 ④右
4	坏	② 7.5	①細砂・砂少量含む。 ②灰色・断面赤灰色。 ③硬質		底部回転糸切り無調整	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
5	坏	② 6.5	①細砂含む。 ②灰黄色。断面にぶい褐色。 ③硬質		底部回転糸切り無調整	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
6	埴	② 6.0	①粗砂含む。 ②灰白色 ③軟質	体部外方に広く開く。体部下位屈曲し上方に延びる。	底部回転糸切り無調整。体部下端回転ヘラ削り。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
7	埴	② 6.8	①粗砂少量含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	底部焼け歪む。	底部回転糸切り。後に大小の圧痕。	①片 ②床面 ③須恵 ④不明
8	埴	① (13.9)	①細砂含む。 ②灰黄褐色。 ③硬質	口縁部内側に屈曲する。		①片 ②カマド内 ③須恵 ④不明 ⑤酸化塩気味
9	埴	① 16.7-17.2 ② 8.5 ③ 6.0	①細砂少量含む。 ②にぶい褐色 ③軟質	体部ゆるく内湾。口縁部器壁を減じ、小さく外反する。口縁部少し焼け歪む。	底部回転糸切り無調整	①口縁部一部欠失。 ②カマド内 ③須恵 ④右 ⑤酸化塩気味
10	甃	① (20.8) ② (16.0) ③ ( 3.7)	①粗砂・砂少量含む。酸化鉄粒含む。 ②灰白色 ③硬質	高台は高く、貼付部と臺付の巾はほぼ同じ。口唇部平面を持つ。	底部全面回転ヘラ削り。高台貼り付け。	①底部片・口縁部片 ②フタ土 ③須恵 ④右
11	甃	② (10.5)	①細砂含む。 ②灰黄色 ③軟質	高台は高い。	底部切り離し技法。再調整不明	①片。②フタ土 ③須恵。④不明 ⑤器壁摩滅



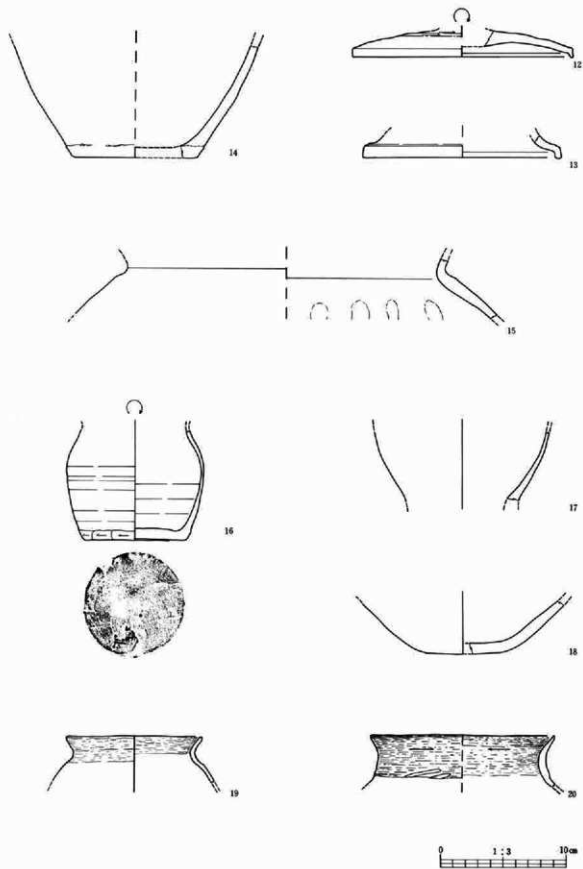
第64図 13号住居址出土遺物実測図(1)

第5章 検出された遺構と遺物

表18 13号住居址出土遺物観察表(2)

NO	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①粘土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種類④コナデ回転 ⑤その他
12	蓋	①(17.6)	①粗砂・礫含む。酸化鉄粒・軽石粒含む。 ②灰色 ③硬質	天井部低く、口唇部下方に折り曲げる。	天井部回転ヘラ削り後中央部回転コナデ。	①残 ②フタ土 ③須恵 ④石
13	高環	②(16.0)	①礫含む。軽石粒・酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	脚端部下方に折り曲げる。端部平坦面を持つ。		①灰 ②フタ土 ③須恵 ④不明
14	壺	②(10.0)	①細砂少量含む。 ②灰色 ③硬質	底部平底。体部ゆるく内湾して立ち上がる。	底部粘土版成形。	①灰 ②フタ土 ③須恵 ④不明 ⑤内外面降灰一部輪化する。
15	壺		①細砂含む ②灰白色 ③硬質		肩部外面平行タタキ目 肩部内面指環成形後回転コナデ。	①灰 ②フタ土 ③須恵 ④不明
16	小型壺	② 8.2	①細砂少量含む。酸化鉄粒少量含む。 ②にぶい褐色～暗赤灰色。 ③軟質	胴部下位直線的に立ち上がり、中で内湾。胴部あまり張らない。	底部回転糸切り無調整。器面回転コナデ。	①底部完。胴部灰。 ②カマド内 ③須恵 ④右 ⑤酸化焙
17	小型壺?		①細砂少量含む ②にぶい褐色		内外面共に回転コナデの可能性ある。器壁筆減のため不明。	①灰 ②カマド内 ③須恵 ④粘土・焼成16,19に近い。
18	壺	② 5.6	①細砂多く含む。石英・酸化鉄粒少量含む。 ②褐色 ③硬質	底部よりゆるく屈曲し体部は広く外方に延びる。	外面タタキ目。内面ナデ。	①灰 ②フタ土 ③須恵 ④不明
19	小型壺	①(10.8)	①細砂少量含む。酸化鉄粒含む。 ②にぶい褐色。	口縁部外反。	不明。コナデ調整か?	①灰 ②カマド内 ③須恵 ④不明
20	壺	①(14.6)	①細砂含む。黒色紅物粒・金雲母少量含む。 ②外・断面にぶい褐色内面黒灰色	口縁部「コ」の字状。頸部器壁厚く。口縁部器壁うすい。	口縁・頸部コナデ。	①灰 ②フタ土 ③土師

第1節 住居址・住居址出土遺物



第65図 13号住居址出土遺物実測図(2)

14号住居址 (図66~71, 表19・20, 図版21・22・56・57・64)

**位置** 中央住居址群南東部の住居址が最も重複・近接する場所に位置する。本住居址は13号住居址と重複し、南に存在する18号住居址とは5cmと近接する。西3mには7号住居址がある。

**平面形・規模** 1辺4.8m程の隅丸方形と考えられる。方位はN-9°-Wを示し、13号住居址と重複する。重複関係は本住居址が古く、13号住居址が新しい。

**壁** 確認壁高は北壁44cmで、南壁は削平されている。

**周溝** 巾12cm-15cm、深さ5cm-10cmでカマド北側から北西コーナーまで検出された。

**柱穴・ピット** 4本の主柱穴が確認され、深さはP<sub>1</sub>44cm・P<sub>2</sub>56cm・P<sub>3</sub>28cm・P<sub>4</sub>32cmを測る。掘り方面においては2ヶ所ピットが確認され、深さはP<sub>5</sub>25cm・P<sub>6</sub>51cmを測る。

**掘り方・床** 掘り方はピットを除き、8cm-14cm掘り込んでいる。底面は凹凸が多く、南に向かって傾斜している。床面は小さい凹凸が多く、軟らかい状態であった。

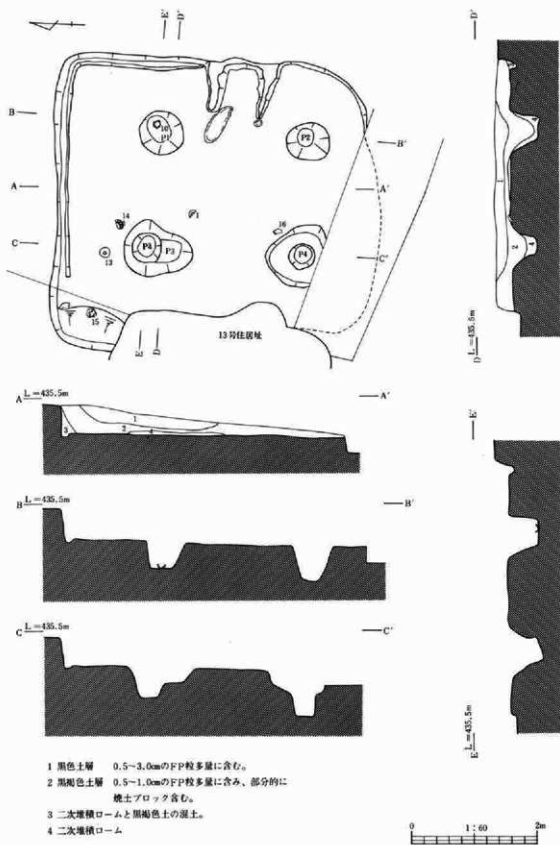
**カマド** 東壁南寄りに、壁をほとんど掘り込まずに設置する。火床面・袖は床面上に構築する。袖は左側が80cm・右側が90cm住居址内に延びており、住居址内におけるカマドの占める面積は大きい。カマド前面には、長さ70cm・巾25cm・厚さ10cmの火を受けた石が床面上3cmより出土しており、天井に架設していたものと考えられる。

**出土遺物** 床面直上より須恵器蓋(13)・同台付壺(15)・同短頸壺(16)が出土している。覆土中より円面硯(14)・墨書土器(4・6)が出土している。円面硯は3号住居址・井戸状遺構の覆土中出土の小破片と接合した。墨書の判読可能なものは(4)であり、その文字は「仁」である。(6)は判読不可能。住居址底部より出土した土師器(10)は器形・胎土・焼成より見て古墳時代後期のものと考えられる。

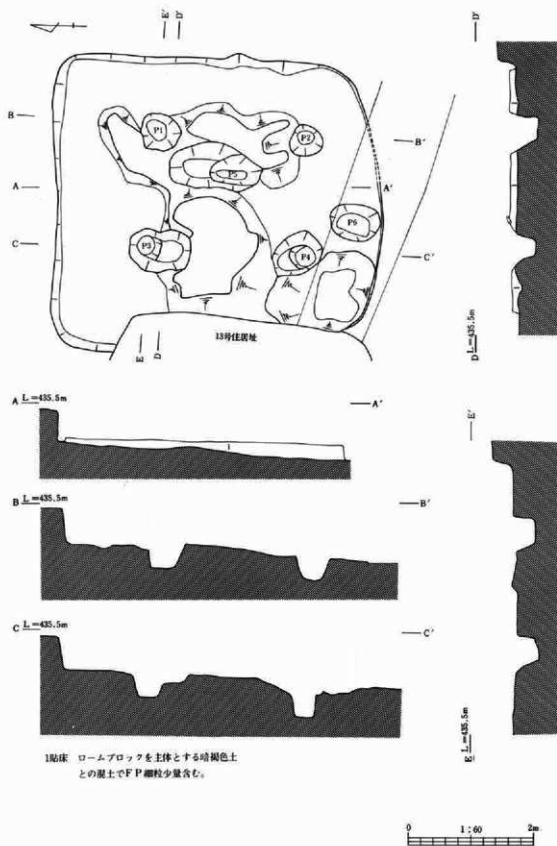


13・14・17号住居址重複状況



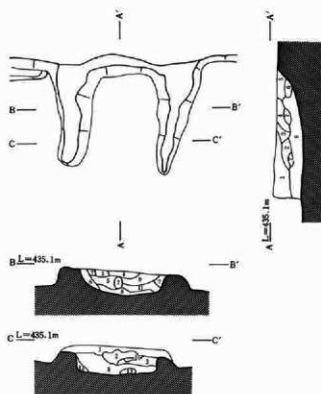


第66図 14号住居址床面実測図

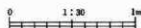


14号住居址 ロームブロックを主体とする暗褐色土との凝土でF P 細粒少量含む。

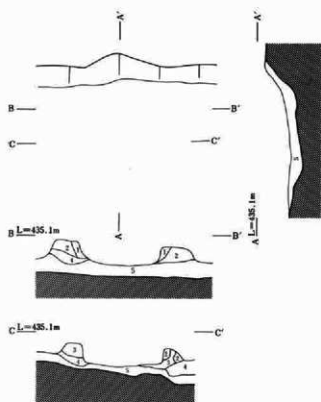
第67図 14号住居址掘り方実測図



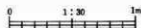
- 1 明褐色土層 F P 粒、焼土含む。
- 2 明褐色土層 粘土主体、焼土含む。
- 3 暗褐色土層 F P 微細粒、焼土少量含む、粘性が強い。
- 4 明褐色土層 白色粘土、焼土含む。
- 5 暗茶褐色土層 焼土含む。
- 6 暗茶褐色土層 5層同様だが、土質が細かい。
- 7 赤褐色土層 焼土ブロック。
- 8 黒褐色土層 F P 細粒少量含む、焼土含む。
- 9 茶褐色土層 F P 細粒、粗粒含む、粘性がある。
- 10 暗褐色土層 焼土含む、粘性がある。
- 11 黒褐色土層 炭化物多く含む。
- 12 黒褐色土層 焼土少量含む。
- 13 白色粘土ブロック。



第68図 カマド火床面実測図



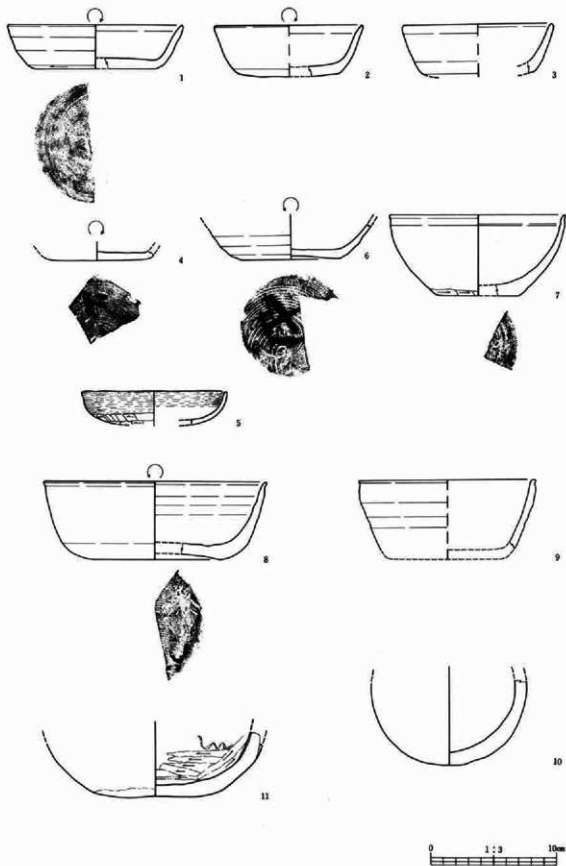
- 1 赤褐色土層 白色粘土の焼土化したもの。
- 2 白色粘土層
- 3 白色粘土と焼土の混土層
- 4 褐色土層 粘性があり、細い焼土ブロック含む。
- 5 粘床



第69図 カマド掘り方実測図

表19 14号住居出土土遺物観察表(1)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①粘土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種類④ロタロ回転 ⑤その他
1	坏	① 13.7 ② 9.6 ③ 3.5	①細砂少量含む。石英・軽石粒少量含む。 ②灰色 ③硬質	底径・口径共に大きい。	底部全面・体部下端回転ヘラ削り。ヘラ削り前に平行な圧痕。回転未切りか?内底指頭圧痕多い。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
2	坏	① (12.0) ② (8.0) ③ (4.0)	①粗砂・糠含む。石英・軽石粒含む。 ②灰色 ③硬質	底径・口径共に小さい?口径部小さく外反。	底部ナデ調整?切り難し技法不明。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
3	坏	① (12.0) ② (8.8) ③ (4.0)	①細砂少量含む。石英・粒含む。 ②灰白色 ③軟質	底径・口径共に小さい?体部ゆるく内湾。	底部残存部ヘラ削り。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
4	坏 (墨書)	② (8.0)	①細砂少量含む。石英・酸化鉄粒含む。 ②外底灰色~灰白色。内・断面灰白色。 ③硬質	底部は平坦である。	底部全面回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削りか?	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤墨書文字「仁」。 墨書部位外底の灰白色部。
5	坏	① (11.6)	①細砂含む。石英・黒色鉱物粒含む。 ②にぶい褐色	口径部は直線的。体部内湾。器高は低く、底部は平底風。	底部全面ヘラ削り。口径部ココナデ。体部ナデ。	①片 ②フタ土 ③土師
6	埴 (墨書)	② 8.0	①細砂少量含む。軽石・酸化鉄粒少量含む。 ②にぶい褐色 ③硬質	底部中央盛り上がる。体部内湾して外方に延びる。	底部回転未切り無調整。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④左 ⑤墨書部位外底。有誤不可能。酸化塩
7	埴	① (14.0) ② (6.4) ③ (6.4)	①粗砂・糠多く含む。石英・軽石粒含む。 ②灰褐色・断面にぶい褐色。③硬質	底径は小さく体部は均一に内湾。口径部小さく外反。口径部内面凹線一列めぐる。	底部ヘラ調整か?底部切り難し技法不明体部下端ヘラ削り。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
8	埴	① (17.8)	①細砂少量含む。軽石・石英粒少量含む。 ②灰色 ③硬質	底部中央盛り上がる。体部直線的に立ち上がる。口径部小さく外反。	底部回転未切り無調整。内底・口径部内面コタロ目度い。	①底部片・口径部片 ②フタ土 ③須恵 ④左
9	埴	① (14.2)	①細砂少量含む。②灰色・断面灰白色 ③硬質	体部あまり開かず口径部に至る。口径部内側にゆるく屈曲。口径部平坦面を有する。		①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明 ⑤内面酸化輪化。外面自然輪化。
10	小型甕?		①粗砂少量含む。石英・軽石・酸化鉄・金雲母含む。 ②にぶい褐色	体部から底部にかけて均一に内湾する。器厚ほぼ一定。	底部ヘラ削り。体部ヘラ削り後ナデか?	①完 ②性穴底部 ③土師 ⑤体部外面器表割離
11	鉢	② (6.6)	①粗砂・糠含む。石英・軽石・酸化鉄粒含む。 ②にぶい褐色	底部平底気味。底部より内湾して体部に至る。	底部ヘラ削り。体部ヘラ削り後ナデ。体部開口縁を有する。体部内面指ナデ。	①片 ②フタ土 ③土師

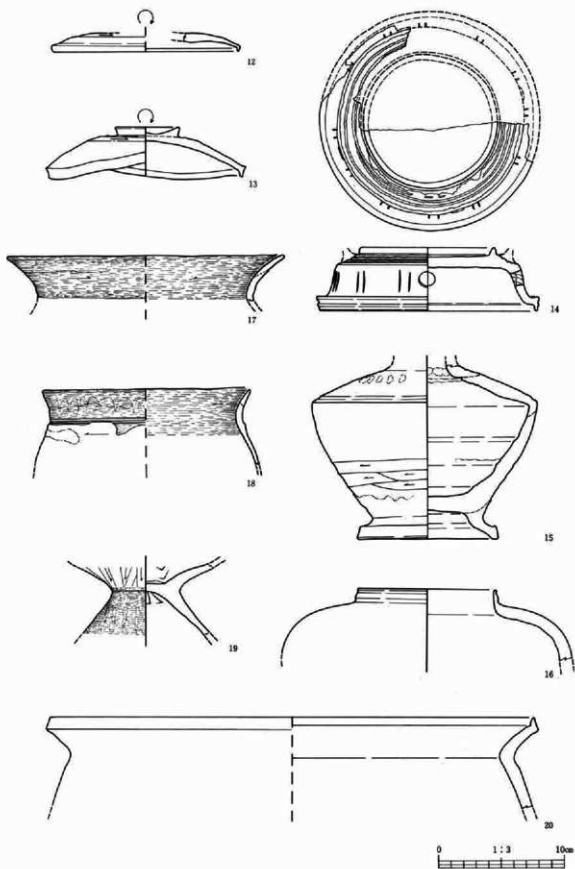


第70图 14号住居址出土遺物実測図(1)

## 第5章 検出された遺構と遺物

表20 14号住居出土遺物観察表(2)

NO	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①粘土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④回転 ⑤その他
12	蓋	①(15.0)	①細砂含む。 ②灰色、内面暗赤灰色。 ③硬質	器高低い、口縁部水平に開いた後下方に折り曲げる。	天井部回転ヘラ削り後回転コナダ。	①垢 ②フタ土 ③須恵 ④右
13	蓋	①15.5-16.0 ③3.8	①細砂少量含む緻密。 ②灰色、内面暗赤灰色。 ③硬質	焼け歪みひどい。器高い。口縁部稜をなして下方に折り曲げる。	天井部回転ヘラ削り後回転コナダ。	①完 ②床直 ③須恵 ④右
14	円面甕	口径 10.8 脚径 (17.1) 器高 5.1	①細砂少量含む。石英・黒色鉱物粒含む。 ②灰白色 ③軟質	脚部は短かく、端部は外方に屈曲した状、上方と下方に折り曲げる。脚端部凹縁一条めぐる。脚部円型通し4個。ヘラ掻き沈線2本1組を12組施す。除の周縁に虎を有し、面の周縁には外縁を有している。	外縁、境貼り付け。除部切り離し不明。回転ヘラ削り後回転コナダ。	①垢 ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤除は少し摩滅している程度であり、あまり使用していないと考えられる。
15	台付壺	肩部径 18.2 ②11.0-11.4	①細砂含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	肩部は張り稜をなして体部に至る。肩部ににぶい凹縁一条めぐる。高台下方に並びた後反する。端部上下に折り曲げる。	底部粗いナダ調整後高台貼り付け。体部下位回転ヘラ削り。下端は高台貼り付け時にナダ折していると思われる。頸部内外面指頭圧痕残る。頸部貼り付け痕明瞭。	①肩部以下完。肩部以上垢 ②床直 ③須恵 ④右
16	短頸壺	①(11.0)	①粗砂・礫少量含む。 ②外面灰色。内・断面灰白色。 ③軟質	肩部は張り、口縁部は短かくち上がる。口縁部外面凹縁2条めぐる。		①垢 ②床直 ③須恵 ④不明
17	壺	①(22.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒多く含む。 ②赤褐色	口縁部外反。	口縁部コナダ。 口縁部外面粘土接合痕明瞭。	①垢 ②フタ土 ③土師
18	壺	①(16.0)	①細砂含む。金雲母多く含む。 ②にぶい褐色	口縁部ゆるく外反。最大径は胴部に存する。	肩部横位ヘラ削り。肩部内面ハケ状工具によるナダ。口縁部コナダ。口縁部外面指頭圧痕。	①垢 ②フタ土 ③土師
19	台付壺		①細砂含む。金雲母含む。黒色鉱物粒少量含む ②にぶい褐色。台部内面灰黄褐色	台部は直線的に開く。底部は広く開く。器壁厚い。	内底・台部内面ヘラ成形。台部コナダ。底部内面ヘラ削り。底部内面ナダ。	①底部垢。台部垢 ②フタ土 ③土師
20	鉢	①(38.8)	①細砂・礫少量含む。 ②飾表灰色～灰白色。断面灰白色 ③軟質	口縁部外反し稜をなして上方に折り曲げる。	口縁部丁寧な回転コナダ。肩部内面指頭成形後粗い回転コナダ。	①垢 ②床直 ③須恵 ④不明

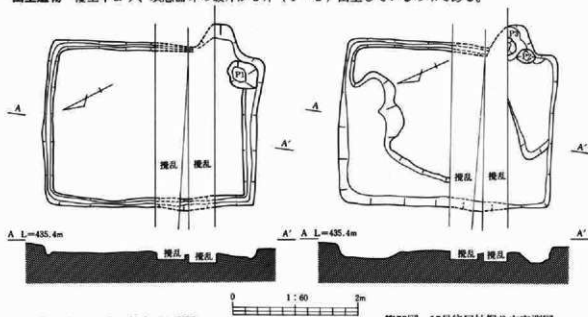


第71图 14号住居址出土遺物実測图(2)

15号住居址 (図72~74, 表21, 図版22・23)

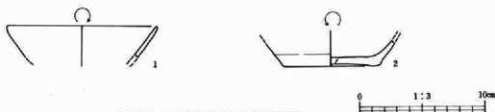
位置 住居址群西側中央に位置する。約5m西に20号住居址・約4.5m南に19号住居址がある。  
 平面形・規模 長軸3.5m・短軸2.6mを測る長方形を呈する。方位はN-23.5°-Eを示す。重複はない。  
 壁 本遺跡において最も傾斜のゆるい位置に構築されているため、北壁8cm・南壁13cmと南壁が高い。  
 周溝 カマド部分を除き、巾10cm~20cm・深さ10cm前後で全周すると考えられる。  
 柱穴・ピット 柱穴は検出されない。貯蔵穴様ピット(P<sub>1</sub>)・カマドに関連するピット(P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>)がある。

掘り方・床 掘り方は北西・南東のコーナーを12cm程掘り込んでいる。他の部分は地床である。  
 カマド 東壁南端に設置する。遺存状態は悪く、北半は擾乱により破壊されている。袖は残存していない。  
 出土遺物 覆土中より、須恵器杯の破片が2片(1・2)出土しているのみである。



第72図 15号住居址床面実測図

第73図 15号住居址掘り方実測図



第74図 15号住居址出土遺物実測図

表21 15号住居址出土遺物観察表

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③擾乱④マタ⑤回転 ⑥その他
1	杯	①(12.0)	①埋少量含む。 ②灰色 ③硬質	口縁部直線的に開く。		①1/4 ②フタ土 ③須恵 ④右
2	杯	②(7.8)	①酸化鉄粒多く含む。 ②にぶい褐色。③軟質		底面回転糸切り無調整。	①1/4 ②フタ土 ③須恵 ④右



## 16号住居址 (図75~81, 表22~24, 図版24・25・57・58)

**位置** 中央住居址群のやや南寄りに位置する。17号住居址と重複し、約2.5m南東に13号住居址・約3m南に7号住居址がある。この付近は本遺跡中最も住居址の密度が高い場所である。

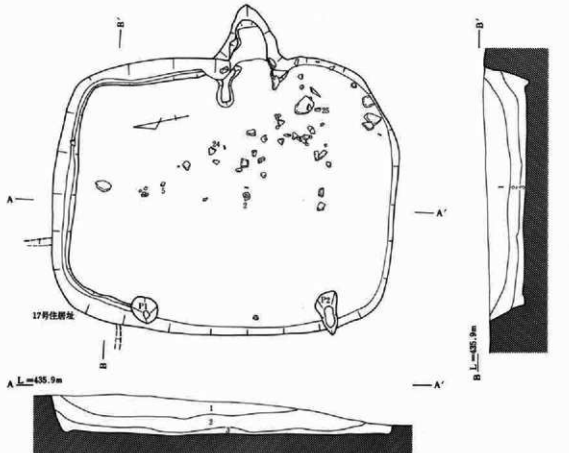
**平面形・規模** 南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、西壁中央は丸味を帯びて外方に張り出している。規模は長軸5.5m・短軸4.4mを測る。方位はN-1°-Eを示す。16号住居址と重複し、その関係は16号住居址が古く本住居址が新しい。

**壁** 確認壁高は北壁55cm・南壁23cmを測る。

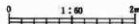
**周溝** 巾10cm~15cm・深さ4cm~8cmで、カマド北側より北西コーナーまで検出された。

**柱穴・ピット** 柱穴は検出されていない。ピットは、西壁際に2ヶ所確認されている。深さはP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>共に34cmで、P<sub>2</sub>の平面形は楕円形を呈する。掘り方面では8ヶ所確認されており、深さはP<sub>3</sub>14cm・P<sub>4</sub>10cm・P<sub>5</sub>12cm・P<sub>6</sub>13cm・P<sub>7</sub>19cm・P<sub>8</sub>28cm・P<sub>9</sub>25cm・P<sub>10</sub>17cmを測る。

**掘り方・床** 掘り方は南に傾斜しており、南壁際は11cm掘り込まれている。床面は南側の最も低い部分を



- 1 黄色土層 0.5~1.0cmのFFP粒を含む。  
 2 褐色土層 ロームブロックを多数に含む。  
 3 黒色土層 ロームブロック僅かに含む。



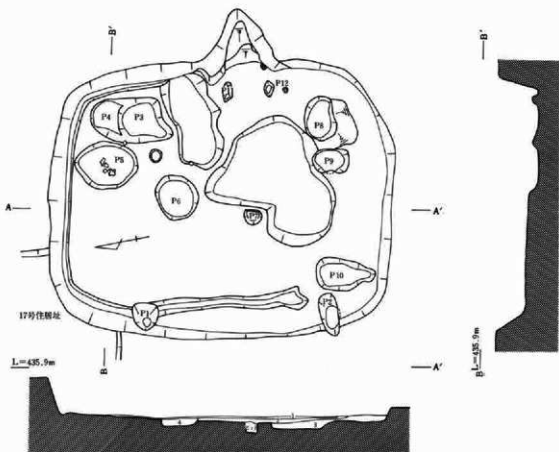
第75図 16号住居址床面実測図

第5章 検出された遺構と遺物

ルーム主体の土で埋め戻し、その後には黒色土主体の土ではぼ水平に埋め戻し、更にルームと褐色土の混土を貼り、構築している。北壁際は地床である。

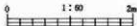
カマド 東壁中央やや南寄りに壁を90cm掘り込んで設置する。火床面からの壁高は60cmを測る。袖は石を芯にして粘土を貼り付けて構築している。袖石は壁に接する部分に1対、壁より10cm～20cm離れた部分に1対立てている。火床面は平坦で煙道に至る部分は障壁状に急角度で立ち上がる。

出土遺物 土師器甕が多量に出土しており、すべて口縁部は「コ」の字状を呈している。また台付甕が2点(25・26)出土している。須恵器坏ではロクロ左回転のものが5点(2・3・4・5・6)出土しており、横し焼成の坏も3点(4・5・10)出土している。鉄製品では刀子(33・34)・紡錘車の軸(32)などがある。

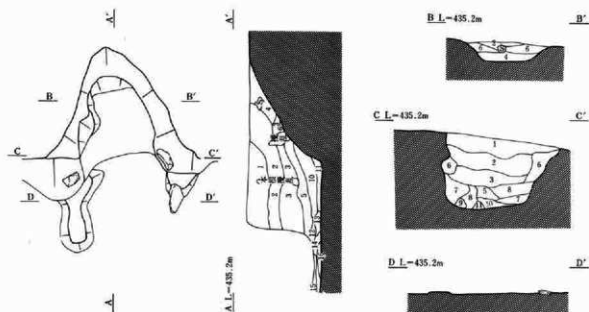


- 貼床1 ロームブロック・褐色土の混土でロームブロック主体。
- 貼床2 細かいロームブロック・黒色土の混土で黒色土主体、部分的に0.5～1.0cmのFP粒含む。
- 貼床3 ロームブロック・褐色土の混土でロームブロック主体、部分的にロームだけ覆ってそのまま埋めたローム部分がある。
- 貼床4 ロームブロック・褐色土の混土で褐色土主体。

第76図 16号住居址掘り方案測図



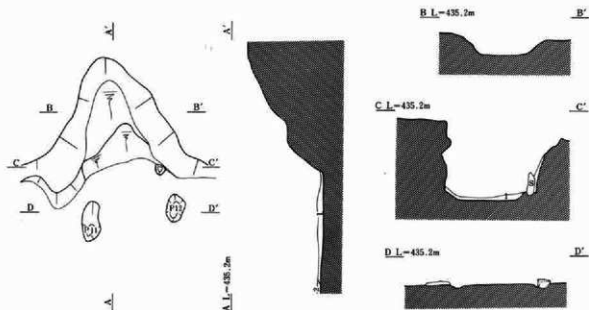
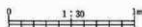
第1節 住居址・住居址出土遺物



- 1 灰褐色土層 F P粒含む。
- 2 灰褐色土層 F P粒・ローム粒を含む。
- 3 灰褐色土層 F P粒を含む。
- 4 灰褐色土層 灰色砂質土を含む。
- 5 明灰褐色土層 焼土を多量に含む。
- 6 明灰褐色土層 焼土・炭化物を多量に含む。
- 7 暗赤褐色土層 焼土粒中に炭化物を多量に含み、ローム粒を少量含む。
- 8 黄褐色土層 ローム粒(2.0-5.0cm)に灰褐色土、炭化物を含む。

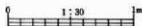
- 9 ロームブロック
- 10 黄灰褐色土層 灰褐色土中にローム粒を多量に含む。
- 11 赤褐色土層 焼土中にローム粒、炭化物を含み粘性がある。
- 12 灰褐色土層 ローム粒を含み粘性をもつ。
- 13 赤褐色土層 焼土・炭化物の混土。
- 14 黒色土層 灰層で1.0cm程度の炭化物を少量含む。
- 15 赤褐色土層 固く焼けた焼土層。
- 16 黄灰褐色土層 ローム粒、炭化物・灰褐色土の混土。

第77図 カマド火床面実測図



- 1 黄褐色土層 ローム中に焼土粒、炭化物粒を少量含む。
- 2 黒褐色土層 灰層中に固いロームブロックを含む。

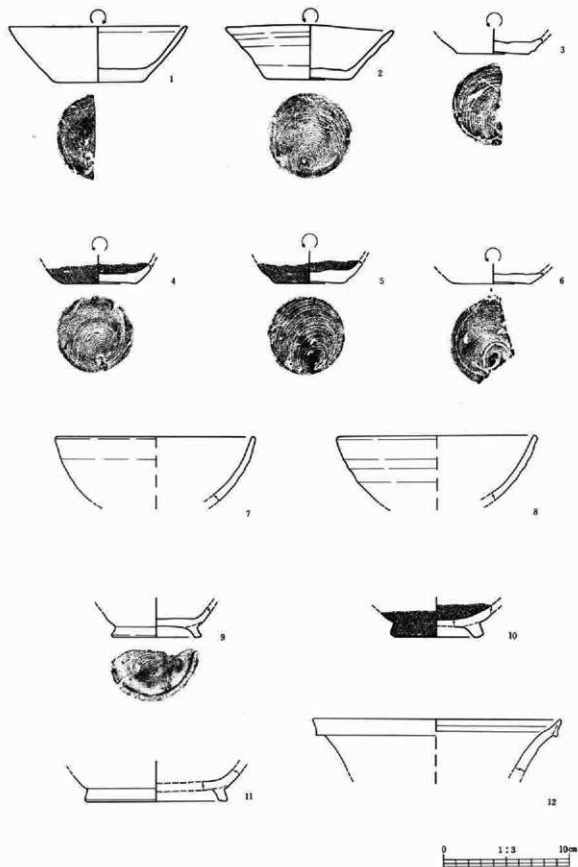
第78図 カマド掘り方実測図



第5章 検出された遺構と遺物

表22 16号住居址出土遺物観察表(1)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①粘土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロタロ回転 ⑤その他
1	坏	① (14.0) ② 7.0 ③ 4.3	①細砂・粗砂少量含む。 ②灰褐色、断面赤褐色。 ③硬質	底部器壁厚い、体部器壁うすく、口縁部は厚さを増す。	底部回転糸切り無調整。	①底部片 ②フタ土 ③須恵 ④右
2	坏	① 13.0～13.5 ② 6.6 ③ 4.3	①粗砂・雑含む。 ②灰白色 ③軟質	体部～口縁部均一に外湾する。口縁部肥厚する。	底部回転糸切り無調整。	①口縁部1部欠失。 ②フタ土 ③須恵 ④左
3	坏	② 6.0	①粗砂・雑含む。酸化鉄粒含む。②灰色 ③硬質	底部外面周縁に段を有する。	底部回転糸切り無調整。	①底部片 ②フタ土 ③須恵 ④左
4	坏	② 5.6	①細砂・粗砂含む。 ②外面黒色、断面灰白色。 ③軟質	底部器壁厚く、体部下位器壁うすい。	底部回転糸切り無調整。	①完 ②握り方 ③須恵 ④左 ⑤横し
5	坏	② 6.0	①細砂・粗砂含む。 ②外面黒色、断面暗赤褐色。③軟質	底部器壁厚く、体部下位器壁うすい。	底部回転糸切り無調整。	①完 ②フタ土 ③須恵 ④左 ⑤横し
6	坏	② (6.0)	①細砂含む。酸化鉄粒含む。 ②褐色 ③軟質		底部回転糸切り無調整。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④左 ⑤酸化焙
7	埴	① (16.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。 ②にぶい黄褐色 ③軟質	体部内湾する。口縁部弱くつまむ。		①片 ②握り方 ③須恵 ④不明 ⑤酸化焙
8	埴	① (16.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。 ②にぶい黄褐色 ③軟質	体部～口縁部均一に内湾する。口縁部弱くつまむ。		①片 ②握り方 ③須恵 ④不明 ⑤酸化焙
9	埴	② 7.4	①粗砂・雑少量含む。酸化鉄粒含む。 ②褐色 ③軟質	高台外方に張る。	底部回転糸切り。糸切り痕高台貼り付け時に周縁ナゲ消す。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明 ⑤酸化焙
10	埴	② (7.4)	①粗砂・雑多く含む。酸化鉄・石英粒含む。 ②黒褐色 軟質	高台厚く、外力に張る。	底部回転糸切り無調整。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
11	埴	② (11.4)	①細砂含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	高台高い。壘付窪む。	高台内側強く押える。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
12	壺	① (20.0)	①細砂含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	口縁部外反し、口唇部折り返す。		①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明



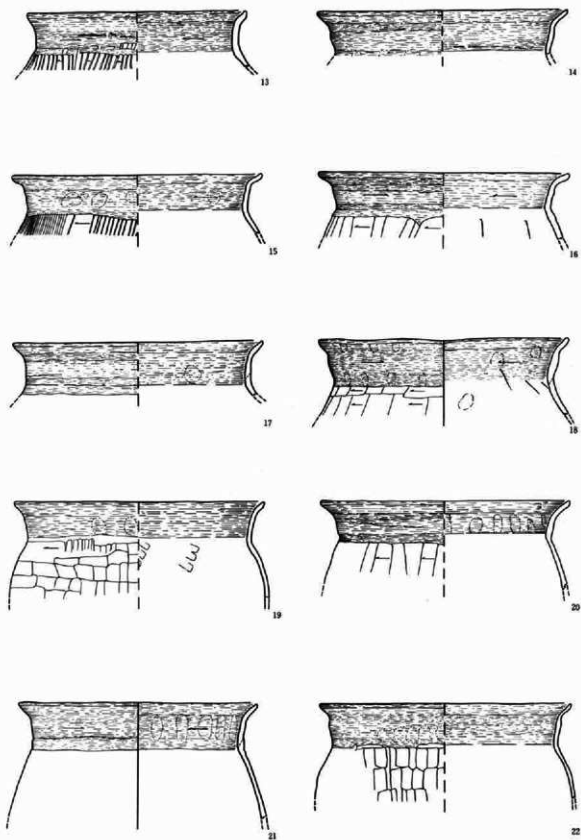
第79图 16号住居址出土遺物实测图 (1)

## 第5章 検出された遺構と遺物

表23 16号住居址出土遺物観察表(2)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①粘土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロタロ回転 ⑤その他
13	甕	①(7.6)	①細砂含む。黒色鉱物 酸化鉄粒含む。金雲母 少量含む。 ②褐色	口縁部「コ」の字状を 呈する。口唇部上方に つまみ上げる。口縁部 器壁厚い。	口縁部ヨコナデ。肩部 外面横位ヘラケズリ。	①片 ②カマド内 ③土師
14	甕	①(20.0)	①細砂少量含む。黒色 鉱物粒少量含む。 ②褐色	口縁部「コ」の字状を 呈する。頸部中央外方 にふくらむ。口唇部弱 くつまみ上げる。	口縁部ヨコナデ。屈曲 部外面強いヨコナデ。 頸部内面指頸圧痕残 る。	①片 ②握り方 ③土師
15	甕	①(20.0)	①細砂少量含む。黒色 鉱物粒少量含む。 ②褐色	口縁部「コ」の字状を 呈する。口唇部丸くお さめる。	口縁部ヨコナデ。屈曲 部外面強いヨコナデ。 頸部中位外面指頸圧痕 残る。	①片 ②フタ土 ③土師
16	甕	①(20.0)	①細砂含む。黒色鉱物 粒含む。 ②褐色	口縁部「コ」の字状を 呈する。口唇部丸くお さめる。器壁厚い。	口縁部ヨコナデ。屈曲 部外面強いヨコナデ。 肩部内面ヘラ成形後ナ デ。	①片 ②フタ土 ③土師
17	甕	①(20.0)	①細砂含む。黒色鉱物 粒含む。 ②褐色	口縁部「コ」の字状を 呈する。口唇部つまみ 上げる。	口縁部ヨコナデ。屈曲 部外面強いヨコナデ 肩部中位指頸圧痕残 る。	①片 ②フタ土 ③土師
18	甕	①(20.0)	①細砂含む。黒色鉱物 粒含む。 ②褐色	口縁部「コ」の字状を 呈する。口唇部つまみ 上げる。	口縁部ヨコナデ。屈曲 部外面強いヨコナデ。 指頸圧痕残る。頸部中 位内面指頸圧痕残る。	①片 ②フタ土 ③土師
19	甕	①(20.0)	①細砂少量含む。黒色 鉱物・酸化鉄粒含む。 ②褐色	口縁部「コ」の字状を 呈する。口唇部つまみ 上げる。	口縁部ヨコナデ。屈曲 部外面強いヨコナデ。 肩部外面中位指頸圧痕 残る。	①片 ②握り方 ③土師
20	甕	①(20.0)	①細砂含む。黒色鉱物 粒含む。 ②外面灰褐色。内断面 にぶい褐色。	口縁部「コ」の字状を 呈する。口唇部外面平 坦面を持つ。	口縁部ヨコナデ。屈曲 部外面強いヨコナデ。 頸部内面指頸圧痕残 る。	①片 ②フタ土 ③土師
21	甕	①(19.0)	①細砂含む。黒色鉱物 粒含む。 ②褐色	口縁部「コ」の字状を 呈する。口唇部うすく 仕上げる。胴部上位に 最大径を持つ。	口縁部ヨコナデ。屈曲 部外面強いヨコナデ。 頸部内外面指頸圧痕残 る。	①口縁部片。肩部1 部 ②カマド内・フ タ土。 ③土師
22	甕	①(20.0)	①細砂含む。黒色鉱 物・酸化鉄粒含む。 ②褐色	口縁部「コ」の字状を 呈する。口唇部つまみ 上げる。頸部中央外方 に張り出す。	口縁部ヨコナデ。屈曲 部外面強いヨコナデ。 頸部外面指頸圧痕残 る。	①片 ②握り方 ③土師

第1節 住居址・住居址出土遺物



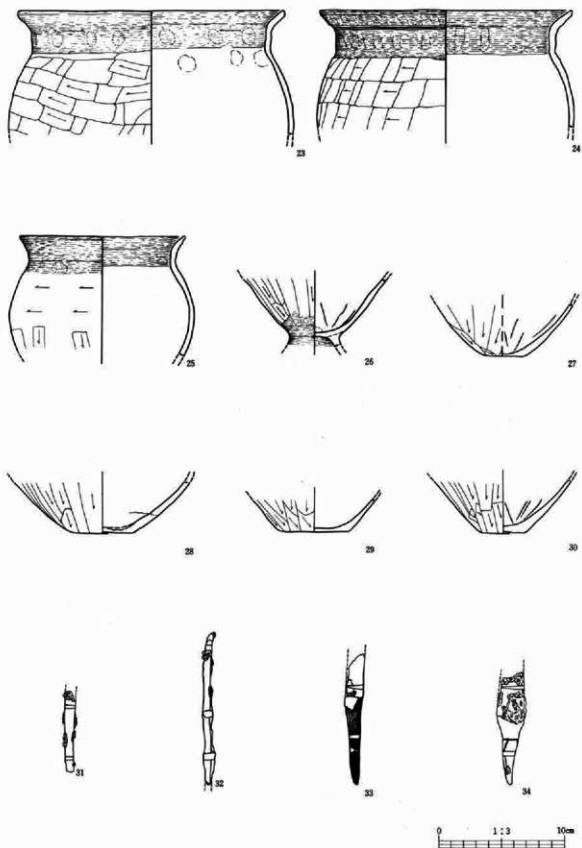
第80图 16号住居址出土遺物实测图(2)

## 第5章 検出された遺構と遺物

表24 16号住居址出土遺物観察表(3)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①粘土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種類④ヨコロ回転 ⑤その他
23	甕	① (21.0)	①細砂含む。黒色鉱物・酸化鉄粒含む。 ②棕色	口縁部「コ」の字状を呈する。口唇部丸くおさめる。器壁やや厚い。胴部上位に最大径あり。	口縁部ヨコナデ。器底部外面強いヨコナデ。頸部内外面中位に指頭圧痕残る。肩部外面横位へラ削り。肩部内面ナデ。	①片 ②床直、カマド内 ③土師
24	甕	① (20.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。 ②棕色	口縁部「コ」の字状を呈する。口唇部つまみ上げる。器壁厚い。胴部上位に最大径あり。	口縁部ヨコナデ。器底部外面強いヨコナデ。頸部内外面指頭圧痕残る。肩部外面へラ削り。肩部内面へラ成形後ナデ。	①片 ②床直 ③土師
25	甕	① 13.2	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。 ②棕色	小型甕。高台付か? 口縁部ゆるい「コ」の字状を呈する。口唇部丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ。肩部一胴部外面横位へラ削り。胴部下位より縦位へラ削り。	①口縁部一肩部1部欠失。胴部片 ②床直・フタ土 ③土師
26	台付甕		①細砂含む。黒色鉱物粒含む。 ②にぶい棕色	底径小さく、内底は丸味を持つ。	外面へラ削り。内底へラ成形後ナデ。	①底部完 ②フタ土 ③土師
27	甕	② 3.2	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。 ②にぶい棕色。内面灰黄褐色。	底径小さく、内底は丸味を持つ。	外面へラ削り。内底へラ成形後ナデ。	①底部完 ②フタ土 ③土師
28	甕	② (5.0)	①細砂含む。黒色鉱物酸化鉄粒含む。 ②棕色	底径大きく、内底は平底。体部はやや開く。	外面へラ削り。	①片 ②カマド内 ③土師 ⑤内面器表剥離
29	甕	② (5.2)	①細砂含む。黒色鉱物粒少量含む。 ②外面棕色。内・新面灰褐色。	底径大きく、内底は平底。体部は開く。	外面へラ削り。内面ナデ。	①底部完・体部片。 ②フタ土 ③土師
30	甕	② 3.4	①細砂含む。黒色鉱物・酸化鉄粒含む。 ②外面灰黒色。内面にぶい棕色。	底径小さく、内底は丸味をもつ。	外面へラ削り。内底へラ成形後ナデ。	①底部完・体部片。 ②フタ土 ③土師
31	鉄製品	断面長方形を呈するもので、両端を欠失する。				
32	紡錘車	紡錘車の輪の上部と考えられる。断面はほぼ正方形を呈し、上端には糸をかける折り反しが見られる。				
33	刀子	刀身のほとんどを欠失しており、茎には木質が残る。				
34	刀子	刀身のほとんどを欠失している。身の巾はやや広い。				

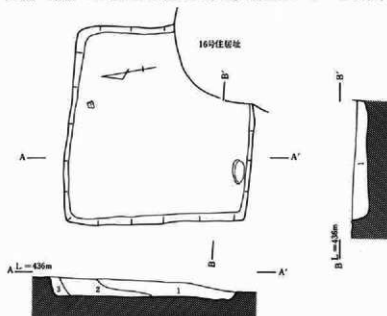




第81图 16号住居址出土遺物実測図(3)

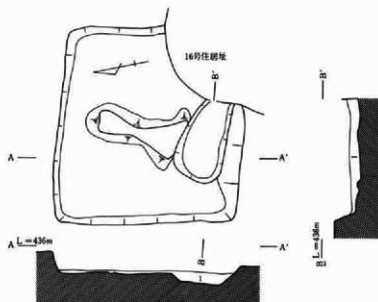
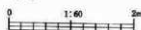
17号住居址 (図82・83、表25、図版25・26・58)

位置 中央住居址群のほぼ中央に位置する。約4.5m北に8号住居址・約4.5m西に9号住居址がある。  
 平面形・規模 1辺3.0mの方形を呈する。方位はN-2°-Eを示す。16号住居址と重複し、その関係は



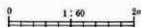
- 1 黒褐色土層 F P 細粒～粗粒及びローム粒含み、土質は粗い。
- 2 黒褐色土層 1層に比してF P 微粒～粗粒は少量でロームブロック粒が多量に含まれている。
- 3 暗褐色土層 ローム(壁)の崩壊土が主体で締りは弱い。

第82図 17号住居址床面実測図



- 1 粘床 ロームと黒色土の凝土で0.5mのF P 粒混かに含む。

第83図 掘り方実測図



本住居址が古い。

壁 確認壁高は、北壁30cm。南壁13cmを測る。壁の比高差は小さい。

周溝 検出されない。

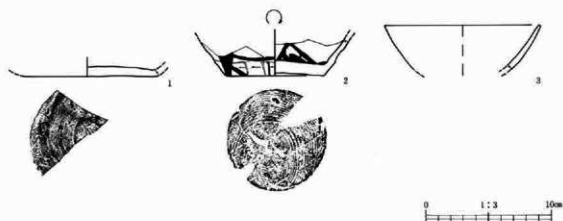
柱穴・ピット 検出されない。

掘り方・床 掘り方中央部は浅く2cm前後・南壁際は15cm～18cmと深い。他は5cm前後である。床面は水平で、やや硬い状態であった。

カマド 16号住居址に南東コーナーを破壊されているため不明である。

出土遺物 遺物は少なく、須恵器破破片が3片出土したのみである。の中には底部回転ヘラ切りのもの(1)・体部下端ヘラ削りのもの(2)がある。

(3)は図示したより口径が大きくなる可能性がある。これらの遺物中(1)と(2・3)との間には明らかに時期差が認められる。



第84図 17号住居址出土遺物実測図

表25 17号住居址出土遺物観察表

NO	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④回転 ⑤その他
1	杯	②(11.2)	①細砂少量含む。 ②灰色。断面積色。 ③硬質		底部回転ヘラ切り。	①× ②フタ土 ③須恵 ④不明
2	杯	②(8.2)	①粗砂少量含む。軽石・酸化鉄粒少量含む。 ②灰白色。③硬質	底部中央に盛り上がる。体部下位凹線状に凹む。体部直線的。	底部回転糸切り。 体部下端ヘラ削り。	①一部欠 ②フタ土 ③須恵 ④石 ⑤火罨あり。
3	杯	①(12.4)	①細砂少量含む。石英・酸化鉄粒含む。 ②灰色。③硬質	体部・口径直線的に開く。		①× ②フタ土 ③須恵 ④右

## 18号住居址 (図85~90, 表26・27, 図版26・27・58)

**位置** 中央住居址群南端に位置する。本遺跡中最も住居址の密度が高い場所で、約5cm北に14号住居址・約13cm北西に13号住居址・約2.5m西に7号住居址がある。

**平面形・規模** 南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈する。規模は4.7m×4.2mを測る。方位はN-9°-Eを示す。重複はない。

**壁** 確認壁高は北壁32cm・南壁25cmを測る。

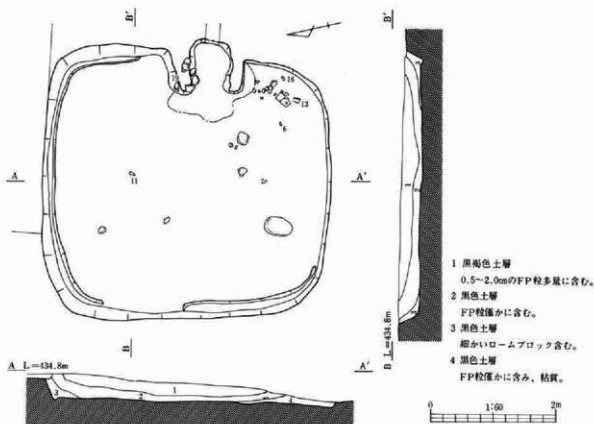
**周溝** 巾10cm~13cm、深さは5cm~8cmで北東コーナーより北西コーナー、及び南西コーナーに検出された。

**柱穴・ピット** 柱穴は検出されない。掘り方面ではピット2ヶ所・落ち込み1ヶ所が確認された。深さはP<sub>1</sub>22cm・P<sub>2</sub>17cm・P<sub>3</sub>10cmである。

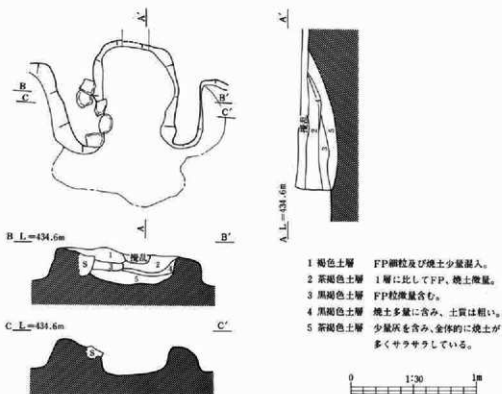
**掘り方・床** 掘り方は4cm~18cm掘り込んでおり、底面は凹凸が多く南に傾斜している。

**カマド** 東壁中央やや南寄りに壁を29cm掘り込んで設置する。袖は左側が70cm・右側が55cm残存する。

**出土遺物** 床面及び床面直上より「コ」の字状口縁の土師器甕(16・19・20)・提げ砥石(23)が出土している。またプラン確認時に陀尾(22)が出土している。

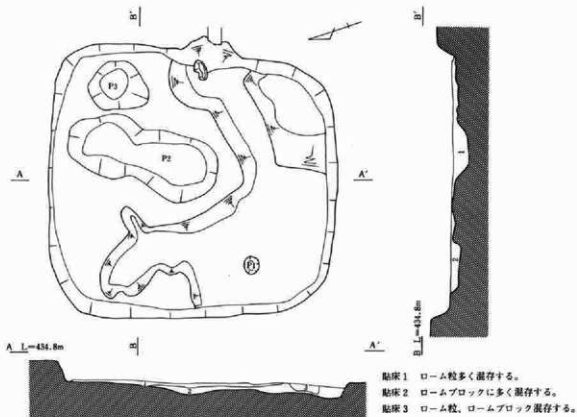


第85図 18号住居址床面実測図

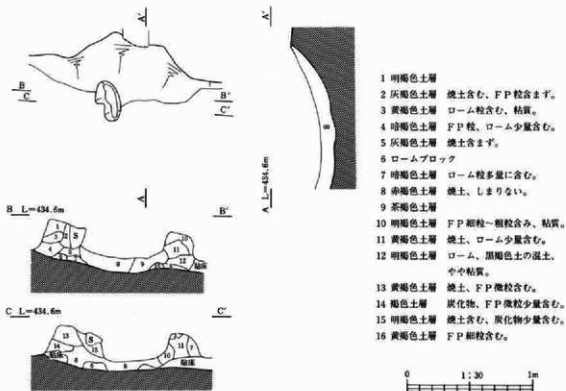


第86図 カマド火床面実測図

第1節 住居址・住居址出土遺物

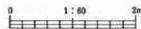


第87図 18号住居址掘り方実測図



第88図 カマド掘り方実測図

- 貼床1 ローム粒多く混存する。
- 貼床2 ロームブロックに多く混存する。
- 貼床3 ローム粒、ロームブロック混存する。



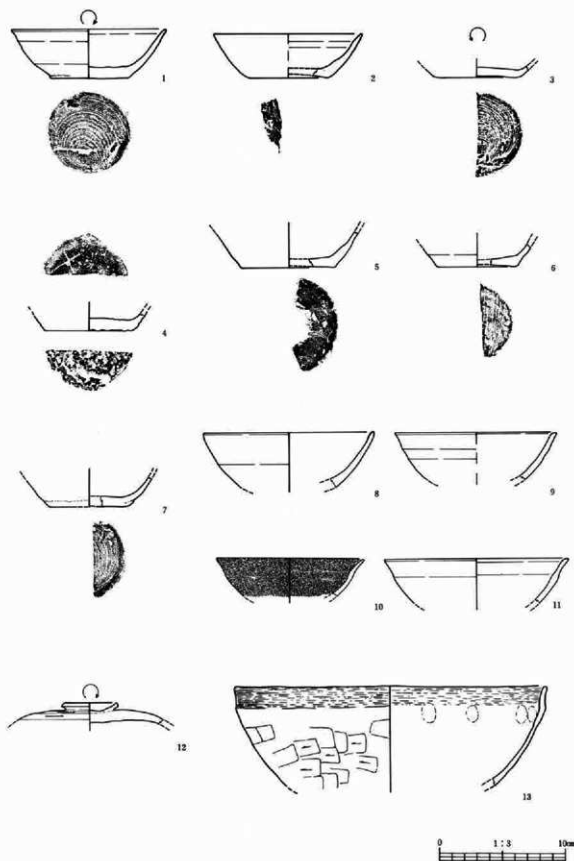
- 1 明褐色土層
- 2 灰褐色土層 焼土含む、F P 粒含まず。
- 3 黄褐色土層 ローム粒含む、粘質。
- 4 暗褐色土層 F P 粒、ローム少量含む。
- 5 灰褐色土層 焼土含まず。
- 6 ロームブロック
- 7 暗褐色土層 ローム粒多量に含む。
- 8 赤褐色土層 焼土、しまりない。
- 9 茶褐色土層
- 10 明褐色土層 F P 細粒～粗粒含む、粘質。
- 11 黄褐色土層 焼土、ローム少量含む。
- 12 明褐色土層 ローム、黒褐色土の混土、やや粘質。
- 13 黄褐色土層 焼土、F P 微粒含む。
- 14 褐色土層 炭化物、F P 微粒少量含む。
- 15 明褐色土層 焼土含む、炭化物少量含む。
- 16 黄褐色土層 F P 粗粒含む。



第5章 検出された遺構と遺物

表26 18号住居址出土遺物観察表(1)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロクロ回転 ⑤その他
1	坏	① 12.3 ② 6.2 ③ 3.9	①粗砂・礫含む。 ②口縁部・体部外面灰色。体部・底部内面灰白色。③軟質	底部段を有する。体部内湾。口縁部小さく外反。内底・体部との境少し窪む。	底部回転糸切り無調整。内底・体部との境強く押さえる。	①口縁部一部欠失。 ②フタ土 ③須恵 ④右
2	坏	① (12.0) ( 6.4) ( 3.5)	①細砂・粗砂含む。 ②器表灰色。断面灰白色。③軟質	体部ゆるく内湾する。口縁部小さく外反する。	底部回転糸切り無調整。口縁部内湾、強く押さえる。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
3	坏	② (6.4)	①粗砂・礫少量含む。 ②灰黄色 ③軟質	内底・体部との境窪む。	底部回転糸切り無調整。内底・体部との境強く押さえる。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④左
4	坏	② (7.2)	①細砂含む。酸化鉄粒含む。②器表灰黄褐色。断面にぶい褐色。 ③軟質	底部中央器壁厚い。	底部切り離し技法不明。	①片 ②握り方 ③須恵 ④不明 ⑤内底へラ記号。器壁摩滅のため焼成の前後は不明。酸化区。
5	坏	② (7.6)	①細砂含む。 ②灰黄色 ③軟質		底部回転糸切り無調整。	①底部片。体部1部 ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤酸化区。
6	坏	② (6.4)	①細砂・粗砂含む。 ②外面灰色。内面灰褐色。③硬質	底部・体部との境に段を有する。	底部静止糸切り無調整。	①底部片 ②床直 ③須恵 ④不明
7	坏	② (6.4)	①細砂・粗砂少量含む。②灰色 ③軟質	底部・体部外面との境に段を有する。体部内湾。	底部回転糸切り無調整	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
8	碗	① (13.7)	①細砂含む。粗砂少量含む。 ②灰白色 ③軟質	体部～口縁部内湾する。口縁部肥厚する。		①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
9	碗	① (12.8)	①細砂含む。 ②灰白色 ③軟質	体部内湾する。口器部外反し、端部丸くおさめる。	外面ロクロ目深い。	①片 ②フタ土 ③須恵④不明。
10	坏	① (13.2)	①細砂・粗砂含む。 ②器表黒色。断面灰黄色。③軟質	体部直線的に延びる。口縁部器壁うすい。	口縁部つまむ。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
11	碗	① (14.7)	①粗砂・礫含む。 ②口縁部外面黒色。にぶい褐色。③軟質	体部直線的に延びる。口縁部器壁うすい。口縁部外反する。	口縁部つまむ。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明 ⑤酸化区。
12	蓋		①細砂・粗砂含む。 ②内面灰色。灰白色。 ③軟質	つまみ中央盛り上がり。周囲は外方に長く延びる。	天井部回転へラ削り。	①つまみ完。天井部片。②握り方。 ③須恵 ④右
13	鉢	① (25.0)	①細砂含む。 ②にぶい褐色	体部内湾する。口縁部内側に凹曲した後外反する。	口縁部ヨコナデ。体部外面横位へラ削り、内面ナデ。	①片 ②床面 ③土師



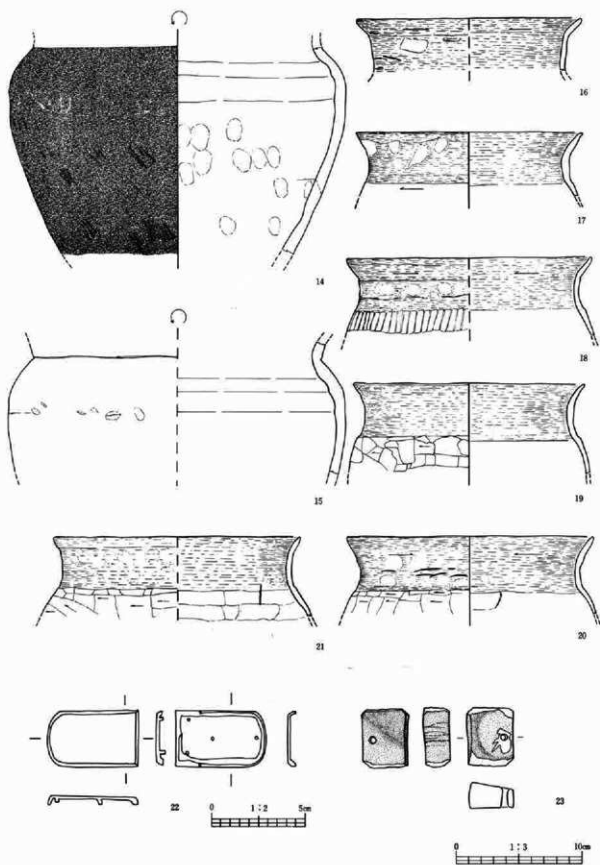
第89図 18号住居址出土遺物実測図(1)

## 第5章 検出された遺構と遺物

表27 18号住居址出土遺物観察表(2)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロクロ回転 ⑤その他
14	甕		①粗砂・焼少量含む。 ②外面黒色。内・断面 にぶい褐色 ③軟質	肩部はあまり張らず、 なで肩である。	体部外面タタキ後回転 ココナデ。体部内面指 須成形後ナデ。肩部強 い回転ココナデ。	①片 ②床直 ③灰患 ④不明
15	甕		①粗砂・焼少量含む。 ②にぶい褐色。 ③軟質	肩部張らず、なで肩で ある。	体部弱い回転ココナ デ。肩部強いココナデ。	①片 ②フタ土 ③灰患 ④不明 ⑤酸化品。
16	甕	① (18.0)	①細砂含む。酸化鉄粒 含む。 ②にぶい赤褐色	口縁部「コ」の字状を 呈する。	口縁部ココナデ。脛部 部外面強いココナデ。 頸部中位外面粗いココ ナデ。	①片 ②床直 ③土師
17	甕	① (18.0)	①細砂含む。酸化鉄・ 黒色鉱物粒含む。 ②にぶい赤褐色	口縁部ゆるい「コ」の 字状を呈する。	口縁部ココナデ。肩部 上端外面強いココナ デ。頸部中位外面粗い ココナデ。	①片 ②カンド内 ③土師
18	甕	① (19.5)	①細砂含む。黒色鉱物 粒含む。 ②にぶい褐色	口縁部「コ」の字状を 呈する。	口縁部ココナデ。脛部 部外面強いココナデ。 口唇部つまみ上げる。 頸部中位指須圧痕。磁 造り痕残る。	①片 ②フタ土 ③土師
19	甕	① (18.4)	①細砂含む。黒色鉱物 粒含む。 ②にぶい褐色	口縁部ゆるい「コ」の 字状を呈する。	口縁部ココナデ。脛部 部やや強いココナデ。 頸部中位粗いココナ デ。	①片 ②床直・フタ土 ③土師
20	甕	① (19.8)	①細砂含む。金雲母・ 酸化鉄粒含む。 ②にぶい褐色	口縁部ゆるい「コ」の 字状を呈する。	口縁部ココナデ。脛部 部外面指須圧痕残る。 肩部内面指ナデ。	①片 ②床直 ③土師
21	甕	① (19.7)	①細砂含む。酸化鉄・ 黒色鉱物粒含む。 ②にぶい褐色	口縁部ゆるい「コ」の 字状を呈する。	口縁部ココナデ。脛部 部外面強いココナデ。 頸部中位外面へり削り 時にヘラの先端当た る。	①片 ②フタ土 ③土師
22	鉈尾					銅製のもので幅28.8mm、長さ47.8mm、厚さは先端4.4mm、基部は2.2~2.5mmを測る。重さは43gである。真金具は 検出されなかった。足金具は4本であり、いずれも基部方向に傾き、その先端は欠れている。したがって真金具は、 錆化による自然剥離とは考えにくい。プラン確認時の出土。
23	砥石					4.5×3.5×2.3cmの撚げ砥石で、短辺の2面以外はすべて使用している。東面より出土。





第90図 18号住居址出土遺物実測図(2)

19号住居址 (図91～97, 表28～30, 図版28・29・58・59)

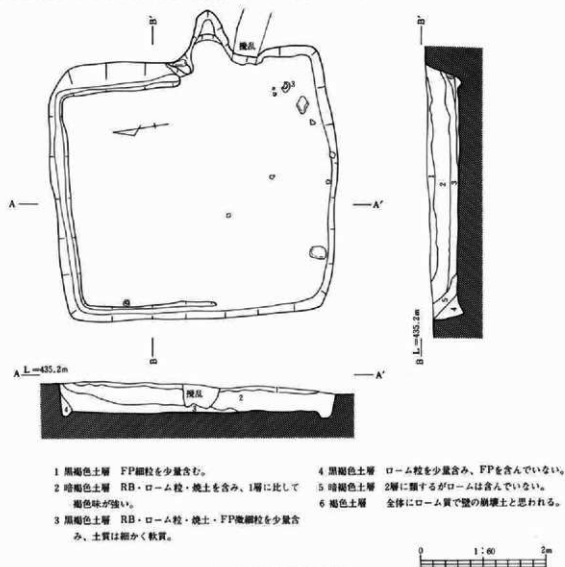
位置 西側住居址群の南寄りに位置する。約4.5m北に18号住居址・約3m西に25号住居址・約3m南に23号住居址がある。

平面形・規模 南北にやや長い方形を呈する。規模は長軸4.4m。短軸4.1mを測る。方位はN-5.5°-Eを示す。重複はない。

壁 確認壁高は北壁46cm・南壁30cmを測る。東壁北半の立ち上がり角度はゆるいが、他は比較的急である。周溝 巾10cm・深さ6cm～10cmでカマド北側から西壁中央まで検出された。

柱穴・ピット 柱穴は検出されない。掘り方面においてピットは2ヶ所確認され、深さはP<sub>1</sub>33cm・P<sub>2</sub>17cmを測る。

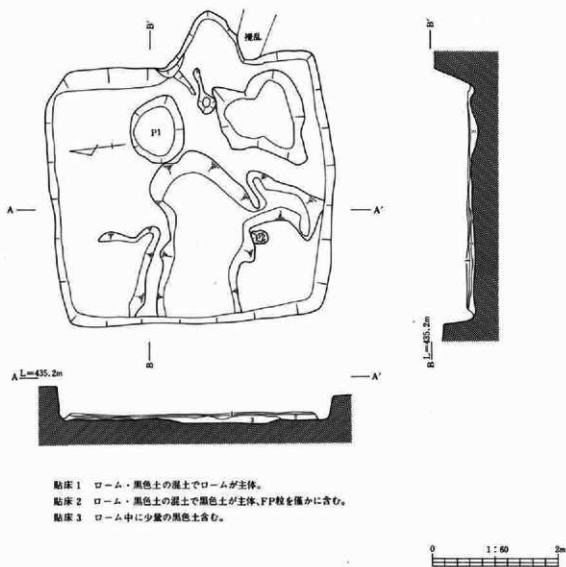
掘り方・床 掘り方はピットを除き8cm～16cm掘り込んでいる。底面は凹凸が多く、南に傾斜している。床は掘り方の深い部分をローム主体の土で埋め戻し、その上に黒色土主体の土ではぼ水平にした後、ローム主体の土を貼っている。床面は非常に硬く、つきかためられていた。



第91図 19号住居址床面実測図

第1節 住居址・住居址出土遺物

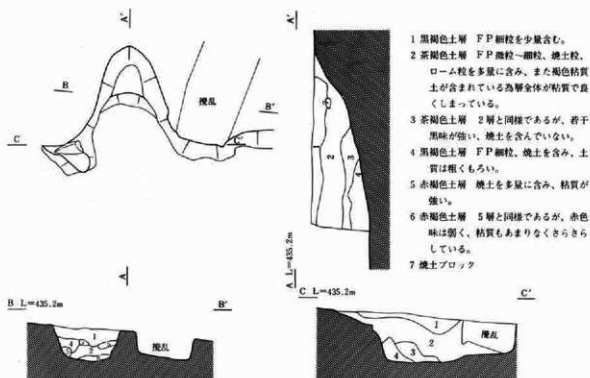
カマド 東壁南寄りに壁を80cm掘り込んで設置する。火床面からの壁高は42cmで、煙道の傾斜はゆるい。  
 出土遺物 掘り方より須恵器杯(1・2)が、床面直上より須恵器杯(3)が出土している。なお(1)は口径が大きくなる可能性がある。また土師器壺はすべて本住居址に伴わないと考えられる。



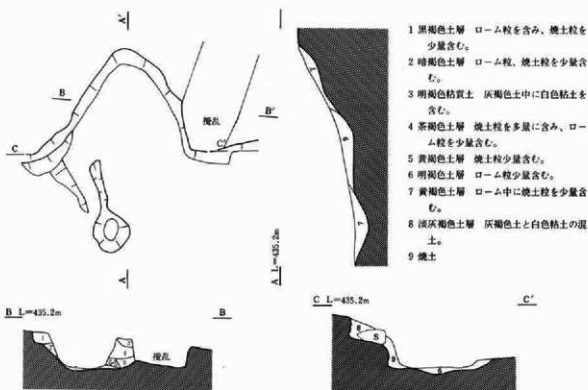
- 貼床1 ローム・黒色土の混土でロームが主体。
- 貼床2 ローム・黒色土の混土で黒色土が主体、FP粒を僅かに含む。
- 貼床3 ローム中に少量の黒色土含む。

第92図 19号住居址掘り方実測図

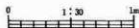
第5章 検出された遺構と遺物

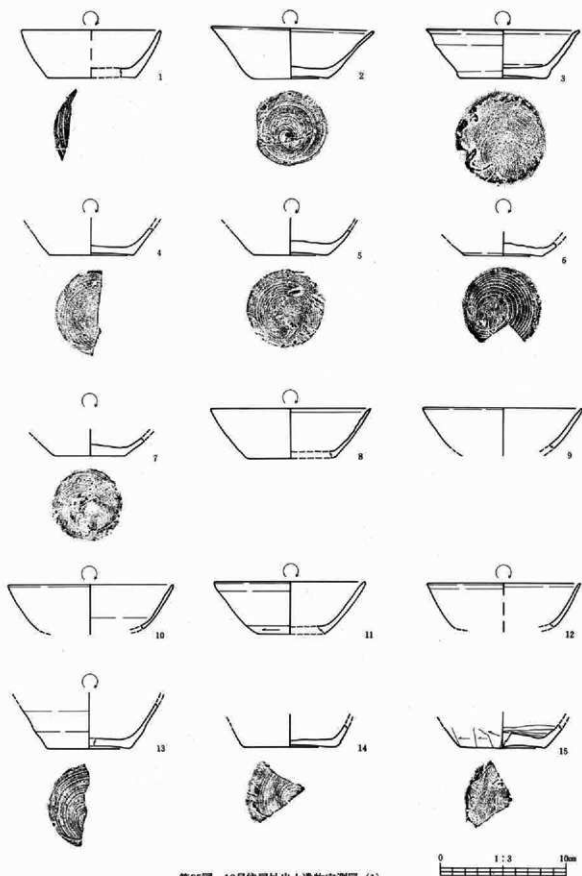


第93図 カマド火床面実測図



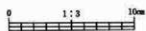
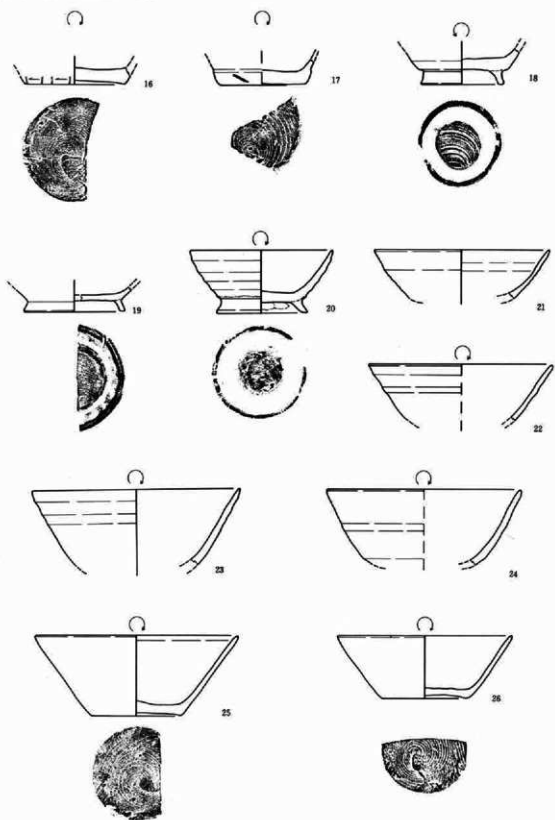
第94図 カマド掘り方実測図



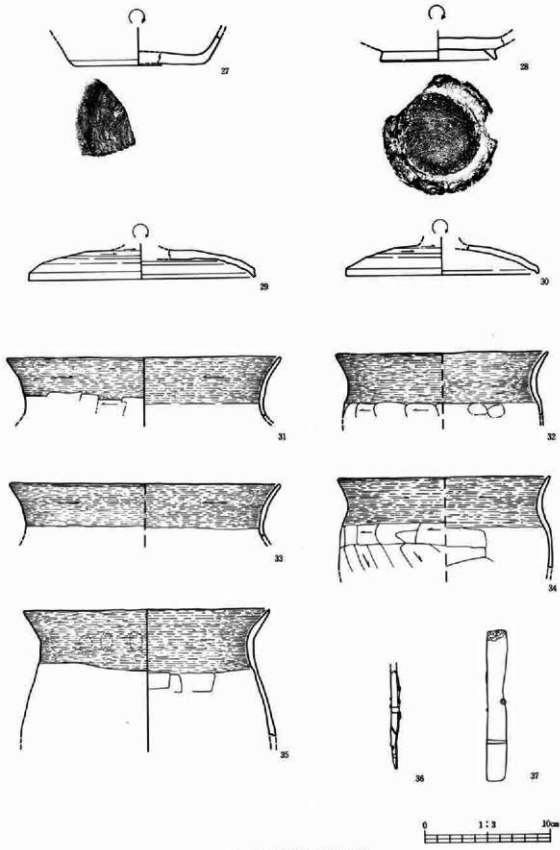


第95圖 19号住居址出土遺物実測図(1)

第5章 検出された遺構と遺物



第96図 19号住居址出土遺物実測図 (2)



第97図 19号住居址出土遺物実測図(3)

## 第5章 検出された遺構と遺物

表28 19号住居址出土遺物観察表(1)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロケツロ回転 ⑤その他
1	坏	① (12.2) ② ( 6.8) ③ ( 3.8)	①細砂含む。礫少量含む。 ②灰白色 ③軟質	口縁部ゆるく内湾する。	底部糸切り無調整。	①片 ②掘り方 ③須恵 ④右
2	坏	① 13.1 ② 6.0 ③ 3.9	①粗砂少量含む。酸化鉄粒含む。 ②灰白色。③硬質	体部→口縁部外反する。	底部回転糸切り無調整。	①底部一部欠失。口縁部欠。 ②掘り方・フタ土 ③須恵 ④右
3	坏	① 12.2 ② 6.8 ③ 3.8	①粗砂・礫含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③軟質	体部内湾する。口縁部外反する。	底部回転糸切り無調整。	①口縁部一部欠失。口縁部欠。 ②須恵 ③須恵 ④右
4	坏	② 6.8	①粗砂・礫少量含む。 ②灰色 ③硬質	体部直線的に延びる。	底部回転糸切り無調整。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
5	坏	② 6.0	①細砂含む。 ②灰色 ③硬質	底部器壁薄い。体部下位内湾する。	底部回転糸切り無調整。	①完 ②フタ土 ③須恵 ④右
6	坏	② 6.2	①粗砂含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	底部中央器壁厚い。	底部回転糸切り無調整。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
7	坏	② 5.6	①粗砂・礫少量含む。 ②灰色 ③硬質	底部中央器壁厚い。	底部回転糸切り無調整。	①完 ②フタ土 ③須恵 ④右
8	坏	① (12.8)	①粗砂少量含む。 ②器表灰色。断面灰白色。 ③軟質	体部ゆるく内湾する。口縁部小さく外反する。		①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
9	坏	① (12.8)	①細砂・粗砂含む。 ②灰色 ③硬質	体部内湾する。口縁部外反する。		①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
10	坏	① (13.2)	①粗砂少量含む。 ②灰色 ③硬質	体部直線的に延びる。体部器壁うすい。		①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
11	坏	① (12.2)	①粗砂・礫少量含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	体部直的に延びる。口縁部ゆるく外反する。	体部下端回転ヘラ削り。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
12	坏	① (12.2)	①粗砂・礫少量含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	体部下位内湾する。口縁部外反する。		①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
13	坏	② (6.6)	①細砂・粗砂含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	体部外反する。	底部回転糸切り無調整。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
14	埴	② (7.6)	①細砂・粗砂含む。酸化鉄粒含む。 ②褐色 ③軟質		底部回転糸切り無調整。体部内面ヘラミガキ。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明 ⑤酸化塩。
15	坏	② (7.0)	①細砂含む。 ②にぶい褐色 ③軟質	底部器壁厚い。	底部回転糸切り無調整。体部下端ヘラ削り。体部内面ヘラミガキ。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明 ⑤酸化塩。



表29 19号住居址出土遺物観察表(2)

NO	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロクロ回転 ⑤その他
16	鉢	② 8.2	①硬少量含む。 ②にぶい橙色 ③軟質	底部器壁厚く、中央盛り上がる。	底部回転糸切り無調整。	①片 ②攪り方・フタ土 ③須恵 ④右 ⑤酸化焰
17	小型壺?	② (7.0)	①粗砂少量含む。 ②にぶい橙色 ③軟質。	底部器壁厚い。	底部回転糸切り無調整。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤酸化焰
18	坏	② 6.5	①細砂多量に含む。 ②灰色 ③硬質	高台高くしっかりしている。	底部回転糸切り無調整。	①完 ②フタ土 ③須恵 ④左
19	埴	② 8.0	①細砂・粗砂少量含む。 ②灰色 ③硬質	高台うすく、高い。	底部回転糸切り無調整。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
20	埴	① (11.4) ② 7.4 ③ 4.9	①細砂・粗砂含む。 ②橙色 ③軟質	高台高く、外方に開く。	底部回転糸切り無調整。 高台貼り付け時に糸切り痕周辺ナゲ潰す。	①底部完。口縁部片 ②フタ土 ③須恵 ⑤酸化焰
21	埴	① (14.0)	①細砂含む。黒色紅物粒含む。②灰色 ③硬質	体部内両する。口縁部外反する。		①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
22	埴	① (14.8)	①細砂少量含む。酸化鉄粒含む。②にぶい橙色 ③軟質	体部ゆるく内両する。口縁部ゆるく外反する。		①片 ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤酸化焰
23	埴	① (16.6)	①細砂含む。酸化鉄粒含む。②褐色 ③軟質	口縁部ゆるく外反する。		①片 ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤酸化焰
24	埴	① (15.6)	①細砂含む。酸化鉄粒含む。②赤褐色 ③軟質	体部下位内両する。口縁部外反する。		①片 ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤酸化焰
25	埴	① (16.3) ② 7.2 ③ 6.3	①細砂・粗砂含む。 ②赤褐色 ③軟質	体部・口縁部ゆるく外反する。	底部回転糸切り無調整。	①底部片 ②末直・フタ土 ③須恵 ④右 ⑤酸化焰
26	埴	① (14.2) ② 7.0 ③ 5.0	①細砂含む。 ②灰色 ③軟質	体部ゆるく外反する。	底部回転糸切り無調整。	①底部片 ②フタ土 ③須恵 ④右

表30 19号住居址出土遺物観察表(3)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④回転 ⑤その他
27	鉢	② (10.5)	①細砂含む。黒色鉱物・酸化鉄粒含む。 ②褐色 ③軟質	底部中央器壁厚い。	底部回転未切り無調整。	①残 ②フタ土 ③須恵 ④右
28	鉢	② (9.2)	①粗砂少量含む。 ②器表灰黄色。断面にぶい褐色。③軟質	高台低く断面三角形。	底部回転未切り無調整。 内底調整丁寧。	①完 ②掘り方 ③須恵 ④右
29	蓋	① (18.0)	①粗砂・礫含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	天井部周縁器壁うすい。口縁部下方に折り曲げる。	天井部回転ヘラ削り。つまみ貼り付け時にヘラ削痕を粗く回転ココナデする。	①残 ②フタ土 ③須恵 ④右
30	蓋	① (15.4)	①細砂含む。酸化鉄粒含む。 ②外面灰色。内・断面灰黄色 ③軟質	天井部均一に内湾する。口縁部水平に屈曲した後下方に折り曲げる。	天井部回転ヘラ削り。つまみ貼り付け時にヘラ削り痕を粗く回転ココナデする。	①残 ②フタ土 ③須恵 ④右
31	甕	① (22.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。 ②褐色	口縁部ゆるい「コ」の字状を呈する。	口縁部ココナデ。頸部下位ヘラ削り痕残る。	①残 ②フタ土 ③土師
32	甕	① (17.0)	①細砂含む。酸化鉄粒・黒色鉱物粒含む。 ②赤褐色	口縁部ゆるい「コ」の字状を呈する。	口縁部ココナデ。肩部外面ヘラ削り。肩部内面ナゲ。	①残 ②フタ土 ③土師
33	甕	① (21.6)	①細砂含む。酸化鉄・黒色鉱物粒含む。 ②赤褐色	口縁部ゆるい「コ」の字状を呈する。	口縁部均一なココナデ。	①残 ②フタ土 ③土師
34	甕	① (17.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。 ②にぶい褐色	口縁部ゆるい「コ」の字状を呈する。	口縁部均一なココナデ。肩部外面横位ヘラ削り。下位右下がりヘラ削り。肩部内面ヘラ成形後ナゲ調整。	①残 ②フタ土 ③土師
35	甕	① 19.6	①細砂含む。酸化鉄・黒色鉱物粒含む。 ②黒褐色	口縁部ゆるい「コ」の字状を呈する。	口縁部ココナデ。屈曲部外面強いココナデ。頸部中央外面指頭圧痕残る。	①残 ②フタ土 ③土師
36	鉄 鏝	某の部分であり、断面正方形を呈し、1方は細くなる。根色の痕は残っていない。フタ土出土。				
37	鉄製品	長さ12cm・幅1.5cm・厚さ3mm～1mmを測る。錆びひどく欠失しているか否か不明。用途不明。フタ土出土。				

20号住居址 (図98~103, 表31・32, 図版29・30・59)

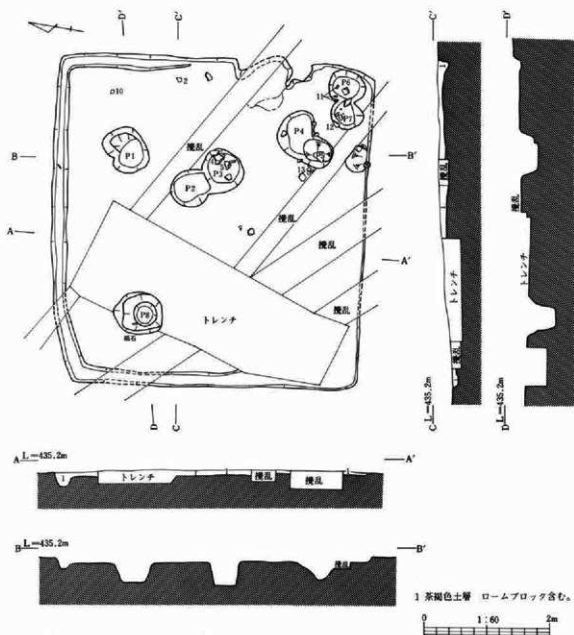
**位置** 西側住居址群の北に位置する。約6.5m北東に21号住居址・約5m東に15号住居址・約1.5m南西に22号住居址がある。

**平面形・規模** 南北にやや長い方形を呈し、その規模は南北5.1m・東西5.0mを測る。方位はN-14.5°-Wを示す。重複はない。

**壁** 確認壁高は北壁7cm・南壁3cmである。

**周溝** 巾18cm-22cm, 深さは13cm-6cmでカマド北より西壁まで確認された。

**柱穴・ピット** 柱穴は3ヶ所 (P<sub>1</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>8</sub>) 確認され、深さはP<sub>1</sub>26cm・P<sub>5</sub>18cm・P<sub>8</sub>49cmを測る。



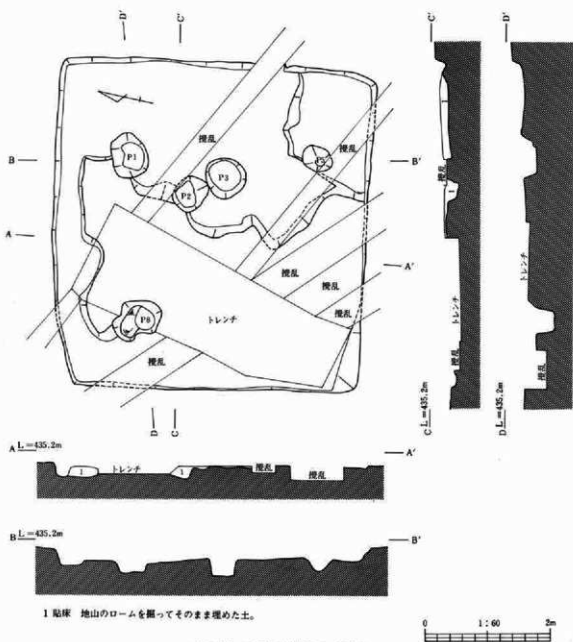
第98図 20号住居址床面実測図

第5章 検出された遺構と遺物

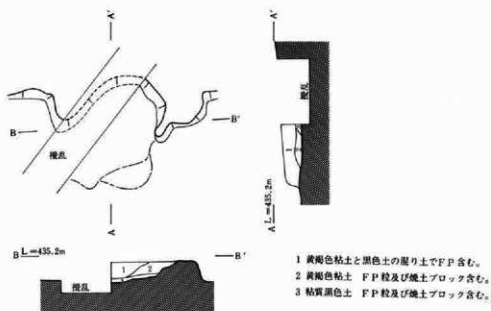
ピットは4ヶ所確認されており、P<sub>1</sub>・P<sub>7</sub>は貯蔵穴様ピットと考えられ、深さはそれぞれ13cmと12cmである。P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は深さ19cm・32cmである。

掘り方・床 掘り方は東・北・西壁を「コ」の字型に13cm～17cm掘り込んでいる。高い部分は地床である。カマド 東壁南寄りに設置する。壁への掘り込みの深さは攪乱のため不明であるが、深くは掘り込んでいなかったと考えられる。右側壁は掛け口部をかこむように内湾している。

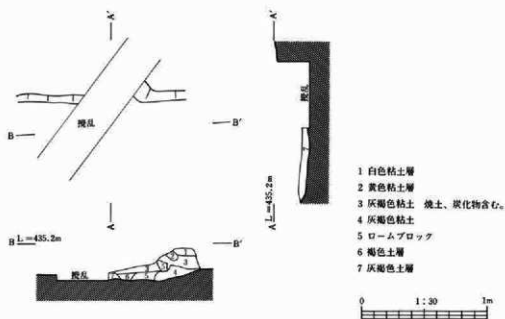
出土遺物 床面直上より須恵器杯(2)・同蓋(6)・土師器埴(10・12)・同壘(13)が出土している。また柱穴内より掘げ砥石(15)が出土している。



第99図 20号住居址掘り方実測図



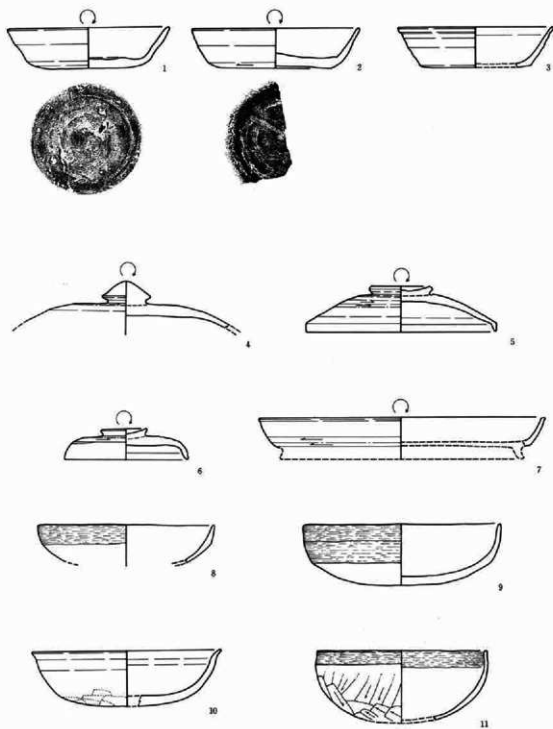
第100図 カマド火床面実測図



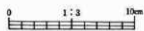
第101図 カマド掘り方実測図

表31 20号住居址出土遺物観察表(1)

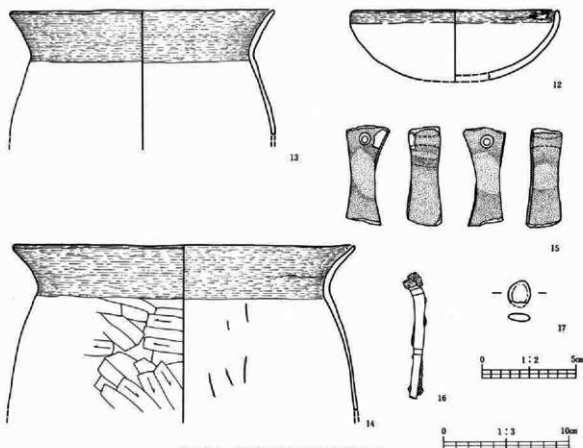
NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロクロ回転 ⑤その他
1	坏	①(13.0) ②(8.6) ③3.2	①細砂多く含む。酸化鉄粒多く含む。 ②灰色 ③硬質	体部ゆるく外湾。 口縁部直線的に延びる。	底部回転ヘラ切り後不定方向ナデ。 内底回転ココナデやヤ箱。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
2	坏	①13.6 ②8.8 ③3.2	①粗砂・糠少量含む。 ②にぶい褐色・口縁部内外面黒色 ③軟質	底部中央部壁厚い。 体部外面巾広いロクロ目めぐる。	底部回転ヘラ切り後狭いナデ状の回転ヘラ削り。体部下端ナデ状の回転ヘラ削り。	①底部完・口縁部片 ②床直 ③須恵 ④石
3	坏	①(12.4) ②(9.0) ③(3.1)	①細砂少量含む。酸化鉄粒含む。 ②灰白色 ③軟質	体部直線的に延びる。 口縁部強いロクロ目。口唇部少し外反。	底部ヘラ削り。切り難し技法不明。	①口縁部片・底部一部 ②フタ土 ③須恵 ④不明
4	蓋		①粗砂・糠含む。軽石・酸化鉄粒含む。 ②灰色・断面浅黄褐色 ③硬質	瓶宝珠つまみ・天井部ゆるく内湾。	天井部回転ヘラ削り後回転ココナデ。内面螺旋状にロクロ目残る。	①天井部完 ②フタ土 ③須恵 ④石
5	蓋	①(15.2)	①細砂含む。酸化鉄粒少量含む。 ②外面灰黄褐色。内・断面黄褐色。③軟質	つまみ中央周囲より低く、小さく突出する。 口縁部下方に折り返す。	天井部回転ヘラ削り。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④石
6	蓋	①9.8 ③3.6	①細砂少量含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	つまみ中央凹む。 口縁部内湾し、下方に延びる。口唇部外面に向い器壁を減じる。	天井部広く回転ヘラ削り。内面凹凸り痕残る。	①完 ②床直 ③須恵 ④右 天井部へ口縁部隆状多い。降灰酸化する。
7	蓋	①(22.8)	①細砂少量含む。 ②灰白色 ③硬質	器高低い。口唇部平坦面を持つ。	体部下端回転ヘラ削り。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
8	坏	①(14.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。 ②にぶい赤褐色	体部より内湾し口縁部に至る。外面はヘラ削りにより後を持つ。底部は丸味を帯びると思われる。	口縁部ココナデ。体部一底部ヘラ削り。	①片 ②フタ土 ③土師
9	埴	①(16.0) ②7.0 ③4.8	①細砂多量に含む。黒色鉱物粒多量に含む。 ②外面褐色。内面にぶい褐色。	口縁部は直線的に延びる。体部は内湾し、底部は丸味を帯びる。	口縁部ココナデ・体部外面・内底ナデ。底部周縁円形にヘラ削り。底部不定方向ヘラ削り	①口縁部片・底部片 ②フタ土 ③土師
10	埴	①(15.4) ③(4.5)	①細砂・粗砂含む。軽石粒含む。 ②外・断面にぶい。	口縁部器壁を減じ外反する。体部は内湾する。底部は丸味を帯びる。	口縁部一底部粗いヘラ削り。底部ヘラ削り後ナデ。内底ナデ。	①口縁部片・底部片 ②床直 ③土師
11	埴	①(13.5)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。 ②にぶい褐色	口縁部はココナデにより、器壁は薄くなり、小さく外湾して上方に立ち上がる。底部一底部は均一に内湾する。底部丸底。	口縁部ココナデ。体部ヘラ削り後ナデ。底部一底部内面ナデ。底部不定方向ヘラ削り後、周縁、円形にヘラ削り。	①片 ②フタ土 ③土師



第102図 20号住居址出土遺物実測図(1)



第5章 検出された遺構と遺物



第103図 20号住居址出土遺物実測図(2)

表32 20号住居址出土遺物観察表(2)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①現存率②出土部位 ③種別④クワ回転 ⑤その他	
12	埴	①(16.2) ③(5.7)	①細砂・粗砂含む ②にぶい褐色	口縁部はヨコナゲにより直立させる。底部へ体部はゆるく均一に内両する。底部は丸底。	口縁部ヨコナゲ。底部へ体部へテ削り。底部へ体部内面ナゲ。	①片 ②床直 ③土師 ④砂壁厚減	
13	壺	①(21.0)	①細砂多く含む。酸化鉄粒含む。黒色鉱物粒少量含む。 ②にぶい赤褐色	口縁部「く」の字状に外反する。胴部最大径と口縁部径はほぼ同一。	口縁部ヨコナゲ。胴部一肩部へテ削り。胴部一肩部内面ナゲ。	①片 ②床面・床直・フタ土 ③土師 ④砂壁厚減	
14	壺	①(27.4)	①細砂多く含む。黒色鉱物・酸化鉄・金雲母粒含む。	口縁部「く」の字状に外反する。胴部最大径と口縁部径はほぼ同一。器壁やや厚い。	口縁部ヨコナゲ。肩部傾位へテ削り。胴部傾位へテ削り。胴部一肩部内面へテ成形後ナゲ調整。	①片 ②フタ土 ③土師	
15	砥石	揚げ砥石で4面使用している。そのうち2面を多く使用している。現存長7.5cm。					
16	鉄製品	断面長方形を呈する。両端は欠失し、巾が広くなる部分は曲がる。					
17	土製品	土器の浮文に似たもので楕円形を呈する。他の土器と胎土がやや異なり、住居に伴うかどうか不明。用途不明。					



## 21号住居址 (図104-109, 表33, 図版31・32・59)

**位置** 西側住居址群北端に位置する。約6m南西に20号住居址・約7m南に18号住居址がある。

**平面形・規模** 南北にやや長い隅丸方形を呈すると考えられる。規模は長軸不明・短軸3.8mを測る。壁の立ち上がり角度はゆるい。北西部は未発掘である。

**壁** 確認壁高は、南壁23cmを測る。北壁は未発掘のため不明である。

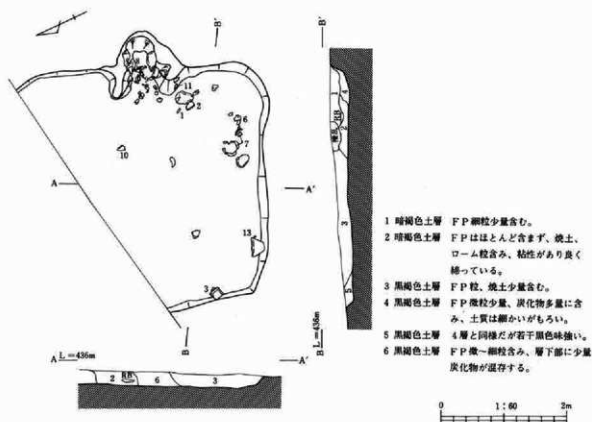
**周溝** 検出されない。

**柱穴・ピット** 柱穴は検出されない。ピットは掘り方面において3ヶ所確認され、深さはP<sub>1</sub>14cm・P<sub>2</sub>13cm・P<sub>3</sub>10cmである。

**掘り方・床** 掘り方は中央が浅く、周辺が深い。深さは中央が4cm・周辺が15cmである。床面は軟らかい状態であった。

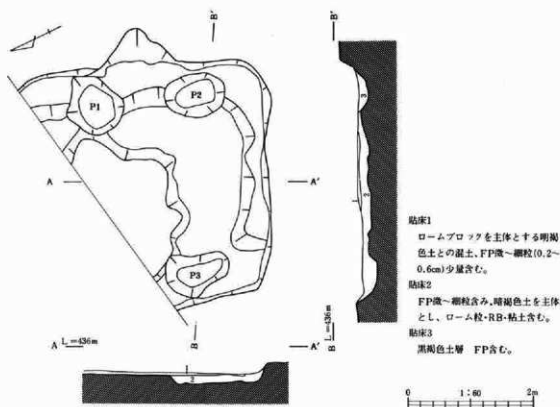
**カマド** 東壁中央に壁を30cm掘り込んで設置する。燃焼部は内側に石を立てている。本住居址付近はローム層が薄いため、火床面はローム下の粘土層を使用している。そのため火床面は厚さ5cmにわたり赤変していた。

**出土遺物** 床面直上より須恵器坏(3)・同塊(6)がカマド内より土師器甕(8・9・11)が出土している。

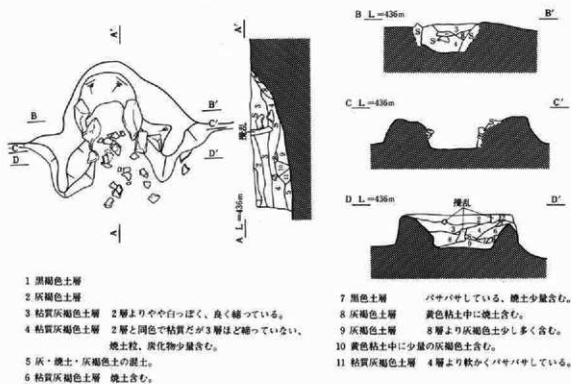


第104図 21号住居址床面実測図

第5章 検出された遺構と遺物

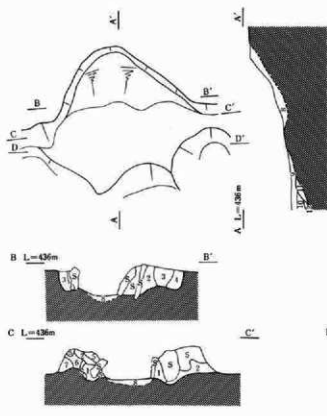


第105図 21号住居址掘り方実測図



第106図 カマド火床面実測図

- 1 黒褐色土層
- 2 灰褐色土層
- 3 粘質灰褐色土層 2層よりやや白っぽく、良く締っている。
- 4 粘質灰褐色土層 2層と同色で粘質だが3層ほど締っていない、  
焼土粒、炭化物少量含む。
- 5 灰・焼土・灰褐色土の混土。
- 6 粘質灰褐色土層 焼土含む。
- 7 黒色土層 バサバサしている、焼土少量含む。
- 8 灰褐色土層 黄色粘土中に焼土含む。
- 9 灰褐色土層 8層より灰褐色土少し多く含む。
- 10 黄色粘土中に少量の灰褐色土含む。
- 11 粘質灰褐色土層 4層より軟かくバサバサしている。



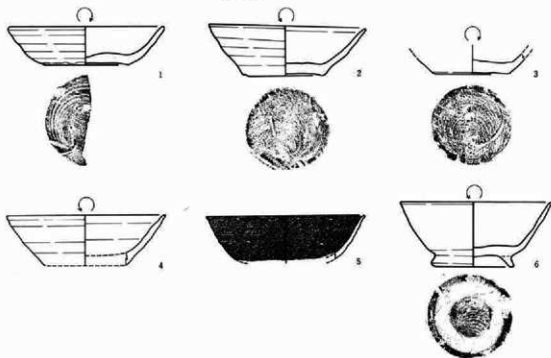
カマド掘り方土層図

- 1 茶褐色土層 焼土含む。
- 2 赤褐色土層 焼土粒を非常に多く含む。
- 3 暗褐色土層 F.P.微量、焼土少量含む、粘性が弱い。
- 4 暗褐色土層 F.P.含まない、焼土微量含む。
- 5 淡黄褐色土層 F.P.極少、良く締り粘性がある。
- 6 淡黄褐色土層 ローム粒極少粘性あり。
- 7 淡黄褐色土層 暗褐色土極少含む。
- 8 赤褐色土層 地山の淡黄褐色粘土が焼土化した部分。

粘床

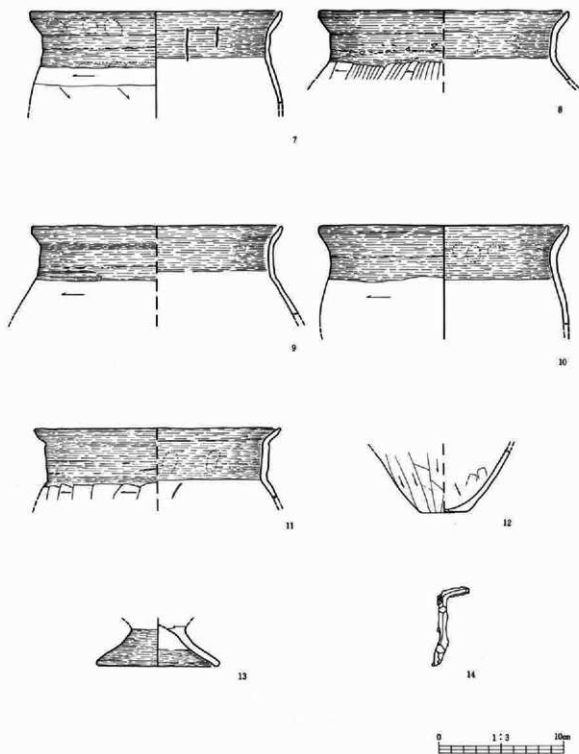
- 粘床9 白色粘土中に灰褐色土少量含む。
- 粘床10 粘質灰褐色土にローム粒、炭化物粒含む。
- 粘床11 10より灰白色粘土、ローム粒多量に含む。
- 粘床12 白色粘土中に灰褐色土多量に含み、やわらかい。

第107図 カマド掘り方実測図



第108図 21号住居址出土遺物実測図(1)

第5章 検出された遺構と遺物



第109図 21号住居址出土遺物実測図(2)

表33 21号住居址出土遺物観察表

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )釐定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロクロ回転 ⑤その他	
1	坏	① (12.7) ② 7.2 ③ 3.0	①細砂含む。酸化鉄・黒色鉱物粒多量を含む。 ②灰色 ③硬質	内底中央凹む。体部広く外方に延びる。口縁部ゆるく外反する。	底部回転糸切り無調整。	①底部片・口縁部片 ②フタ土 ③須恵 ④石	
2	坏	① 12.5 ② 6.2	①細砂・雑含む。酸化鉄・石英粒含む。②灰色-黄褐色。③軟質	底部器壁厚い。体部ゆるく内両気味に立ち上がる。口縁部外反。	底部回転糸切り無調整。	①底部完・口縁部片 ②フタ土 ③須恵 ④左 ⑤器壁摩滅	
3	坏	② 6.4	①細砂・粗砂少量含む ②灰色 ③硬質	底部器壁厚い。	底部回転糸切り無調整	①底部完 ②味直 ③須恵 ④右	
4	坏	① (12.8)	①細砂含む。雑少量含む。 ②灰白色 ③軟質	体部広く直線的に開く。 口唇部小さく外反。		①片 ②カマド内 ③須恵 ④不明	
5	坏	① (12.8)	①細砂少量含む。 ②器表黒色。断面淡褐色。③軟質	体部ゆるく内両する。 口縁部小さく外反。		①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明	
6	壺	① 12.0 ② 6.3 ③ 5.2	①細砂含む。石英・軽石粒含む。②黒色-浅黄褐色。③軟質	底部器壁厚い。高台少し開く。体部直線的に延びる。口唇部小さく外反。	底部回転糸切り後付高台。	①底部完。体部一口縁部片。 ②味直 ③須恵 ④左	
7	壺	① 20.2	①細砂含む。黒色鉱物・酸化鉄粒少量含む。 ②褐色	口唇部ヨコナデによりつまみ上げる。頸部と肩部の境ゆるく屈曲し胴部はあまり張らない。	口縁・頸部内面へラ成形残る。頸部外面粘土接合残る。口縁・頸部横ナデ	①完 ②フタ土 ③土師	
8	壺	① (20.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。 ②褐色	口唇部ヨコナデにより、つまみ上げる。肩部には張りがあり、「コ」の字状口縁となる。	口縁・頸部ヨコナデ。肩部外面横位へラ削り。肩部内面ナデ。	①片 ②カマド内 ③土師 ⑤器壁摩滅	
9	壺	① (20.0)	①細砂含む。黒色鉱物・酸化鉄粒含む。 ②褐色	口唇部ヨコナデによりゆるくつまみ上げる。肩部には張りがあり、「コ」の字状口縁となる。	口縁・頸部ヨコナデ。肩部外面横位へラ削り。肩部内面ナデ。	①片 ②カマド内 ③土師 ⑤器壁摩滅	
10	壺	① (20.0)	①細砂含む。黒色鉱物・酸化鉄粒少量含む。 ②褐色	口唇部ヨコナデによりつまみ上げる。頸部と肩部の境は明瞭ではない。	口縁・頸部ヨコナデ。肩部外面へラ削り。肩部内面ナデ。	①片 ②フタ土 ③土師 ⑤器壁摩滅	
11	壺	① (20.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。②褐色	「コ」の字状口縁。	口縁・頸部ヨコナデ。頸部内面指頭圧痕残る。	①片 ②カマド内 ③土師	
12	壺	② (5.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。②褐色	内底凹む。	外面へラ削り。内底へラ成形後ナデ。	①片 ②カマド内 ③土師	
13	台付壺	② (10.0)	①細砂含む。黒色鉱物粒含む。②褐色	外方に大きく開き、高台は低い	台部ヨコナデ。	①片 ②フタ土 ③土師	
14	鉄製品	鍔化ひどく断面形は不明であるが、方形の可能性が高い。用途不明。外圧によりゆるく屈曲する部分がある。					

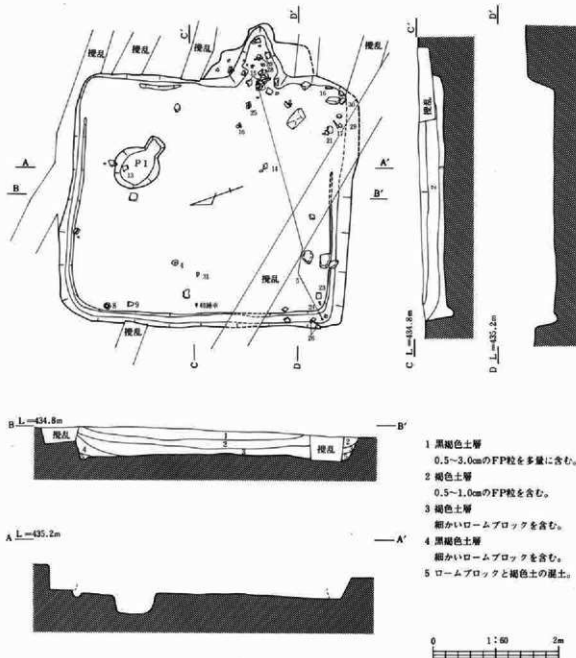
22号住居址 (図110~117, 表34~36, 図版33~34・59・61・64)

位置 西側住居址群のはほぼ中央に位置する。約1.5m北東に20号住居址・約1.5m南西に26号住居址がある。  
 平面形・規模 南北に長軸を持つ長方形を呈する。規模は長軸4.6m・短軸3.9mを測る。方位はN-11°-Eを示す。重複はない。

壁 確認壁高は北壁46cm・南壁31cmを測る。南壁の立ち上がり角度はゆるい。

周溝 巾10cm~15cm・深さ5cm~10cmでカマド部分・北東及び南東の各コーナーを除いて確認された。

柱穴・ピット 柱穴は検出されない。床面においてピットは1ヶ所(P<sub>1</sub>)確認され、深さは27cmである。掘り方面では3ヶ所確認され、深さはP<sub>2</sub>12cm・P<sub>3</sub>13cm・P<sub>4</sub>17cmであり、P<sub>3</sub>はカマドに伴うものと考え



第110図 22号住居址床面実測図

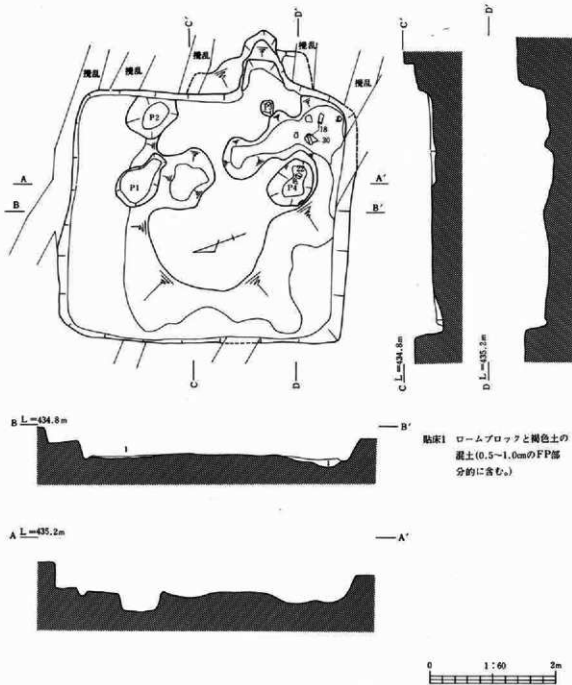
第1節 住居址・住居址出土遺物

られる。なお南東コーナーの落ち込みは遺物の出土状態などから考えて貯蔵穴の可能性が高い。

**掘り方・床** 掘り方は北・西・南の各壁際を5cm～15cm掘り込んでおり、カマド部分及び住居址中央部は地床である。

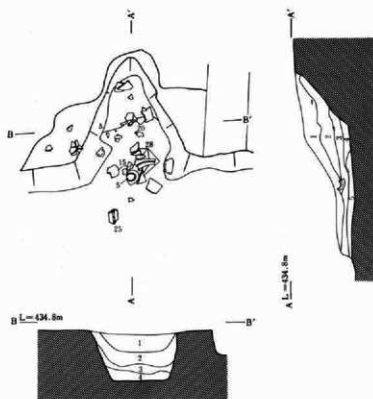
**カマド** 東壁南寄りに壁を約80cm掘り込んで設置する。袖は残存していないが、掛け口部両側の壁上場に厚さ10cm程粘土が残存している。おそらく、この部分より粘土で天井を構築したものであろう。本遺跡において、壁外に粘土が検出されたカマドは本住居址のみである。

**出土遺物** 酸化焰焼成と還元気味の羽釜が出土している。墨書土器は3点(1・3・4)出土しているが、いずれも判読は不可能で、(1)は2ヶ所に墨書が認められる。



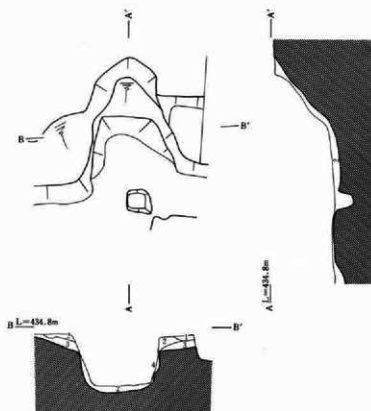
第111図 22号住居址掘り方実測図

第5章 検出された遺構と遺物

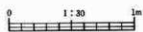


- 1 褐色土層 F P 粒を含む。
- 2 黒褐色土層 F P 粒を含む。
- 3 黒褐色土層 焼土ブロックを含む。
- 4 黒褐色土層 3層より黒色味が強く焼土ブロックを含む。
- 5 黒色土層 焼土ブロック及び炭化物を含む。

第112図 カマド火床面実測図

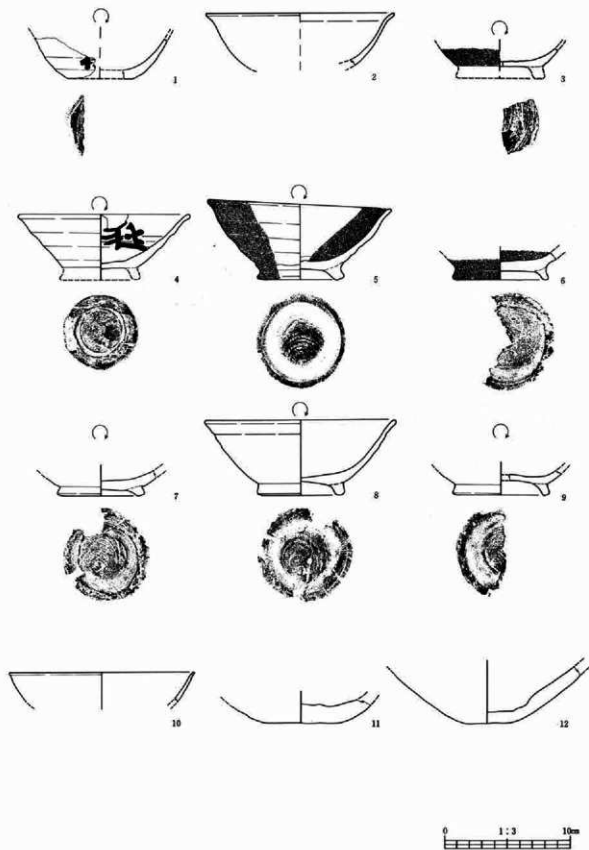


- 1 褐色土を極少量含む型い灰褐色砂質粘土。
- 2 褐色土を少量含む型い灰褐色砂質粘土。
- 3 ローム粒を少量含む型い灰褐色砂質粘土。
- 4 ロームと焼土。



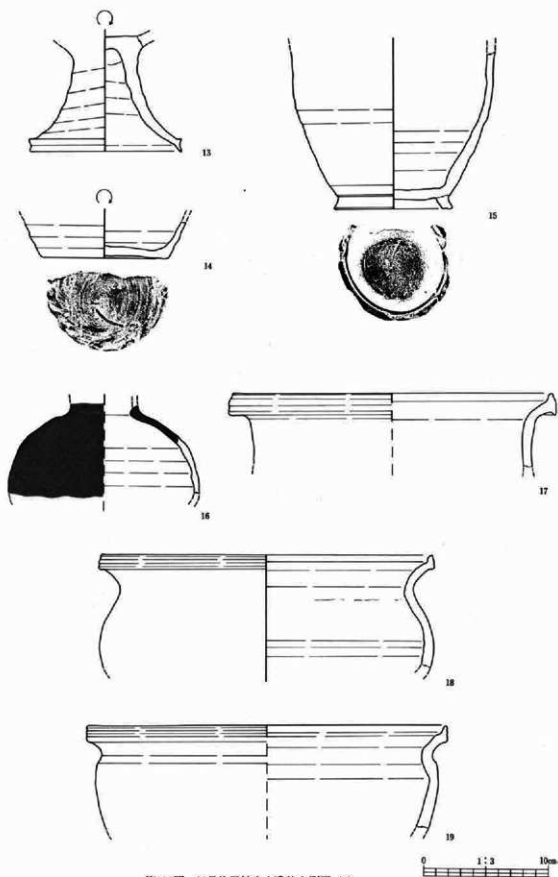
第113図 カマド振り方実測図



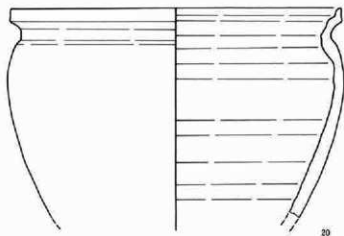


第114圖 22号住居址出土遺物実測図(1)

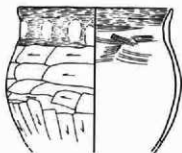
第5章 検出された遺構と遺物



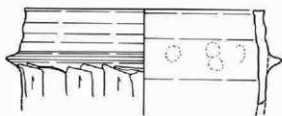
第115図 22号住居址出土遺物実測図(2)



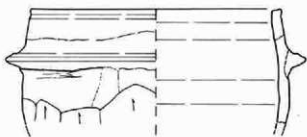
20



21



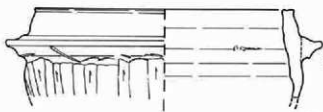
22



23



24



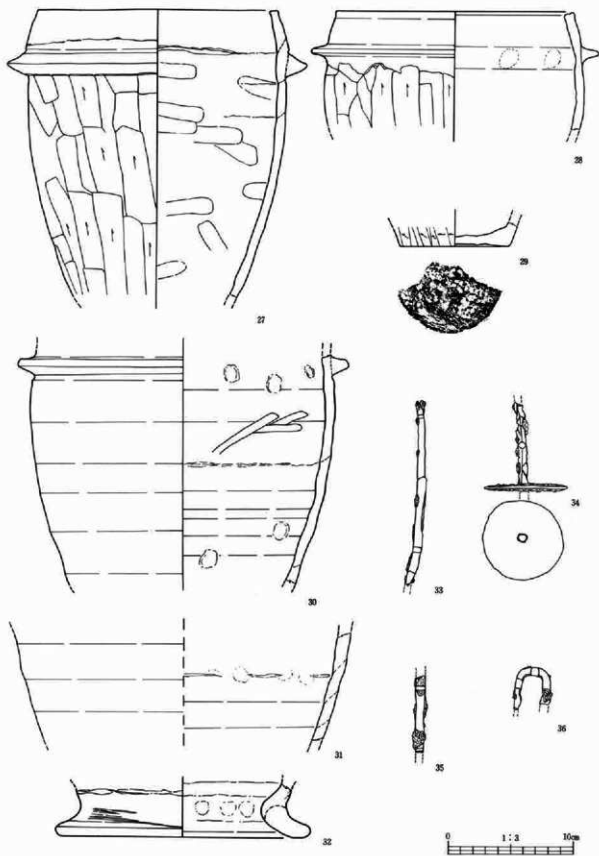
25



26

第116图 22号住居址出土遺物実測图(3)





第117図 22号住居址出土遺物実測図(4)

表34. 22号住居址出土遺物観察表(1)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①粘土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③埋深④ロタロ回転 ⑤その他
1	坏	② (5.6)	①粗砂・礫多量を含む。石英多量を含む。 ②灰白色 ③軟質	体部内湾。	底部糸切り無調整。	①体部片・底部片 ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤墨書部位内底・体部下位外面。墨書判読不可能。
2	埴	① (15.1)	①粗砂・礫多量を含む。②地灰色 ③軟質	体部内湾。口縁部は外反し、口唇部は肥厚する。		①片 ②握り方 ③須恵 ④不明 ⑤器壁摩滅
3	坏 (墨書)		①細砂多量・礫少量含む。②外面黒色・内・断面褐色 ③軟質	体部外方に広がる。高台割離。	底部糸切り。糸切り痕高台貼り付け時の回転ココナゲによりナゲ消す。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤墨書部位外底。判読不可能。
4	坏 (墨書)	①(13.6)	①細砂・粗砂含む。②灰白色～灰色 ③軟質	体部直線的に延びる。口縁部ゆるく外反し、口唇部は肥厚する。高台割離。	底部糸切り。糸切り痕高台貼り付け時の回転ココナゲによりナゲ消す。	①高台以外底部完。口縁部片 ②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤墨書部位外底。「社」の可能性あり?
5	埴 (墨書)	① 14.8 ② 7.0 ③ 6.0	①粗砂・礫含む。②黒色～暗褐色 ③軟質	高台は歪む。体部ゆるく内湾し、口縁部は外反する。	底部回転糸切り後高台貼り付け時の回転ココナゲによりナゲ消す。	①底部完。体部へ口縁内 ②フタ土・カマド内 ③須恵 ④右 ⑤墨書部位外底。判読不可能。
6	埴	② (7.6)	①粗砂・礫含む。②外面・内底黒色。体部内面・断面にぶい黄色。③軟質		底部回転糸切り。糸切り痕高台貼り付け時にナゲ消す。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
7	埴	② (7.0)	①粗砂・礫含む。②にぶい橙黄色 ③軟質	高台は低く厚い。体部は内湾すると思われる。	底部回転糸切り。糸切り痕高台貼り付け時に周辺ナゲ消す。	①完 ②フタ土 ③須恵 ④右
8	埴	① (14.3) ② 7.2 ③ 5.0	①粗砂・礫含む。②褐色～にぶい橙黄色 ③軟質	体部は内湾し、口縁部外反する。口唇部肥厚する。	底部回転糸切り。糸切り痕高台貼り付け時に周辺ナゲ消す。	①底部完、口縁部片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
9	埴	② (7.8)	①粗砂・礫含む。②器表灰色・断面灰白色 ③軟質	高台はやや高めで外方に開く。	底部回転糸切り後高台貼り付け。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
10	埴	① (16.0)	緻密で細砂はほとんど含まない。②灰色 ③硬質	口唇部小さく外反。口縁部少し幾許歪む。	無輪である。	①片 ②フタ土 ③灰軸 ④右
11	不明	② (5.4)	①粗砂・礫含む。②灰白色 ③軟質	体部外方に開く。	内外面ナゲ。底部は粘土版より作る。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
12	不明	② (4.0)	①粗砂・礫含む。②にぶい橙黄色 ③軟質	体部外方に開く。	内外面ナゲ。底部は粘土版より作る。	①片 ②握り方 ③須恵 ④不明

表35 22号住居址出土遺物観察表(2)

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種類④回転 ⑤その他
13	高 杯	② 12.1	①細砂含む、酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	筒部は短かく、袖部は開く。頸部は下方に折り曲げ、上端は様をなす。	口タロ目深い。	①完 ②フタ土 ③真恵 ④不明
14	鉢	② 10.0	①粗砂・微量含む。酸化鉄粒含む。 ②にぶい褐色 ③軟質	底部中央盛り上がる。	底部糸切り無調整。内底口タロ目螺旋状につき、調整は丁寧である。	①片 ②床直 ③真恵 ④右 ⑤酸化焙
15	長頸瓶	② 9.0	①細砂・粗砂含む。酸化鉄粒含む。 ②にぶい褐色 ③軟質	高台いびつ。壘付中央凹線めぐる。体部下位は直線的に延び、中位屈曲し、上方へ延びる。	高台貼り付け。外底ナダ調整。内底中央粗いナダ調整、周縁粗い回転ココナダ。	①底部片、体部片 ②カマド内、フタ土 ③真恵 ④不明 ⑤酸化焙
16	長頸瓶		①細砂微量含む。黒色鉱物粒微量含む。 ②灰白色 ③硬質	肩部一割部均一に内湾する。	口タロ目深い。頸部貼り付け痕ナダ消す。	①頸部片、肩部片 ②床直・フタ土 ③灰釉 ④不明 ⑤頸部一肩部割れ口に触れかかる。胎土中の黒色鉱物粒吹き出す。
17	甕	① (25.8)	①粗砂・雑含む。酸化鉄粒含む。②灰白色。断面淡褐色 ③軟質	口縁部外反し、口唇部は上下に折り返す。	頸部内面接合痕残る。	①口縁部片 頸部1部。 ②床直 ③真恵 ④不明 ⑤胎土混ぜ合わせか?
18	鉢	① (26.5)	①細砂・粗砂含む。酸化鉄粒含む。 ②明赤褐色 ③軟質	口縁部外反する。口唇部上方につまみ上げる。肩部やや張る。	頸部屈曲部内面粘土接合痕残る。	①片 ②握り方 ③真恵 ④不明 ⑤酸化焙
19	鉢	① (26.5)	①細砂含む。粗砂少量含む。 ②明赤褐色 ③軟質	口縁部外反する。口唇部つまみ上げる。	口縁部一肩部回転ココナダ。肩部以下ナダ。	①片 ②握り方 ③真恵 ④不明
20	鉢	① (29.0)	①細砂・粗砂含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	口縁部外反する。口唇部上方につまみ上げる。肩部小さく張る。	内面口タロ目深い。特に口縁部内面の口タロ目は深い。	①口縁部片、体部片 ②カマド内 ③真恵 ④不明
21	甕	① (12.4)	①細砂含む。黒色鉱物・酸化鉄粒少量含む。 ②にぶい褐色	口縁部ゆるく外反する。頸部直立する。最大径は胴部中位に存する。	口縁部ココナダ。口縁部下位外面指頭圧痕残る。頸部下位外面強いココナダ。	①片 ②床面・握り方 ③土師
22	羽蓋	① (19.0)	①粗砂・雑多量に含む。石英粒目立つ。 ②灰白色 ③軟質	口縁部しだいに器壁を増し、内傾する。口唇部面取りする。	口縁部回転ココナダ。胴内面指頭圧痕残る。体部外面縦位へラ削り。	①片 ②握り方 ③真恵 ④不明
23	羽蓋	① (20.0)	①粗砂・雑多量に含む。石英粒目立つ。 ②淡黄褐色 ③軟質	口縁部ゆるく内傾する。口唇部面取りする。	口縁部回転ココナダ。体部内面回転ココナダ。体部外面縦位へラ削り。	①片 ②フタ土 ③真恵 ④不明 ⑤酸化焙
24	羽蓋	① (19.0)	①粗砂・雑多量に含む。石英粒目立つ。 ②淡黄褐色 ③軟質	口縁部短かい。口唇部面取りする。	口縁部回転ココナダ。体部内面回転ココナダ。体部外面縦位へラ削り。	①片 ②フタ土 ③真恵 ④不明 ⑤酸化焙

表36 22号住居址出土遺物観察表(3)

NO	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①粘土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④回転 ⑤その他
25	羽釜	①(21.0)	①粗砂・礫多量を含む。石英粒目立つ。 ②灰白色 ③軟質	口縁部器壁厚く、内傾しつつ細かく立ち上がる。口唇部面取りする。	口縁部回転ココナデ。体部内面回転ココナデ。体部外面縦位ヘラ削り。	①× ②カマド内 ③須恵 ④不明
26	羽釜	①(20.0)	①粗砂・礫多量を含む。石英粒目立つ。 ②灰色、断面灰白色 ③軟質	口縁部ゆるく内傾する。口唇部面取りする。	口縁部回転ココナデ。体部内面回転ココナデ。体部外面縦位ヘラ削り。	①× ②床面・フタ土 ③須恵 ④不明
27	羽釜	①(19.5)	①粗砂・礫含む。酸化鉄粒含む。石英粒目立つ。 ②にぶい黄褐色。 ③軟質	口縁部内傾する。口唇部面取りする。体部は下位に行くに従い径を減ずる。	口縁部回転ココナデ。体部外面縦位ヘラ削り。両上部粘土接合痕残る。体部内面ナデ。	①× ②フタ土・カマド内 ③須恵 ④不明 ⑤酸化焙
28	羽釜	①(19.0)	①粗砂・礫含む。酸化鉄粒含む。 石英粒目立つ。 ②灰褐色 ③軟質	口縁部内傾する。口唇部面取りする。体部中位内湾する。	口縁部回転ココナデ。体部内面回転ココナデ。体部外面縦位ヘラ削り。	①× ②床直 ③須恵 ④不明
29	羽釜	②(8.4)	①粗砂・礫含む。石英粒目立つ。 ②にぶい褐色 ③軟質	底部中央器壁すい。内底凹凸多い。	体部下端横位ヘラ削り。内底粗いナデ。	①× ②床直 ③須恵 ④不明
30	甌		①粗砂・礫含む。酸化鉄粒含む。 石英粒目立つ。 ②灰褐色。断面灰褐色 ③軟質	断面台形の罫を有する。胴部は歪らず、体部に行くに従い径を減ずる。	回転ココナデ。粘土接合部強い回転ココナデ。	①× ②撈り方 ③須恵 ④不明
31	甌		①粗砂・礫含む。酸化鉄粒含む。 石英粒目立つ。 ②淡黄褐色。 ③軟質		回転ココナデ。粘土接合部強い回転ココナデ。	①× ②床直 ③須恵 ④不明 ⑤酸化焙・粘土混ぜ合わせか?
32	甌	②(19.8)	①粗砂・礫含む・石英粒目立つ。 ②灰白色。断面淡黄褐色。 ③軟質	台部外反する。台部器壁厚い。	台部接合部内面指頭痕残る。	①× ②フタ土 ③須恵 ④不明 ⑤粘土混ぜ合わせか?
33	鉄製品	断面方形を呈する。種状のもので、錆化ひどい。二又に分かれている部分は錆ぶくれによるものと考えられる。用途は不明。フタ土出土。				
34	紡錘車	軸先端部・下部が欠失する。				
35	鉄製品	断面長方形の棒状のもので、用途は不明。フタ土出土。				
36	鉄製品	断面方形で「コ」の字形を呈し、両端共に欠失する。用途不明。フタ土出土。				

23号住居址 (図118~123, 表37, 図版35・36・61)

**位置** 西側住居址群南端に位置する。約3m北に19号住居址・約3.5m北西に25号住居址・約2.5m西に24号住居址がある。

**平面形・規模** 南北に長軸を持つ長方形を呈する。規模は長軸4.2m・短軸3.5mを測る。方位はN-24°-Wを示す。重複はない。南西コーナーは未発掘である。

**壁** 確認壁高は北壁34cm・南壁17cmを測る。

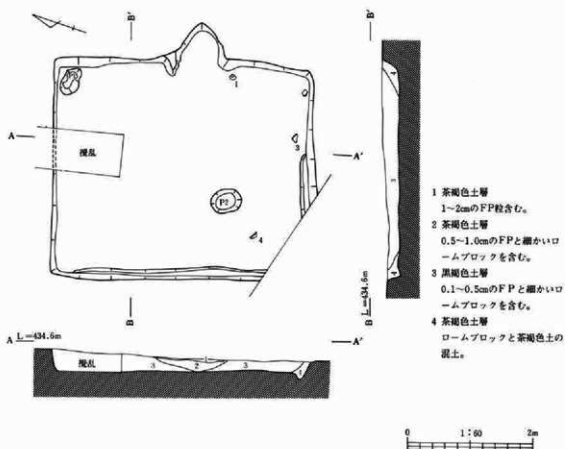
**周溝** 巾10cm~15cm・深さ7cmで西壁と南壁西半に確認された。

**柱穴・ピット** 検出されない。床面においてピットは2ヶ所確認され、P<sub>1</sub>は8cm・P<sub>2</sub>は5cmの深さを有する。掘り方面においてピット等は確認されない。

**掘り方・床** 掘り方は、全体的には北半を浅く、南半を深く掘り込んでいる。深さは浅い部分で5cm~10cm、深い部分で25cmである。

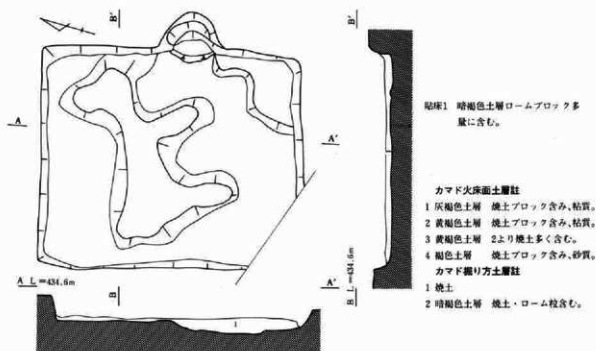
**カマド** 東壁中央やや南寄りに、壁を60cm掘り込んで設置する。袖は左側のみ35cm残存する。掘り方は深い部分で10cmの深さを有し、その平面形は船底形を呈している。火床面は掘り方を暗褐色土で埋め戻して構築している。

**出土遺物** 床面直上より、須恵器坏(1)が出土している。また覆土中より土製紡錘車(6)、ロクロ左回転の須恵器蓋(3)が出土している。

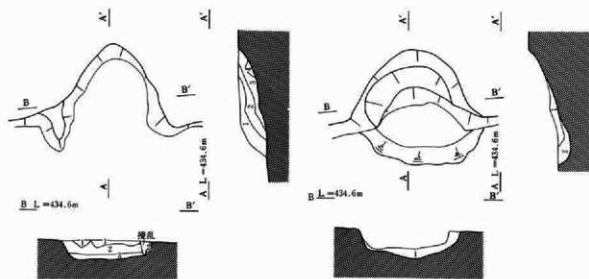


第118図 23号住居址床面実測図



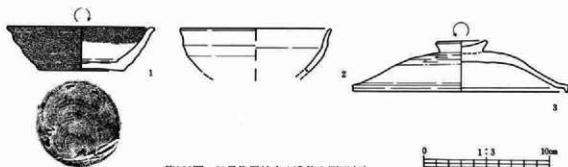


第119図 23号住居址掘り方実測図

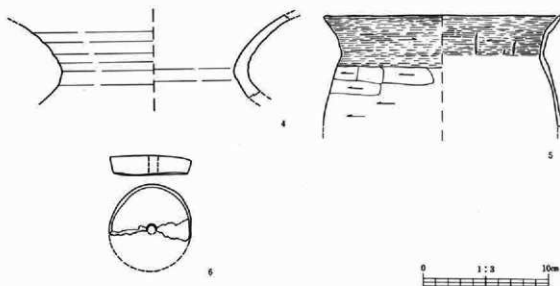


第120図 カマド火床面実測図

第121図 カマド掘り方実測図



第122図 23号住居址出土遺物実測図(1)



第123図 23号住居址出土遺物実測図(2)

表37 23号住居址出土遺物観察表

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④クワ回転 ⑤その他
1	環	① 11.8 ② 6.8 ③ 3.4	①細砂・粗砂含む。 ②外面黒色。内面灰褐色。断面灰白色 ③軟質	全体に小型で、底部に比して体部器壁厚い。体部ゆるく内湾し、口縁部は外反する。内底と体部の境、小さい段を有する。	底部回転糸切り無調整。	①口縁部1部欠失 ②床直 ③須恵 ④右 ⑤外底に焼成後のへら掻き「X」あり。
2	環	① (12.0)	①細砂・粗砂少量含む。②内外面灰色、断面灰白色。 ③軟質	体部はゆるく内湾し、口縁部は外反する。		①珩 ②フタ土 ③須恵 ④不明
3	蓋	① 17.2 ③ 4.1	①細砂含む。礫少量含む。酸化鉄粒含む。②口縁部外面灰色。他は灰白色③軟質	つまみは小さく、中央凹む。天井部はゆるく湾曲し下方に延びる。口縁部水平に湾曲した後縁をなして下方に折り曲げる。	天井部回転へら削り後つまみ貼り付時にゆるく回転ヨコナデ。天井部内面指ナデ。	①天井部突・口縁部珩 ②フタ土 ③須恵 ④左
4	壺		①細砂・粗砂含む。 ②器表灰色。断面中心部灰色、器表付近褐色③軟質	口縁部は大きく外反すると思われる。	肩部内面ナデ。	①珩 ②フタ土 ③須恵 ④不明
5	壺	① (18.9)	①細砂含む。酸化鉄、黒色鉱物粒含む。 ②にぶい褐色。	口縁部「コ」の字状を呈する。	口縁部ヨコナデ。器曲部外面強いヨコナデ。頸部内面へら成形後ナデ。肩部内面ナデ。	①珩 ②フタ土 ③土師
6	紡錘車	上面6.4・下面6.0・厚さ1.4cm。穿孔は焼成前。全面指頭による成形後ナゲ調整。成形時の布目圧痕下面に残る。				

## 24号住居址 (図124-128, 表38, 図版36・37・61)

位置 西側住居址群の南に位置する。28号住居址と重複し、南約25cmに25号住居址、東約2.5mに23号住居址がある。

平面形・規模 南壁は未発掘であるが、南北にやや長い隅丸方形を呈すると考えられる。規模は長軸不明・短軸3.7mを測る。方位はN-6°-Wを示す。28号住居址と重複し、その関係は28号住居址が古く、本住居址が新しい。

壁 確認壁高は北壁15cmを測る。

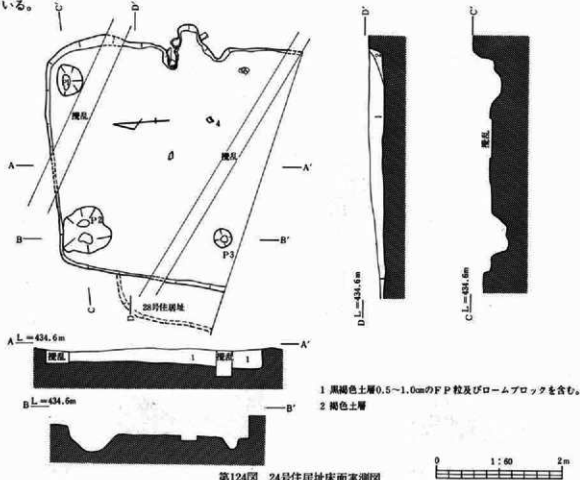
周溝 検出されない。

柱穴・ピット 床面においてピットは3ヶ所確認され、深さはP<sub>1</sub>13cm・P<sub>2</sub>24cm・P<sub>3</sub>18cmである。また掘り方面では5ヶ所確認され、深さはP<sub>4</sub>9cm・P<sub>5</sub>21cm・P<sub>6</sub>22cm・P<sub>7</sub>8cmで、P<sub>8</sub>はカマドの掘り方である。

掘り方・床 ピットを除き、全体に5cm前後掘り下げることができたが、土層から判断すると地床が使用中に汚れたものと考えたい。

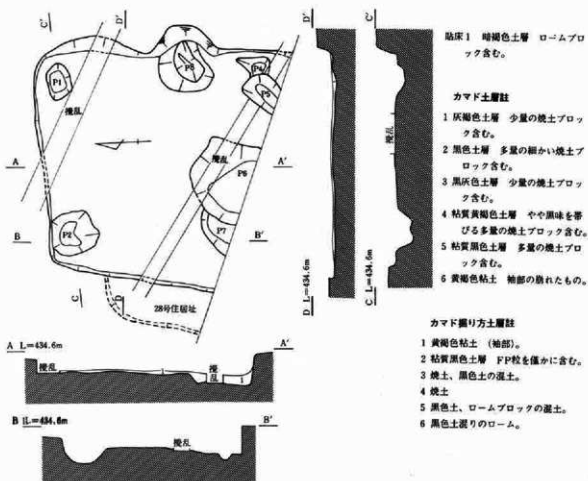
カマド 東壁中央、又はやや南寄りに位置すると考えられ、壁への掘り込みは32cmである。掘り方は深く、23cm掘り込んだ後に黒色土で埋め戻している。袖は掘り方を埋め戻した後に構築している。

出土遺物 覆土中よりロタロ左回転の須恵器坏(1)・「コ」の字状口縁の土師器小型甕(6)が出土している。

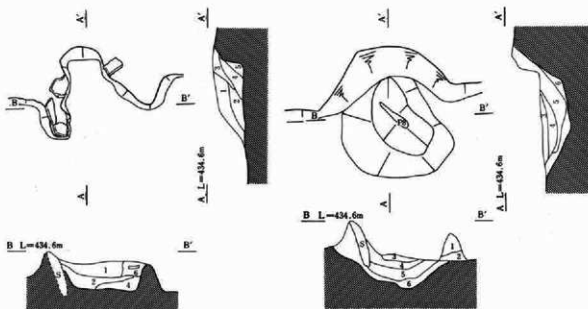


第124図 24号住居址床面実測図

第5章 検出された遺構と遺物



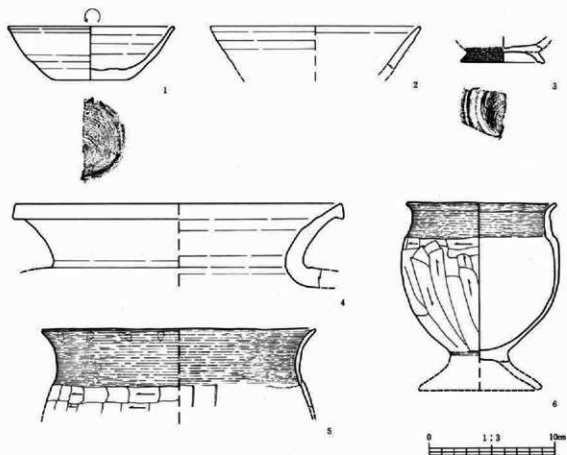
第125図 24号住居址掘り方実測図



第126図 カマド火床面実測図

第127図 カマド掘り方実測図

第1節 住居址・住居址出土遺物



第128図 24号住居址出土遺物実測図

表38 24号住居址出土遺物観察表

NO	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③焼割④フタ⑤回転 ⑥その他
1	杯	① (13.2) ② 6.0 ③ 4.2	①細砂含む。粗砂少量含む。②灰色、断面灰白色。③軟質	体部はゆるく内湾。体部中位で器厚を増し。口縁部小さく外反。	底部回転未切り無調整。	①1/4 ②フタ土 ③須臾 ④左
2	埴	① (17.0)	①粗砂含む。②にぶい褐色。③軟質。	口縁部直線的に延びる。		①1/4 ②フタ土 ③須臾 ④不明
3	埴	② (6.6)	①粗砂含む。②外面黒色。内・断面褐色 ③軟質	高台高く外方に開く。	底部未切り無調整。	①1/4 ②フタ土 ③須臾 ④不明
4	甕	① (26.2)	①細砂少量含む。②灰色 ③硬質	口縁部に外反し、端部下方に折り返す。	肩部内面ナデ。	①1/4 ②フタ土 ③須臾 ④不明
5	甕	① (21.8)	①細砂含む。黒色紅物粒含む。②褐色	口縁部ゆるい「コ」の字状を呈する。	口縁部ヨコナデ。肩部内面ヘラ成形後ナデ。	①1/4 ②カマド内 ③土師
6	甕	① 11.8	①細砂含む。黒色紅物粒含む。②赤褐色	高台を有する。口縁部「コ」の字状を呈する。	口縁部ヨコナデ。	①高台欠失。 ②フタ土 ③土師

25号住居址 (図129-133, 表39, 図版38・39・62)

**位置** 西側住居址群の南に位置する。約3m北東に19号住居址・約3.5m南東に23号住居址がある。また南には24号住居址が近接しており、その間隔は25cmである。

**平面形・規模** 南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.0m・短軸3.3mを測る。方位はN-12°-Eを示す。重複はない。

**壁** 確認壁高は北壁33cm・南壁15cmである。

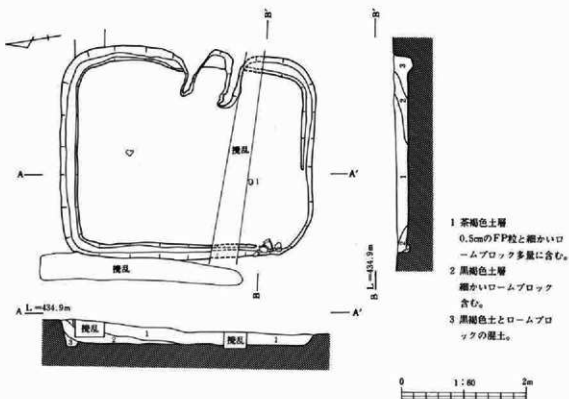
**周溝** 巾はカマド北側と南壁中央部が狭く、6cm-10cmで、他は20cm前後である。カマド部分と南西コーナーを除く他の部分に検出された。

**柱穴・ピット** 柱穴は検出されない。ピットは掘り方面において、北西と南東のコーナーにそれぞれ1ヶ所確認されている。深さはP<sub>1</sub>10cm・P<sub>2</sub>27cmである。

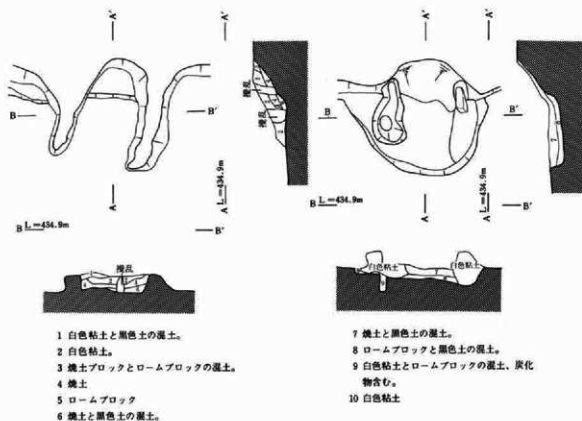
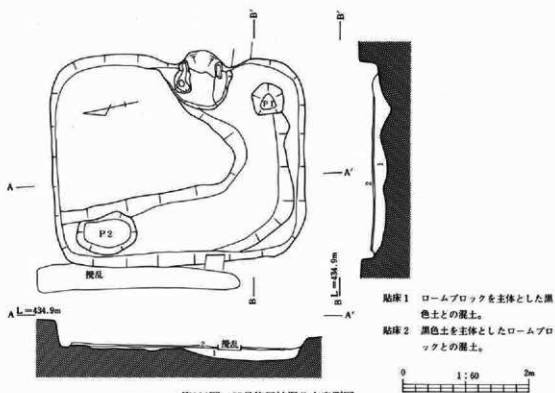
**掘り方・床** 掘り方は南と西の壁際が深く16cm・他の部分は5cm前後掘り込んでいる。底面は凹凸が多い。床面はゆるい凹凸があり、軟らかい状態であった。

**カマド** 東壁南寄りに壁を20cm掘り込んで設置する。袖はカマド掘り方内の溝状の落ち込みを基底とし、石を芯にして粘土を積み上げて構築している。カマドの掘り方は深さ11cmで、掘り方をロームと黒色土の混土で埋め戻し、火床面としている。

**出土遺物** 床面直上より、体部下端にヘラ削り痕を有する須恵器碗(1)、口縁部が「く」の字状を呈する土師器長胴甕(2)が出土している。



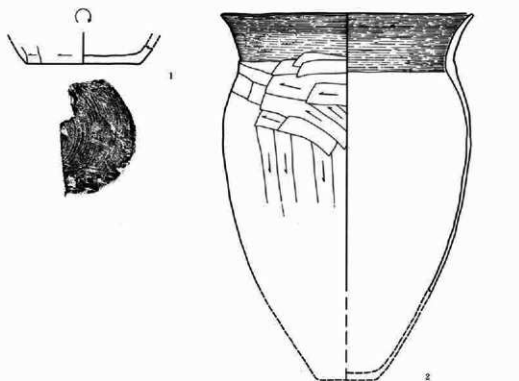
第129図 25号住居址床面実測図



第131図 カマド火床面実測図

第132図 カマド掘り方実測図

第5章 検出された遺構と遺物



第133図 25号住居址出土遺物実測図

表39 25号住居址出土遺物観察表

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種類④ヨコヨ回転 ⑤その他
1	埴	② (9.0)	①粗砂・糠少量含む。 酸化鉄・黒色灰物粒含む。 ②にぶい褐色 ③軟質		底部回転糸切り無調整。	①片 ②床直 ③須恵 ④右 ⑤酸化岩
2	壺	① 20.2	①細砂含む。酸化鉄粒少量含む。 ②口縁部赤褐色。胴部にぶい褐色。	口縁部外反するが、ゆるい「コ」の字状を呈する。最大径は胴部にある。	口縁部ヨコナゲ。口縁部中央外面雑なヨコナゲ。肩部外面横位、胴部上位斜め、胴部下位縦位ヘラ削り。内面指頭庄痕残る。	①片 ②床直、フク土 ③土師



## 26号住居址 (図134-138, 表40, 図版39・40・62-64)

位置 西側住居址群の西に位置する。西約5.5mに27号住居址・北東約1.5mに22号住居址がある。

平面形・規模 南北に長い長方形を呈する。規模は長軸4.7m・短軸3.8mを測る。方位はN-27°-Eを示す。重複はない。

壁 確認壁高は北壁30cm・南壁2cmを測る。壁の立ち上がり角度は急である。

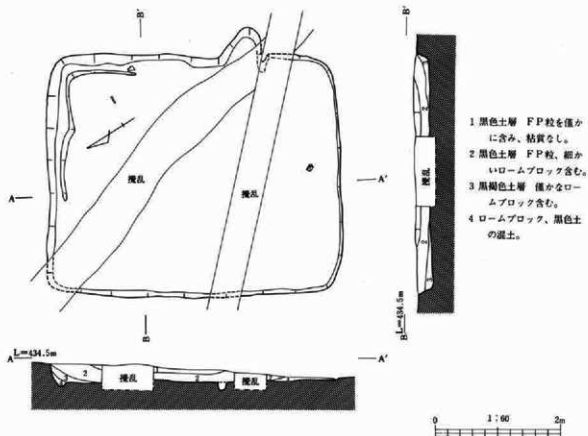
周溝 巾15cm-20cm・深さ5cm前後で、北東コーナー部のみ検出された。

柱穴・ピット 柱穴は検出されない。床面中央部に深さ15cmの小ピットが断面で検出された。掘り方面では5ヶ所確認されている。深さはP<sub>1</sub>24cm・P<sub>2</sub>13cm・P<sub>3</sub>14cm・P<sub>4</sub>41cm・P<sub>5</sub>18cmである。

掘り方・床 北東コーナー付近は地床であり、他は10cm-21cm掘り込んでいる。全体的には中央部がやや低い。

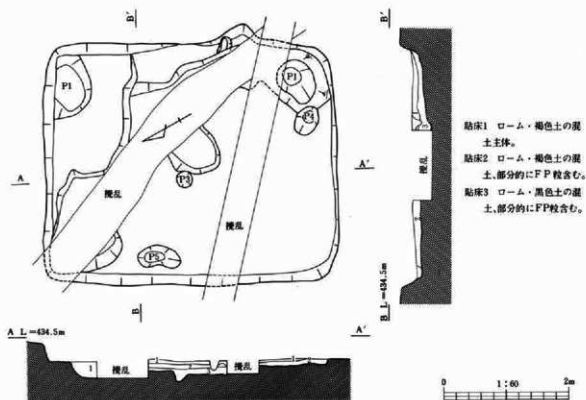
カマド 東壁南寄りに、壁を30cm掘り込んで設置する。遺存は悪く、約半分は擾乱により破壊されている。袖は残存していないが、袖の掘り方と思われる掘り込みが検出されている。おそらく袖は掘り方面より構築していたと考えられる。煙道部の傾斜はきつい。

出土遺物 掘り方より須恵器杯(2)・土師器甕(9)の底部が、床面より体部下端にヘラ削り痕を持つ須恵器碗(5)が出土している。また床面直上からは土師器杯(3)が、覆土からは鉄鏝・刻書を施した紡錘車(13・図版64)が出土している。(1)の須恵器杯は底部ヘラ切りであり、本住居址には伴わないと考えられる。



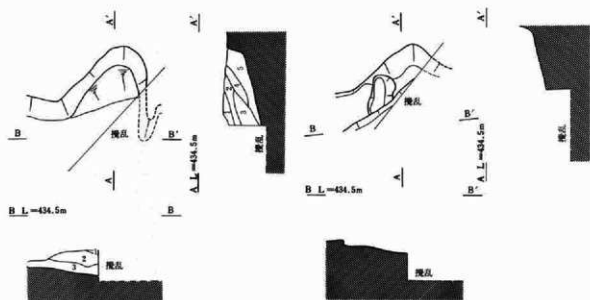
第134図 26号住居址床面実測図

第5章 検出された遺構と遺物



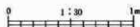
貼床1 ローム・褐色土の混  
 土主体。  
 貼床2 ローム・褐色土の混  
 土、部分的にFP粒含む。  
 貼床3 ローム・黒色土の混  
 土、部分的にFP粒含む。

第135図 26号住居址掘り方実測図



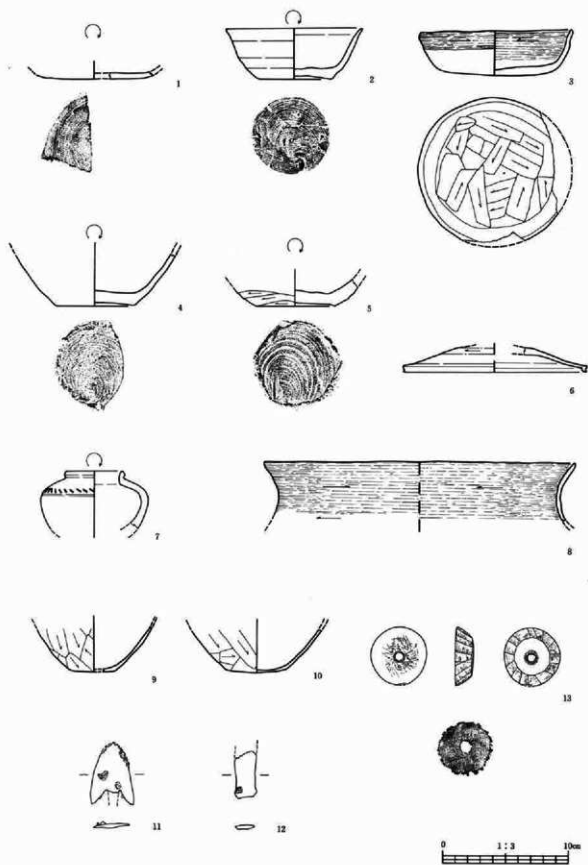
- 1 黄褐色土・黒色土の混土、FP粒含む。
- 2 黄褐色土層 FP粒及び焼土ブロック含む、粘性がややある。
- 3 黒褐色土層 FP粒及び焼土ブロック含む、粘性がある。
- 4 赤褐色土層 焼土粒多く含む。
- 5 茶褐色土層 焼土粒含む。

第136図 カマド火床面実測図



第137図 カマド掘り方実測図

第1節 住居址・住居址出土遺物



第138図 26号住居址出土遺物実測図

## 第5章 検出された遺構と遺物

表40 26号住居址出土遺物観察表

NO	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④マトロ回転 ⑤その他
1	杯	② 8.0	①細砂・粗砂含む。 ②外面灰色。内・断面 黒色。③軟質		底部回転ヘラ切り後周 縁回転ヘラ削り。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
2	杯	① 10.9 ② 6.1 ③ 4.0	①少量含む ②灰色 ③硬質	口径・底径小さい。 底部中央盛り上がる。 口縁部外反する。	底部回転糸切り無調 整。	①口縁部欠失 ②握り方 ③須恵 ④右
3	杯	① 11.8 ② 8.0 ③ 3.6	①細砂・粗砂含む ②にぶい褐色	底部は平底風。口縁部 小さく外湾する。口唇 部小さく内側に折り曲 げる。	底部ヘラ削り、内底ナ デ。口縁部ココナデ。	①口縁部1部欠失 ②床直、フタ土 ③土師
4	鉢	② 6.4	①細砂・硬質含む。 ②外面灰色。内断面に ぶい褐色 ③硬質	底部器壁厚く。中央盛り 上がる。体部直線的 に延びる。	底部回転糸切り無調 整。	①底部片・体部1 部。 ②フタ土 ③須恵 ④右
5	埴	② 6.4	①粗砂・硬少量含む。 ②外側にぶい褐色。内 面にぶい褐色。③軟質	器壁厚い。体部内湾す る。	底部回転糸切り無調 整。体部下端ヘラ削り。	①完 ②床直 ③須恵 ④右 ⑤酸化塩
6	蓋	① (14.6)	①細砂・粗砂含む。 ②灰色 ③硬質	天井部内湾し、体部は ゆるく外湾する。 口縁部横をなして折り 曲げる。口唇部外方に 小さく折り曲げる。	天井部回転ヘラ削り後 回転ココナデ。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④左
7	短頸壺	① (4.6)	①細砂・粗砂含む。 ②灰色 ③硬質	肩部ゆるく張る。 口縁部外面肥厚し、口 唇部は尖がる。	肩部にぶい凹線めぐら し、その上に5本単位 のタシ状工具の刺突文 をめぐらす。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
8	甕	① (24.8)	①細砂・粗砂含む。 ②褐色	口縁部ゆるい「コ」の 字状を呈する。	口縁部ココナデ。口縁 中位外面指痕圧痕残 る。	①片 ②フタ土 ③土師
9	甕	② (3.8)	①細砂含む。黒色鉱物 粒含む。②にぶい褐色	内底と体部下位は境目 がなく、内底は凹む。	体部・底部外面ヘラ削 り。体部・底部内面ナ デ。	①片 ②握り方 ③土師
10	甕	② 4.9	①細砂含む。黒色鉱物 粒含む。②にぶい褐色	内底と体部下位の境は 明確で内底は平坦であ る。	体部・底部外面ヘラ削 り。体部・底部内面ナ デ。	①片 ②フタ土 ③土師
11	鉄 鏝	有蓋の鉄鏝であり、進利を有する。蓋は欠失している。				
12	鉄製品	幅1.6cm・厚さ0.4cm。錆化ひどい。				
13	紡錘車	上面径4.7cm・下面径3.0cm・厚さ1.4cm・重さ43.4g。上面に刺罫あり。判読不可能。				

## 27号住居址 (図139-144, 表41, 図版41・42・62)

位置 住居址群西南端に位置し、東約5.5mに26号住居址がある。

平面形・規模 西半は未発掘であり、東壁は攪乱により破壊されているため平面形・規模・方位は不明。

壁 確認壁高は、北壁17cmを測る。南壁は攪乱により破壊されている。

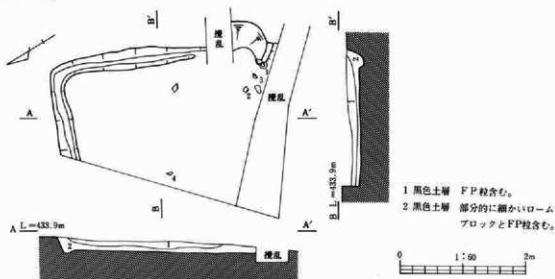
周溝 巾10cm深さ5cmで、カマド北側より北壁まで検出されている。

柱穴・ピット 柱穴は検出されない。掘り方面において深さ13cmの落ち込み(P<sub>1</sub>)が確認されている。

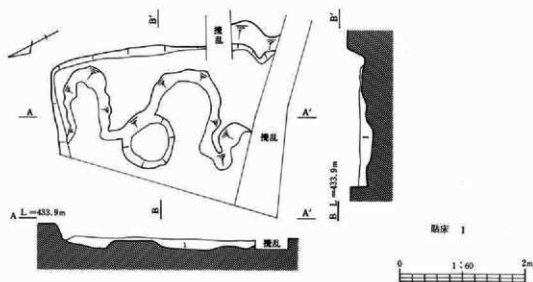
掘り方・床 掘り方は4cm~13cm掘り込む。底面は凹凸が多く、東側が浅く中央が深い。浅い部分・深い部分共に南にゆるく傾斜している。

カマド カマドは遺存が悪く、北側約半分は攪乱により破壊されている。

出土遺物 掘り方より土師器壺(5)が出土しており、床面からは静上糸切り痕を有する須恵器杯(1)が出土している。

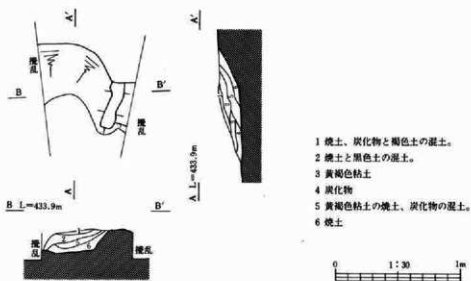


第139図 27号住居址床面実測図

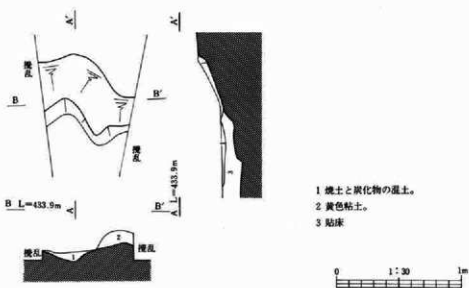


第140図 27号住居址掘り方実測図

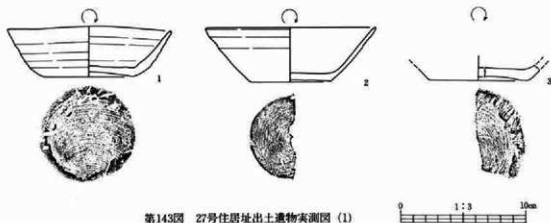
第5章 検出された遺構と遺物



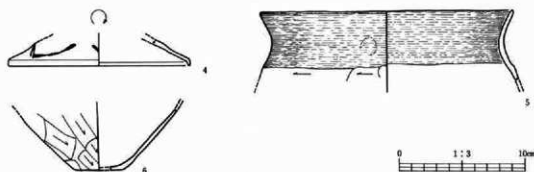
第141図 カマド火床面実測図



第142図 カマド掘り方実測図



第143図 27号住居址出土遺物実測図(1)



第144図 27号住居址出土遺物実測図(2)

表4I 27号住居址出土遺物観察表

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高 ( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロタロ回転 ⑤その他
1	坏	① 13.0~12.0 ② 7.5~7.0 ③ 4.0	①細砂含む。黒色紅物粒含む。 ②灰色 ③硬質	底部中央盛り上がる。体部・口縁部直線的に延びる。	底部糸切り無調整。	①完 ②床面 ③須恵 ④右 ⑤焼け歪みあり。
2	坏	① (13.5) ② ( 6.5) ③ 4.2	①粗砂・糖少量含む。 ②外面灰一灰白色。内・断面灰白色 ③軟質	体部・口縁部直線的に外方に開く。	底部回転糸切り無調整。	①片 ②床直 ③須恵 ④右
3	埴	② (9.0)	①細砂・糖含む。 ②暗褐色 ③軟質		底部回転糸切り無調整。 底部周縁圧痕多い。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
4	蓋	① (14.5)	①粗砂少量含む。黒色紅物粒含む。 ②灰色 ③硬質	体部ゆるく外反する。口縁部下方に折り曲げる。口唇部外反する。		①片 ②フタ土 ③須恵 ④右
5	甕	① (20.5)	①細砂含む。黒色紅物粒含む。 ②暗褐色	口縁部外反する。	口縁部コナデ。口縁部中位外面粗いコナデ。	①片 ②掘り方 ③土師
6	甕	② (3.6)	①細砂含む。 ②に、い、橙色		底部・体部下位外面へラ削り。	①片 ②フタ土 ③土師

## 28号住居址 (図145)

位置 西側住居址群の南端に位置し24号住居址と重複する。約2m北に25号住居址がある。

平面形・規模 平面形・規模・方位不明。24号住居址と重複し、その関係は本住居址が古い。

壁 確認壁高は北壁5cmを測り、重複部分は周溝のみ残存していた。

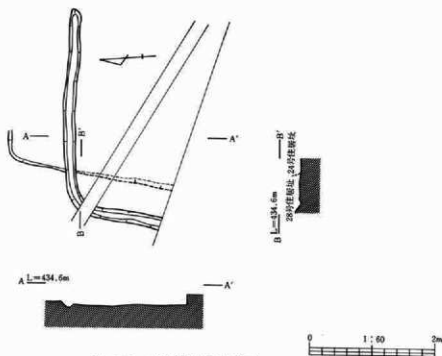
柱穴・ピット 検出されない。

周溝 重複部分は巾15cm・深さ1cm、他は巾15cm・深さ5cmである。

掘り方・床 残存部分は地床と考えられる。

カマド 24号住居址により破壊されていると考えられる。

出土遺物 出土していない。



第145図 28号住居址床面実測図

29号住居址 (図146～150, 表42, 図版42・43)

**位置** 東側住居址群のやや北寄りに位置する。約7m北に配石遺構・約7m南西に6号住居址・約7m南に3号住居址がある。また約70m北西には第3ピット群がある。

**平面形・規模** 南北に長軸を持つ長方形を呈する。規模は長軸5.4m・短軸4.0mを測る。方位はN-9.5°-Wを示す。重複はない。傾斜のきつい場所に位置し、南壁が削平されているため、平面形は台形に近い形態となっている。

**壁** 確認壁高は北壁30cm・南壁は残存していない。壁の立ち上がり角度は直角に近い。残存している各壁共に立ち上がり角度はほぼ等しい。

**周溝** 巾10cm～16cm・深さ4cm～10cmでカマド北側より西壁まで確認された。

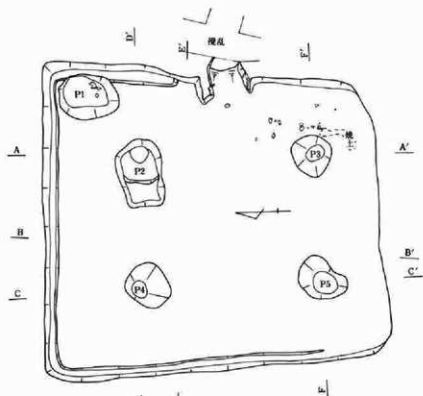
**柱穴・ピット** 支柱穴は4本確認された。柱穴はいずれも住居址中央に向ってゆるく傾斜している。また北東コーナーには、深さ26cmの貯蔵穴(P<sub>1</sub>)がある。掘り方面では3ヶ所のピットが確認され、深さはP<sub>5</sub>42cm・P<sub>6</sub>74cm・P<sub>7</sub>23cmである。

**掘り方・床** 北半は地床で、南半は掘り方を有する。深さは深い部分で23cmである。床面は硬くつきかためられており、南端は若干削平されている。

**カマド** 東壁中央やや南寄りに壁を若干掘り込んで設置する。煙道部は攪乱により破壊されている。袖は掘り方面より構築し、掘り方を黒色土で埋め戻して火床面を設けている。

**出土遺物** 遺物量は少なく、図示できたものは3点のみである。カマド内より土師器坏(3)・覆土中より回転ヘラ切りの須恵器坏(1)が出土している。なお貯蔵穴の底より(3)と同様の土師器坏の細片が出土している。





B L=438.3m

A L=438.4m

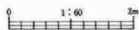
C L=438.4m

1 暗褐色土層 FP粒少量含む。

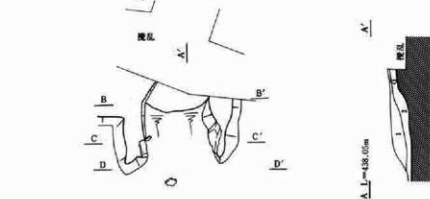
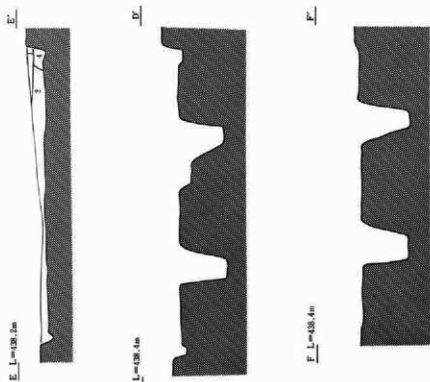
2 暗褐色土層 FP粒多量に含む、ローム粒少量含む。

3 灰褐色土層 ローム粒含む、ロームブロック少量含む。

4 黄褐色土層 ローム中に、暗褐色土含む。



第146図 29号住居址床面実測図

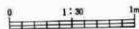


B L=438.05m

C L=438.05m

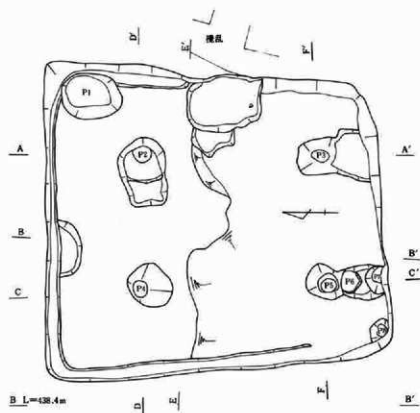
1 所褐色土層

2 所褐色土層 焼土粒含む、しまりない。



第147図 カマド火床面実測図





B L=438.4m



A L=438.4m

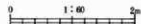


C L=438.4m

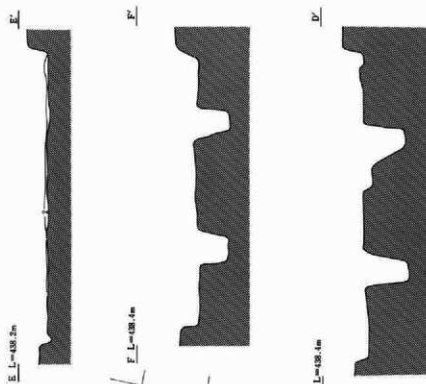


陥床1 ロームブロック黒色土の混土でロームブロック主体、黒色土の中にF P粒含み、つぎ固められている。  
 陥床2 褐色土、黒色土の混土、黒色土中にF P含む。

陥床3 大きなロームブロック、黒色土の混土、ロームブロック主体。



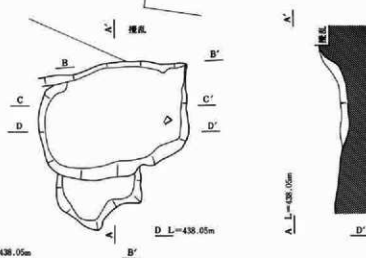
第148図 29号住居址掘り方丈測図



E L=438.2m

F L=438.4m

D L=438.4m



B L=438.05m

D L=438.05m

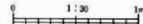
A L=438.05m

C L=438.05m

C'

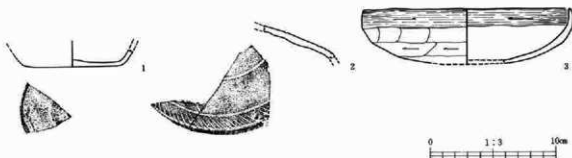


1 黒褐色土層 ローム粒含む。  
 2 粘土  
 3 焼土



第149図 カマド掘り方丈測図





第150図 29号住居址出土遺物実測図

表42 29号住居址出土遺物観察表

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④回転 ⑤その他
1	杯	②(8.0)	①細砂少量含む。 ②灰色。断面灰白色。 ③硬質	底部中央器壁厚くなる。	底部回転ヘラ切り後ナゲ調整。	①4% ②フタ土 ③須恵 ④不明
2	杯	①(16.7)	①細砂含む。 ②にぶい褐色	口縁部内両気味に立ち上がる。体部器厚増し、斜め上方に立ち上がる。底部ゆるい丸底。	口縁部ヨコナゲ。体部ヘラ削り後ナゲ。底部不定方向ヘラ削り後周縁ヘラ削り。内底ナゲ。	①4% ②カマド内 ③土師
3	壺		①細砂含む。黒色紅物粒吹き出す。 ②灰色 ③硬質	肩部張る。	肩部下位にぶい凹線めぐる。凹線間に斜交文をめぐらす。肩部上位にぶい凹線あり。	①肩部1部 ②カマド内・3柱フタ土 ③須恵 ④不明

## 30号住居址 (図151-155, 表43, 図版44・45・62)

**位置** 住居址群の東端に位置する。約3.5m東には沢があり、遺跡の東端と考えられる。本遺跡中最も他の住居址と離れており、最も近い30号住居址でも13m離れている。

**平面形・規模** 南北にやや長い方形を呈する。規模は長軸4.1m・短軸3.7mを測る。方位はN-17°-Wを示す。重複はない。

**壁** 確認壁高は北壁25cm・南壁7cmで、壁の立ち上がり角度はゆるい。

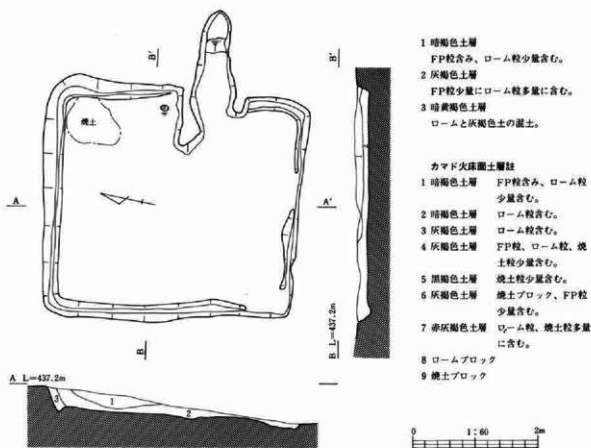
**周溝** 巾17cm・深さ5cm～8cmでカマド部分・南壁中央と南西コーナーを除く、他の部分に検出された。

**柱穴・ピット** 柱穴は検出されない。掘り方面においてピットは8ヶ所確認されている。深さはP<sub>1</sub>15cm・P<sub>2</sub>26cm・P<sub>3</sub>19cm・P<sub>4</sub>12cm・P<sub>5</sub>20cm・P<sub>6</sub>8cmである。なおP<sub>2</sub>は掘り方面において確認されたものだが、貯蔵穴様ピットの可能性が高い。P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>はカマドに付随するもので、深さは13cm・10cmである。

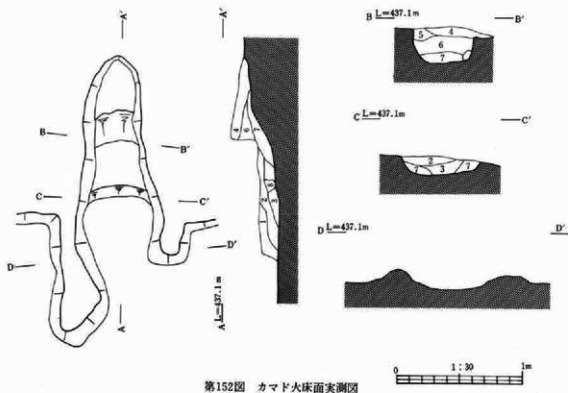
**掘り方・床** 北西コーナーと南東コーナーを結ぶ対角線が浅く、他の部分を深く掘り込んでいる。

**カマド** 東壁南寄りに壁を130cm掘り込んで設置する。左側袖は床面上にロームを貼り付けて構築している。

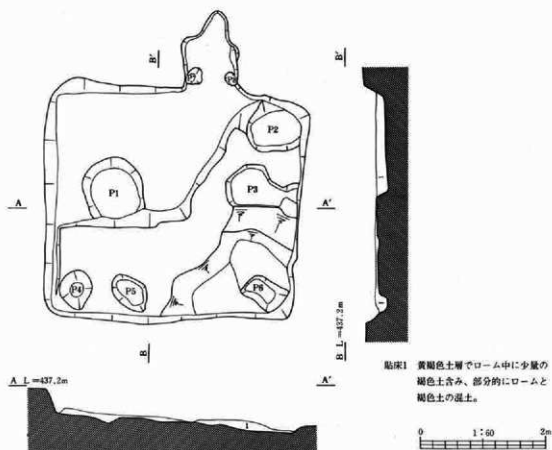
**出土遺物** 掘り方より須恵器杯(2・3)・土師器壺(10)が、床面より須恵器杯(4)が出土している。



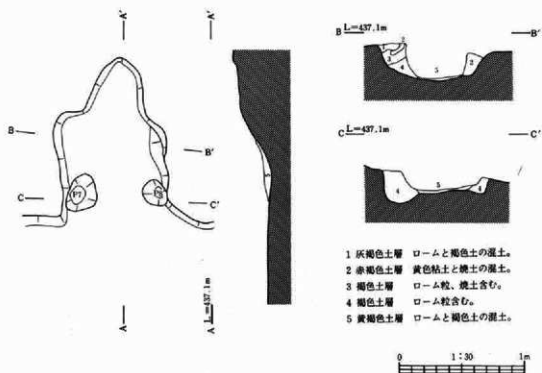
第151図 30号住居址床面実測図



第152図 カマド火床面実測図

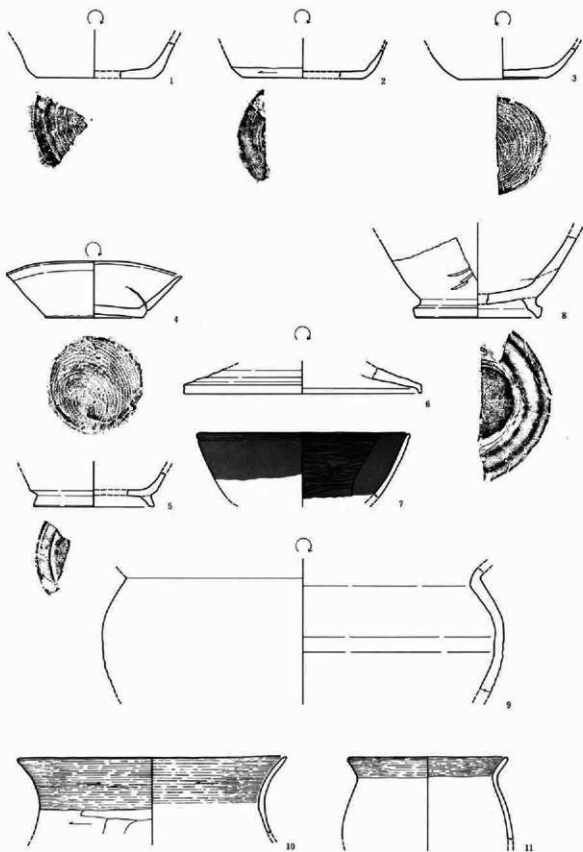


第153回 30号住居址掘り方実測図



第154回 カマド掘り方実測図

第5章 検出された遺構と遺物



第155図 30号住居址出土遺物実測図





表43 30号住居址出土遺物観察表

NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③機能④ロコロ回転 ⑤その他
1	埴	② (9.6)	①粗砂含む・酸化鉄粒含む。 ②灰白色 ③軟質	器壁厚く、体部は直線的に延びる。	底部全面・体部下端回転ヘラ削り。	①写 ②フタ土 ③肌想 ④右
2	坏	② (9.8)	①細砂含む ②灰色 ③軟質		底部全面・体部下端回転ヘラ削り。	①写 ②廻り方 ③肌想 ④右
3	埴	② (7.7)	①粗砂・糠含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色。断面雑灰色 ③硬質	体部内湾し広く外方に延びる。	底部回転糸切り無調整。	①写 ②廻り方 ③肌想 ④左
4	坏	① 14.0~10.8 ② 7.4	①粗砂・糠少量含む。 ②灰色 ③硬質	体部は直線的に延びる。口縁部ゆるくつまみ、器壁をうすくする。焼け歪みひどい。	底部回転糸切り無調整。	①完 ②表面 ③肌想 ④右
5	坏	② (9.6)	①細砂含む。 ②灰色 ③硬質	高台は高く外方に延びる。	高台貼り付け時の回転ココナデにより切り難し痕ナゲ消す。	①写 ②フタ土 ③肌想 ④不明
6	蓋	① (19.0)	①細砂含む。 ②灰黄褐色 ③軟質	天井部器壁厚い。口縁部折り曲げる。		①写 ②フタ土 ③肌想 ④不明
7	埴	① (17.0)	①細砂含む。 ②内面・口縁部外面黒色。体部外面・断面明褐色。	体部・口縁部ゆるく内湾する。口縁部外面にぶい沈線一糸めぐる。	内外面粗い横位ヘラミガキ。	①写 ②フタ土 ③土師
8	台付壺	② (10.0)	①細砂・粗砂含む。 ②褐灰色 ③硬質	高台中央で外方に屈曲し、臺付は尖がる。	底部切り難し技法不明。内底ナゲ。	①底部写。体部1部 ②フタ土 ③肌想 ④不明 ⑤刻書? 2ヶ所あり。判読不可。
9	鉢		①細砂少量含む。 ②灰色 ③硬質	口縁部「く」の字状に外反すると思われる。肩部はあまり張らない。	外面カキ目状の成形痕残る。	①写 ②フタ土 ③肌想 ④不明
10	壺	① (21.4)	①細砂含む。黒色紅物粒含む。②にぶい褐色	口縁部ゆるい「コ」の字状を呈する。	口縁部ココナデ。口縁部外面中位ココナデ粗く、成形痕残る。	①写 ②廻り方 ③土師
11	壺	① (12.8)	①細砂含む。 ②外・断面赤褐色。内面黒褐色。	口縁部「く」の字状を呈する。肩部は張らず、最大径は胴部中位一下位にある。	残存部内外面共にココナデ。	①写 ②フタ土 ③土師 ④肩部外面器表剥離。ココロ使用か?

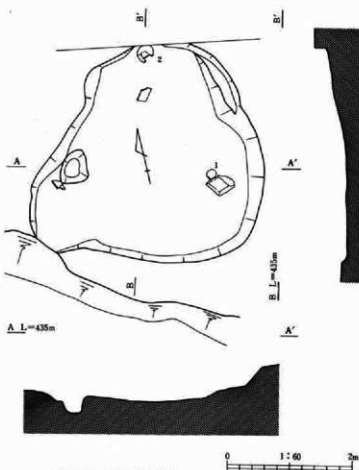
第2節 その他の遺構

1号土壌 (図156・157, 表44, 図版47・62)

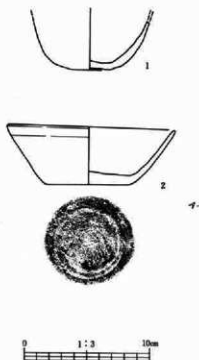
位置 住居址群より約60m西に位置し、その間に遺構は検出されていない。地山は水成土壌で、湧水が多い。

平面形・規模 不整形円で規模は長軸1.8m・短軸1.5~1.8mを測る。

出土遺物 覆土中より器形不明の土師器(1)と須恵器碗(2)が出土している。



第156図 1号土壌実測図



第157図 1号土壌出土遺物実測図

表44 1号土壌出土遺物観察表

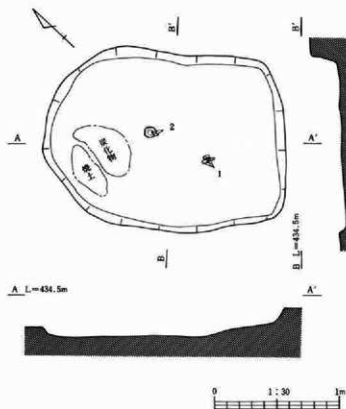
NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種類④ロケツト回転 ⑤その他
1	不明	② 3.7	①細砂含む。酸化鉄粒・黒色炭粒を含む。 ②にぶい橙色	底部平底気味で、体部内湾する。	内外面粗いナデ。内底成形痕残り、凹凸激しい。	①完 ②フタ土 ③土師 ⑤外底砂付着
2	碗	① 13.4 ② 6.7 ③ 4.7	①細砂含む。酸化鉄粒を含む。②にぶい橙色 ③軟質	底部中央器壁厚い。体部直線的に延びる。口縁部つまむ。	器壁摩滅のため底部切り難し技法不明。	①口縁部1部欠失 ②フタ土 ③須恵 ④不明 ⑤器壁摩滅

## 2号土墳 (図158・159, 表45, 図版47・48・62)

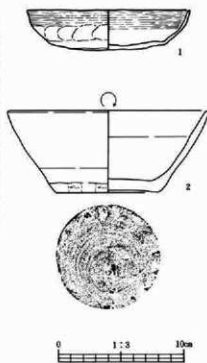
**位置** 住居址群の約52m西に位置し、住居址群との間に遺構は検出されていない。約7.5m北西に1号土墳がある。地山は水成土壌であり、湧水がある。

**平面形・規模** 平面形は、ほぼ東西方向に長軸を持つ隅九五角形に近い形状を呈している。規模は長軸1.94m・短軸1.4mを測る。

**出土遺物** 覆土中より体部下端ヘラ削りの須恵器鉢(2)と土師器坏(1)が出土している。



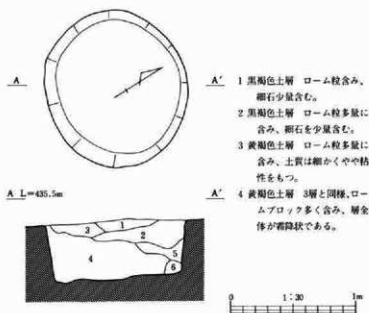
第158図 2号土墳実測図



第159図 2号土墳出土遺物実測図

表45 2号土墳出土遺物観察表

NO	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④回転 ⑤その他
1	坏	① (13.0) ③ ( 3.1)	①細砂含む。黒色紅物粒含む。 ②褐色	体部起伏多い。 底部平底気味。	口縁部コナナデ。体部外面指爪圧痕残る。底部周縁指押えにより窪む。底部ヘラ削り。	①片 ②フタ土 ③土師 ④器壁摩滅
2	鉢	① (16.0) ② 8.2 ③ 6.4	①粗砂・硬少量含む。酸化鉄粒含む。 ②にぶい褐色 ③軟質	体部器壁うすく、口縁部に至り、厚味を増す。体部外湾、口縁部内湾気味。	底部回転車切り無調整。体部下端ヘラ削りの可能性高い。	①底部完。口縁部1部。②フタ土 ③須恵 ④右 ⑤器壁摩滅。酸化鉄。



第160図 3号土壇実測図

3号土壇 (図160)

**位置** 西側住居址群の中央に位置する。約1m北西に18号住居址・約3.5m南に19号住居址がある。

**平面形・規模** 平面形は円形を呈し、直径1.25~1.14mである。

**壁・底面** 壁の立ち上がり角度は90°に近く急である。壁高は45cm前後で、底面は粘土層上面に達しており、平坦である。

**出土遺物** 出土していない。

井戸状遺構 (図161)

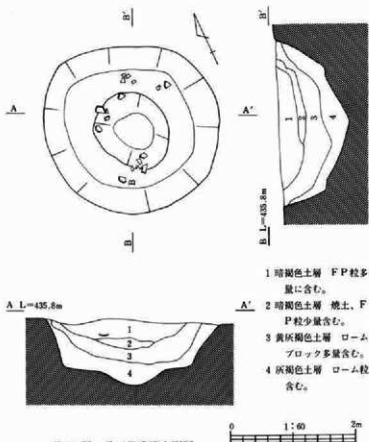
~163, 表46・47, 図版45・46・62・63)

**位置** 東側住居址群の南に位置し、5号住居址との距離は50cmと近接する。約4m北に3号住居址・約9m西に14号住居址がある。

**平面形・規模** 平面形は隅丸方形気味の円形を呈している。規模は東西2.8m・南北2.65mを測る。

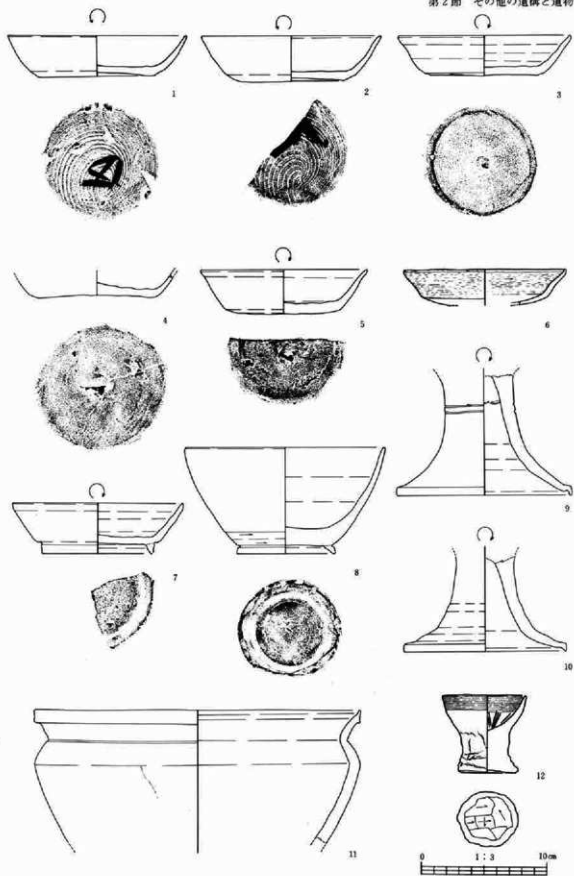
**壁・底面** 壁の立ち上がり角度は比較的ゆるい。底面中央は円形に23cm程深くなっており、この部分はローム層下の粘土層に達している。

**出土遺物** 覆土中より墨書土器が2点出土しており、1は「丑」と判読できるが2は不明である。また覆土中出土の土器片中には3号住居址出土の須恵器蓋(26)と14号住居址出土の円面甕(14)と接合したものがある。(12)の小型手づくね土器は本遺構に伴わない可能性が高く、(14)の小型甕は伴うか否か不明である。

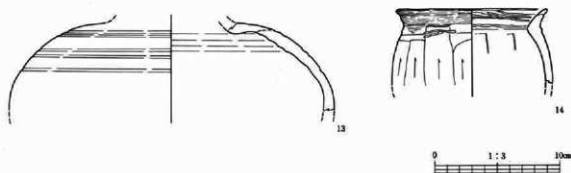


第161図 井戸状遺構実測図

- 1 暗褐色土層 F P粒多量に含む。
- 2 暗褐色土層 焼土、F P粒少量含む。
- 3 黄灰褐色土層 ロームブロック多量含む。
- 4 灰褐色土層 ローム粒含む。



第162図 井戸状遺構出土遺物実測図(1)



第163図 井戸状遺構出土遺物実測図(2)

表46 井戸状遺構出土遺物観察表(1)

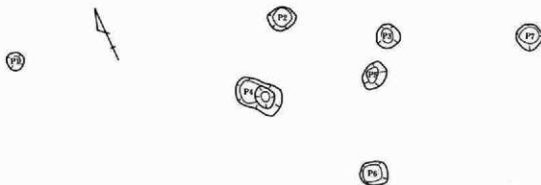
NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④マロ回転 ⑤その他
1	坏 (墨書)	① 14.4 ② 9.0 ③ 3.2	①粗砂・硬少量含む。 酸化鉄粒含む。 ②灰黄色 ③軟質	底部中央盛り上がる。 体部内湾する。	底部回転糸切り無調整。	①残存率 ②フナ土 ③須恵 ④左 ⑤酸化焙。墨書「丑」
2	坏 (墨書)	① (14.4) ② ( 8.4) ③ 3.6	①粗砂・硬少量含む。 酸化鉄粒含む。 ②灰黄色 ③軟質	底部中央器腔うすい。 体部内湾し、口縁部は小さく外反する。	底部回転糸切り無調整。	①写 ②フナ土 ③須恵 ④左 ⑤酸化焙。黒書判読不可能
3	坏	① (13.8) ② 8.5 ③ 3.1	①粗砂含む。酸化鉄粒含む。②灰色 ③軟質	体部直線的に延びる。 口縁部外反する。	底部全面回転ヘラ削り。	①写 ②フナ土 ③須恵 ④不明
4	鉢	② 9.4	①細砂含む。酸化鉄粒含む。②灰黄色 ③軟質	内底凹凸多い。	底部回転ヘラ切り後全面回転コナダ。内底の調整やや粗い。	①完 ②フナ土 ③須恵 ④不明
5	坏	① (13.4) ② 7.4 ③ 3.4	①細砂含む。酸化鉄粒含む。②灰色 ③硬質	体部直線的に延びる。 口縁部外反する。	底部回転ヘラ切り後全面粗い回転コナダ。	①底部写。口縁部写 ②フナ土 ③須恵 ④右
6	坏	① (13.0)	①細砂含む。酸化鉄粒・黒色鉱物粒少量含む。②にぶい褐色。 ③硬質	口縁部後をなして外反する。口器部内側に丸く折り返す。	口縁部コナダ。底部ヘラ削り。	①写 ②フナ土 ③土師
7	坏	① (13.7) ② ( 9.0) ③ 3.9	①細砂・粗砂多量に含む。酸化鉄粒含む。 ②灰色 ③硬質	高台断面三角形、体部直線的に延びる。口縁部小さく上方につまみ上げる。	底部全面回転ヘラ削り後高台貼り付け。	①写 ②フナ土 ③須恵 ④右
8	鉢	① 16.0 ② 7.9 ③ 8.5	①粗砂・硬少量含む。酸化鉄粒少量含む。 ②にぶい褐色 ③軟質	高台薄く、外方に張る。底部器壁厚い。体部直線的に延びる。口縁部小さく内湾する。	底部全面・体部下端回転ヘラ削り、後粗い回転コナダ。	①底部完 ②フナ土 ③須恵 ④左

表47 井戸状遺構出土遺物観察表(2)

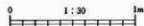
NO.	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種別④ロケロ回転 ⑤その他
9	高 坏	② (14.0)	①細砂含む。酸化鉄粒 少量含む。 ②にぶい褐色 ③軟質	胴部短かく、袖部は開く。胴端部は横をなして下方に折り曲げる。にぶい凹線2条めぐる。	胴部上端には坏部の接合を強くするため、カキ目状の条線を入れる。	①残存率 ②出土部位 ③種別④ロケロ回転 ⑤その他
10	高 坏	② (13.0)	①細砂含む。酸化鉄粒 少量含む。②灰色。断面 灰白色	袖部はかなり広く開く。端部はにぶい横をなして下方に折り曲げる。		①胴部片。袖部片 ②フタ土。3柱フタ 土 ③須恵 ④右
11	鉢	① (26.2)	①粗砂・礫少量含む。 ②灰色・断面セピア色 ③硬質	口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は下方に少さく垂下する。	胴部横をなして屈曲する。口唇部内面押さえる。	①片 ②フタ土 ③須恵 ④不明
12	高 坏	① (6.7) ② 4.8 ③ 6.1	①細砂含む。 ②にぶい褐色	坏部は深く、内底は深む。胴部下位は外方に広がる。	内底へラ成形後ナデ。口縁部ヨコナデ。坏部・胴部手づくね。	①胴部完。坏部1部 ②フタ土 ③土師
13	長頸瓶		①粗砂・礫少量含む。 ②灰色 ③硬質	肩部ゆるく下方に屈曲する。	ロケロ目深い。	①片 ②床面直上 ③須恵 ④不明
14	甕	① (12.0)	①粗砂含む。 ②外面褐色。断面にぶい褐色。内面黒色	口縁部「く」の字状を呈する。口唇部外反する。	口縁部ヨコナデ。肩部外面縦位へラ削り。内面へラ成形後ナデ。	①片 ②フタ土 ③土師

## 第1ピット群 (第164図)

発掘区西端に位置し、P<sub>4</sub>と1号土墳は約1.5mの距離がある。地山は水成土壌で、発掘時には湧水が多く見られた。P<sub>1</sub>は他のピットとかなり離れているため、同一の群に含めないほうが良いかも知れない。北側は発掘区外であり、北方への広がりは不明である。深さはP<sub>1</sub>18.0cm・P<sub>2</sub>40.5cm・P<sub>3</sub>24.0cm・P<sub>4</sub>23.5cm・P<sub>5</sub>22.0cm・P<sub>6</sub>43.4cm・P<sub>7</sub>31.5cmを測る。出土遺物はなく、時期は不明。

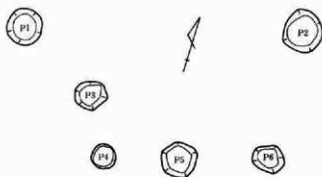


第164図 第1ピット群実測図



第2ピット群 (第165図・図版50)

住居址群の西端中央、21号住居址の東約1.2mに位置する。地山は風成ロームである。北側は道路下で未発掘のため、全体は不明である。深さはP<sub>1</sub>13.0cm・P<sub>2</sub>21.0cm・P<sub>3</sub>16.0cm・P<sub>4</sub>11.0cm・P<sub>5</sub>16.0cm・P<sub>6</sub>21.0cmを測る。出土遺物はなく、時期は不明。

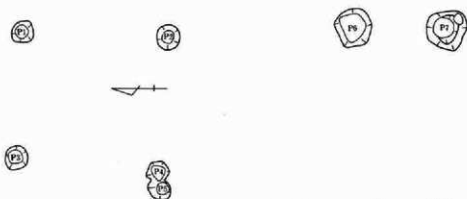


第165図 第2ピット群実測図

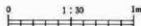


第3ピット群 (第166図)

住居址群の北東、29号住居址の西側に近接して位置する。29号住居址内にはピット群に属すると考えられるピットは検出されていない。深さはP<sub>1</sub>33.0cm・P<sub>2</sub>22.0cm・P<sub>3</sub>30.0cm・P<sub>4</sub>30.5cm・P<sub>5</sub>26.0cm・P<sub>6</sub>34.0cmを測る。出土遺物はなく、29号住居址との重複もないため、時期は不明。



第166図 第3ピット群実測図

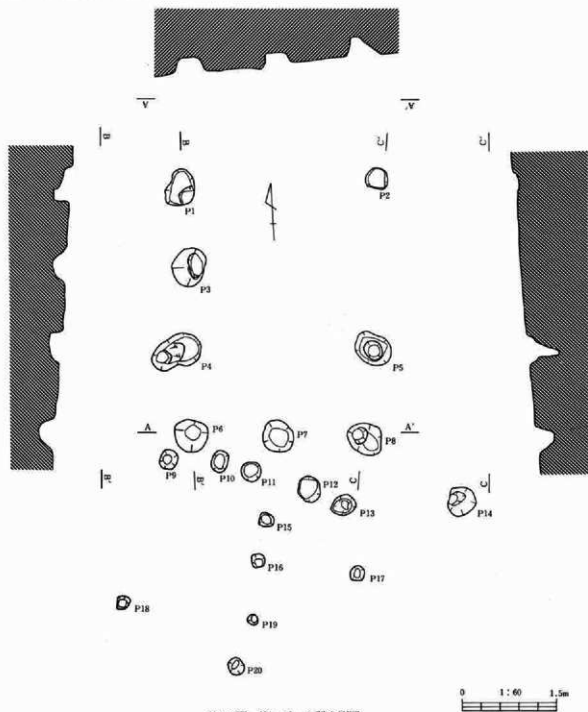


第4ピット群 (第167図・図版50)

住居址群の中央南、9号住居址の西に位置する。P<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>はP<sub>9</sub>～P<sub>21</sub>に比して径が大きく、前者と後者



では埋土が異っており、これらの間には時期差があると考えられる。P<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>の埋土はF P粒を含む黒色土であり、住居址のそれに近いものである。またP<sub>3</sub>からは図示できない程の細片であるが、国分期に属する須恵器片が2点出土している。深さはP<sub>1</sub>23.0cm・P<sub>2</sub>10.0cm・P<sub>3</sub>47.0cm・P<sub>4</sub>63.0cm・P<sub>5</sub>65.0cm・P<sub>6</sub>32.0cm・P<sub>7</sub>21.0cm・P<sub>8</sub>48.0cm・P<sub>9</sub>22.0cm・P<sub>10</sub>43.0cm・P<sub>11</sub>12.0cm・P<sub>12</sub>38.0cm・P<sub>13</sub>25.0cm・P<sub>14</sub>37.0cm・P<sub>15</sub>51.0cm・P<sub>16</sub>10.0cm・P<sub>17</sub>22.5cm・P<sub>18</sub>21.5cm・P<sub>19</sub>16.5cm・P<sub>20</sub>15.5cm・P<sub>21</sub>46.0cmを測る。P<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>は国分期に属し、不揃いであるが掘立柱建物址を想定してもよいかもしれない。P<sub>9</sub>～P<sub>12</sub>は出土遺物がなく、時期は不明。



第167図 第4ピット群実測図

配石遺構 (図168-170・図版48・49)

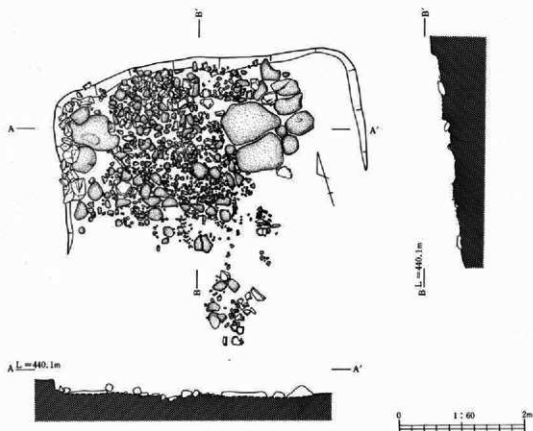
位置 発掘区北東に位置し、約7.5m西に10号住居址、約8m南に29号住居址がある。

平面形・規模 傾斜地に位置するため、南が削平されており平面形・規模は不明。残存する北壁は4m80cm・東壁は1m90cm・西壁は2m90cmを測る。

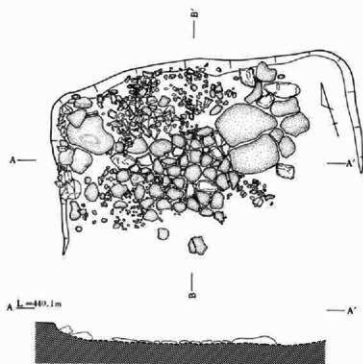
配石 配石確認時の状態(図168)は東西に大きな扁平の河原石を配し、その間に玉砂利を敷設している。また北壁には割石が分布している。玉砂利下には20cm-30cmの比較的大きさのそろった扁平な河原石を敷設している。石の上面のレベルはほぼ一定している(図169)。

掘り方 扁平な河原石下の掘り方は平坦(図170)であるが、割石下は40cm掘り込まれている。割石は河原石や玉砂利と異なり、敷設された様子もないため、この部分は攪乱であろう。

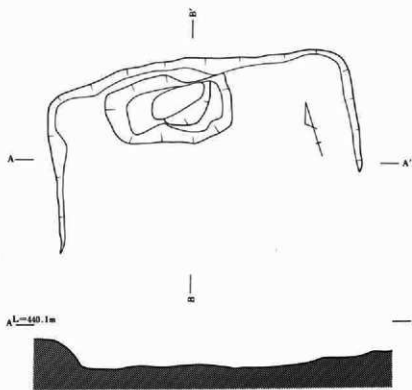
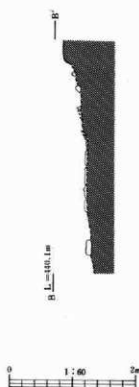
出土遺物 遺物の出土はなく時期・性格は不明。



第168図 配石遺構実測図(玉砂利除去前)



第169図 配石遺構実測圖(玉砂利除去後)



第170図 配石遺構実測図(配石除去後)



## 入道塚（上毛古墳総覧薄根村第9号古墳）

発掘区北東の傾斜変換線高位に『上毛古墳総覧』記載の「薄根村第9号古墳・入道塚」にあたる地番があり、約100㎡発掘区内に入っていた。この付近一帯は、現状では平坦になっていたが、発掘区内の部分は、付近が柔畑であるのに対して荒地のままになっており、古墳が削平された可能性が考えられた。この部分は発掘区が10×10m程の区域であり、現状で墳丘が確認できないため、長さ8mのトレンチを「+」字に設定して断面観察を行った。

断面観察の結果、盛土や周溝は確認されず、地表下40～50cmにB軽石を多く含む黒色土、50～60cm下には、FPを多く含む黒色土の水平堆積が認められた。したがってトレンチを設定した箇所には古墳は存在していなかったと考えられる。しかし地元の方々からは「高い塚がここにあった」という話を聞いており、『上毛古墳総覧』にも「高サ7尺」と記されているため、中世以降の塚、もしくは発掘区外に古墳が塚があったものと考えられる。

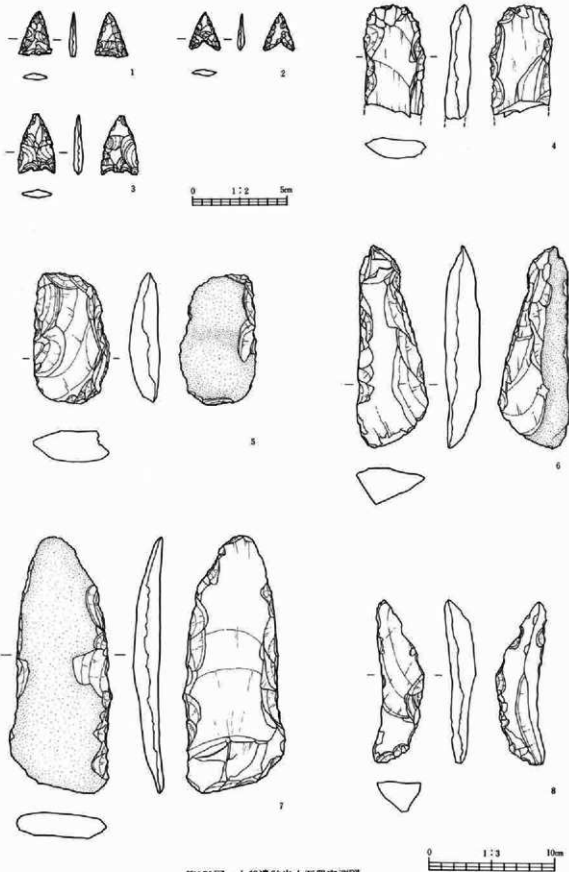
## 大釜遺跡出土石器

- No 1. 石鏃、両かえり部を欠損しており、やや薄手の作りである。両縁辺の丸部は、比較的ていねいに作り出しており、両面の剝離調整がなされている。
- No 2. 無茎の有袂鏃である。全体にていねいな剝離で仕上げられている。基部は厚く、先端部へ行く程薄くなっている。
- No 3. 有茎の有袂鏃である。両面からの剝離調整を施す、先端部欠損。
- No 4. いわゆる短冊形の打製石斧であるが、下部欠損品である。やや荒い両面からの剝離調整によって刃部を作り出している。
- No 5. 表面全体に自然面を残す、裏面は平らで、刃部は簡単な打出し調整で作り出している。
- No 6. やや不定形な換形打製石斧である。中央に稜を持つ断面三角形を呈する。刃部にまで自然面を残しており先端部は若干内反する、両側縁は、打調整され、歯潰しされている。刃部は、最初の打ち剥ぎによって作られたと思われる。
- No 7. 大型の換形石斧である。大きめな自然稜から最初に剥ぎ取った石片から作られたもので、片面に自然面を残し、反りを持ち側縁部に簡単な調整を加えただけのものである。刃部は肉薄で、いわゆる土掘具としての機能を持つものである。
- No 8. 断面三角の縦長剥片石器である。刃部は弓状にカーブしており、両面から調整されている。

図番号	種別	出土地点	最大長 <sup>cm</sup>	最大幅 <sup>cm</sup>	最大厚 <sup>cm</sup>	重量 <sup>g</sup>	石質	備考
1	石鏃		2.3	1.7	0.3	1.6	安山岩	かえり部欠損
2	*		1.5	1.7	0.35	0.71	チャート	
3	*		2.9	2.0	0.5	2.2	黒色頁岩	
4	打製石斧		9.1	4.8	1.9	101.0	*	刃部欠損
5	*		10.3	6.2	2.5	192.0	*	自然面残す
6	*		16.1	5.7	2.8	226.0	*	*
7	*		20.3	7.9	2.1	390.0	*	*
8	剥片石器		12.9	3.4	2.0	80.5	珪質岩	

大釜遺跡出土石器計測表

第2節 その他の遺構と遺物



第171図 大釜遺跡出土石器実測図

## 第6章 化学分析

## 土器の胎土分析

花岡 謙一 (群馬県工業試験場)

大西 雅広 (群馬県埋蔵文化財調査事業団)

## はじめに

群馬県内には古窯址群が10群あり、そのうち太田金山古窯址群・安中市秋間古窯址群・多野郡吉井古窯址群・高崎市乗付古窯址群・吾妻郡中之条古窯址群の5ヶ所については一傾向を知ることができた<sup>1)</sup>。

今回は同時に分析した葭田東遺跡<sup>2)</sup>の傾向を加え、金山古墳群第2号墳出土の埴輪と大釜遺跡出土の須恵器の胎土傾向を知るために、分析・検討した。

なお、本稿の化学的な所見を花岡が、考古学的な所見を大西が分担した。

## 1. 分析目的

①試料1～3は金山古墳群第2号墳より出土した埴輪である。3点の埴輪は色調・焼成が異なるものの肉眼観察による限り、胎土はやや粗く、白色鉱物粒を多量に含むなどの点で共通する。またその産地は、沼田月夜野地域に求められる。したがって分析内容は、分析値が月夜野古窯址群の領域に含まれるか否かである。目的は未確認の埴輪窯の存在、及び2号墳出土の埴輪が一元的に供給されていたことを傍証することにある。

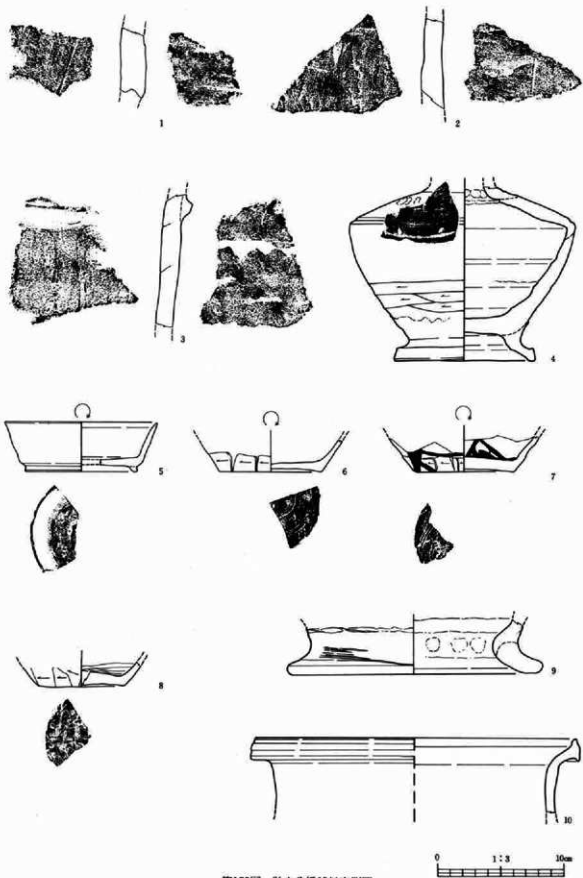
②試料4(大釜14住-15)・5(大釜3住-22)は共に緻密な胎土を有し、黑色鉱物粒を含むなど共通点が認められる。しかし、4は白色鉱物粒を含み、やや焼成も甘い。そのため、5は秋間古窯址群製、4は河支群製の可能性が高いが、秋間古窯址群製の可能性も考えられるものである。分析内容は分析値が秋間領域に含まれるかどうかであり、分析値が近似値を示せば月夜野古窯址群に近い大釜遺跡にも秋間古窯址群より須恵器が供給されていたことの傍証となる。

③試料6(大釜8住-1)・7(大釜16住-2)・8(大釜19住-15)は体部下端に手持ちへら削りを施す須恵器である。この技法を持つ須恵器坯は、現在までのところ県内の古窯址からは発見されていないようである。しかし、肉眼観察では月夜野古窯址群製の可能性が考えられる。分析内容はこれらの胎土傾向を知ることであり、目的は体部下端に手持ちへら削りを有する坯を月夜野古窯址群で生産していたことを傍証することにある。

④試料9(大釜22住-18)・10(大釜22住-19)は、断面に鉄分の差によるものと考えられる灰白色と浅黄色の部分が交互に縞状を呈しており、粘土の混ぜ合わせを行っている可能性がある。胎土分析によって粘土の混合を傍証するためには、数10点の試料が必要であるが<sup>3)</sup>、大釜遺跡出土の同様な須恵器は10点に満たないため、この点に関しては目的とし得なかった。そのため今回の目的は産地同定のみとした。試料9・10は肉眼観察による限り月夜野古窯址群製と考えられる。もし分析値が月夜野領域に含まれれば、二種以上の粘土混合を行うことは瓦工が多く行うため、瓦工が月夜野古窯址群内で須恵器生産に関与した可能性も考えられる。

## 2. 分析試料

分析試料の推定年代、種別・胎土の肉眼観察などの考古学的な要目は、表49に示した。



第172图 胎土分析試料実測図

0 1:3 10mm

第6章 化学分析

試料NO	推定年代	種別	粘土の内眼観察	摘要
1	7C前-7C中	埴輪	白色鉱物粒を多く夾雑する。黒色鉱物粒をわずかに夾雑する。素地はやや素で重い。	焼成はやや軟質。色調は外面にぶい黄褐色、内面断面灰黄褐色。
2	7C前-7C中	埴輪	白色鉱物粒を多く夾雑する。黒色鉱物粒をわずかに夾雑する。素地はやや素で重い。	焼成はやや硬質。色調は器表にぶい褐色。断面灰黄褐色。
3	7C前-7C中	埴輪	白色鉱物粒を夾雑する。黒色鉱物粒をわずかに夾雑する。素地はやや素で重い。	焼成は軟質。色調は器表にぶい褐色。断面灰黄褐色。
4	8C後	須恵器	黒色鉱物粒を夾雑する。素地は緻密で重い。洞窟窯址群製か。	焼成は硬質。色調は灰色。黒色鉱物粒吹き出す。
5	8C中	須恵器	黒色鉱物粒を夾雑する。素地は緻密で重い。秋間古窯址群製か。	焼成は硬質。色調は器表灰色。断面黄灰色～灰色。
6	9C前?	須恵器	白色鉱物粒・黒色鉱物粒をわずかに夾雑する。素地は緻密で重い。	焼成は硬質。色調は灰色。
7	9C前	須恵器	白色鉱物粒を夾雑する。素地は緻密で重い。	焼成は硬質。色調は器質。色調は器表灰白色。断面にぶい黄褐色。火葬あり。
8	9C前	須恵器	白色鉱物粒をわずかに夾雑する。黒色鉱物粒を含む。粘土を混ぜ合っている可能性がある。	焼成は軟質。色調は灰褐色。酸化腐。内面にはヘラミガキが施されている。
9	10C前	須恵器	白色鉱物粒を多く夾雑する。素地は緻密で重く、粘土を混ぜ合っている可能性がある。	焼成は軟質。色調は器表灰白色。断面淡黄色。
10	10C前	須恵器	白色鉱物粒を多く夾雑する。素地は緻密で重く、粘土を混ぜ合っている可能性がある。	焼成は軟質。色調は器表灰白色。断面にぶい褐色。

表49 試料の考古学的な要目

3. 試験方法

分析試料は各試料を10μm以下に粉砕し、5～10gを円板に成型し、蛍光X線分析試料およびX線回折試料とした。

元素分析装置(理学電機製KG-4型)を使用した。管球は銀対陰極・計数法はチャート方式(4°/min)を使用した。詳細な条件は表50に示した。なおケイ素(Si)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)は定時計数法によった。また、蛍光X線分析値は粘土標準試料(日本標準試料委員会認定、科学技術社発売)R-601、R-602、R-603、および前回試料の3点(No. A・B・C)の湿式化学分析試料を標準として求めた。

分析元素	管電圧 電流	分光結晶	検出器	波高分析	測定数
Fe Si Rb Mn Zr Zn Ca Ni Cr Ba	50KV- 20mA	LiF	S・C		1
Ca K Ti Si Al	40KV- 30mA	EDDT	P・C		1
Mg	40KV- 30mA	ADP	P・C		1

表50 蛍光X線分析条件



表51 分析結果

試料	成分	SiO <sub>2</sub> (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	CaO (%)	MgO (%)	K <sub>2</sub> O (%)	Ca	St
	K								Rb	
1		64.2	21.2	2.65	0.61	0.86	0.45	1.09	1.10	3.00
2		64.0	21.2	3.80	0.63	0.68	0.42	1.25	0.74	2.07
3		65.1	20.4	3.65	0.61	0.71	0.38	1.24	0.75	2.72

金山古墳群試料

試料	成分	SiO <sub>2</sub> (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	CaO (%)	MgO (%)	K <sub>2</sub> O (%)	Ca	St
	K								Rb	
4		71.2	15.5	2.70	0.65	0.27	0.45	1.04	0.36	0.78
5		67.0	19.5	3.13	0.65	0.35	0.52	2.17	0.21	0.60
6		68.6	16.8	2.80	0.80	0.37	0.49	2.04	0.25	0.95
7		68.0	19.3	2.87	0.90	0.37	0.50	1.86	0.27	1.01
8		65.0	19.1	4.55	0.77	0.35	0.55	1.77	0.26	1.16
9		65.2	22.1	3.10	0.70	0.79	0.44	1.47	0.75	1.91
10		66.1	22.0	3.77	0.75	0.72	0.48	1.50	0.67	2.02

大釜遺跡試料

試料	成分	SiO <sub>2</sub> (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	CaO (%)	MgO (%)	K <sub>2</sub> O (%)	Ca	St
	K								Rb	
11		68.2	18.5	2.42	0.64	0.50	0.46	1.96	0.36	2.10
12		66.0	21.0	5.19	0.66	0.78	0.45	1.45	0.76	2.84
13		70.6	18.4	2.96	0.67	0.57	0.76	1.75	0.43	1.92
14		66.5	20.5	5.14	0.73	0.83	0.75	1.32	0.83	2.21
15		65.2	21.0	2.94	0.67	0.78	0.38	1.38	0.79	2.43
16		65.1	23.0	2.41	0.66	0.90	0.43	1.46	0.84	3.24
17		64.2	20.4	3.04	0.64	0.77	0.30	1.38	0.77	2.97
18		66.0	20.3	2.23	0.62	1.05	0.40	1.46	0.99	3.04
19		68.6	18.4	4.29	0.82	0.70	1.12	1.49	0.62	1.79
20		65.7	18.7	5.51	1.02	0.48	0.97	1.36	0.47	0.86
21		65.2	20.2	4.40	0.75	0.59	0.49	1.62	0.50	1.08

月夜野古窯址群試料

## 第6章 化学分析

成分 試料	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	TiO <sub>2</sub>	CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Ca	St
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	K	Rb
R-601	50.3	33.0	1.16	0.56	0.15	0.29	1.71	0.11	0.24
R-602	45.9	37.3	0.69	0.12	1.41	0.37	0.58	3.06	51.08
R-603	46.1	37.0	0.66	0.09	1.66	0.29	0.40	5.24	25.58
A	66.7	18.6	6.00	0.94	1.09	1.29	1.39	1.08	2.29
B	64.4	17.1	6.03	0.61	0.86	0.55	2.63	0.46	1.16
C	68.0	17.6	1.65	0.49	0.94	0.58	2.77	0.48	1.21

表52 標準試料

### 4. 地質 (図173)

月夜野古窯址群は東を利根川、南を赤谷川に挟まれた一角にある味城山の東北麓部に7支群をもって構成された利根・沼田・吾妻地方最大規模の窯跡群<sup>(1)</sup>である。本窯跡群は、北より水沼A、真沢A、深沢B・C、沢入A、藪田A、洞A支群の7個所に支群構成を認ることができる。操業年代は8世紀の窯跡の存在する沢入A支群を古い例とし、10世紀代の深沢B・C支群まで2世紀以上の継続存続がある。

この窯跡群を地質図<sup>(1)</sup>と対照してみると生成の異なる3つの基盤層上に存在していることが判り、地質鑑定上<sup>(10)</sup>も同様の所見を得た。基盤の生成は図173のとおり、Aの变成安山岩上に水沼A・真沢A支群が、Bの石英安山岩質凝灰岩上に深沢B・C支群がある。また、Cの緑色凝灰岩上には藪田東遺跡、沢入A、洞A支群が立地する。いずれも第三系に時期する。



第173図 月夜野窯跡群地質図 1:50,000  
(調査報告『群馬県地質図』1964をもとにしているが、一部について加筆してある。)

### 5. 胎土傾向

支群個々の須恵器の胎土を仔細に観察すると各支群は、立地する生成基盤ごとにとまるとなる傾向があり、生成基盤層と須恵器胎土とは、直接的な関係があることが明らかとなった。このうち水沼A、真沢A支群については、資料がなく除外するが、残る5支群については採集資料が多量にあり、それに基づいて胎土の観察所見を得た。その所見は以下のとおりである。

変性安山岩の基盤	〔水沼A、真沢A支群〕	資料がなく観察から除外
石英安山岩質凝灰岩の基盤	〔深沢B、C支群〕	素地は粒子が粗く、夾雑鉱物に石英・長石の大き粒を多く含む。胎土傾向Aとよぶ。
緑色凝灰岩の基盤	〔沢入A、藪田A、洞A支群〕	素地は粒子が細く、密である。夾雑鉱物に石英・長石の微細粒を含むが少量である。特徴的に黑色鉱物粒(Fe <sub>3</sub> O <sub>4</sub> とSiO <sub>2</sub> の混合物)を少量含む。胎土傾向Bとよぶ。

## 6. 分析結果と考察 (図174-177)

①金山古墳群第2号墳出土の埴輪は、すべて同様な胎土傾向(肉眼観察)を示し、色調・焼成による分類を行っても、試料1-3に代表される3種に分類できるのみである。したがって最低3点の分析によって、第2号墳出土埴輪の傾向を知ることができる。

試料1-3の分析値は、県内古窯址群の分析値と比較すると月夜野領域に含まれる。そのため、第2号墳出土埴輪はすべて月夜野古窯址群周辺で生産されたものと考えられる。

当初は埴輪窯の存在を図173に示した同一基盤層の範囲にまで限定することを目的としていた。しかし、埴輪は可塑性を高めるために夾雑物を多く混入するので、須恵器と比較すると分析値が分散する傾向が認められる。今回の分析においても同様な傾向が表われ、1は石英安山岩質凝灰岩を基盤とする深沢C領域に、2は緑色凝灰岩を基盤とする沢入領域に、3は双方の領域に含まれてしまう。その結果、埴輪窯址の存在を狭い範囲に限定することは不可能となった。

②試料5は秋間古窯址群製、試料4は洞支群製の可能性が高いが、秋間古窯址群製の可能性も考えられるものである。分析値は5が秋間領域に、4が洞領域に含まれ、大釜遺跡にも秋間古窯址群より須恵器が供給されていたことの傍証となる。

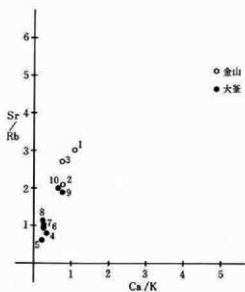
大釜遺跡では、秋間産と考えられる須恵器は試料5の他には1点(14住-13)を数えるのみであり、いずれも沢入A支群製と考えられる須恵器を出土する住居址より出土している。また5は沢入A支群の須恵器よりも古い時期に位置付けられる。大釜遺跡ではこれら以外に搬入品と考えられる須恵器は出土していない。したがって大釜遺跡における須恵器搬入の終息は8世紀中頃であり、この結果は利根地区の傾向とも一致する<sup>①)</sup>。

③試料6-8は、体部下端に手持ちへう削りを施す坏である。これらの分析値は、いずれも洞・藪田両領域に近接する部分にまとまっている。この分析結果からすると、これらの生産は洞・藪田支群の周辺、すなわち緑色凝灰岩を基盤とする地域(図173)に求められよう。

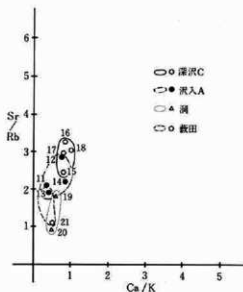
④試料9・10は胎土に溝状の色差が認められるもので、粘土の混ぜ合わせを行っている可能性を持つ須恵器である。これらは共に沢入領域に含まれるため、沢入支群で生産されたと考えられる。粘土混ぜ合わせの問題に関しては、試料不足のため分析目的とし得なかった。しかし、月夜野古窯址群の瓦生産の実体が不明なもの、洞支群においては瓦が出土している<sup>②)</sup>ため、瓦工が須恵器生産に関与した可能性は考えられるであろう。この問題に関しては、月夜野古窯址群における瓦生産の実体の解明、及び試料の増加を待って胎土分析を行う必要がある。

## 註

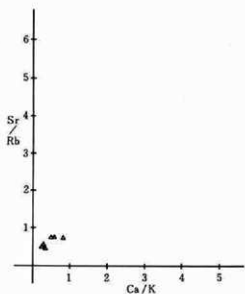
- (1) a 花岡敏一・石塚久樹 「土器の胎土分析」『塚園古墳群』群馬県教育委員会 1980
- b 花岡敏一・大江正行 「瓦の胎土分析」『天代瓦窯遺跡』中之条町教育委員会
- c 花岡敏一・田口正美 「瓦の胎土分析について」『山王庵寺跡第7次発掘調査報告』前橋市教育委員会 1982
- (2) 花岡・中沢・原 「飯田東遺跡出土土器胎土分析」『飯田東遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- (3) 註(1)に同じ
- (4) 『土器部会研究資料-No 2-1』群馬歴史考古同人会 1983
- (5) 新井厚夫 『群馬県地質図』1964
- (6) 鹿貝基一 「飯田東遺跡周辺の地質」『飯田東遺跡』1982
- (7) 大江正行 「月夜野古窯址群の成立とその背景」『土器部会研究資料-No 2-1』群馬歴史考古同人会 1983
- (8) a 山崎義男 「上野国利根郡月夜野二窯址に就いて」『古代文化』12-4、1941
- b 井上増雄 「群馬県利根郡月夜野町洞窯址発掘調査報告」月夜野町教育委員会 1973



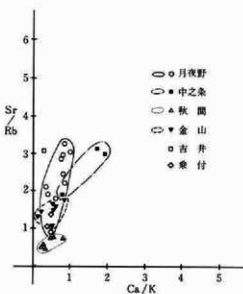
第174図 金山、大釜試料



第175図 月夜野露降群試料



第176図 秋間露降群試料



第177図 県内露降群の領域

## 第7章 ま と め

### 住居址とカマド

住居址は8世紀後半から10世紀前半までの29軒が検出されている。これらのうち8世紀後半に属する住居址とカマドは、後出するものとその構造を異にしている。すなわち3・12・20・30号住居址は面積が広く4本の主柱穴を有しており、カマドはほとんど壁外に突出していない。これに対し、後出する住居址では主柱穴は確認されず、カマドも壁外に突出している。但し11号住居址は8世紀後半に属するが、小型で主柱穴を持たない。しかしカマドは壁外に突出していない。本遺跡の8世紀後半の住居址で4本柱穴を有するものは6軒中5軒であり、カマドはすべて壁外に突出していない。

県南平野部では、群馬郡群馬町上野国分寺隣接地域において同時期の住居址は5軒検出され、4軒は主柱穴を有しておらず、1軒は不明<sup>11)</sup>。富岡市本宿・郷土遺跡では11軒検出され、すべて主柱穴を有していない<sup>12)</sup>。また伊勢崎・東流通団地遺跡では9軒のうち2軒に4本主柱穴が認められている<sup>13)</sup>。なおカマドはすべて壁外に突出するタイプである。県南地域に近い埼玉県児玉地方では、4本主柱穴を有する住居の割合は真間期13.3%・国分期9.8%であり<sup>14)</sup>、県南地域との大きな差はないようである。

この時期の資料は未だその数が少なく、検討を行うには不十分であるが、現段階において大釜遺跡では4本主柱穴の住居址や壁外に突出しないカマドが運くまで残っているといえよう。また本遺跡では8世紀後半と9世紀初頭の間に住居址・カマドの構造に大きな変化が認められる。

### 掘り方

本遺跡の約93%の住居址は深くローム層を掘り込んだ「掘り方」を有する。掘り方の平面形態は形の乱れたものが多く明確な形態分類はできないが、全体を掘り込むものと南に傾斜するものとがほぼ同数で全体の約63%を占める。他にはカマド部分を除いて「コ」の字状に掘り込むものや南北壁際を掘り込むものなどがあるがその数は少ない。床面は掘り方内を人為的にローム主体の土で埋め戻し、その上に黒色土主体の土、又はロームを多く混じえた土で構築している。このような床面構造は植松章八氏が「床面の二重構造<sup>15)</sup>」と呼んでいるものである。これに関しては植松章八氏と柿沼幹男氏による考察<sup>16)</sup>があり、掘り方の3基本形態<sup>17)</sup>を示し、その機能を「防湿」と「床面の亀裂防止」と推察している。このような例は静岡・神奈川・東京・千葉・埼玉・群馬・栃木・福島の各都県で報告されており、時期も弥生後期から国分期に至るまで認められる。

南斜面に占地する本遺跡では掘り方が南に傾斜する例が約33%存在する。従来形態分類されていなかったこの形態は福島県杉内B遺跡<sup>18)</sup>に良好な例が検出されている。杉内B遺跡は東斜面に占地し、5軒の住居址が確認されている。住居址の東西壁高差はすべて30cm前後を測る。掘り方が検出されたものは3軒で、いずれも掘り方は東に傾斜するものである。本遺跡と杉内B遺跡の例から判断すると、傾斜を有する掘り方は占地している地形に影響されていると考えられる。同様な例は今後斜面に占地する遺跡で増加するであろう。掘り方の機能に関しては「防湿」と「床面の亀裂防止」以外に、常川秀夫氏<sup>19)</sup>は栃木県西根B遺跡の床面が粒子の粗い今市軽石層中に構築されていることから「床面を堅固」にする機能を指摘している。掘り方は遺跡の立地・土質などの諸条件によってさまざまな形態・機能を有していたと考えられる。特に機能に関しては上記の諸機能を兼ね備えていたことも十分考えうる。

次に貼床に関して、16・19号住居址は貼床と考えられる薄い層が2枚認められた。16号住居址では床面下

の「貼床2」層より掘り込まれたピット6(図76)があり、19号住居址では貼床(貼床1層)下に堅い面(貼床2)が認められ(図92)、共に広範囲に床の貼り替えが行われていた可能性が高い。3号住居址は貼床の薄い土層は1枚(貼床1層)のみであった(図12)が、貼床1層下に土器が多く検出されており、本住居址も床の貼り替えが行われた可能性が高い。しかしカマドの造り替えは1例も検出されていない。

#### ロクロ左回転の須恵器

須恵器生産におけるロクロの回転方向は(以下「回転方向」)、6世紀前半頃を境としてしだいに左回転から右回転へと変化してゆく<sup>109)</sup>。それ以後歴史時代に至っても回転方向は右回転が一般的であり、関東地方もその例外ではない。このような状況の中にあつて大釜遺跡ではロクロ左回転の須恵器がかなり認められ、器種には坏・蓋・埴がある<sup>110)</sup>。ここでは出土量が多く、回転方向の判断しやすいため若干検討を加えた。

3・11・12・14・20号住居址と井戸状遺構では、底部回転糸切り後全面又は周縁回転ヘラ削り(以下「底部調整」)を施す坏と底部回転糸切り無調整(以下「底部無調整」)の坏とが伴出している。回転方向は前者がすべて右回転で、後者はすべて左回転である。これらの坏は器形・技法などから8世紀後半に属すると考えられる。次に9世紀初頭頃と考えられる9号住居址では、回転方向の判明した2個体は底部無調整で左回転である。また30号住居址では回転方向の判明した4個体中3個体が右回転で、そのうち1個体が底部無調整である。以上のように8世紀後半において底部調整を行う坏は右回転、底部無調整の坏は左回転で、その比率はほぼ3:1である。その後、底部無調整が一般化しはじめる9世紀初頭頃には、底部無調整で右回転の坏が出現してくる。これ以後9世紀代の状況については住居址ごとのバラツキが多く、良好な一括資料も欠いているためここでは検討できないが、右回転と左回転の比率は約4:1であり、前代と大きな変化はないようである<sup>111)</sup>。

胎土分析の項ですでに述べたように8世紀後半は、月夜野古窯址群による在地供給が軌道に乗っている時期であり、他地域の須恵器は払拭されている状況である。そのため上述の現象は供給地の差異によるものではなく、月夜野古窯址群で右回転と左回転の坏を併焼しているためと考えられる。

月夜野古窯址群は現在7支群が知られており、そのうち8世紀後半の須恵器を焼成しているものに沢入A支群<sup>112)</sup>、9世紀前半の須恵器を焼成しているものに洞A支群<sup>113)</sup>がある。沢入A支群は2基の窯体が確認されており、坏は25個体出土している。そのほとんどは底部調整を行っており、右回転である。一方無調整のものは1個体<sup>114)</sup>のみであるが、回転方向は左である。洞A支群は4基の窯体が確認されており、このうち出土遺物が豊富な3基<sup>115)</sup>についてみると、「例外なく糸切底を有する」と報告されている。回転方向についてはすべての遺物を観察し終えていないため比率は出せないが、発見した限りにおいてはすべて底部無調整で右回転が主であるものの、左回転のものも存在している。沢入A・洞A支群以外にも粘土採掘坑が検出されている藪田東遺跡で左回転の坏が出土している<sup>116)</sup>。以上のように月夜野古窯址群では右回転と左回転の坏を併焼することが一般的なようであり、ひとつの特徴として捕えることができる。加えて3・11・12・14・20号住居址・井戸状遺構出土資料と沢入A支群出土資料との比率の差異は、資料数が少ないことも関係しているであろうが、沢入A支群より多量に左回転・底部無調整の坏を焼成している窯の存在を示唆していると考えられる。

大釜遺跡出土の8世紀後半の須恵器坏は、底部調整を施すものは右回転、底部無調整のものは左回転であり、同様な事実は沢入A支群でも認められる。この事実は月夜野古窯址群で最初に底部無調整の坏を焼成したのが左回転のロクロを使用する工人であったことと、回転方向の異なったロクロを使用する工人が同一の窯

体を使用していたことを示すものと考えられる。月夜野古窯址群では東海地方の系譜をひく沢入A支群と洞A支群に始まる在地工人を主とした支群の2つの系譜があることが指摘されている<sup>(11)</sup>。更に両者には回転方向の異なるロタロを使用する工人の存在が想定され、大釜遺跡からは月夜野古窯址群製と考えられる体部下端に手持ちのヘラ削りを施した坏<sup>(12)</sup>が出土していることから、東北西部地方の系譜を有する工人の存在も考えられる。このように月夜野古窯址群における須恵器工人のあり方は、かなり複雑な様相を呈していたようである。

#### おわりに

今回の調査は関越自動車に伴う事前調査であるため、その範囲は幅80mと限定されていた。しかし調査の結果堅穴住居址29軒、堅穴状遺構・井戸状遺構・配石遺構各1基、土壇3基、ピット群4ヶ所が確認され、その分布状態や地形から南の1部を除いてほぼ遺跡の全体を調査することができたと考えられる。その結果大釜遺跡は小規模な集落であり、弥生後期の堅穴状遺構を除けば8世紀半に出現し、10世紀前半に消滅することが明らかとなった。検出された住居址は量的には少ないが遺存状態は良好なものが多く、掘り方もほとんどの住居址に検出された。出土遺物は円面硯・鉈尾・墨書土器といった特殊遺物が出土している。一方日用汁器に関してはあまり良好な一括資料は出土しなかった。しかし、上述したロタロ左回転の須恵器以外にも、本遺跡出土の土器器型や坏が所謂「武蔵型土器型」「北武蔵型土器坏」であることが明確となり、今後資料の増加を待ってこの名称を変更しなければならない<sup>(13)</sup>ことなど、いくつかの成果を納めることができた。

現段階では資料的な制約が大きいが、今後本遺跡周辺でも上越新幹線・関越自動車道・月夜野バイパスなどに伴う発掘調査報告書の刊行が予定されており、当地域の実体もしだいに解明されてゆくであろう。

#### 註

- (1) 井上唯雄・須田 茂他 『上野国分寺隣地城址発掘調査報告』 群馬県教育委員会 1979
- (2) 井上太他 『本宿・掘土遺跡発掘調査報告書』 富岡市教育委員会 1981
- (3) 坂口 一他 『伊勢崎・東流通団地遺跡』 群馬県企業局 1982
- (4) 祐沼幹夫 『住居跡について』『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書—下田・諏訪—』 埼玉県教育委員会 1979
- (5) 植松章八 『住居址東面の二重構造について』『月の輪遺跡群』 富士宮市教育委員会 1981
- (6) 註(4)に同じ
- (7) 植松章八氏はA類「床面プランの外縁部に沿って周濠状に掘り込み、中央部を方台に残すもの」、B類「床面プランの外縁部を平掘に残し、その内側を周濠状に掘り込むもの」、C類「床面プラン全域を平掘に掘り込むもの」の3基本形を示している。
- (8) 大越道正他 『杉内B遺跡』『母畑地区遺跡発掘調査報告書—福島県文化財調査報告95集—』 福島県教育委員会 1981
- (9) 常川秀夫 『西根B遺跡』『原宮遺跡発掘調査報告書—栃木県文化財調査報告第41集—』 栃木県教育委員会 1981
- (10) 田辺正三 『須恵器大成』 1981
- (11) 他の器種は観察が困難であり、資料数も少ないため回転方向は不明である。今後資料の増加に伴い他の器種についても検討しなければならない。
- (12) 9世紀中頃—後半の窯址出土資料はなく検討できなかった。また9世紀末—10世紀前半の資料として、深沢B・C支群出土資料があるが、B支群は未検討である。またC支群出土資料に左回転のものはない。B支群に関しては後日を期したい。
- (13) 『土器部会研究資料—2—』 群馬県史学同人会 1983
- (14) a 山崎義男 『上野国利根郡月夜野二窯址に就いて』『古代文化 12—4』 1941  
b 井上唯雄 『群馬県利根郡月夜野洞窯址発掘調査報告』 月夜野町教育委員会 1973
- (15) 筆者が実見してロタロの回転方向を判断した。
- (16) 註(14)bに同じ
- (17) 原 雅徳氏の御教示による。
- (18) 大江正行 『月夜野古窯址群の系譜について』『土器部会研究資料—No.2—』 群馬県史学同人会 1983
- (19) 体部下端手持ちヘラ削りの須恵器坏は現在、県内の窯址出土資料にはみられない。近県では栃木・茨城県の窯址出土資料に認められる。月夜野古窯址群範囲A支群に含まれる飯田東遺跡からは東北系と考えられる型が出土している。

## 第7章 ま と め

- (20) 群馬県南部地域については報告例は少ないが、前橋市「清里・陣場遺跡」・大胡町「天神風呂遺跡」・群馬町「上野国分寺隣坂地域」・藤岡市「堀ノ内遺跡群」や井上唯雄氏の「群馬県下の歴史時代の土器」などを見る限り主体を占めている。また今回県北の大釜遺跡においても「武藏型土師甕」の口縁部彩装は「く」の字から「ヨ」の字へと変化し、その終末には器厚を増し屈曲部に棒状工具を使用するものも見られ、甕の主体を占めている。大釜遺跡出土甕の胎土は県南部地域のものとは異っており、県南部地域においても胎土の異なる地域もある。したがって群馬県においては福田龍司氏のいわゆる「かなり広範なところに一元的に供給されていたかのような様相」は見られない。



かな やま  
金山古墳群



## 第1章 発掘調査に至る経過と発掘調査の経過

古墳群の発掘調査は「関越自動車道新潟線」の建設工事に伴う事前調査として、先の大釜遺跡終了後の計画について日本道路公団沼田事務所との協議の結果、月夜野インターチェンジ路線内における古墳3基の調査に入る事に決定し、昭和56年8月1日から3日間下草刈りを行ない、同年9月30日より発掘調査を開始した。

古墳は当初3基と思われたが、さらに東側尾根上にもう1基存在するという地元の方々からの証言を得た。このため担当者が実地踏査した結果、墳丘はすでに流失していたが、石室の壁用石と推定される石材が確認された。石室の残存が予想されたため、昭和56年10月26日再度公団と協議を行ない、作業員の現有勢力では対応しきれないために増員を求め、並行して行なう事に決定した。

調査の結果、横穴式袖無型石室を有する古墳3基、両袖型石室を有する古墳1基、および墳丘下に存在する二ッ岳軽石（FP）層降下前の土師器使用の住居址1軒を検出し、昭和56年12月25日日本調査を終了し、翌26日月夜野の地を後にした。

## 第2章 発掘調査の方法

本古墳群は三峰山から南へ延びる尾根上に3基直列して占地し、さらに東側の尾根上に1基占地しているため、全体を網羅する様に国家座標を組み、座標値 $X=+75050.00$ ・ $Y=-72370.00$ をグリッド基本杭とした。

調査の便宜上、西側尾根北側に位置する「上毛古墳総覧」古馬牧村第29号古墳、同28号古墳を第2号古墳、同27号古墳を第3号古墳、同34号古墳（通称白骨塚）を第4号古墳と仮称した。以下、調査時に付した番号を用いて記述する。

## 第3章 遺跡の立地と環境

### 1. 地理的環境

金山古墳群は、月夜野町の東北に位置する標高1122.5mの三峰山麓にあたる。月夜野町大字師字金山地内に所在する。南方約1.5kmには、新潟県との県境に聳える谷川連峰より源を発する利根川が、幾多の沢水を集めて、高槍、板山、三峰山の西麓、吾妻耶、大峰、味城山塊の蛇行しながら浸食しつつ、狭長な流域を形成しており、また万太郎山、仙ノ倉に源をもつ赤谷川は、西川、須川川と出会い東流して月夜野町で利根川と合流する<sup>1)</sup>。合流点からは川幅を増しながら沼田市に入り、西流して来る四釜、薄根、片品川を合わせて岩本町からは西側の子持山、東側の赤城山の裾部を再び川幅を狭めて縫うように蛇行しながら渋川市方面へと南流する。各河川とも浸食作用が進み、両岸には大小の規模を有する河岸段丘を発達させており、特に利根川左岸の月夜野町後閑から薄根川左岸にかけては広大な段丘面が3段から4段に広がりを見せている。また薄根、片品両川により分断された袋間の台地上には沼田市街地が発展し、北端は急峻な崖に、南側は段丘地形が東西に延びている。

以上の如く、この地域は河川の種々の作用が影響して複雑な地形を呈しており、流域には沖積地が形成され、耕地や宅地が開けている。一方、山麓においても沢や谷地が幾筋も入り込み、三峰山の南麓にあたる沼田市宇楚井地区および月夜野町師地区から西方の後閑、稗田、東原地区一帯には土石流による扇状を呈する地形が認められるが、附近一帯には灰色でやや黒色味のかかった溶結凝灰石の礫が散在している。大きいものは径数メートルを測るが、供給源は後方の切り立った崖面を見せる三峰山であり、岩塊流として流出してきたもので<sup>2)</sup>、後述する石室用石として利用される岩石である。

金山古墳群は、この地の字名にもなっている「金山」<sup>3)</sup>と称される円形の小山状に盛り上がった丘陵の斜面に点在し、幅を狭めながら南へ延びる標高435~410mの尾根が傾斜度を緩め、長さ50m、幅30m~50mの平坦地となる背上に、本調査の4基の古墳のうち3基がほぼ南北に直列して占地する。尾根西側は沢のため急峻な崖となり、東側は浸食された支谷が深く入り込んでいる。その支谷をはさんで、同じく舌状の尾根が南南西方向に長さ300m、最大幅90mをもって延びているが、付け根部にあたる標高446mの尾根東寄りには他の1基が存在する。

このような尾根間の支谷には、湧水を利用して中小の谷地水田が営まれ、段丘面においても湧水導入可能な低地および河川流域の沖積地に広がり、微高地は畑地となっている。沼田市原町内に「千泥田」なる名称

の字名が見受けられるが<sup>3)</sup>、古来からの水田耕作地帯との見解が推定可能な地域のひとつである。しかし、現在において今回の調査の目的となった関越自動車道建設工事による大規模開発や、圃場整備事業、灌漑設備等の充実に伴い、当地域における土地利用の構造に変化を来しつつある。

## 2. 歴史的環境

前項で述べてきたように、金山古墳が立地する三峰山麓地域は背後に山を背負い、南に開ける緩傾斜地であり、尾根や谷地が幾条にも延びてその末端は段丘面が広がる複雑な地形を呈しており、現在のように広範に耕地化されている平坦地、緩傾斜地、谷地を見ても、古墳時代とは当然様相はもっと限定された地域に凝集されていたと考えられる。近年の種々の開発等により、そして規模の拡大化によって周辺の遺跡の他に数多くの遺跡が知られるところとなり<sup>4)</sup>、利根沼田地方の今日までの歴史的概念を再考しなくてはならなくなっている。

昭和10年に行われた古墳の県下一斉調査<sup>5)</sup>によれば、利根沼田地方では総数445基が数え上げられ、それらは単独で存在するものは希で、大半が群集形態を呈し、粗密はあるものの立地条件としておおむね次のような項目が見出される。①段丘崖に近い段丘面縁辺部、②段丘崖の緩斜面、③河川に面し、背後に斜面を負ったやや開けた緩傾斜地、④丘陵斜面、⑤丘陵から延びる尾根頂部、⑥河川の合流点に近い平坦地、など赤谷、利根、薄根、片品の主要河川をはじめとして、その支流流域の上流附近まで認められ、沖積台地の開拓と密接な関連をもつと推察される。巨視的に地理的条件から捉えると、利根川左岸に開ける“沼田盆地”内に集中する傾向がある。以下、古墳の分布状況を各水系と地域において概観してみたい。

北西にあたる赤谷川流域を見ると、利根川との合流点より3km程さかのぼった右岸の月夜野町上塚原、不動地区を中心に分布が認められ、52基が記載されている。そのうち数基が概観されているが<sup>6)</sup>、横穴式石室を有する小規模な円墳がほとんどである。次に合流点より下流域にかけては北西から南東方向に広く三峰山麓と段丘面が開けるが、粗密を考慮しなければ、ほぼ四釜川右岸まで一線にてその分布が認められる。換言すれば、2段目段丘上である月夜野町真庭<sup>7)</sup>、政所<sup>8)</sup>、沼田市井土上町に、一方で月夜野町俣田<sup>9)</sup>、師、沼田市宇楚井、原、棚廻、大釜町に至る標高約500mラインまで存在している。右岸では同市川田地区に10基記載されていて、字名にも名残が見える。また武尊山より南西流する薄根川流域においては、その支流である発知川、溝又川、桜川等の川沿いにわずかに開けた沖積地および段丘上に分布する。川場村では総数89基が記載されており、特に桜川上流の湯原、谷地地区、溝又川との合流点附近の門前、天神、東方の萩室、立岩地区、薄根川と田沢川との狭間に位置する生品地区に認められる。さらに発知川との合流点よりやや上流の沼田市奈良町に谷地状を呈する2段目段丘上に奈良古墳群<sup>10)</sup>が所在するが、1.5km程上流の秋塚同様に地形的に限られた範囲に集中している。岡谷町峰山の丘陵斜面、そして対岸面、そして対岸の横塚町にも分布する。下って利根川と合流する現田、薄根町にかけては現在ほとんどその痕跡を留めていないが分布が記載されている。一方、沼田市街地が所在する台地の南側は西流してくる片品川によって大規模な段丘地形を発達させているが、右岸の沼須、戸鹿野町に、さらに利根川との合流点の新町にかけて8基が分布し、左岸の昭和村糸井、権久保から森下、川額<sup>11)</sup>、入原地区に64基が記載されている。特に森下から川額にかけてが濃密に分布しており、この一帯が中心的役割を果たしていたと推定される。

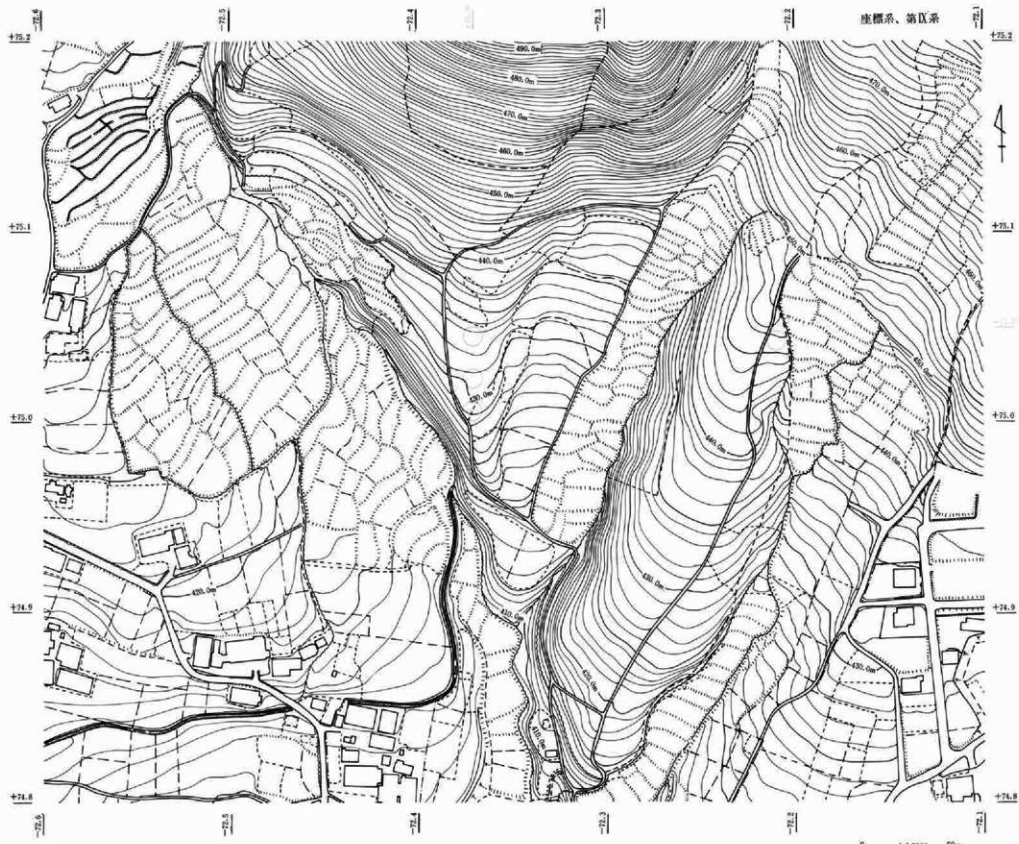
以上のように沼田盆地を中心として分布する古墳群の地域を概観したが、古墳として記載されたすべてがはたして古墳であったかどうかは一概に信じ得ないし、記載漏れ、すでに消滅していたものも当然あったであろう。しかし数多くの古墳が築かれている事実は、その各々の地域的集団の存在が有り、生活を営んでいた証拠である。近年の発掘調査例の増加で生活場所である住居跡、用具、そして分布圏が明らかにされつつ

### 第3章 遺跡の立地と環境

ある。

#### 註

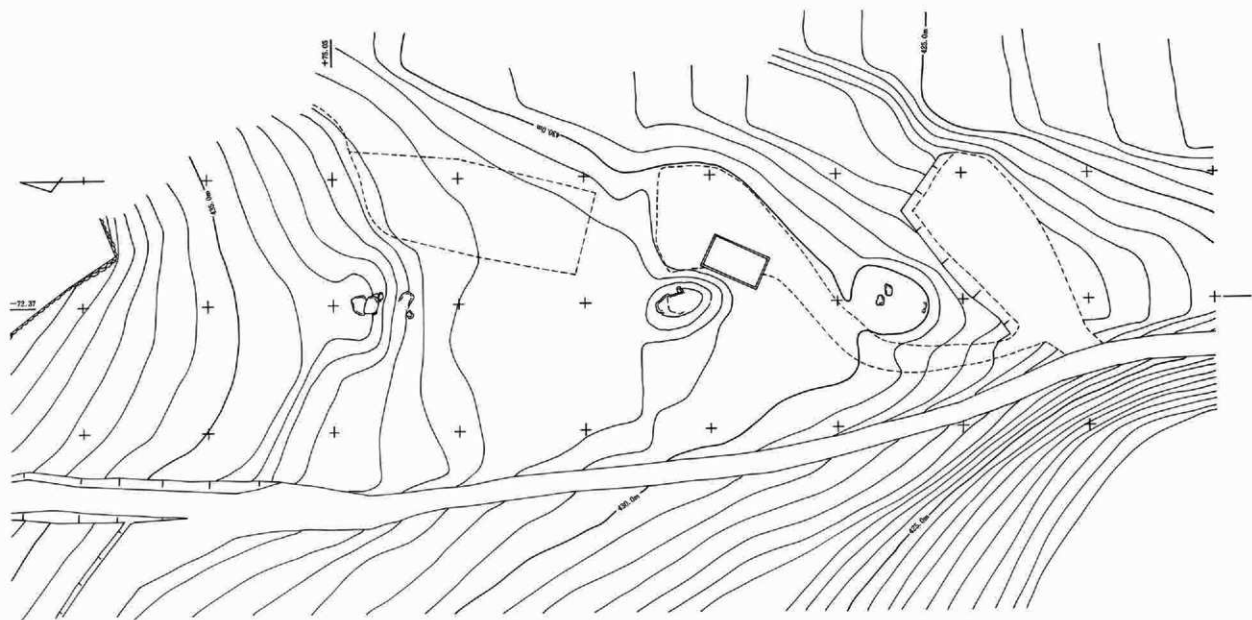
- (1) 『古馬牧村史』 月夜野町誌編纂委員会 1972
- (2) 『群馬のおいたちをたづねて—上—』 上毛新聞社 1978
- (3) 沼田市教育委員会 水田 稔氏謝教示
- (4) 関越自動車道の他、上越新幹線工事に伴う調査例。『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報—Ⅰ—Ⅵ—』 群馬県教育委員会1973—1978
- (5) 『上毛古墳総覧—群馬縣史蹟名勝天然記念物調査報告書第5輯—』 群馬県 1938
- (6) 『桃野村史』 月夜野町誌編纂委員会 1961
- (7) 註(1)に同じ。
- (8) 『群馬県史—資料編3・原始古代3古墳』に京塚古墳として記載されている。
- (9) 註(1)に同じ。
- (10) 尾崎喜左雄 『横穴式古墳の研究』 1966  
『池田村史』 池田村史編纂委員会 1964
- (11) 平野通一 『鏡石古墳発掘調査報告』 群馬県教育委員会 1974



第178図 金山古墳群周辺の地形図

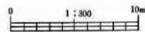






L = 448.0m

第179图 第1·2·3号古墳现状图





## 第4章 検出された遺構と遺物

### 第1節 古墳と出土遺物

#### 第1号古墳 (綜覧古馬牧村第29号古墳)

本古墳は金山の裾部が緩やかな傾斜となり、幅を狭めながら南北へ延びる舌状の尾根の基部に占地する。標高は432mである。南方約20mには第2号古墳が所在する。上毛古墳綜覧によると、古馬牧村第29号古墳に相当し、大字節字金山1940番地に所在、地目は山林、規模は径30尺、高さ9尺となっている。なお同番地内に第30号古墳として他に1基記載されているが、地元の方の証言と記載事項との検討から、本古墳が第29号に該当すると思われる。

#### 外部構造

調査に入った時点では低木、雑草に覆われ、その中に石室上半部が開口していたため、古墳と認められたほどであり、天井石は露出し、わずかな墳丘の高まりが確認できた。斜面に寄せて構築するいわゆる「山寄せ式」を呈する古墳で、4基の古墳の中で最も墳丘の残存状態が良好であった。西側は1.5m程の段差が北西にかけて延び、また東側は桑畑が墳丘裾部を回り込んで耕作されており、同様に50cm程の段差が生じて東に延びていた。よってこの段差部に突出して構築されていると推測された。

墳丘の構築状況を把握するため、石室主軸を中心に8方向にベルトを設け、表土を除去しながら土層観察を行った。その結果、墳丘中程を環状に巡る列石、そして石室前面および西側にかけて多量の流紋岩質凝灰岩<sup>①</sup>の礫、天井石の1枚であろうか溶結凝灰岩の扁平な大石、また墳丘東側から北西に弧状の黒色の落ち込みが幅約2mの範囲で確認され、周堀の存在が判明した。本古墳は直径約11mを測る円墳である。

墳丘は旧表土である二ツ岳軽石(FP)層<sup>②</sup>(黒色土が混入し、濁っているが純層に近い)上から石室の構築と並行して、場所によって順序が多少異なるが、黒色土と褐色土、そしてロームと褐色土の混土を互層にして固く締めながら積上している。盛り土されている範囲は石室裏込め外縁から列石までである。石室後部では旧表土にまず黒色土を厚さ20cm程にたたき締め、次に褐色土を主体に積み上げ、東西両側においては逆にロームと褐色土の混土を5cm~20cmの厚さに積まれていた。

周堀は北側にかけて半円形に存在する。幅は一定ではなく、最も狭い東端で1.1m、広い北側は近世から営まれている墓地のため、墓壇により外縁が掘り下げられ正確な数値は不確定であるが、約2.7mを測る。東側から北側にかけて幅が広がっていく傾向がある。断面は逆台形状を呈する。掘り込みの角度も相違があり、東半分は50°~70°の斜度に対し、西半分は30°~40°と緩く、地形の傾斜に則している。底部はほぼ平坦で幅もほぼ一定しているが、50cm~70cmを測る。深さは西端の15cmから深い北側で1.57m、東端80cmとなっている。覆土は5層から8層に分層でき、おおむね次の通りである。第1層、表土、30cm。第2層、黒褐色土層、浅間B軽石<sup>③</sup>を少量含む、25cm。第3層、黒色土層、浅間B軽石を多量に含む砂質である、13cm。第4層、黒褐色土層、浅間B軽石およびFP粗粒を少量含む、10cm~20cm。第5層、褐色土層、FP粗粒を霜降りを含む、10cm~22cm。第6層、暗褐色土層、成分的には第5層と同様である、18cm。第7層、褐色土層、ローム粒子を少量含む若干粘質である、12cm。第8層、暗褐色土層、FP細粒を若干含む、土質は細かく弱粘性、18cm。

#### 第4章 検出された遺構と遺物

周堀内縁から約1.44m内側に周堀に沿って環状に巡る列石が存在する。石室開口部が後世の破壊によって根石は残存しているものの、左右の側壁、天井石の1石、そして裏込めまで崩落し、その際盛り土も雨り取られているために現状以上に回っていたかは不明である。列石の積み方と配置状況を見ると、根石は旧表土上に設置している。北側および南端との根石のレベル差を比較すると、北側がやや高くなっており、これは占地する地形に則する結果である。前述のごとく本古墳の盛り土はこの列が巡る内側、すなわち石室を被覆するためのみに積土され、墳丘全体においては認められない。墳頂部は土砂の流失が著しく、すでに天井石も露出していたために、どの程度の盛り土がなされていたかは推定し得ない。石室後背部ではおおむね2段に横積みになされ、石室主軸より東側10石、西側10石まで2段、以降は1段に置かれていた。石材はすべて流紋岩質凝灰岩を使用しており、最大のものは60cm×30cm、小さいものは15cm×10cm大の角礫である。盛り土の崩落を防止するための施設と思われるが、墳頂部まで全面的に設置されていたとは考え難い。

列石と周堀内縁の間に幅1.44mの「テラス」状を呈する平坦面が検出された。この平坦面は石室主軸を中心として北西から南東にかけて周堀に沿って認められ、周堀の堀り込みが無くなる西側から開口部にかけては存在しない。この部分はなだらかな傾面となり、墳丘裾部へ移行していく。よって周堀との関係が深い遺構と言え、墳丘が周堀によって外区と画される範囲に認められるのに対して平面的にはアンバランスな点が指摘できる。しかしこの遺構をテラスと認識できるかどうかは、他の古墳の墳丘残存状況が最悪ということもあり、比較検討が許されず慎重を要したが、石室後部の土層観察から、墳頂部より盛り土である褐色土が崩落堆積し、その際同じくして礫が転落している点、後世に周堀を完全に埋没せしめた浅間B軽石を多量に含む黒褐色土層が列石の根石付近まで水平にこの平坦面に流入している点、そして北西方向へ延ばしたベルトの断面による所見からも裏付けできる。地形上の制約からこのような墳丘構造を成し得たと推測されるが、詳しくは後項で述べることにする。

#### 内部構造

盗掘を受けて石室はすでに開口しており、半分程の高さまで土砂が流入し天井石が露出していたが、開口方向をほぼ真南に取る自然石乱石積横穴式無型石室である。開口部は3分の1程が崩落、また壁用石の1部が抜き取られ、後世の破壊を受けているものの比較的良好に残存していた。石材は天井石には溶結凝灰岩の平石、壁用石には表面茶褐色を呈する流紋岩質凝灰岩の壊石を使用するなど、2種類の石材を選別して構築している。

石室は旧表土であるF Pを多量に混入する黒色土層を隅丸長方形に掘り込んだ「掘り方」内に構築されている。床面はローム層を掘り下げて設定され、ほぼ水平に地形したのちよく固めている。規模は南側正面が掘削されているため正確な数値は不明であるが、現状において南北4.4m、東西は北壁際で3.65m、中央部3.25m、南端で2.6mを測り、平面的にはやや南に行くにしたがい幅を狭めている。深さは北壁中央部で90cm、東壁の北端94cm、南端60cm、西壁において北端84.2cm、南端58cmで北側から南側へ掘り込みの深さに差が生じている。これは金山からの傾斜面が平坦面へと転換する接点に構築しており、旧表土が周堀内縁より掘り方南端まで約80cmのレベル差があるため、傾斜度に対して掘り込みの深さを調節することにより水平化を考慮している。各壁は約75°で立ち上がる。

奥壁は方形の角の多い平石を2段に平積みとして、間隙には角礫を充填する。特に根石が5角形状を呈するため、上辺での「座わり」が悪く2段目を据える際には角礫を丁寧に斜辺に積み、水平に整えている。根石がほぼ直立して据え置かれているのに対し、2段目は10°前後で内傾する。

左壁および右壁は同じく根石に大振りの壊石3石を配置し、上部に積み上げていく過程でおおむね横積み

法にて小振りな礫石を使用する傾向が認められる。比較的残存度の良好な左壁を観察する限り顕著である。逆に右壁の中位の用石が引き抜かれるなど良好とは言えないが、天井までやや大振りな礫石を積み上げているため、用石の使用が左壁と異なった様相を示している。左壁で5°、右壁で7°の転びが認められる。

天井石は現状において2石残存するが、表土の除去作業中扁平な大石が1石崩落して来たかのように石室正面にて検出された。側壁根石の有り方から恐らくもう1石存在していたのではないかと思われ、石材、規模等からみて、この平石が天井石の1枚に間違いなく、よって天井石は3石構成であったと言えよう。

床面は盗掘の際完全に擾乱されてしまい、玄室床面の存在さえ不明であり、他の石室の様相から注意してみたが、礫石や玉砂利のひとつも検出されない。

裏込め石は壁用石と同じ石材の角礫や歪角礫をもって、掘り方と根石の間隙を底部より直接埋填し、石室の構築と墳丘の盛り土作業と並行して行なわれている。壁最上部まで土は一切使用せずに積み上げており、拳大から人頭大のものが目立ち、盛り土と接する部分、すなわち裏込め外縁部には比較的大振りな礫をもって押えとしている。

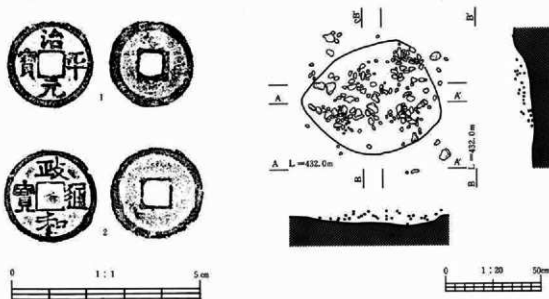
#### 遺物出土状況・遺物 (図180・181・図版75)

1号墳は周堀が廻っているが、周堀内の遺物は見られなかった。また石室内は掘り方に至るまで擾乱されているため、掘り方から「治平元宝」(1)(1064年初鋳)が1枚出土したのみである。更に石室前面の崩落石下から「政和通宝」(2)(1111年初鋳)が1枚出土している。

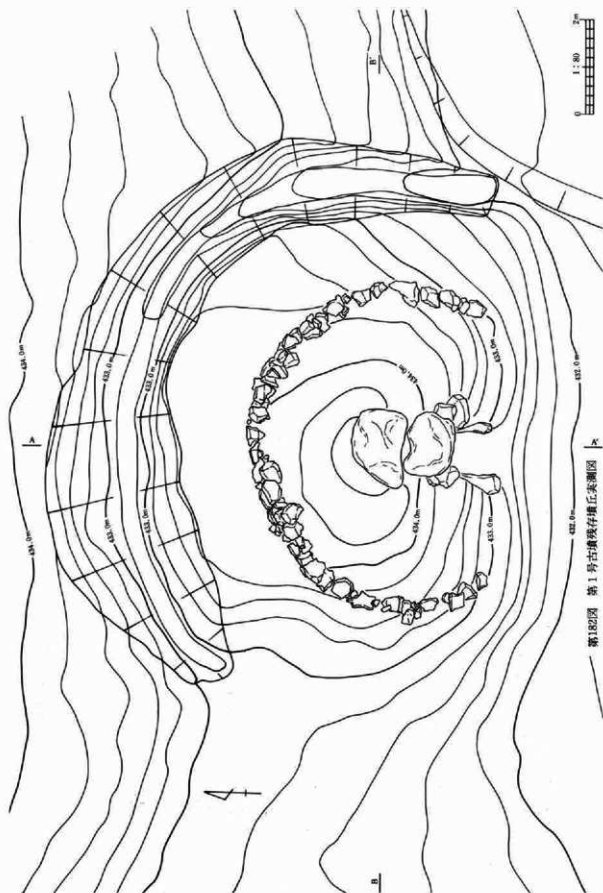
墳丘の南東部では、裏込めの崩落石下から数10点スラグが集中して検出されている(図181・図版75)。この部分には明確な遺構は検出できなかったが、スラグの平面・垂直分布を見ると浅いピット状のものが想定される。更にフィゴの羽口と炉壁と思われるものも出土しているため、炉が存在していた可能性が高い。なお年代を示す遺物の出土がなく、1号墳の墳丘もこの部分には残っていないため、年代や1号墳との関係は不明である。

#### 註

- (1) 沼田市教育委員会角田景氏御教示
- (2) 「特選、大山人遺物と遺跡」『月刊考古学ジャーナル1』 1979
- (3) 註(2)に同じ。



第181図 第1号墳南東部鉄滓出土状況



## 第2号古墳土層柱

## 1 表土

- 2 明褐色土層 ロームアロック少量含む、土質きめ細い。  
 3 黒色土層 F P細粒・ロームアロック少量含む。  
 4 明褐色土層 F P細粒・ロームアロック少量含む。  
 5 明褐色土層 黒色土少量含む。  
 6 明褐色土層 黒色土・F P細粒含む。  
 7 黒褐色土層 黒色土主体でローム含まない。  
 8 黒色土層 F P細粒多量に含む。ロームアロック少量含む。  
 9 赤褐色土層 ローム主体で黒色土少量含む。  
 10 黒色土層 F P主体で軽石面に黒色土が突出してゐる。  
 (軽石に近い状態である)  
 11 明褐色土層 ローム粒少量含む。  
 12 明褐色土層 F P細粒少量含む。  
 13 明褐色土層 F P細粒・小礫含む。  
 14 明褐色土層 13層と同様であるが、やや褐色味が強い。  
 15 明褐色土層 B Pを主体とする。  
 16 明褐色土層 上部にF P細粒含む。  
 17 黒色土層 F P細粒多量に含む。  
 18 暗褐色土層 F P粒多量に含む。  
 19 黒色土層 16層に比してF P多量に含む。  
 20 明褐色土層 F P・ローム粒少量含む。粘性強い。  
 21 明褐色土層 F P・ローム粒2層と少量含む。  
 22 黒色土層 F P細粒多量に含む。  
 23 明褐色土層 F P細粒・ローム粒多量に含む。

A'

A' L = 435.0m

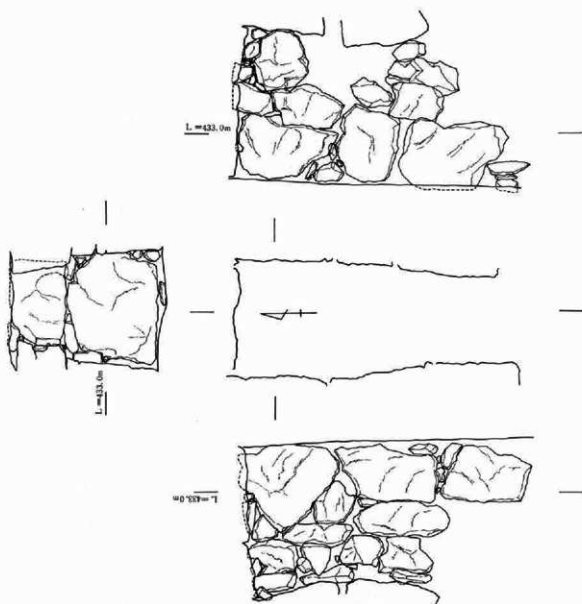


B' L = 434.0m

B' L = 434.0m



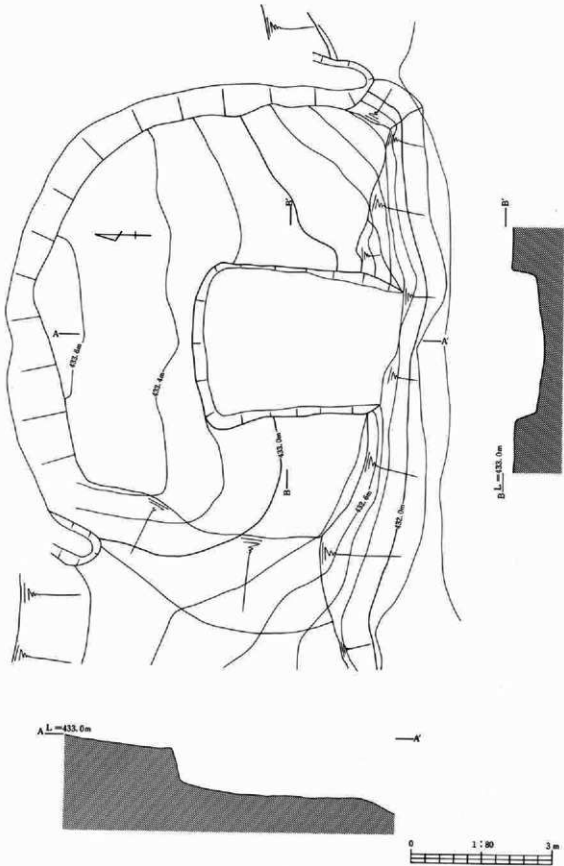
第183図 第1号古墳断面図



0 1:40 1.5m

第184図 第1号古墳石室実測図





第185図 第1号古墳掘り方実測図

## 第2号古墳 (綜覧古馬牧村第28号古墳)

本古墳は3基の古墳が占地する平坦面の中央部やや南寄りに、第1号古墳から南へ20m、第3号古墳からは北へ11mと両古墳にはさまれて所在する。綜覧によると古馬牧村第28号古墳に相当し、地番は大字師字金山1930、地目は山林、大きさ22尺、高さ7尺、円形と記されている。調査前は山林となっており、墳丘東側には隣接して墓地在営まれていたために広い範囲に破壊を受け、石室の石組が露出していた。西側には楕円形を呈する小規模な墳丘の高まりが認められた。

## 外部構造

盛り土の流失が著しく、すでに天井石や奥壁の一部が露出するなど原状をほとんど留めていなかったが円墳であろう。表土を除去するとすぐに裏込め石が現われ、わずかに残存する盛り土を切断して観察した結果、ロームと褐色土を互層にして積み上げている。トレンチを設定して周墳の存在を追求したが、土層の見から存在していなかったと思われる。

## 内部構造

今回調査した4基の古墳のなかで最も残存状態が良好な石室である。溶結凝灰岩を主として使用する自然石乱石積横穴式袖無型石室で、S-13°-Eに開口する。

石室は旧表土であるF Pを含む黒色土層より隅丸長方形(やや四辺形気味)に掘り込んだ「掘り方」内に構築している。南壁は石室への入口のため「墓道」として、中央部が掘り開かれている。規模は南北5.62mを測り、墓道を含めると6.55m、東西3.95m、深さは北壁93cm、西壁58cm(いずれも中央部にて)。墓道の長さは1.05mまで確認できた。幅は56cm-90cmで、入口部の方が幅を狭めている。壁高は最高70cmを測る。根石は奥壁1石、左壁4石、右壁4石を配置し、用石は奥壁、天井石を除いて大石は使用しておらず、全体的に中掘りの石が横積みを通り積み上げられている。間隙には土と礫をもって充填する。左壁に11°の転びが認められるが、墓地の造営の際に裏込め石まで取り除かれてしまった右壁は約30°ほど内傾している。奥壁は2段に構成され、根石は平積み、2段目は横積みで据えている。根石は調査した4基の壁用石のなかで最も大きく、2.5m×1.4m×0.6mを有する規模である。形状は台形を呈し、構築時に面を最大限に利用するために長さの短い方を下底に据えている。接地させた時点で右辺がほぼ直立するのに対して左辺は斜度があるため掘り方床面との間に空間が生じてしまう。よって左壁根石をこの空間を考慮に入れ下底部ぎりぎりの位置に置き、右壁の根石に置き、石壁の根石でもって石室平面の規模を調整したと推定される。天井石は2石構成である。後方が大きく、長さ2.8m、幅1.75m、厚さ26cmを測る。前後の用石間は20cmの間隙があり、前石の南辺は間仕切石の設置地点の上部に一致している。

石室は平面上、間仕切石をもって玄室と閉塞部を区画する。間仕切石は安山岩の割石1石を石室主軸に直交させて掘り方床面に直接設置させている。玄室側の面は非常によく研磨されており、底部も直線的で座わりが良い。壁との間隙には同材の礫を重ねて充填する。玄室は調査に入る以前は土砂が天井付近まで入り込んでいた。長さは左壁際2.9m、中央部2.85m、右壁際2.74m。幅は奥壁下で1.31m、中央部1.6m、間仕切石で1.29mを測り、弱い脚張りを呈する。また構築状況であるが、掘り方床面に6cm×7cmから最大26cm×33cmの礫(その大部分が流紋岩質凝灰岩)を礫石として敷き詰めて、次に玉砂利を敷設して床面を整えている。なお床面の状況を観察すると非常に雑な感を受ける。礫石は玄室奥半分には扁平な礫を互いに接するように敷かれているのであるが、対して前半部分は各々の間隙が多く、小礫を並べているにすぎず、対照的である。玉砂利の敷設状況をもみても礫石上に厚く敷き詰めるのではなく、礫石間の凹地に充填し平坦面を作っ

ているため、量的には少ない。床面から天井石まで1.4m～1.67mである。

閉塞部は短く間仕切石より長さ53cm、幅1.1mを測り墓道が続く。床面と玄室のレベル差は無くほとんど同一であり、褐色土を15cmほど貼り固めている。閉塞石は天井石近くが抜き取られている他は残存状態が良くほぼ原状を保っていた。石材は流紋岩質凝灰岩の小～人頭大の角、亜角礫を主として使用し、墓道の確認できうる箇所から積み上げている。

裏込めは左壁と奥壁裏側にて観察した結果、2通りの工法が認められた。1つは奥壁裏にて掘り方床面から旧表土下部まで壁と奥壁との間隙にロームと褐色土を互層にして押し詰め、よく固めながら埋填し、旧表土から上部は礫をもって積み上げていく。また礫とともに純粋なF Pが裏込め用に使用されていた。左壁裏では掘り方床面から直接礫を埋填して墳丘盛り土作業と並行して積み上げていることである。このような工法の相違が生じる原因は、壁用石の大きさに合わせているため、上部からの荷重を密に考慮していると言えよう。

#### 遺物出土状況 (図189・図版69)

出土遺物は、墳丘上遺物と石室内遺物に分けられる。墳丘上遺物には土師器環と埴輪があり、前者は閉塞石上面、後者は閉塞石上面と石室内羨道部寄りの埋土上部から出土している。土師器環は「墓前祭」に使用された可能性が考えられる。また埴輪は盛土がほとんど流失しているため不明であるが、墳丘周辺では埴輪が表採されていないため、羨道部付近に樹立されていた可能性も考えられよう。

石室内遺物には、直刀(3)・銅劍(3)・鉄劍(1)・鉄鎌(8)・金環(6)・土製丸玉(12)・ガラス製小玉(5)・切子玉(4)などがある。また人骨・獣歯も遺存していた。遺物と人骨は奥壁寄りに多く、中央に小刀、西側には上腕骨・尺骨・指骨などの腕の骨が多く認められ、その付近からは銅・直刀が出土している。また後頭骨の認められた東側では、金環・土製丸玉・ガラス製小玉・切子玉などの首・耳飾りと直刀が出土している。これに対し、玄室羨道部寄りでは西側に大腿骨・胫骨などの足の骨が多く認められ、遺物は両側壁際に鉄鎌が集中しているのみである。

石室内の人骨は、各部位ごとに集骨されており、飾身具も身につける部位の骨の付近にすべて集められている。しかし、直刀・鉄鎌といった武器類は分散して出土している。これは遺骸の「片付け」に際し、飾身具も同様に片付けた結果と考えられる。またその時期は、遺骸が骨化した後であると考えられる。

#### 出土遺物 (図190～193・図版76～78)

##### 銅

銅劍(1～3)と鉄劍(4)があり、いずれも玄室奥壁寄り西側から出土している。銅劍は断面四角形を呈し、両端部の離れているもの(1・2)と、断面満鉢形で両端を重ね合わせているもの(3)の2種がある。なお、5は4に比してやや細身である。鉄劍は3片が出土し、すべて接合できたものの1片は欠損している。錆化が進んでいるため、明確な断面形は不明であるが、ほぼ円形を呈すると考えられる。端部の状態は不明である。

##### 金環

すべて銅地金金環のもので、玄室奥壁寄りの東側から6点出土している。これらは、太さや金の遺存状態などから3対と考えられる。5・6は最も金の遺存が良く、端部には金の紋目が残っている。重さは30.4g・33.1g。7・8はやや細身で、金はほとんど遺存していない。重さは24.8g・26.0g共に端部に金を絞り込むための凹みを有する。9・10は内側に少量金が遺存しているもので、端部に金を絞り込むための凹みを有している。重さは31.7g・32.0g。

#### 第4章 検出された遺構と遺物

##### 玉類

切子玉(12~15)は水晶製で、穿孔はすべて一方より行われている。長さは12が29.6mm・13が22.4mm・14が19.6mm・15が20.5mmを測る。

霽玉(16)は原位置を押えられなかったもので、石製である。明緑灰色を呈し、軟らかく、長さは12.7mm、長径は11.7×9.5mmを測る。石材は不明。

土製丸玉(17~28)は12点出土したが、原位置を押えることができたものは9点(17~25)である。表面は黒色処理が施されているため黒色を呈している。19・20・22・24は表面が剥離しており、胎土は灰褐色を呈している。穿孔はすべて焼成前である。長さは4.6mm~8.3mm、直径は8.2~9.7mmを測る。

ガラス製小玉(29~33)は5点出土しているが、原位置を押えられたものは1点(31)のみである。

##### 大刀・小刀

玄室奥壁寄りから大刀2振り、小刀1振りが出土している。いずれも平棟、平造りである。34は現存長53cmを測る。茎は目釘孔の部分で欠損している。区部には錐が遺存している。35は現存長49.7cmを測るが、34に比して茎・刀身共に幅が広く、全長は80cm前後になるものと考えられる。刀身の錆化は著しいが、目釘や錐・鏝は遺存している。36は現存長28.2cmの小刀で、茎には目釘や木質が遺存している。

##### 資金具

倒印形をした銅地金金張りの資金具である。小刀(36)に伴うものと考えられる。

##### 鉄鏝

鉄鏝は8本出土しているが、そのうち6本は細根式の棒状部である。42・43は茎が遺存している。42・43は無茎平根式で、中央には小孔が認められる。

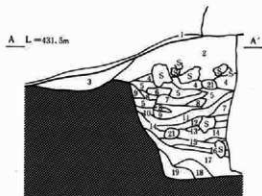
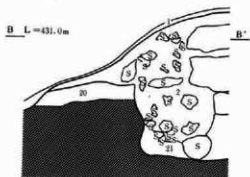
##### 土師器

閉塞石上面から出土した坏(45・46)と墳丘付近で表採された短頸壺(4)がある。いずれも内面は黒色処理が施されている。

##### 埴輪

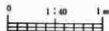
埴輪には円筒埴輪(図192)と形象埴輪(図193)がある。円筒埴輪には全形を知りうるものはないが、基部(56)の直径が18cmと小さいため、二段のタガを有する小型のものであろう。口縁部(49・50・52)は外反し、端部は面取りを行い、内面には浅い沈線をめぐらす。これらの円筒埴輪の外周調整は、すべて板状工具によるナデである。形象埴輪にも全形を知りうるものはない。62は外面を板状工具によりナデしており、円筒形を呈している。現存高は25cmを測るが透かしが認められないため、形象埴輪の台部と考えた。63は円筒埴輪か形象埴輪の基部と考えられるが、直径が62に近似するためここでは形象埴輪に含めた。64は透かしが1ヶ所認められ、下位(上位?)の内側は欠損しておりこの部分に段があったと考えられる。59には赤色塗彩が認められる。



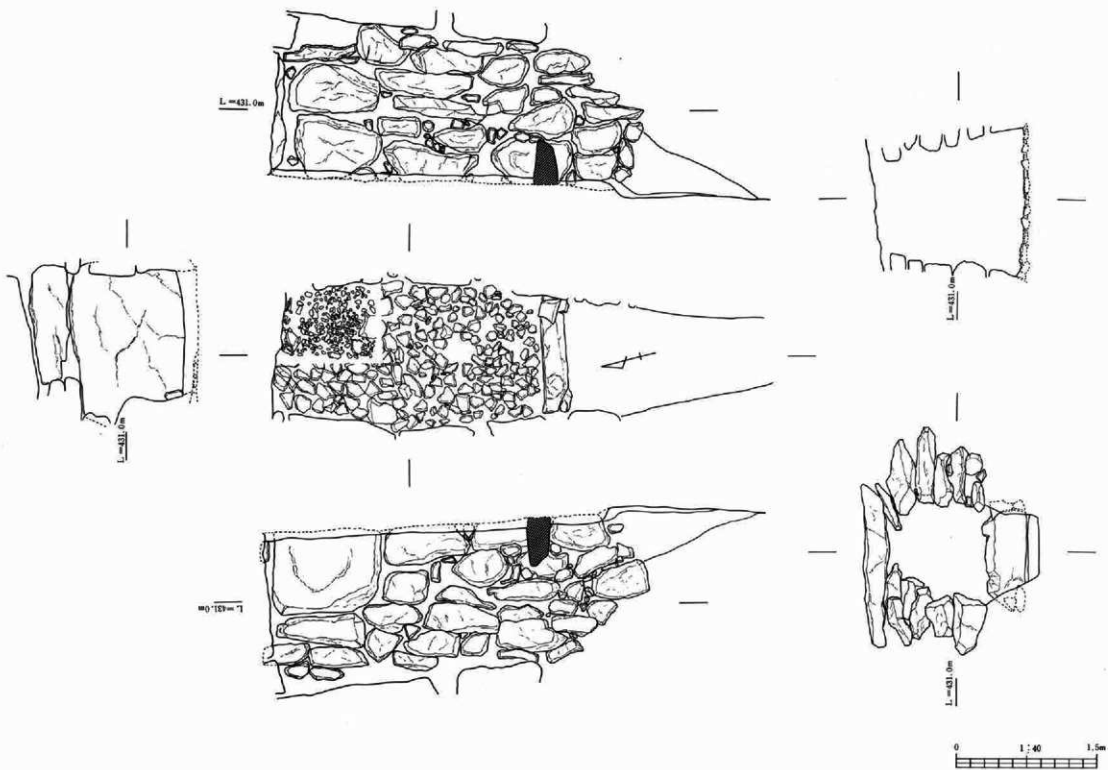


第2号古墳土層註

- |                                   |                        |
|-----------------------------------|------------------------|
| 1 表土                              | 12黄褐色土層 黒色土少量含む。       |
| 2 暗褐色土層 奥壁近くにF P 多量に含む。こぶし大の礫を含む。 | 13黒色土層 ローム少量含む。        |
| 3 暗褐色土層 F P ・礫含まない。               | 14褐色土層 ローム主体で黒色土含む。    |
| 4 褐色土層 ローム主体で暗褐色土含む。              | 15明黄褐色土層 ローム主体。        |
| 5 暗褐色土層 ロームブロックと黒色土の混土。           | 16黒褐色土層 ロームブロック多量に含む。  |
| 6 暗褐色土層 5層に比してローム多く含む。            | 17灰黄褐色土層 ロームと白色粘土の混土。  |
| 7 黄褐色土層 ローム粒多く含む。                 | 18灰黄褐色土層 17層に比して黒味が強い。 |
| 8 黒色土層 F P 粒少量含む。                 | 19黒色土層 ローム粒少量含む。       |
| 9 黄褐色土層 ローム主体で暗褐色土少量含む。           | 20黒褐色土層 F P 粒少量含む。     |
| 10黒褐色土層 F P 細粒含む。                 | 21ロームブロック              |
| 11暗褐色土層 ロームブロックと黒色土の混土。小礫少量含む。    |                        |



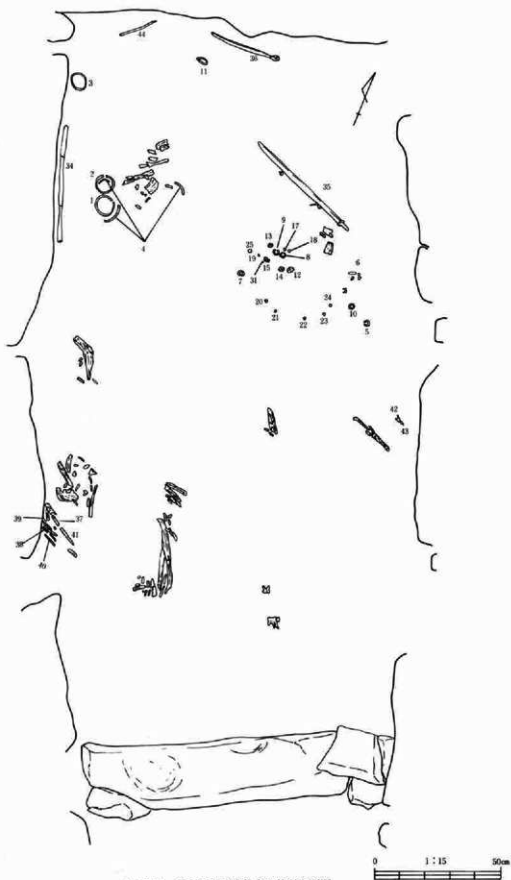
第187図 第2号古墳断面実測図



第388图 第2号古墳石室実測図

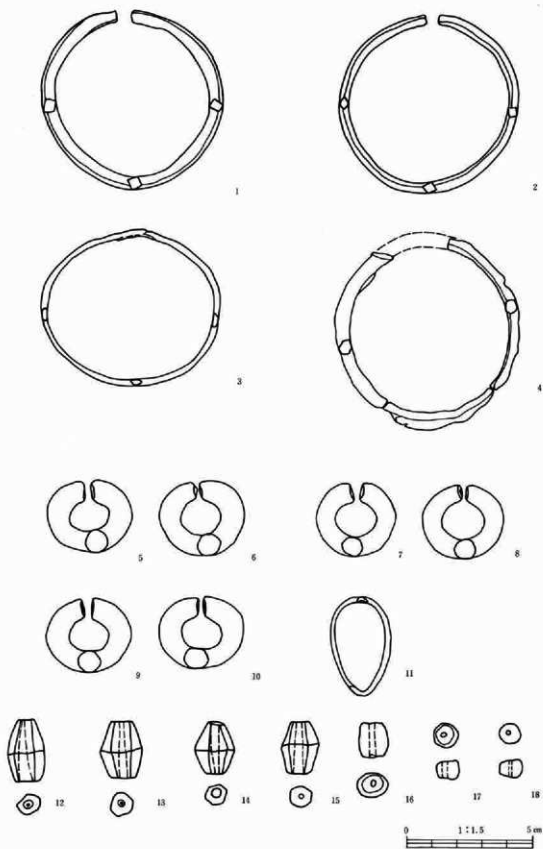




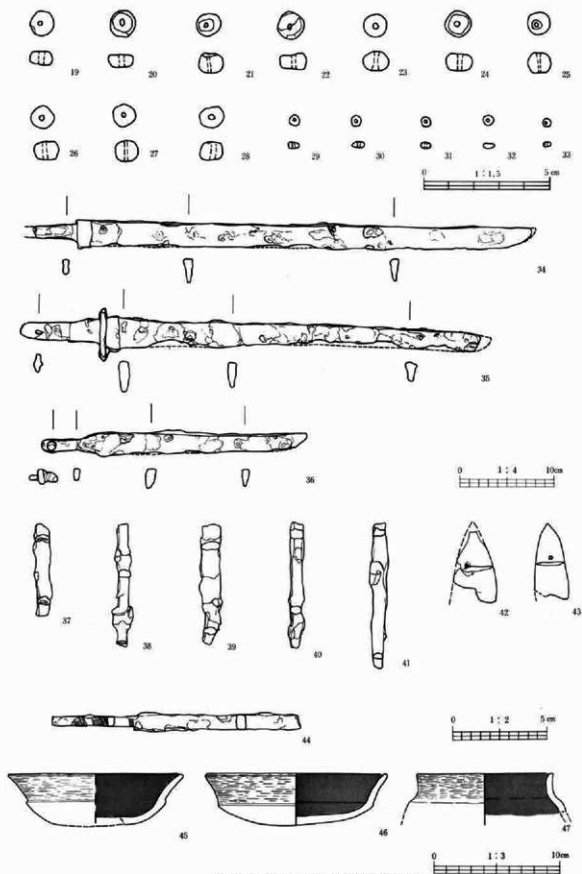


第189図 第2号古墳遺物出土状況実測図

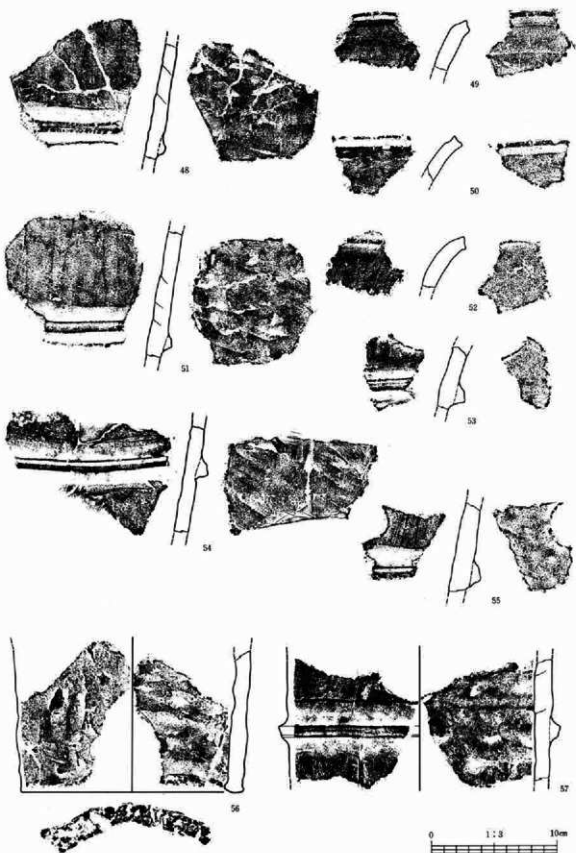
第4章 検出された遺構と遺物



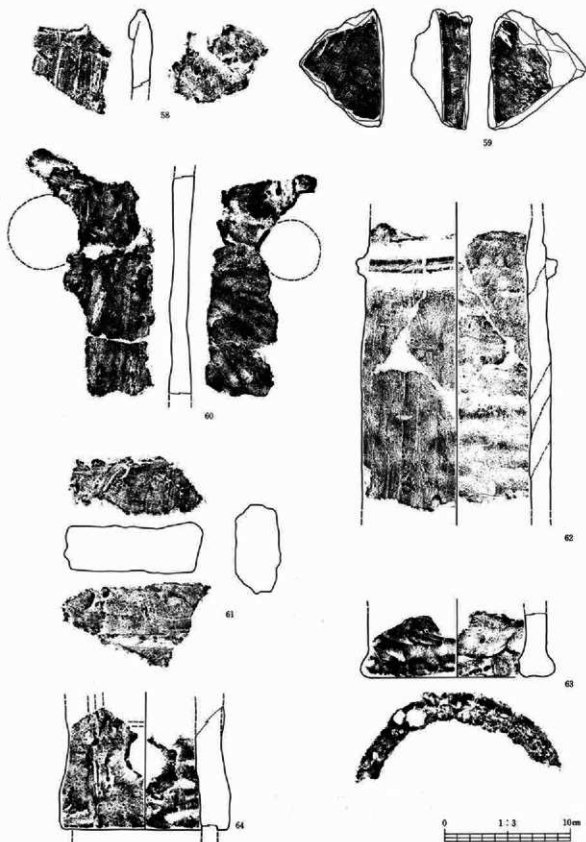
第190図 第2号古墳出土遺物実測図(1)



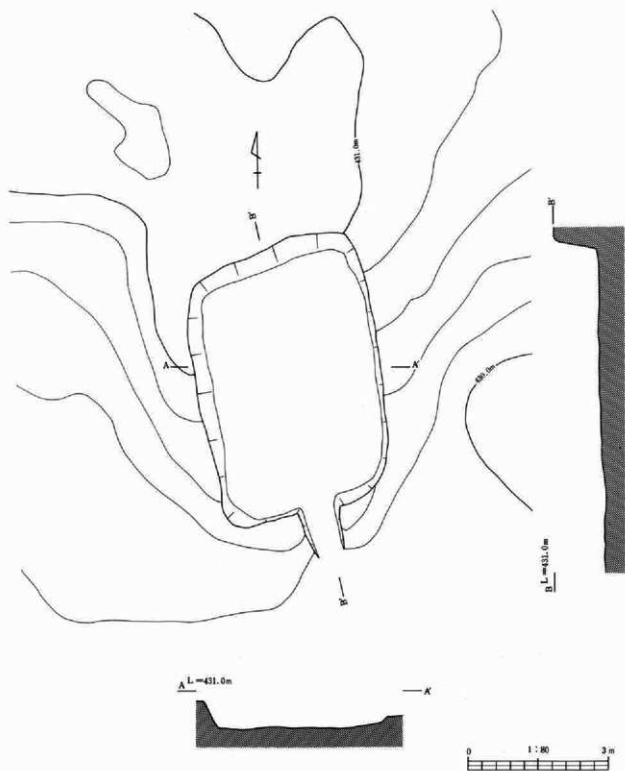
第191图 第2号古墳出土遺物実測図(2)



第192図 第2号古墳出土遺物実測図(3)



第193図 第2号古墳出土遺物実測図(4)



第194図 第2号古墳掘り方実測図

## 第3号古墳 (総覧古馬牧村第27号古墳)

本古墳は第2号古墳の南約11mの、平坦面が再び斜度を強めて南方へ下向き始める突端部に占地する。総覧によると古馬牧村第27号古墳に相当し、地番は大字師字金山1931、地目は山林、大きさ26尺、高さ9尺の円型と記されている。調査前は桜や楡、杉等の林となり、墳丘西側は2号墳に隣接する墓地への参道が、また南側は墓地により南側西から北東方向へ大きく削り取られ、崖となっている状態であった。下草を刈ると、楕円形を呈するわずかな高まりと、裏込め石と思われる多数の礎、奥壁の一部であらう半欠の大石の存在によって古墳と認められた。

## 外部構造

墳丘西側を参道に、南側を墓地で削り取られ著しく形を変えていたが、円墳と推定される。表土を除去すると裏込めと思われる礎が多量に検出された。盛り土の状況を把握するために墳丘を切断した結果、盛り土は旧表土であるF Pを含む黒色土層からロームと褐色土を互層にして裏込め石を包み込むようにして盛り上げている。しかし、盛り土の流失や、石室上部の崩壊が著しいため詳細は不明である。

石室入口部より南東方向へ延びる墓道と推定される掘り込みが検出された。現状で西壁1.85m、東壁1.2m、幅は入口部で1.0m、南側の残存する先端で90cm、壁高は入口部で30cmを測り、底面は平坦でよく締っており、地形に従い緩く傾斜する。しかし墓地によって地山が削り取られているため南側延長上は不明である。なお東壁は褐色土を盛り寄せ、整形している状況が認められる。

トレンチ調査の結果、周堀の存在は無かったと思われ、墳丘規模等は明らかではない。また埴輪も調査中一片も検出されなかった。

## 内部構造

天井石はすでに取り去られ、裏込め石等も露出するなど崩壊が進んでいたが、自然石乱石積の横穴式袖無型石室で、S—28°—Eに開口する。

石室は旧表土であるF Pを含む黒色土層を隅丸の長方形に掘りくぼめた「掘り方」内に構築されており、規模は南北5.32m、東西3.63mを測り90cm東側で墓道とするため壁を掘り込んでいる。北壁(奥壁側)と南壁は長さにおいて、80cm程前者が長くなっているなど平面的に差を生じている。掘り込みの深さは各壁中央部で北壁70cm、西壁53cm、東壁46cmを測り、地形の傾斜に則して掘り方床面の水平化を考慮している点が認められる。床面は南方に向かって若干ではあるが緩く傾斜する。

石室は溶結凝灰岩を石材として構築しており、全長4.52mを有する。玄室は左壁際で3.4m、中央部3.29m、右壁際3.6m。幅は奥壁際で1.76m、中央部1.66m、間仕切り石上で1.38m、閉塞石上で1.11m。羨道は長さ1.22mを測り、掘り方平面と同様に入口部より奥へ進むにつれて広くなり、65cmの差を生じている。

側壁は左3石、右4石をもって根石としている。後方2石は大石を、前方はやや小振りな石を使用している。中でも左壁最奥部の用石は2.5m×1.26m、厚さ40cmあまりで最も大きい。また左壁奥より2番目の用石は、ちょうど半分程に割れたため、玄室床面に転倒していた。そしてその上部に二次的な閉塞用の石積みがなされていた。

全体的に破壊が進み、壁高等は明らかではないが、根石は平石の最大面を壁面として据え、2段目、3段目は横積みあるいは小口積みに積み上げ、上部になるほど用石が小振りになっていく。

奥壁は天井石が無く明らかではないが、現状で2段構成で平積みとする。根石は1.82m×1.13m、2段目は左方が半分程欠失しているが、推定1.6m×70cm程であらう。残存する側壁の高さ、他の3基の古墳から

#### 第4章 検出された遺構と遺物

検討しても恐らく2段構成であろう。根石底部より高さ1.8mを測り、側壁との間隙は礎で充填する。

石室は框状に組まれた間仕切り石で支室と閉塞部に区画する。間切り石は礎石が敷設されたのち3石を横直列に設置している。支室の床面は掘り方床面に10cm×8cmから26cm×27cm程の流紋岩質凝灰岩の割石を間隙なく丁寧に敷設して礎石としたのち、玉砂利を5cm～10cmの厚さに均一に敷き詰めている。

閉塞は入口床面に根石として小礎をまず敷き並べ、上部に長さ59cm、幅22cm、厚さ26cmおよび長さ35cm、幅35cm、厚さ29cmの2石を横置きに直列させて外界と区画していた。支室床面と掘り方床面との差は15cmである。また閉塞石として拳大から人頭大の角礎を主に積み上げていた。

裏込め石は流紋岩質凝灰岩の礎を多用しており、構築技術として、石室の根石が大きく、またその高さがある部分の裏側には旧表土層下部まで褐色土をまず押し詰め、次に礎を盛り土とともに積み上げているが、壁高の少ない所、用石間の接点部や小振りな用石を使用している所は、礎を直接床面から埋填している。この事実は調査した他の3基についても共通しており、上部より壁にかかる荷重を考慮し、弱い部分への補強手段であり、高度な技術が示されている。

#### 遺物出土状況 (図198・図版72)

石室内遺物には金環・勾玉・切子玉・管玉などがあり、支室中央から奥壁手前50cm程の間にはほとんど集中する。これは石室主軸付近と西側壁付近の2群に分けられる。前者は飾身具、後者は壁際が鉄器でやや離れて金環が出土している。大刀は羨道寄りの西側壁際から出土している。

#### 出土遺物 (図199・図版79)

##### 金環

金環はすべて銅地金金張で、8点出土している。これらは形態により4対と考えられる。1・2は金の遺存が良好で断面は円形を呈する。重さは23.1gを測る。3・4は細身で金はほとんど剝離している。重さは20.1g・17.3gを測る。5・6は金が半分程遺存しており、断面は楕円形を呈する。重さは25.9g・25.0gを測る。7・8は小型で断面楕円形を呈し、重さは8.5g・8.1gを測る。金の遺存は良好である。

##### 玉類

勾玉(11-14)は4点出土しており、いずれも瑪瑙製で大きさが異なる。形態は「コ」の字形を呈し、右側より穿孔している。なお12-14の3点は左側より浅く孔を広げている。

切子玉(15・16)は水晶製で、共に長さは18.5mmを測る。穿孔は一方からである。

管玉(17)は1点のみ出土している。断面は六角形を呈し、穿孔は両側から行われている。石材は不明。

ガラス製小玉(18-23)は大ぶりのもので、すべて管切法で造られている。長さは4.9-6.2mm、直径は6.9mm-8.7mmを測り、かなりばらつきが見られる。色調は23が淡青色、他は濃青色である。

石製小玉(24)は管玉(17)と同質の石で造られている。長さ2.8mm、直径7.0-7.6mmを測る。色調は濃緑色を呈する。

##### 大刀

現存長75.6cmの平棟・平造りの直刀である。鏃・鐔・目釘が遺存している。また基先端に目釘孔がある。

##### 鉄製品

28-31は細根式鉄線の棒状部で、27は尖根式の両刃の鉄線である。26・32は不明。

##### 瑪瑙目

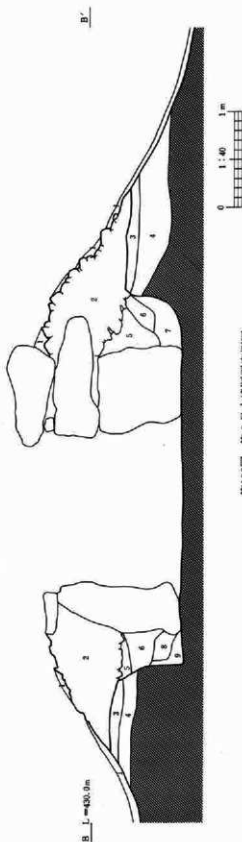
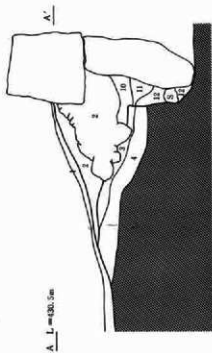
9・10は対になると考えられるもので、銅地金金張製である。9には木質が遺存している。



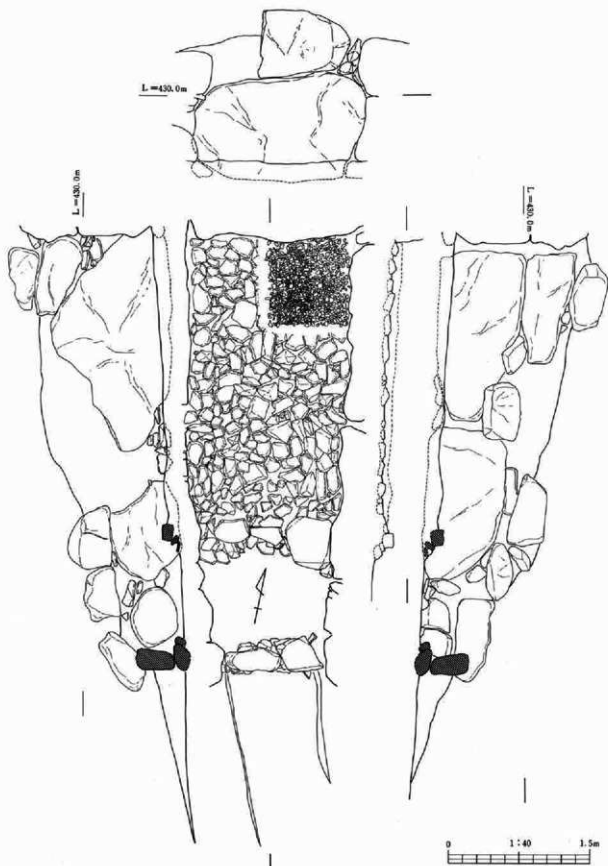


第3号古墳土層柱

- 1 葺土
- 2 明褐色土層 ローム主体で、黒色の石多量を含む。
- 3 黒色土層 FP主体で軽石間に黒色土充満する。
- 4 黒褐色土層 ローム粒多量を含む。
- 5 明褐色土層 ローム粒多量を含む。
- 6 明褐色土層 ローム粒主体で黒色土少量を含む。
- 7 明褐色土層 ロームコア玉体で、黒褐色土含む。
- 8 暗褐色土層 ローム粒少量含む。
- 9 暗褐色土層 9層と同層であるが、やや黒味を帯びる。
- 10 黒褐色土層 FP粒多量を含む。
- 11 黒褐色土層 11層と同層であるが、黒色味強い。
- 12 暗褐色土層 ローム粒多量を含む。

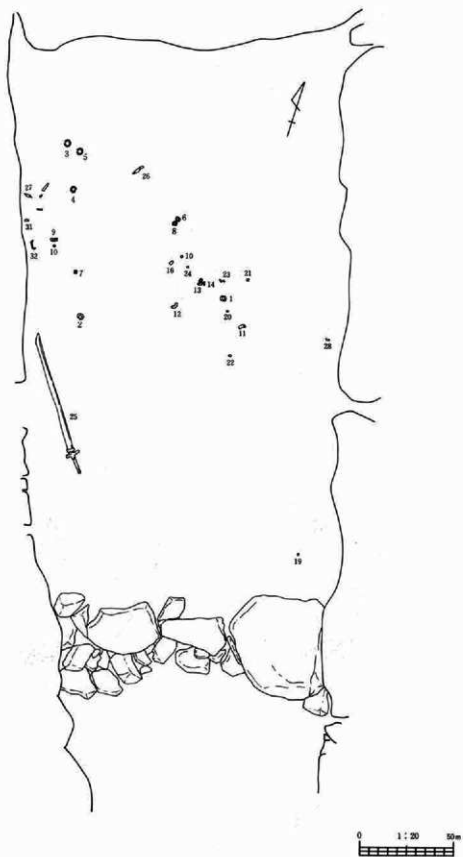


第196図 第3号古墳断面実測図

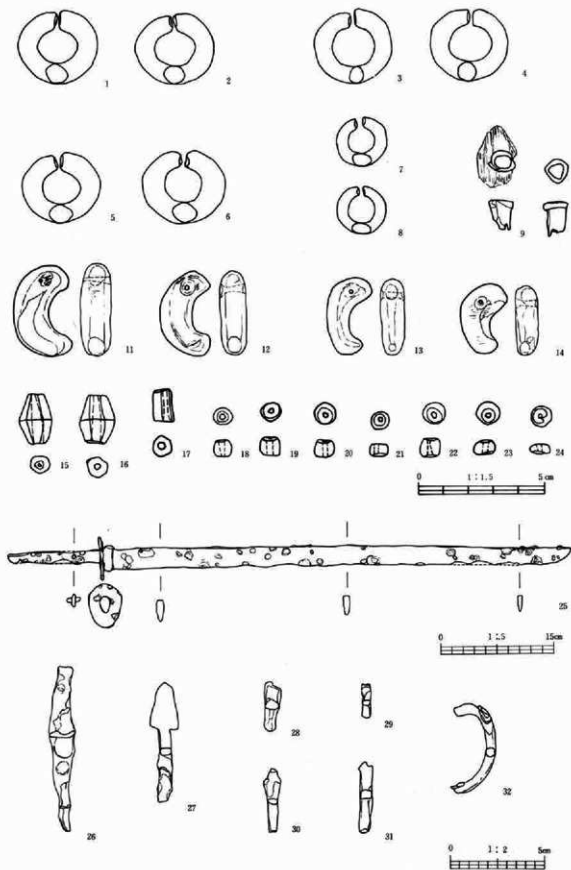


第197図 第3号古墳石室実測図

第4章 検出された遺構と遺物

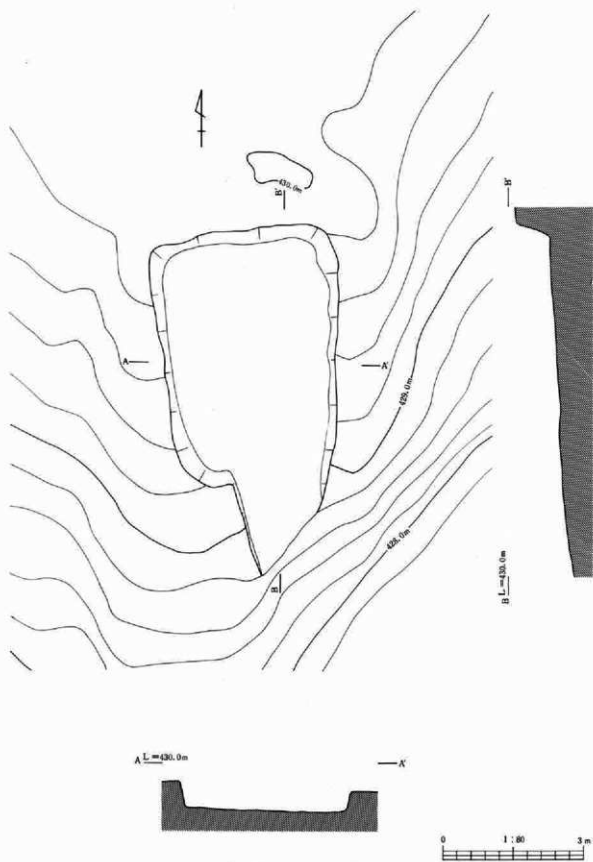


第198図 第3号古墳遺物出土状況実測図

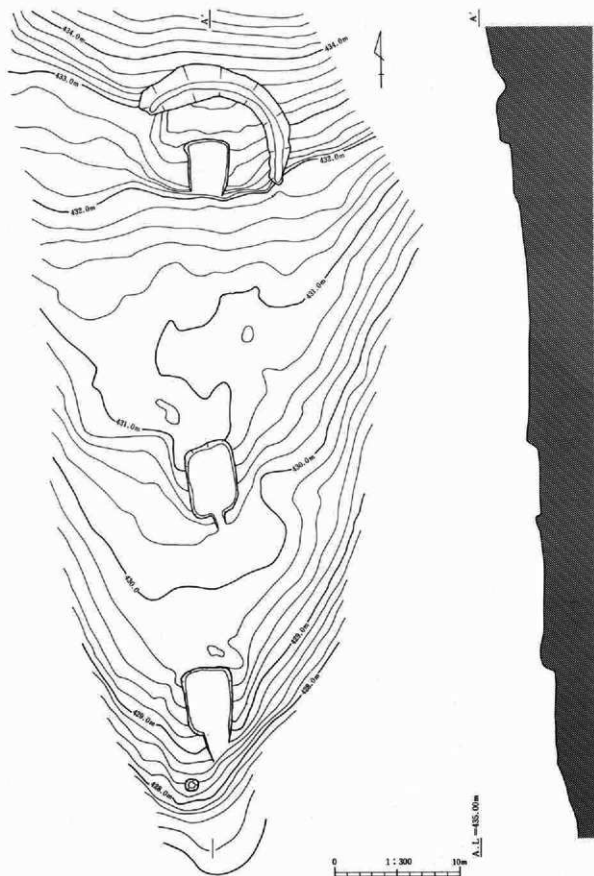


第199図 第3号古墳出土遺物実測図

第4章 検出された遺構と遺物



第200図 第3号古墳掘り方実測図



第201図 第1.2.3.号古墳地山成形実測図

## 第4号古墳 (綜覧古馬牧村第34号古墳)

本古墳は三峰山麓から南南西に狭長に延びる舌状を呈した尾根のはば付け根東端に占地する。綜覧によると古馬牧村第34号古墳に相当し、地番は大宇節字金山2001の1、地目は山林、規模は不詳；石室は開口され、通称白骨塚と記されている。調査前は山林となっており、墳丘と思われる高まりもほとんど認められず地元の方の証言により所在が明確となった次第である。第1号古墳からは真東にあたり、直線にして162m隔れている。標高はおよそ446mで、前者との比高差は13mである。

## 外部構造

古墳の東側は崖が南流しており、西側は農道が南北に走り、両者に築まれた状態で存在していた。墳丘盛り土は流失著しく、石室部分で若干残存しているにすぎず、表土を除去すると壁用石、裏込め石と思われる多数の礎および壁用石であろうが溶結凝灰岩の平石等が検出され、石室の存在が確認された。残存する盛り土の土層状況を把握するために石室主軸に直交して4本のトレンチを設定し観察した結果、盛り土は旧表土であるFPを若干含む黒色土層より主として褐色土を積土していると推定される。しかし残土が薄いため詳細は不明である。コンターラインから円墳と思われるが、周堀の存在も確認されないため、墳丘の規模、その他施設等はつかみ得なかった。墳丘部分の表土除去作業の結果、石室開口部左壁附近から西側を回り北側奥壁後背部にかけて散在する角礫の外縁が石室を巡るように径4.8mの範囲で並ぶかのごとく検出されたが、石材が裏込め石と同様であり、表土上はすでに多数認められている事実を踏まえて、この外縁が墳丘裾部であろうと認識するためにはトレンチの所見を合わせても論拠が弱い。なお墳輪は一切出土していない。

## 内部構造

綜覧の記載事項により、石室は古くから開口され、現状においても天井石は持ち去られたり、石室内に崩落して壁上部の破壊が進んでいたが、比較的残存度良好な自然石乱石積横穴式両袖型石室である。開口方向をS-4°-Eに取っている。

石室は旧表土のFPを若干含む黒色土から方形に掘り込まれた「掘り方」内に構築されている。規模は南北5.0m、東西3.2m、深さ10cm~20cmを測り、壁面は約60°の斜度で立ち上がっている。南壁はすべて開かれているため、プランは「コ」の字状を呈する。床面はローム層を掘り込んで設定され、平坦に地形を行ったのちよく踏み固め根石を配置している。

本古墳の石室は他の3基には見られない両袖型を呈し、玄室と羨道部が明確に区分される。全長3.67mを測る。壁用石はすべて溶結凝灰岩を使用しており、第2号、第3号両古墳と同様である。

玄室は全長2.32m、幅は奥壁下で1.3m、中央部1.62m、入口部0.78mで弱い「胴張」形を呈し、奥壁から1.4mの地点で幅1.62mを測り最大値を取る。プラン上から見ると、左右両壁の根石ラインが最大に張る箇所に相違があり、左壁はほぼ中央に、右壁は奥壁より3石目と4石目の根石接点部に来ている。全体的に奥から入口部にかけて広まる傾向を示している。また壁の状況であるが、奥壁は2段構成の平積みとし、間隙には角礫、亜角礫をもって充填する。上下両石ともほぼ直立して据えられ、掘り方床面から2段目上辺まで高さ1.58mである。根石は壁用石中最大で1.18m×0.87m×0.3mの扁平な大石を使用する。左壁は根石に比較的大石を奥壁側から3石、小掘りを1石、計4石を配置して、おおむね横積みに積み上げられているが、用石によっては小口積みの併用が見られる。2~3段目附近は20cm×34cmから56cm×34cm大を、さらに上部には1m×30cm大の大石を積み上げている。間隙には角礫、亜角礫をもって充填する。壁下半部は15°~20°の転びが認められるが、上半部はあたかもドーム状にせり出しており、根石と最上壁石を結ぶ線は75°



の角度を有する。一方右壁は左壁とは様相が異なり、奥壁から2石目の根石が1石のみ74cm×69cmと大振りなのに対して、他の根石3石を含めて全体的には30cm×15cmから60cm×30cm大の用石をそろえて横積みと小口積みを併用して、転びはわずかに認められるがほぼ直立して積み上げている。中位に小角礫の使用が目立つ。床面は盗掘の際に大方荒されてしまっており、詳細は明確ではないが、掘り方床面上に14cm×12cmから48cm×32cmほどの扁平な角礫や割石を間隙無きよう敷設して床面としたものであろうと推定されるが、幸いにも玄室入口部附近において残存していた。しかし第2号、第3号両古墳の玄室に見られるような礎石を敷設したのち、玉砂利を敷き詰めた床面とは様相を異にしている。遺物の出土状況からも裏付けされる。袖部床面には長方形と楕円形を呈する平石2石が並列して小口に置かれ、間仕切石としている。

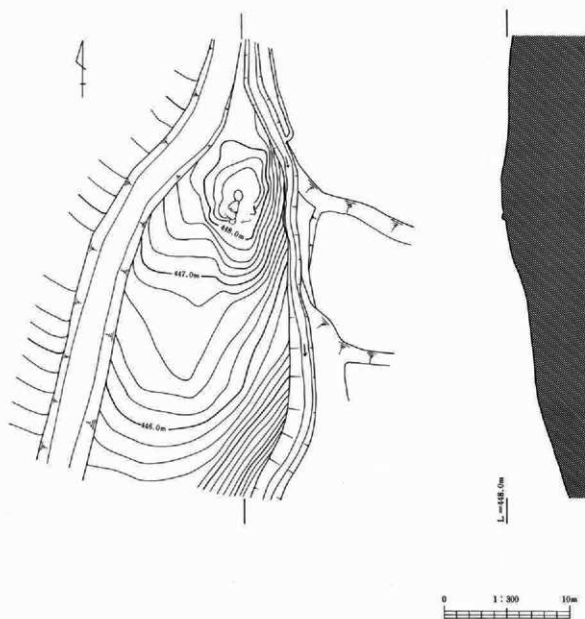
羨道は袖部および床面に設置されている間仕切石で玄室と区画される。全長1.34m、幅は袖部73cm、中央部94cm、開口部87cmを測り、玄室同様駒張りプランが見られ、最大値を中央部に取る。左壁より右壁に一層顕著である。根石は左壁に3石、右壁に4石の構成である。おおむね横積みを基調として、ほぼ玄室の左右各壁の積み方の技法がこの羨道部左右各壁においても踏襲されている。しかし開口部と袖部に関しては小口積みとし、根石から上部まで目の通る通し目積み技法が行われている。両壁とも直立して積み上げられており、若干のせり出しがあるものの、転びは認められない。床面は玄室床面とレベル差はほとんど無く、状況も玄室同様に割石や礫が丁寧に間隙なく敷設されている。なお開口部正面からわずかに凹地となって南方へ延びるよく締った平坦面が検出された。これは遺構と推定できるが、不明瞭な点が多く、断定し難い。

裏込めは玄室、羨道部とも同様な手順、技法が観察でき、左右両壁裏側はまず掘り方床面上に黒色土を10cm～15cmほどの厚さにたたき締め、次に小振りな角礫を中心に埋填しているが、奥壁裏側においては直接掘り方壁面との間隙に礫を埋填する。外縁のラインはそろえて盾形に石室を圍繞する。右壁裏側は塚の掘開工事の際に削られてしまい、不明瞭となっているが、左壁と同様な技法であろう。

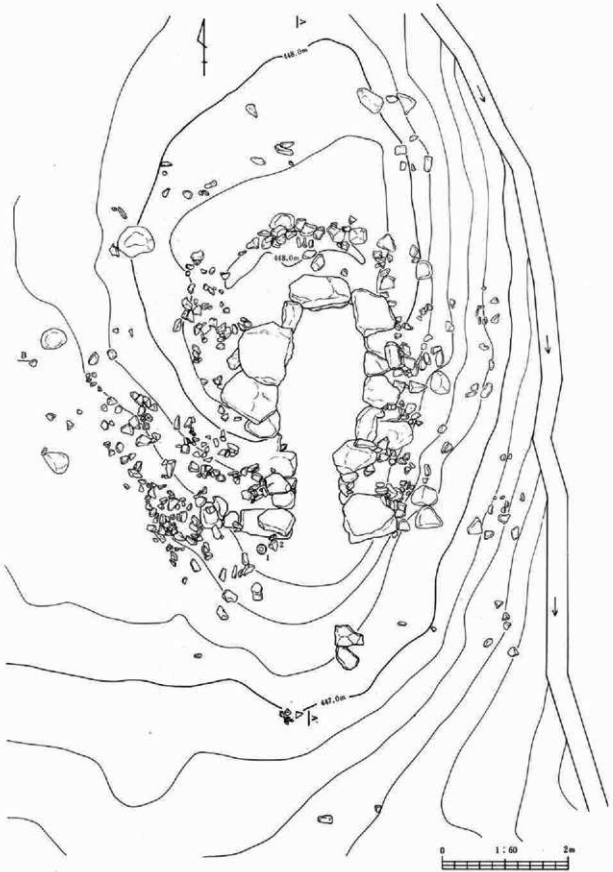
#### 遺物出土状況 (図205・図版74)

出土遺物は、石室内遺物(3・4)と石室外遺物(1・2)に分かれる。1・2は羨道入口部西側の石に接して出土している。3は玄室羨道部寄りに正位で出土し、4は石室内埋土出土である。

出土遺物 (図206・図版80) 出土遺物は、須恵器(1～3)と土師器(4)のみである。須恵器にはクワロ左回転の底部回転糸切り無調整の坏(1)、焼け歪みの著しい高台付坏(2)、高台状のつまみを有する蓋(3)、がある。いずれも8世紀末～9世紀初頭頃の所産と考えられる。土師器は、外面へラ削りの甕(4)のみで時期は不明。この土師器甕の出土した玄室奥壁寄りには掘り方まで攪乱が及んでいるため、古墳に伴うかどうか不明である。

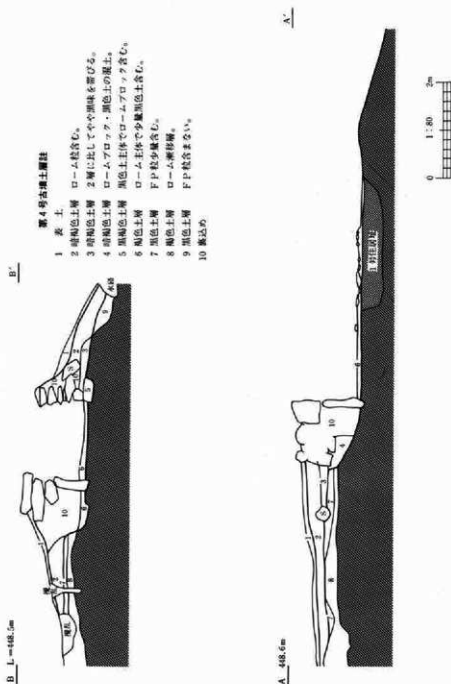


第202図 第4号古墳現況平面実測図

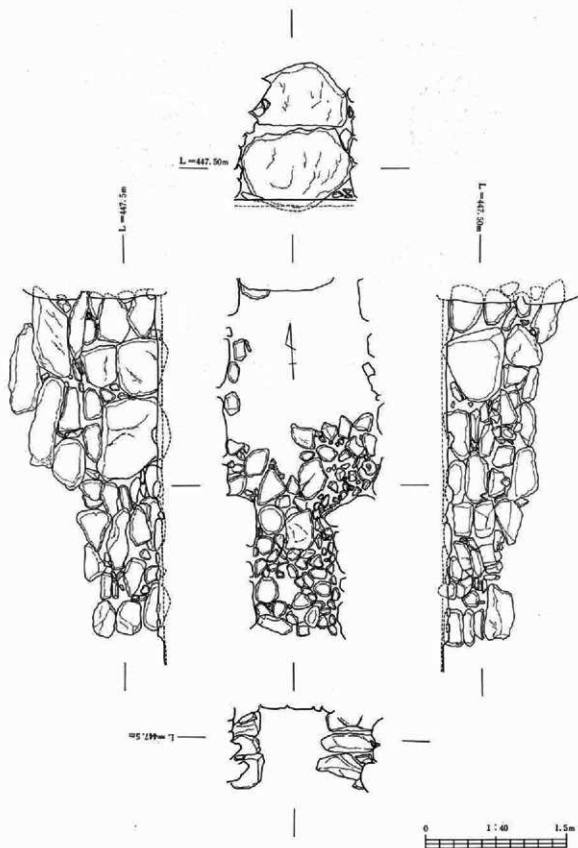


第203図 第4号古墳残存墳丘実測図

第4章 検出された遺構と遺物

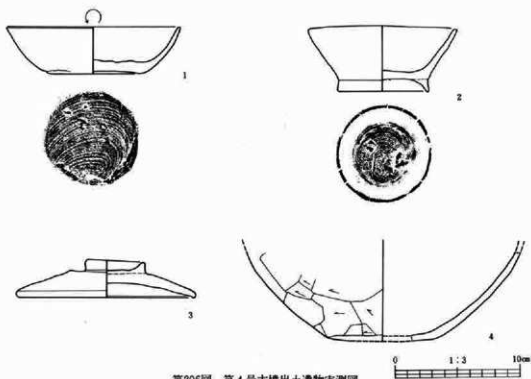


第204図 第4号古墳断面実測図



第205図 第4号古墳石室実測図

第4章 検出された遺構と遺物



第206図 第4号古墳出土遺物実測図

## 第2節 その他の遺構と遺物

## 1号住居址 (図207・208・図版75・80)

**位置** 第4号古墳の墳丘下に位置する。狭い尾根の頂上部に開けた僅かな平坦地に占地し、東側と西側は開折谷へ向って傾斜地形を示す。基盤のローム層を50cm掘り込んで床面とし、床面上35cmに榛名山ニッ岳起源の降下軽石(FP)がレンズ状に純層堆積している。

**平面形・規模** 一辺2.9mで北壁が他の三壁に対して長い不整形を呈し、方位はN-14°-Wを示す。

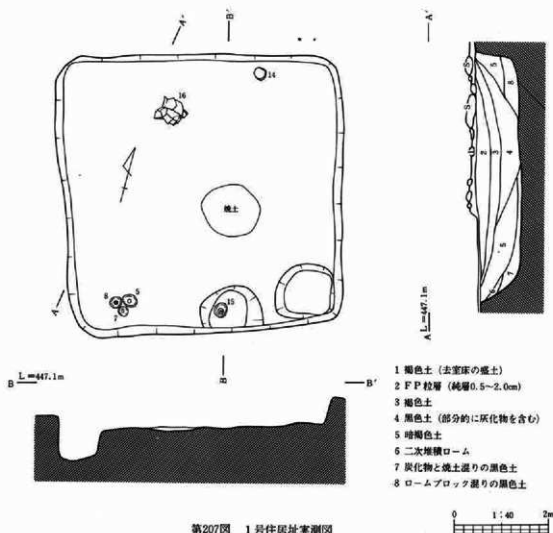
**壁** 確認した壁高は西壁50cm、東壁15cmを測る。

**床** 全体に平坦で踏み固められて硬い。貼床はなく、ローム層の地山を整えて生活面としている。

**柱穴・ピット** 壁内に主柱穴はない。南壁際中央部に直径50cm、深さ30cmの貯蔵穴様ピットを検出した。

**炉** 住居の中央から南東に偏した直径50cmの範囲に焼土を検出した。床面を深さ5cmの円形に掘り窪めて炉床とする。焼土の量は少なく、強く焼けた痕跡はない。

**出土遺物** 住居南西隅より3個体の埴、住居北西部と貯蔵穴様ピット内より甕が、それぞれ床面に密着して出土する。



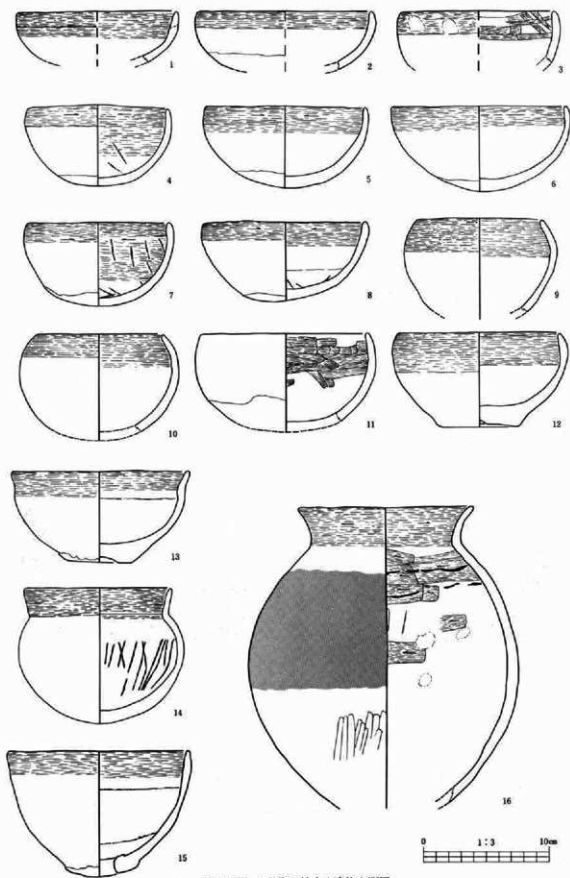
第207図 1号住居址実測図

表53 1号住居址出土遺物観察表

NO	器形	①口径 ②底径 ③器高( )推定	①胎土②色調③焼成	器形の特徴	成形・調整の特徴	①残存率②出土部位 ③種類④ロタロ回転 ⑤その他
1	坏	① (12.8)	①細砂含む。 ②黒褐色	口縁部屈曲して立ち上がる。	口縁部ヨコナデ。 底部へラ削り。	①片 ②床直 ③土師
2	坏	① (14.0)	①粗砂・確含む。 ②黒褐色	口縁部小さく内湾する。 体部内湾する。	口縁部ヨコナデ。 底部へラ削り。	①片 ②床直 ③土師
3	埴	① (12.2)	①粗砂含む。 ②褐色	口縁部直立気味。	口縁部内面ヨコナデ。 口縁部外面ナデ。	①片 ②床直 ③土師
4	埴	① 11.2 ② 6.5	①細砂・粗砂含む。 ②褐色	口縁部内湾する。 底部九底。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。内底へラ成形。 底部へラ削り。	①底部1部欠失 ②床面 ③土師
5	埴	① 13.2 ② 6.2	①細砂・粗砂含む。 ②褐色	口縁部肥厚する。 体部内湾する。底部九底。	口縁部ヨコナデ。底部内面へラ成形。体部内外面・内底ナデ。	①完 ②床面 ③土師
6	埴	① 14.0 ③ 6.8	①細砂・粗砂含む。 ②にぶい・黄褐色	口縁部ゆるく内湾する。 体部内湾する。 底部九底。	口縁部ヨコナデ。体部内外面・内底ナデ。 底部へラ削り。	①口縁部1部欠失 ②床直 ③土師
7	埴	① 11.4 ③ 6.6	①細砂・粗砂含む。 ②褐色	口縁部内湾する。口唇部肥厚する。体部内湾する。	口縁部ヨコナデ。体部外面・内底ナデ。内面へラ成形。	①完 ②床面 ③土師
8	埴	① 13.0 ③ 6.5	①細砂・粗砂含む。 ②褐色	口縁部直立気味。 体部内湾する。 底部九底。	口縁部ヨコナデ。体部内外面・内底ナデ。 底部へラ削り。	①口縁部1部欠失 ②床面 ③土師
9	埴	① (10.0)	①細砂・粗砂含む。 ②にぶい・褐色	口縁部内側に屈曲する。 体部直線的に開く。	口縁部ヨコナデ。体部内外面ナデ。	①片 ②床直 ③土師
10	埴	① (10.1)	①細砂・粗砂含む。 ②にぶい・褐色	口縁部・体部内湾。	口縁部ヨコナデ。体部内外面ナデ。	①片 ②床直 ③土師
11	埴	① (13.5)	①細砂・粗砂含む。 ②黒褐色	口縁部内湾。底部は九底と考えられる。	口縁部外面ヨコナデ。 口縁部内面ナデ。	①片 ②床直 ③土師
12	埴	① 13.1 ② 7.5 ③ 6.4	①細砂含む。 ②褐色	体部・口縁部内湾。 口縁部中位肥厚する。 底部平底で中央窪む。	口縁部ヨコナデ。体部以下内外面ナデ。	①完 ②床直 ③土師
13	埴	① 14.2 ② 5.6 ③ 7.2	①細砂含む。 ②明赤褐色	口縁部「く」の字状に外反する。体部内湾。	口縁部ヨコナデ。体部以下内外面ナデ。	①体部1部欠失 ②床直 ③土師
14	埴	① 11.8 ③ 10.8	①細砂含む。 ②明赤褐色	口縁部直線的に延びる。体部内湾。	口縁部ヨコナデ。 体部内面へライガキ。	①完 ②ビット底 ③土師
15	甗	① 14.4 ② 5.8 ③ 10.0	①細砂含む。 ②褐色	体部ゆるく内湾。底部器壁厚い。底部穿孔径2.4cm。	口縁部ヨコナデ。 体部以下ナデ。	①完 ②床面 ③土師
16	甗	① 15.0	①細砂含む。 ②明黄褐色	口縁部外反する。体部中位に最大径を持つ。	口縁部ヨコナデ。肩部内面ナデ。	①底部欠失 ②床面 ③土師



第2節 その他の遺構と遺物

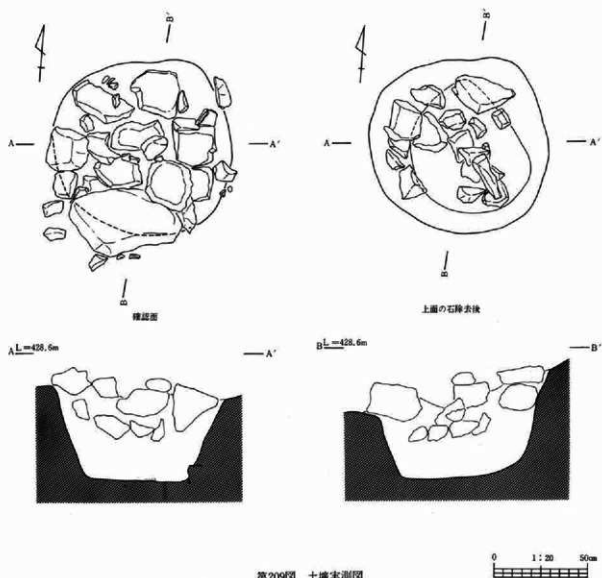


第208図 1号住居址出土遺物実測図

#### 第4章 検出された遺構と遺物

##### 土壌 (図209・図版75)

古墳の占地する尾根の先端、3号古墳の約2m南に位置する。平面形は90×97cmの不整形を呈し、深さは50cmを測る。底は平坦である。土壌は黄褐色土で充填されており、確認面では石英安山岩質溶結凝灰岩が少量に認められたが、底部には認められない。遺物は出土しておらず時期・性格共に不明である。



第209図 土壌実測図

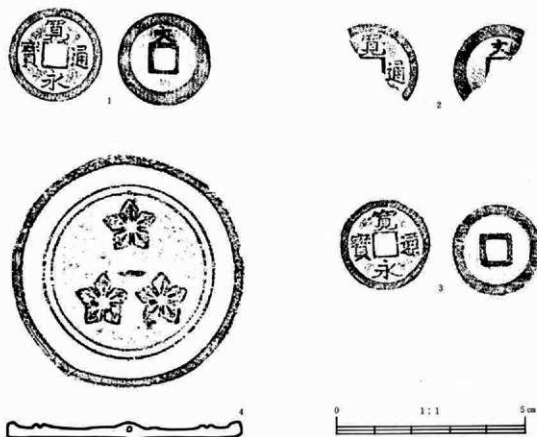
##### 第2号古墳東側墓地表採遺物 (図210・図版83)

第2号古墳の東側には現代の墓地があり、関越自動車道の建設に伴い、墓の移転が行われていた。そのため墓地は再度掘り返されていた。図210に示した遺物はこの墓地内で表採したものである。

遺物は「寛永通宝」3枚、和鏡1面が表採された。1～3は新寛永であり、1～2はいわゆる文銭である。これらの古銭は重なっていた痕跡が認められ、墓の築造か移転の際に刺繍したものと考えられる。4は「栞

「寛永通宝」で、径6.25cm・縁高3.8mm・縁幅2.8mmを測る。重さは、パラロイド減圧含浸後で57.0gである。境界が二重圏であることや、鏡背文様が散文であることから統山時代の所産と考えられる。

「寛永通宝」と「桔梗散鏡」には時期差が認められるため、墓地の築造・移転時に2種の遺構が破壊されたと考えられる。



第210図 第2号古墳東側墓地表探遺物

金山古墳群出土石器 (図211・212・図版81)

- No 1 やや粗雑な作りの尖頭器である。若干反りを持つ。表面はかなり磨滅している。
- No 2 縁辺部に自然面を残す石片である。石器製作途中生じた二次的な石片と考えられる。
- No 3 No 2と同様に母岩から剥ぎ取られた、縦長の石片である。
- No 4 両側縁はかなり薄く鋭利で、わずかに剝離調整がなされている。スクレーパーである。
- No 5 礫の自然面を残す、縦形の石匙である。木の葉状を呈し、つまみ部がやや曲がって付く、両側縁部は比較的いい調整がなされている。
- No 6 無基石匙、基部、縁辺部共に両面からの剝離調整がなされている。
- No 7 横形の石匙である。つまみ部は端寄りに付け、先端部はやや尖りぎみで、縁辺、刃部は両面からの

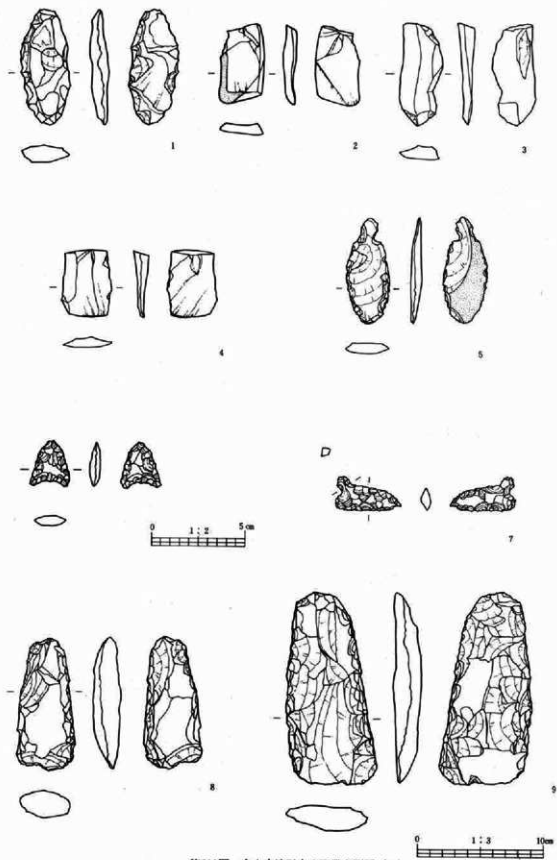
#### 第4章 検出された遺構と遺物

いねいな、剝離調整がなされている。

- No 8 打製石斧である。荒削りの後、打調整されている。刃部内外面に磨減痕が認められる。
- No 9 やや大型の換形打製石斧である。若干反りを持ち、外面の一部に自然面を残している。刃部にはほとんど調整は見られず、側縁に形を整えるための打調がなされている。
- No 10 換形打製石斧の、下部欠損品である。
- No 11 肉厚でやや不整形な分調型を呈す、荒い調整で縁辺部を作り出しているが、刃部は鈍角で、物を切るというには、不向きである。
- No 12 短冊型打製石斧の刃部欠損品である。わずかに反りを持っている。両側縁の歯潰しされた部分に、磨減痕が見られるが、着柄によるものだろうか。
- No 13 不定形石器、縁辺部に調整がなされている。刃部欠損品であろうか。
- No 14 換形打製石斧の基部欠損品である。割れ口は斜めになっており使用中に折れたものであろうか、片面に自然面を残しており、刃部はかなり磨減している。
- No 15 やや扁平な小礫を利用した凹石であるが、へこみは大きくいわゆる凹石とは趣を異にする。かなり意識して大きく穿たれており、使用によるものと考えられる磨減痕が見られる。裏面は、固定するために若干くぼめられており、使用痕も観察される。何かの作業を行なうため、物を固定する台石として使われたものと考えられる。約半分が欠損している。
- No 16 No15と同様に、扁平な礫を用いた凹石である。側面部が約半周程欠けている。又、側面の一部をハンマーとして使ったと思われる痕が見られる。
- No 17 一部に自然面を残す石制である。石器製作途中で生じた二次的な石片であろう。

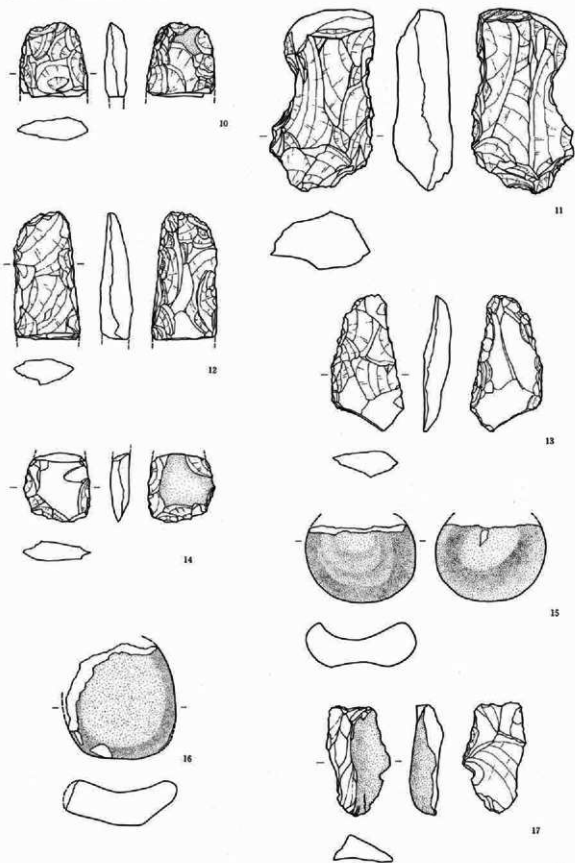
図番号	種別	出土地点	最大長 <sup>cm</sup>	最大幅 <sup>cm</sup>	最大厚 <sup>cm</sup>	重量 <sup>g</sup>	石質	備考
1	尖頭器		9.1	3.2	1.3	51.0	黒色頁岩	
2	石片		5.9	3.4	0.8	23.5	*	
3	*		8.0	3.2	1.2	33.0	*	
4	スチレーバー		5.4	3.7	1.1	23.5	頁岩	
5	石匙		8.3	3.3	0.8	23.0	黒色頁岩	自然面残す
6	石鏃		2.1	2.1	0.6	2.4	チャート	
7	石匙		5.2	2.6	0.8	9.5	*	
8	打製石斧		10.5	4.6	2.0	110.0	緑粒凝灰岩	
9	*		15.1	6.6	2.3	252.5	黒色頁岩	
10	*		5.8	5.4	1.6	71.0	*	刃部欠損
11	*		14.4	8.1	4.8	567.0	安山岩	
12	*		10.0	5.2	2.6	163.5	黒色頁岩	刃部欠損
13	*		10.8	5.6	2.1	107.0	*	
14	*		5.4	5.3	1.5	50.0	*	基部欠損
15	(凹石)		6.1	8.8	3.5	341.5	角閃石凝灰岩	機能的には石皿に属するものと考えられる。
16	*		9.3	8.7	2.9	425.0	石英閃緑岩	よく磨かれている。
17	石片		8.3	4.9	2.3	92.0	黒色頁岩	

表54 出土石器計測表

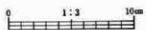


第211図 金山古墳群出土石器実測図(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第212図 金山古墳群出土石器実測図(2)



## 金山古墳群出土縄文式土器 (図213・214, 図版82)

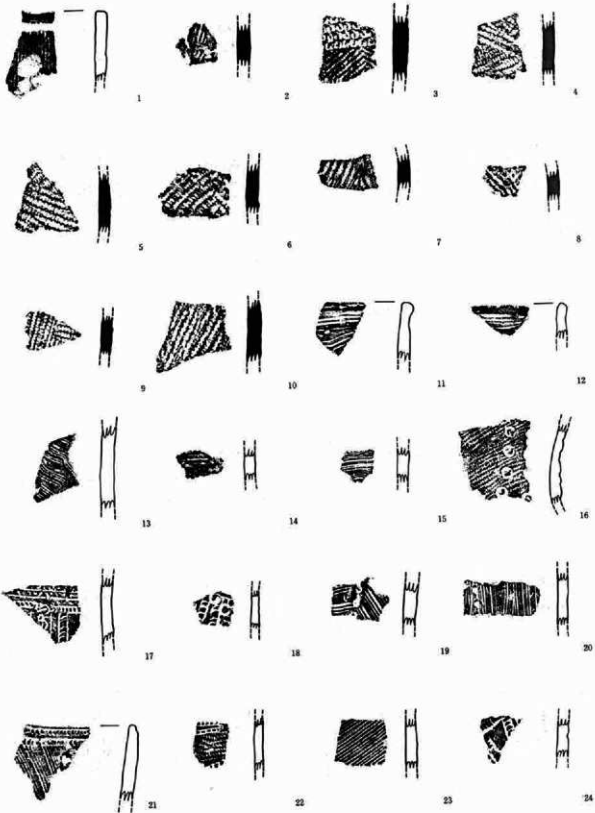
※ スタリントーンは含糠粒

NO.	文様の特徴	粘土・焼成・色調	備 考
1	器面は磨滅している。おそらく熱糸文(L)が口唇部下より施されるのであろう。	砂粒を含む。焼成は良好。色調褐色。	夏島式
2	内外面とも貝殻条痕を施す。	繊維含む。焼成は軟。色調褐色。	
3	ループ文と縄文を交互に施す。縄文はLRとRLの2種類で羽状効果を出している。	繊維含む。焼成はやや軟。色調にぶい褐色。	岡山式
4 1 6	4はRL(0段3条)とLR(1段2条)の斜位施文 RLの後にLRを施す。5、LR(0段3条)RL(0 段3条)の逆時計施文。6、おそらくLR(1段2条) とRL(0段2条)の斜位施文となろう。	4~6とも繊維含む。焼成は6がやや軟。 色調4、にぶい褐色、5、にぶい褐色、6、に ぶい褐色。	黒浜式
7	LRの横位施文と斜位施文で羽状効果を出している。	繊維含む。焼成は普通。色調褐色。	
8	全体に磨滅して詳細は不明 RLか	繊維含む。焼成はやや軟。色調にぶい褐色。	
9	LR(0段か1段3条)の横位施文、斜位施文で羽状効果を出している。	繊維含む。焼成は良好。色調褐色	
10	LR(0段3条)とつぶれて不明瞭な原体の2種を使用している。	繊維含む。焼成は良好。色調赤褐色。	
11 1 15	櫛状工具による沈線、11は横位斜位に。12・14は横位、 13は2~3本単位で波状、15は3本単位で横位と波状 に交互する。	11、12、15、少量の石英 14、雲母含む 色調11、12、13、14、にぶい褐色。15、明褐色。	讃岐*式
16 1 21	円形刺突文を配す。16、ゆるやかな波状口縁。多穀竹 管の回転(3回)による円形刺突文が2列垂下する。 地文は縄文(LR)。 17、平行沈線内部に櫛状工具を押し引き、幅広い連続 爪形文を縦に、幅広い連続爪形文を横に走らせ区画文 を構成する。2列の円形刺突文を縦位に施す。18、連 続爪形文を斜位、円形刺突文を斜位に施す。 19、櫛状工具による沈線を斜位に走らせ、円形刺突文 を縦位に配す所謂物骨文。20、櫛状工具による沈線を 縦位に施し、小形の円形刺突文を垂下させる。21、連 続爪形文を口縁直下に2列平行し、櫛状工具による沈 線を斜めに、小形の円形刺突文を下斜めより刺突し垂 下させる。	16、18、20、雲母含む。17、19、砂粒含む。 焼成19はやや軟、他はすべて良好。 色調16、にぶい褐色。17、18、にぶい黄褐色。 19、にぶい褐色。20、灰黄褐色。21、明赤褐色。	16、口唇部欠損
22	小形の多穀竹管を連続し、区画文を施す。地文縄文(R L)	少量の雲母含む。焼成は良好。色調黒褐色。	
23	櫛状工具による沈線	石英含む。焼成は良好。色調褐色。	
24 1 29	連続爪形文を施す。24、巾広の連続爪形文で*1形を 区画する。25、意匠文を配す。区画内の縄文はRL。 26、小形の連続爪形文を横位に施文。縄文はRL。 27、口唇部下に小形の多穀竹管の平行沈線で割り付け し、両工具で2列の連続爪形文を施す。28、やや巾広 の連続爪形文で意匠文?を構成する。29、やや巾狭の 連続爪形文を横位と斜位に走らせ、意匠文?を構成す る。	25、27~29、少量の石英含む。24、26、雲母含 む。焼成は、24、26、27は普通、25、28は良好、 29はやや軟。 色調24、赤褐色。25、明赤褐色。26、にぶい黄 褐色。27、褐色。28、にぶい褐色。29、黒褐色。	29、器面はかなり荒 れている。 讃岐b式

第4章 検出された遺構と遺物

NO	文様の特徴	胎土・焼成・色調	備考
30   34	浮線文を施す。30、棒状工具による刻みを持つ浮線を渦巻状に施すと思われる。浮線を囲むように連続爪形文を走らせる。31、刻みを持つ浮線を平行し、連続爪形文を浮線と交互に配す。32、巾広の連続爪形文と刻みを持つ薄い浮線文が交互しながら平行する。下部にかけて、爪形文と浮線文が弧を描きながら交互すると思われる。回転した円形刺突文を配す。33、矢羽状の刻みを持つ浮線文が渦巻を呈す。34、ふぞろいな浮線を平行する。編文〔RL〕	30、33、34、少量の石英を含む。31、32、少量の石英、長石を含む。浮線部も同様な胎土。焼成は良好 色調30、31、赤褐色。32、にぶい黄褐色。33、褐色。34、赤褐色。	32、円形刺突文 34、底部破片
35   36	沈線。浮線文を施す。35、「く」の字状に屈曲する頸部と胴部との境に刻みを相対的に施す浮線を2本平行させる。胴部には小形の連続爪形文による区画文が配される。36も35と同様な文様要素	35、36、少量の石英を含む。焼成は良好。 色調35、明赤褐色、36、赤褐色	
37   40	編文RLを施す。	37、39、40、少量の長石。38、石英、砂粒を含む。焼成38、やや軟。色調37、にぶい赤褐色。38、にぶい褐色。39、橙色。40、にぶい褐色。	
41   43	結節編文RLを施す。41、42、0段3条RLを施す。	41、42、砂粒多く含む。43、少量の石英を含む。焼成は良好。色調41、42、にぶい黄褐色。	41・42は同一個体。
44   46	編文LRを施す。	44、長石、石英を含む。焼成、45、46、やや軟。色調44、橙色。45、46、にぶい橙色。	46器壁一部割離。割れ口磨滅する。
47	編文LR、RLを交互に施文する。	石英を含む。焼成は普通。色調にぶい橙色。	
48	口縁部に棒状工具による刻みを施し、以下、沈線、刺突文を横位に走らせ、胴部にかけて棒状工具に沈線を斜位に施す。	極少量の砂粒を含む。焼成は良好。 色調褐色。	興津式

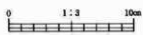
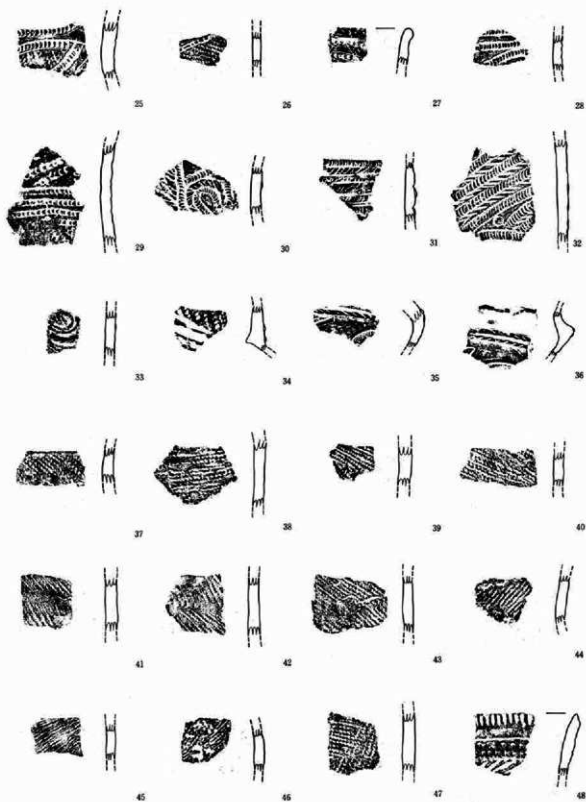




第213図 金山古墳群出土縄文土器実測図(1)



第4章 検出された遺構と遺物



第214図 金山古墳群出土縄文土器実測図(2)

## 第5章 金山古墳群第2号古墳出土人骨について

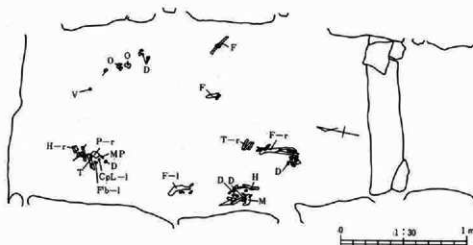
森本 岩太郎

### 1. はじめに

昭和56年9～12月の発掘調査により金山古墳群第2号古墳の石室内から発見された人骨は群馬県埋蔵文化財調査事業団から鑑定のため筆者宛に送られてきた。この人骨の所属年代は7世紀前半ごろと考えられるという。

### 2. 人骨の出土状況

第2号墳の横穴式石室の支室は約2.8×1.3m大で、南に向けて長さ約1.8mの羨道に続いている。支室の床面から保存状態の極めて不良な人骨片が散乱状態で発見された。これらの人骨片の支室内における分布状況を第215図に示す。概して人骨片は壁ぎわに多く、支室中央部では数が少ない。支室床面の覆土中からも保存不良な若干の人骨片や歯が出土している。しかし、床面上の人骨片と覆土中の人骨片との間には相互に移行が見られ、両者を厳密に区別できる訳ではない。人骨には直刀2・小刀1・銅劍3・鉄劍1・土製丸玉10・切子玉4・ガラス小玉4・金環6などが伴っており、また支室内からはシカの歯と思われるものや獣骨片などの動物遺体も若干見出されている。



第215図。支室内における人骨片の出土状況。記号はCpL、有頭骨と月状骨;F、大腿骨;Fb、腓骨;H、上腕骨;M、下顎骨;MP、中手骨と手の指骨;O、後頭骨;P、恥骨(乳児);R、橈骨;U、尺骨;V、椎骨;-l、左側;-r、右側をそれぞれ示す。

### 3. 人骨所見

人骨の保存が悪く、いずれも断片的である。骨表面の腐蝕も甚だしく、時には反り返って変形しているものも見られる。したがって、現場でパラフィンを用いて人骨片のくずれを防止する作業が行われている。発見された人骨片は大小合わせて80個余り、その外に遊離歯の破片が20余個あり、これらの総重量はパラフィンの重さを加えて約330gである。人骨片はできるだけ接着し復元に努めたが、散乱状態で発見されたこともあって、人骨片の個体識別は一部を除き著しく困難である。

#### (a) 個体数

個体数を調べるため人骨片と歯の両方を用いた。まず、骨片のうち、左右別の判然とするもので、明らか

第5章 金山古墳群第2号古墳出土人骨について

に異個体に属すると思われるものを選び出し、その数量を表55にまとめた。この表で最大数を示すのは左胫骨であり、少くとも成人2個体の存在が推測できる。この左胫骨は比較的細く小さいので女性骨と思われる。したがって、ここでは、左胫骨から女性2個体、右胫骨から男性1個体があると判断される。ほかに、乳児骨と思われる小さな右恥骨1個体がこれに加わる。

次に、遊離歯の数から個体数を推定してみよう。残存する遊離歯は床面上から3個、覆土中からの24個、合計27個である。これらの歯の内訳を表56に示す。この表から最大数をもつのは $\overline{7}$ であり、少くとも3個体分の歯が存在することが分かる。ただし、27個のうち、 $\overline{4}$ は全く咬耗を受けていないので未萌出の歯であり、7～9歳の小児のものであろうと思われる。したがって、遊離歯の数からは成人3個体と小児1個体が少なくとも存在すると言ってよい。後述するように、下顎骨に丁植している歯のなかに $\overline{7}$ が1本あるので、歯から推定される個体数は結局少くとも成人4体・小児1体・計5個体である。

以上の所見に基づいて、骨片および歯から推測される個体数を総括すると成人4体(男性1体・女性2体・性別不詳1体)・小児1体・乳児1体の計6個体分が少なくとも数えられるということになる。

表55 主要人骨の数

( ) 内は乳児骨

	左側	右側
後頭骨	1	
下顎骨	1	
上腕骨		1
橈骨	1	
尺骨	1	
月状骨	1	
有頭骨	1	
恥骨		(1)
大腿骨	1	1
胫骨	2	1
腓骨	1	

(b) 人骨片および歯の形状 (表55・56)

各骨片ならびに歯のうち、特徴の把握できるものにつき、その概略を記すことにする。

頭蓋骨については後頭鱗の破片が2個ある。いずれも玄室の東北部にある鉄刀付近から得られたもので、1つは約5×3cm大の頂平面の一部であり、他の1つは約5×4cm大の横洞溝を含む部分である。両骨片はおそらく同一個体に属すると思われるが、外後頭隆起が欠くので、イニオンの発達度は不明で、性別も分からない。

下顎骨片は玄室の西壁中央付近にあったもので、下顎体の左半とこれに続く左下顎枝前下方の一部である。この下顎骨は比較的小型で、オトガイ棘も小さい。おそらく女性のものであろう。左オトガイ孔は1個で、 $\overline{5}$ のすぐ前下方に位置する。歯および歯槽の状況は次のとおりである。

$\overline{4}$  ×  $\overline{3}$   $\overline{4}$  ○ ●  $\overline{7}$  ×

表56 残存する遊離永久歯の種類と数

上顎歯数			1	2			1	1	1	1	1	1	2		11		
歯種	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	計
下顎歯数		2	1	1	1	2	2						1	2	3	1	16

ただし数字は残存する歯、○印は歯槽開放、●印は歯槽閉鎖、×印は欠損のため状況不明のことをそれぞれ表わす。歯の咬耗度はⅢが Broca の第 3 度、またⅣが同第 2 度である。歯の咬耗度が進んでいることから、この個体の年齢は熟年期と思われる。なお、下顎骨付近の床面から発見された遊離の 6 の咬耗度は第 2 度で、下顎骨と同一個体に属する可能性が高い。

遊離歯の数などについては、(a)個体数の項で述べたが、これらの歯の大きさ・色調なども区々で、歯の咬耗度も第 0 度から 2 度までのものが混在し、一部を除いては個体識別は困難である。歯の咬合様式については、上・下顎の切歯の咬耗状態から鉄状咬合型であると推定される。

椎骨片としては、玄室東北部の鉄刀付近および玄室西北部の鉄釘付近にあった頸椎弓の破片 1 個と胸椎弓の破片 2 個がある。

上肢骨片は比較的まとまって出土した。玄室の西北部の鋼釘付近から出土した約 8 cm の長さの右上腕骨体上部には、比較的大きな小結節と幅広い結節間溝が見られ、外科頸も比較的大きいので、男性の右上腕骨を思わせる。そのほか、左右不詳の右上腕骨片と思われるものが 3 個（長さ約 11・6・5 cm）ある。この右上腕骨体片の付近からは左桡骨片と左尺骨片とが得られた。左桡骨片は長さ約 4 cm の骨体上部で、良く発達した桡骨粗面が見られる。左尺骨片も長さ約 8 cm の骨体上部で、鈎状突起は残っているが、肘頭を欠く。左尺骨片近くには、また若干の手骨が認められる。すなわち、手根骨としては左月状骨と左有頭骨各 1 個、中手骨の骨体 2 個、指節骨体 1 個である。以上の上肢骨片は出土地点が近接し、骨の性状も類似するので、同一個体に属するものと推測される。

下肢骨については、まず玄室西北部に見られた前述の手骨付近から、乳児のものと思われる小さな右恥骨片が発見されている。

大腿骨片としては、玄室の西壁中央付近および玄室中央部南寄りから発見された左右 1 対と見られる大腿骨体上部とそれに続く大腿骨頭の下部からなる破片（左約 17 cm、右約 23 cm 大）がある。左右とも骨体上部は比較的扁平で、骨体中央部ではピラステルの形成が認められる。ほかに、大腿骨片と思われるものは 6 個（各約 13・10・9・7・5・4 cm 大）があるが、いずれも左右不明である。5 cm 大の破片には発達した大腿骨粗線が見られる。

脛骨片は左右の判明する骨体部が 3 個ある。すなわち、玄室の中央部南寄りから発見された左脛骨体（約 18 cm 大）と玄室の西壁中央付近にあった左脛骨体（約 15 cm）と玄室中央部付近にあった右脛骨体片（約 13 cm 大）とである。これらのうち、左脛骨は女性、右脛骨体は男性のものと思われる点については (a) 個体数の項ですでに記した。左脛骨は細く、骨体断面は不等辺三角形を呈し、右脛骨は太く、自然に変形しているが、その前縁は鋭く、骨体横断面はやはり不等辺三角形と思われる。

玄室西北部の鋼釘付近からは長さ約 8 cm の左腓骨体中央部の破片 1 個が得られた。腓骨体の外側面は浅く陥凹している。

#### 4. まとめ

金山古墳群第 2 号古墳横穴式石室の玄室内から散乱状態で出土した 7 世紀前半ごろの人骨片は、少くとも成人 4 体（男性 1・女性 2・性別不詳 1）、小児 1 体、乳児 1 体の合計 6 個体分であると推定される。歯の咬合様式は鉄状咬合型で、齧蝕はほとんど見られず、咬耗度の進んだ個体を混在する。大腿骨体上部は比較的扁平で、大腿骨体中央部にはピラステルの形成が認められる。脛骨体の横断面は不等辺三角形を呈する。

## 第6章 考 察

金山古墳群は、三峰山から延びる金山丘陵地の斜面および尾根上に11基が数え上げられ、本調査において岡越自動車道路線内にかかる4基を調査した。第1号古墳を除く他3基は墳丘の破壊が進み、形状、規模をはじめ、その他施設も不明であったが、石室は4基とも破壊は多少受けているものの、幸いにも比較的良好に残存し、石積み法、平面構成、副葬品類や、第4号古墳下部より発見されたF P純層が覆土上部に堆積を見る土師器使用の住居址等、貴重な資料を得た。以下、調査の結果を踏まえて問題点を指摘し、検討を加えながら概観したい。

## 墳 丘

最も残存状態が良好な第1号古墳を見ると、施設として周堀、テラス、列石が挙げられる。旧表土（F Pを多量に含む黒色土）を平坦に整形して基壇としたのち同心円を描き、周堀外縁、列石の根石を設定したと思われる。盛り土は列石の内側、つまり石室と裏込めを被覆するのみに施されている。周堀が終わる墳丘北西部から西側を回る部分は地山を削り裾部として整え、一方列石の根石から周堀内縁までの間はテラスとして地山面をそのまま採用し、標高が低くなる東側は表土を若干内縁に向かって傾斜を造り出して東西の墳丘斜面のバランスを取っている意図が伺える。しかし南側正面より比較すると、東西裾部における周堀の存否によってややアンバランスな感を受けるが、墳丘全体からの量感に対して省力化が認められ、少ない労働力で構築できたものと推測される。テラスに関して近辺の類例として、渋川市の空沢遺跡<sup>11)</sup>におけるF A層下の古墳および子持村の中ノ峰古墳<sup>12)</sup>の報告例がある。前者はF A、後者はF P降下前の構築なるもので、F P降下後の所産である本古墳とは時代差があり、その様相に多少の相違が認められるものの、継続した墳丘構造における一施設として捉えられるであろう。

現状に巡る列石については盛り土の崩落を防止するための押えとして考えられる。石室後背部では中軸線を境として見た場合、東西10石目までは2段（一部に3段か）に横積みされ、以降は1段にて各石端部を接合させて設置する構造上の変化は、天井石が露出するほど墳頂部での盛り土が崩落しているため、全面的に葺かれていたのか、あるいは原状を呈しているのか明確には判断しかねるが、石積みされた上面がよく整っている点や斜面、テラス、周堀に崩落した礫の検出状況により、普遍的に見られる葺石の概念とは異なりほぼ原状通りであろう。後述する墳丘の企画に基づいて設置していることは明白である。

旧表土を地山整形して墳丘構築を行なう工法は、第2号、第3号、第4号古墳においても、わずかに残存する墳丘下の土層面の所見からも同様である。

次に墳丘の企画構成については、占地する地形等に制約されるものの、構造物である以上石室同様一定の尺度が用いられ、企画ののって規模、その他施設が設定されたと思われる。横穴式石室の尺度論については尾崎喜左雄博士が細かく検討され、多数の研究者が意欲的にこの問題に取り組み、発展的成果を増している。博士は35cmを一尺とする高麗尺<sup>13)</sup>と30cmの唐尺を大別して、群馬県における横穴式石室の年代観の相異に鋭く考察を加え、隔年基準を与えた。近年、宋尺、晋尺なる新しい尺度論が展開されて、F A層、F P層をキーポイントとして、副葬品たる土師の隔年作業からも横穴式石室の受容期および尺度の時期差が再考され、試案されている。

こうした状況の中で、F P降下後に構築された本古墳の使用尺度を推測してみると、各計測値の検討から高麗尺の使用が推定できる。必ずしも各数値において整合するとは限らないが、また、墳丘測量図に高麗尺

の35cm方眼を当てて、さらに同心円を描き検証すると、中心を石室奥壁中央部に置き、周堀外縁においては半径20尺、列石は半径10尺の弧上に合致するが、周堀内縁は枳然としない。しかし半径15尺のライン上にて東西の端部が一致してくる点は、やや付会気味であろうか。墳丘西側裾部の範囲は、等高線の流れから周堀外縁の延長線に変換線が認められる。よって本古墳は高麗尺使用の直径40尺に企画した14mの規模を有する円墳である。他3基については不幸にも破壊が著しく、不明である。

## 石室

### (1) 石材

4基の石室を観察すると、表面が茶褐色の流紋岩質凝灰岩と黒色味のかかる灰色の溶結凝灰岩の2種が大別できる。特色として前者は非常に堅緻で、かつ比重が高く板状に節理する性質を有する。供給源はすぐ背後の金山である。後者は三峰山麓一帯に存在し、三峰山から岩塊流として崩落してきたもので、やや軟質であるが、大石、巨石が字名に「石畑」と称される地域があるほど数多く散在している。

両者を比較すると、その性質上、前者は裏込め用と閉塞用に、また2号、3号墳に敷設されている硝石として主に使用され、後者は比較的大きな石材として確保できるために、扁平大石の類が天井石、奥壁に、そして2号、3号、4号墳の壁体に共通して使用され、両者の選択状況が顕著に見られる。よって1号墳の藍用石に前者を使用している点は他と相異し、特異な存在と言えよう。

工法を見ると、石室根石を設定したのちに藍用石を積み上げていく過程で、裏込め、盛り土作業を並行して行っているが、壁用石の小振りな箇所には根石下部から、逆に大石の部分(例えば奥壁)においてはロームと粘質性の褐色土をもって埋填したのちに裏込めを積んで行く。上部より壁体に加わる荷重配分を考慮した綿密な石積み法が成されている。

### (2) 平面構成

石室の平面構成については形式として袖無型、両袖型の2つのタイプに分けられる。中には玄室に胴張り認められるものもあり、多岐にわたっている。ここで前項での計測値を高麗尺と唐尺をもって換算して、使用された尺度を探<sup>4)</sup>ってみることにする。

1号古墳は袖無型と思われるが、開口部が著しく崩壊せられ、その際に墳丘も削り取られている痕跡が認められるため、石室の現存長がさらに延びる可能性が懸念されるために言及は避けたい。

2号古墳は袖無型で、間仕切石をもって玄室と閉塞部を区画している。玄室は弱い胴張りが認められ、前項で述べた計測値を両尺度(以下( )内の数値は唐尺とする)で換算すると、全長10.3尺(12.1)、玄室長は7.9尺(9.2)、閉塞部は長さ2.4尺(2.8)。幅は奥壁で3.5尺(4.1)、中央部4.5尺(5.4)、間仕切石3.7尺(4.2)、開口部3.2尺(3.8)、となり、各数値の操作、許容範囲を考慮すると、本古墳の使用尺度は、その整合性から見て唐尺が使用されたと推定できる。よって企画構成は全長を12尺に決定して、玄室長9尺、閉塞部3尺、奥壁の幅は4尺、中央部5尺、閉塞部を4尺に企画したものと考えられる。

3号古墳も2号古墳同様袖無型であり、2号古墳で試みた石室各箇所における換算値の計算順序をもって行なうと、全長は12.9尺(15.1)、玄室長は8.4尺(9.7)、閉塞部4.6尺(5.5)、幅は奥壁で5.2尺(6.1)、中央部4.7尺(5.8)、間仕切石で4尺(4.6)、閉塞部3.2尺(3.7)となる。各換算値を比較すると、全長はほぼ互いに完尺値に近いが、その他は高麗尺に整合してくる点が多く指摘できる。しかし玄室長においては、間仕切石内縁では8.4尺となり、8尺では間仕切石に到達できない。一方、9尺に取った場合には外縁よりわずかに内側に来る。したがって玄室は9尺に設定し、閉塞部を4尺に取る見方が妥当であろう。幅は奥壁で5尺、間仕切石4尺、開口部3尺に企画したと考えられる。

## 第6章 考 察

4号古墳は他の3基と異なり両袖型を呈し、玄室に弱い胴張りが見られる。同様に試みると、全長は10.4尺(12.2)、玄室長は6.1尺(7.2)、羨道部長は4.3尺(5)。幅は奥壁で3.6尺(4.3)、中央部4.6尺(5.4)、袖部4.2尺(5)、玄室入口2尺(2.4)、羨道部中央2.6尺(3.1)、開口部2.4尺(2.8)となり、比較的新しい様相を呈する本石室は以上の事から唐尺使用が推定され、石室全長を12尺、玄室長を7尺、羨道部5尺、幅は奥壁4尺、中央部5尺、袖部5尺、羨道部3尺、に企画したと考えられる。

以上述べてきたように、各計測値から割り出した換算値には、それぞれ無理を強いた箇所もあり、釈然としない点も多い。しかし墳丘の項で試みた一定の方眼を実測図に当てて見ると、一概には言えないものの、よく照合し、見事な企画性、意図が伺える。尾崎博士の研究によると、袖無型から両袖型へと石室構築技術の一般的推移があるとし、玄室長と奥壁幅の比が大きいほど古い様相を示すとも指摘されている。さらに総合的に検討を重ねて構築年代を追求してみたい。

### 遺 物

本古墳群出土遺物は古墳に一般的に見られるもので、遺物個々に特筆すべきものはない。しかし、2号古墳の人骨と遺物の出土状態は石室内の片付け時期を考えるうえで貴重な資料である。人骨は若干の例外は認められるものの下肢、上肢、頭骨の各部位に集骨された状態を示し、護身具は付されていた部位の周囲より出土している。また大刀は頭骨の上に、銅は粉化した骨の上に乗っており、人骨下からの遺物の出土はなかった(図189)。以上のことから2号古墳の石室は最終埋葬遺体が骨化した後に集骨と遺物の片付けが行われたと考えられる。またその過程は集骨した後遺物を片付けた可能性が高い。

### 追 葬

2号、3号、4号古墳には追葬された証拠が認められる。特に2号古墳については、床面上や覆土中から残存状態が不良な人骨、歯を検出している。詳細は後述の通りであるが、3号古墳は人骨は検出できなかったが、壁石が直接床面上に崩落していたために盗掘を免れ、遺物や閉塞石が残存していた。この閉塞石に2次的な積み方が認められた。4号古墳は玄室内袖部附近と開口部外側左壁際に時代の下る須恵器が供献されていた。

2号古墳は、その所見から成人4体(男性1、女性2、不詳1)と小児1体、乳児1体の計6体埋葬されていることが判明した。横穴式石室は堅穴式石室と性格上異なり、元来追葬を目的としたものであり、本古墳の場合、端的に言えば計5回の追葬の事実があり、葬られている人達の関係は想像の域を出ないが、家族的な役割りを果しているであろうか。

3号古墳は間仕切石にて玄室と閉塞部を区画していることは前述の通りである。玄室内精査の際、左壁の奥より2石目が約半分程で割れ、奥壁側が床面に転倒していた。この転倒した壁石を復元あるいは除去しようともせず、その上部に時期は不明であるが、閉塞石を積み上げていた。

4号古墳より出土した須恵器は明らかに後出する形式であり、本古墳の使用されていた期間が判明する良好な資料である。

### 構築年代

本調査において調査した4基の古墳について種々の様相を概観してきたが、それらを踏まえた上で構築された年代について論及してみたい。

群馬県は全国でも有数の火山県であり、年代決定の際に示標となるテフラ層が現在数多くの発掘現場にて検出され、重要な役割りを果している。その中のひとつであるF P層に着目<sup>13)</sup>し、層の上下関係から古墳の隔年大系を樹立したのが尾崎喜左衛門博士である。博士はF P降下年代を7世紀初頭頃と推定されたが、近年



の膨大な資料の増加と再検討により、6世紀後半頃と位置付けられるようになってきた。

4基の古墳において、わずかに残存する墳丘下にて旧表土中にこのF Pが混在することが確認され、年代の上限を決定する上で極めて重要な根拠となり得る。よって4基の古墳はすべてF P降下後に構築されたものであり、4号古墳にて出土した須恵器は古墳使用および祭祀の期間を如実に示していると言えよう。しかし構築時期を明確にし得る土器が検出されず(2号古墳出土の土器器杯に関しては、出土状況に疑問が残る)判然としない点があるが、石室構築の際に使用された尺度と形式の相違から検討すると、前述の通り高麗尺の使用が認められるのは1号古墳と3号古墳である。高麗尺は唐尺に先行して使用され、唐尺使用の2号古墳、4号古墳は前者より後出するものと考えられる。さらに本県においては、唐尺使用は終末期古墳に多い。

本古墳群に近接して旧古馬牧村第13号古墳と同82号、同65号古墳の報告例が見られるが<sup>6)</sup>、また沼田市の奈良古墳群の数例、昭和村の久呂保中学校裏古墳の様相を照合して比較検討を試みた結果から、1号古墳および3号古墳を6世紀末から7世紀前半、4号古墳に先行すると思われる2号古墳を7世紀前半から中葉に、4号古墳を7世紀後半に構築されたものと推定される。なお4号古墳出土の須恵器杯、蓋は形式から8世紀後半から9世紀初頭に比定すべく、本古墳における追葬、祭祀がこの時期まで継続していたことを物語っている。また4号古墳下部から検出された土器器使用の住居跡は、覆土上部をF Pが純堆積し、F P層下の土器群として捉えられるが、鬼高1期に比定されよう。これは利根、沼田地方はもとより、群馬県におけるF P層に関連した示標として良好な一括資料と言えよう。

金山古墳群をはじめとする三峰山麓には数多くの古墳が散在し、利根、沼田地方には総数445基が数え上げられ、確認されず埋れている古墳もあろう。それらは河川を背景に群を形成して存在する。古墳に葬られた人々、構築した人々があり、生活した集落も存在するはずである。本古墳群の調査と並行して行なわれた後田遺跡が、西方指呼の位置にあり、時期を同じくする住居跡が相当数検出されている。さらに同遺跡から600m程南西に段丘を1段降りた地点の師B遺跡においても同時代の住居跡が検出されている。また、当時の生活基盤が農耕である以上、生産の場所である水田跡、畑跡が必ず営まれていたはずである。古墳のみならず、集落構成、生産遺跡の3者を一層総合的、具体的に検討されなければならぬ。その点において、後田遺跡、師B遺跡の解明は極めて重要と言えよう。検出された住居址群と本古墳群を含む後閑、神田地区はその数において、三峰山西麓地域にて中心的役割を占めていたと思われる。現在において、国道17号線沿いに立ってみると、冬場は北面する谷川連峰から吹き降ろす寒風が冷く感じるのに対して、後田遺跡の占地する南傾斜面は、背後の三峰山の影響が直接には作用されずに比較的温暖な地域となっている。集落の設営条件にも大きく誘因しているものと考えられる。

古墳群の解明には群のすべてを調査した上でなければ全体を総括することができないし、各古墳群相互の相関関係も必須事項のひとつでもある。故に今回の調査はこれらの意味においても意義があったと言えるであろう。当地方は残念ながら農業生産遺構が発見されていない。よって遺構の検出例を待つとともに、地域的性格を個々の状況から総合的に立って解明していかねばならない。

#### 註

- (1) 大塚昌彦他 「空穴遺跡発掘調査報告書」 渋川市教育委員会 1979
- (2) 松本浩一 「中ノ峯古墳発掘調査報告書」 子持村教育委員会 1980
- (3) 尾崎善左衛門 「横穴式古墳の研究」 1966
- (4) 松本浩一 「横穴式石室における副葬に関する一考察」『古代学研究—53—』 古代学研究会 1968
- (5) 『特集・火山灰堆積物と遺跡—1—』『月刊考古学ジャーナル—1—』 1961
- (6) 『古馬牧村史』 月夜野町誌編纂委員会 1961



# 圖 版





遺跡遠景（西より）



発掘前近景（北より）



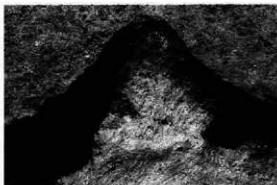
1号住居址平面



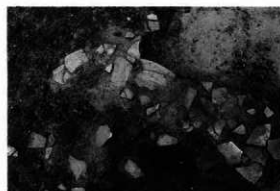
1号住居址掘り方



1号住居址カマド火床面



1号住居址カマド掘り方



1号住居址遺物出土状況



2号住居址遺物出土状況



2号住居址床面



3号住居址床面

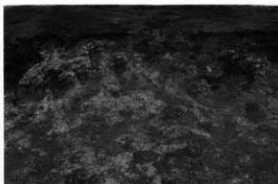


3号住居址掘り方





3号住居址カマド火床面



3号住居址カマド掘り方



3号住居址遺物出土状況



竪穴状遺構遺物出土状況



竪穴状遺構



5号住居址床面



5号住居址掘り方

大釜遺跡



5号住居址カマド火床面

図版 7



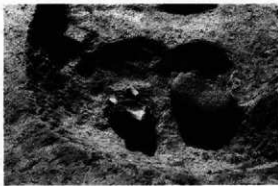
5号住居址カマド掘り方



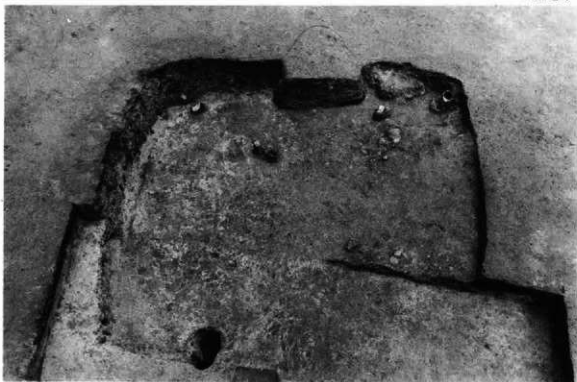
5号住居址カマド天井石遺存状況



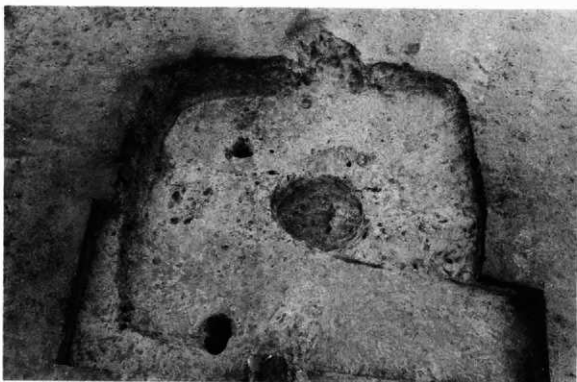
5号住居址遺物出土状況



5号住居址遺物出土状況



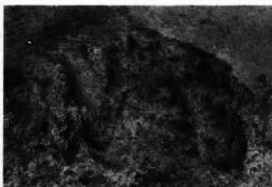
6号住居址大床面



6号住居址掘り方



6号住居址カマド火床面



6号住居址カマド掘り方



6号住居址遺物出土状況



6号住居址遺物出土状況



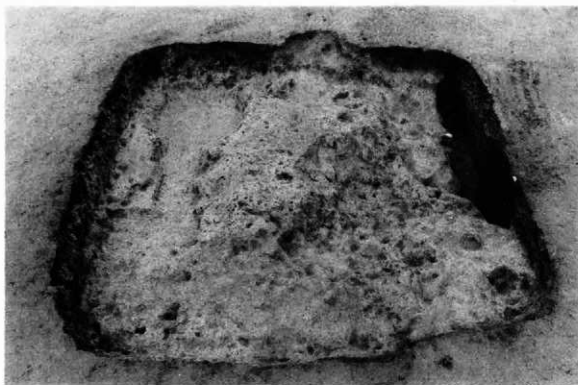
6号住居址遺物出土状況



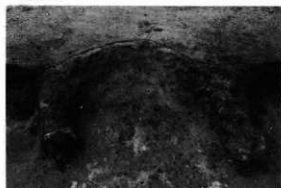
6号住居址遺物出土状況



7号住居址床面



7号住居址掘り方



7号住居址カマド火床面



7号住居址カマド掘り方



7号住居址遺物出土状況



7号住居址遺物出土状況



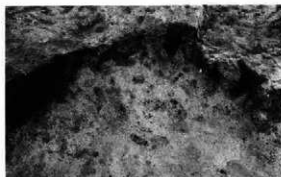
8号住居址床面



8号住居址掘り方



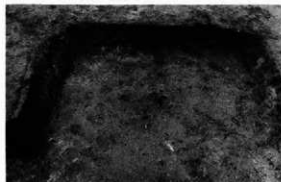
8号住居址カマド火床面



8号住居址カマド掘り方



8号住居址遺物出土状況



8号住居址遺物出土状況





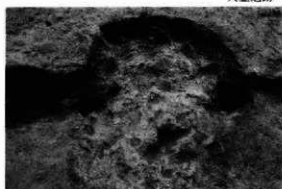
9号住居址床面



9号住居址掘り方



9号住居址カマド火床面



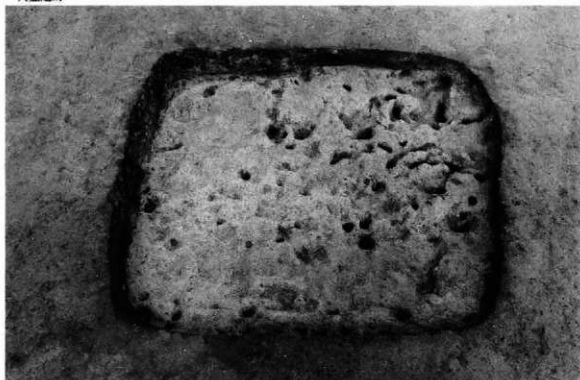
9号住居址カマド掘り方



10号住居址床面



10号住居址遺物出土状況



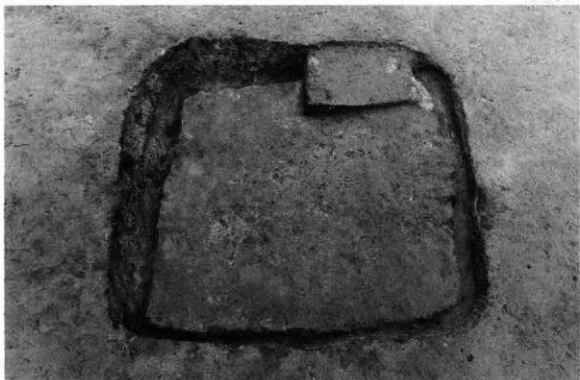
10号住居址掘り方



10号住居址遺物出土状況

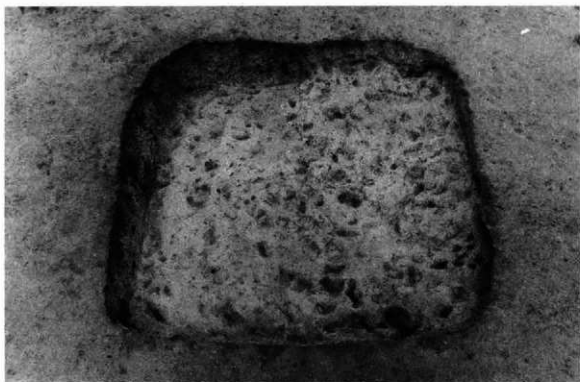


10号住居址遺物出土状況



11号住居址

11号住居址床面



11号住居址掘り方



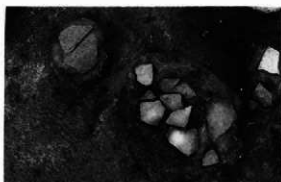
11号住居址カマド火床面



11号住居址カマド掘り方



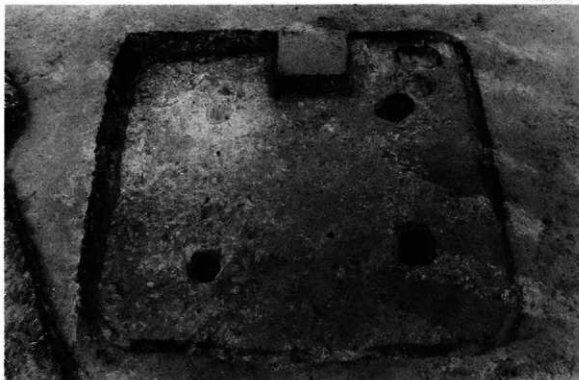
11号住居址遺物出土状況



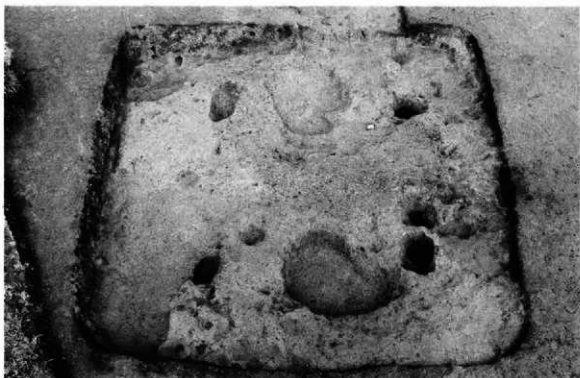
11号住居址遺物出土状況



11号住居址遺物出土状況



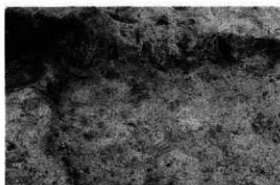
12号住居址床面



12号住居址掘り方



12号住居址カマド火床面



12号住居址カマド掘り方



12号住居址遺物出土状況



12号住居址遺物出土状況



12号住居址遺物出土状況



13号住居址床面

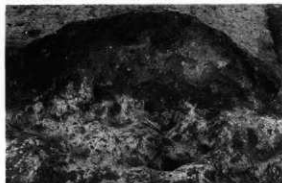


13号住居址掘り方





13号住居址カマド火床面



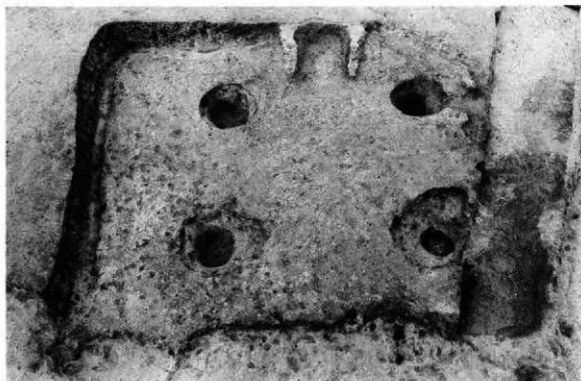
13号住居址カマド掘り方



13号住居址カマド遺物出土状況



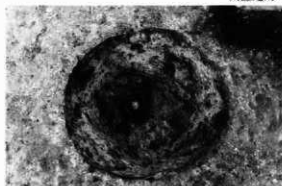
13号住居址カマド遺物出土状況



14号住居址床面



14号住居址遺物出土状況



14号住居址柱穴内遺物出土状況



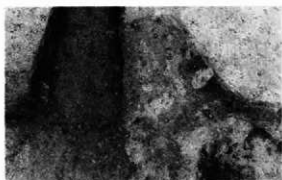
14号住居址遺物出土状況



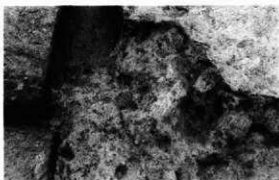
15号住居址床面



15号住居址掘り方



15号住居址カマド火床面



15号住居址カマド掘り方



16号住居址床面



16号住居址堀り方



16号住居址カマド火床面



16号住居址カマド廻り方



16号住居址遺物出土状況



16号住居址遺物出土状況



17号住居址床面



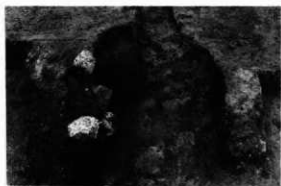
17号住居址掘り方



18号住居址床面



18号住居址掘り方



18号住居址カマド火床面



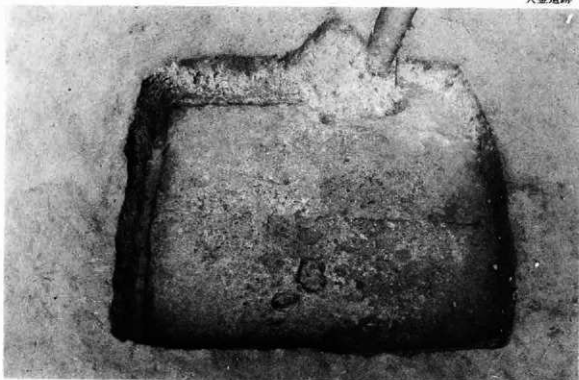
18号住居址カマド掘り方



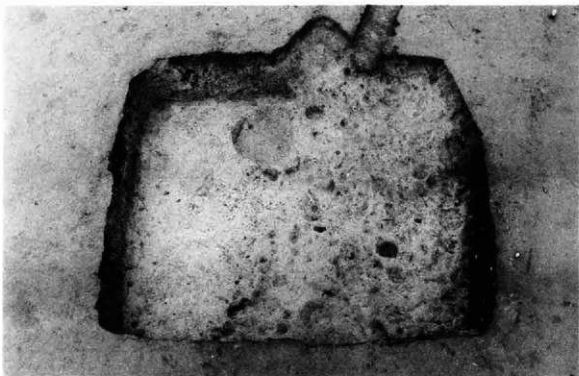
18号住居址遺物出土状況



18号住居址遺物出土状況



19号住居址床面



19号住居址掘り方





19号住居址カマド火床面



19号住居址カマド掘り方



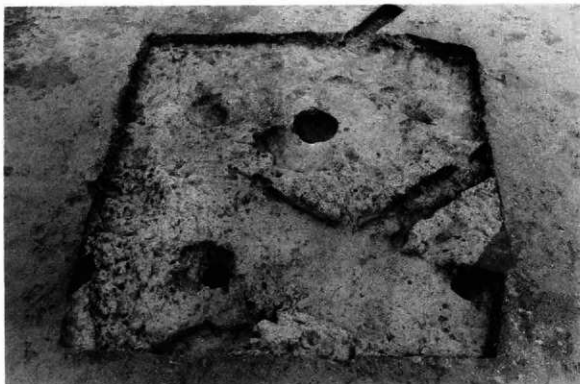
19号住居址遺物出土状況



19号住居址遺物出土状況



20号住居址床面



20号住居址掘り方



20号住居址カマド火床面



20号住居址遺物出土状況



20号住居址遺物出土状況



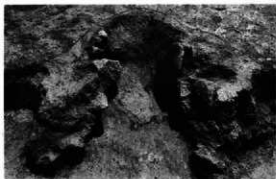
20号住居址礫石出土状況



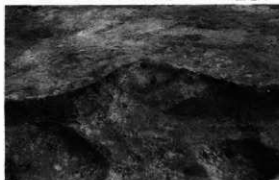
21号住居址床面



21号住居址掘り方



21号住居址カマド火床面



大釜遺跡

21号住居址カマド掘り方



21号住居址遺物出土状況



21号住居址遺物出土状況



21号住居址遺物出土状況



21号住居址遺物出土状況



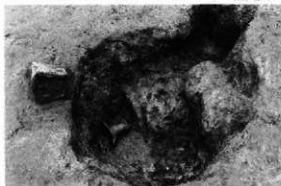
22号住居址床面



22号住居址掘り方



22号住居址カマド火床面



22号住居址遺物出土状況



22号住居址遺物出土状況



22号住居址遺物出土状況



22号住居址遺物出土状況



22号住居址遺物出土状況



23号住居址床面



23号住居址掘り方



23号住居址カマド火床面

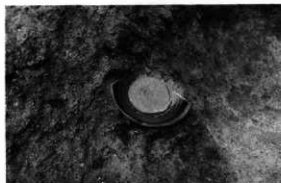


大釜遺跡

23号住居址カマド掘り方



23号住居址遺物出土状況



23号住居址遺物出土状況



24号住居址床面





24号住居址掘り方



24号住居址カマド火床面



24号住居址カマド掘り方



24号住居址遺物出土状況



24号住居址遺物出土状況



25号住居址床面



25号住居址掘り方

大釜遺跡



25号住居址カマド火床面



25号住居址カマド掘り方



25号住居址遺物出土状況



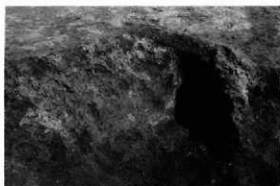
25号住居址遺物出土状況



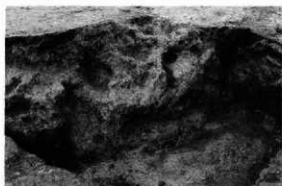
26号住居址床面



26号住居址掘り方



26号住居址カマド火床面



26号住居址カマド掘り方



26号住居址遺物出土状況



26号住居址遺物出土状況



27号住居址床面



27号住居址掘り方



27号住居址カマド火床面



27号住居址カマド掘り方  
大釜遺跡



27号住居址遺物出土状況



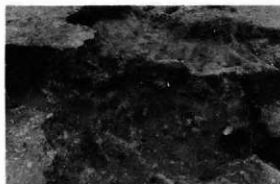
29号住居址床面



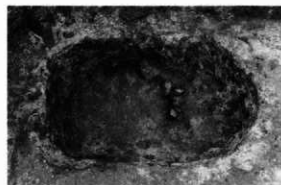
29号住居址掘り方



29号住居址カマド火床面



29号住居址カマド掘り方



29号住居址貯藏穴



30号住居址床面

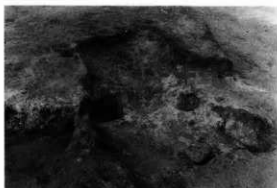


30号住居址掘り方





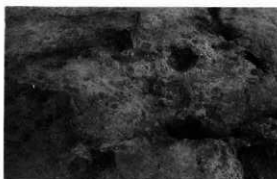
30号住居址カマド火床面



30号住居址カマド掘り方



30号住居址カマド(北西より)



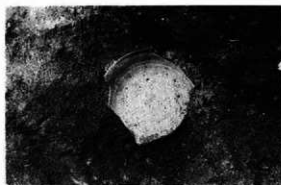
30号住居址カマド掘り方(北より)



井戸状遺構



井戸状遺構遺物出土状況



井戸状遺構遺物出土状況



井戸状遺構遺物出土状況



井戸状遺構遺物出土状況



井戸状遺構遺物出土状況



1号土壇



1号土壇遺物出土状況



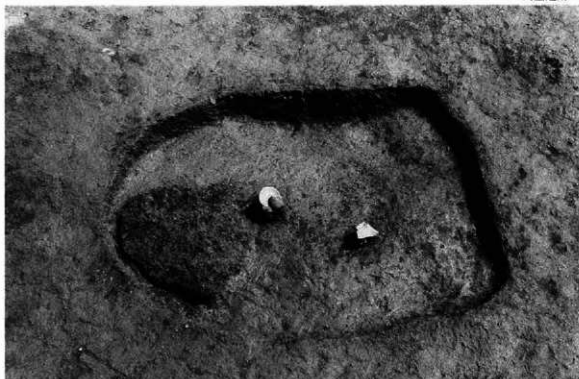
1号土壇遺物出土状況



2号土壇遺物出土状況



2号土壇遺物出土状況



2号土壇



配石遺構（検出状況）



配石遺構 (玉砂利除去後)



配石遺構 (配石除去後)



第2ピット群 (南より)



第4ピット群 (南より)



1-2



1-1



2-1



3-1



3-2



3-3



3-7



3-5



3-16



3-17



3-19



3-21



3-22



3-23



3-25



3-29



3-26



3-36



3-43



3-44



3-45



3-46



3-47



3-41



3-40



3-37



3-38



3-48



3-50



3-49



3-39



3-52



3-51



4-1





5-3



5-5



5-6



5-7



5-8



5-9



5-11



5-10



6-1



6-3



6-4



6-7



6-6



6-5



6-8



6-13



6-12



7-1



7-11



7-13



7-10



7-16



7-18



7-15



7-24



8-4



8-6



8-7



9-1



9-2



10-1



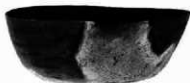
10-3



11-1



11-2



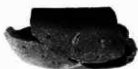
11-4



11-3



11-7



11-5



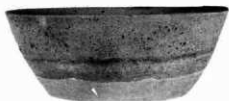
12-2



12-7



12-6



12-9



12-11



12-10



12-14



12-15



12-21 $\frac{1}{4}$



12-20



13-8



13-3



13-2



13-9



13-16



14-1



14-2



14-6



14-8



14-7



14-5



14-16



14-11



14-10



I



I



14-13



14-14



16-2



14-15



16-24



16-21



16-23



16-31 16-32 16-33 16-34



17-2



18-1



18-13



18-14



18-18



18-19



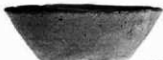
18-22



18-23



19-2



19-3



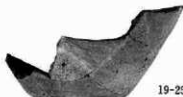
19-20



19-29



19-26



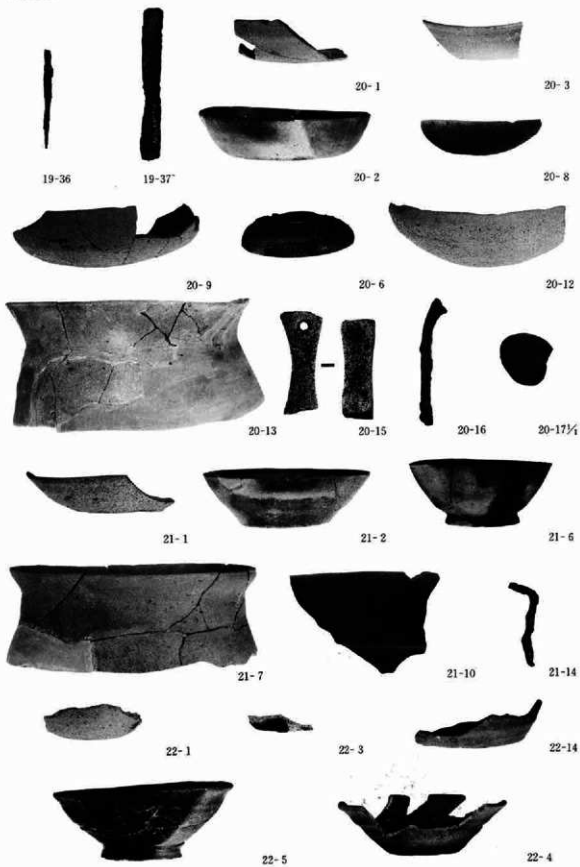
19-25



19-35



19-31





22-32



22-13



22-16



22-20



22-18



22-15



22-21



22-23



22-25



22-23



22-22

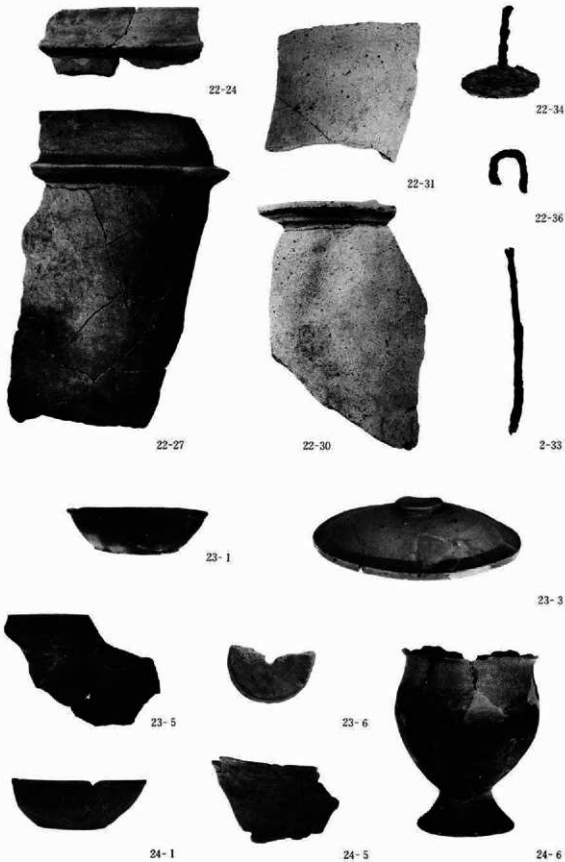


22-26



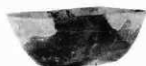
22-28



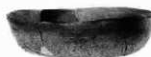




25-2



26-2



26-3



26-13



27-1



26-7



30-8



1土-1



2土-2



井-1



30-4



井-5



井-7



2土-1



井-3



井-8



井-12



井-13



井-10



井-11



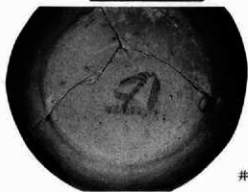
井-9



3-23



3-32



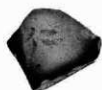
井-1



井-2



14-6



14-4



9-1



22-4



22-1



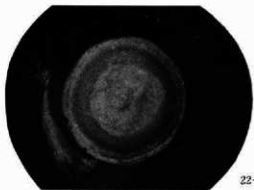
22-1 (内)



表土



22-3



22-5



26-13



第1号墳 墳丘 (南より)



第1号墳列石 (北より)



第1号墳列石 (東より)



第1号墳 墳丘（北より）



第1号墳石室



第1号墳盛土除去後（北より）



第1号墳 掘り方（南より）



第2号墳調査前（南より）



第2号墳閉塞石（南より）





第2号墳石室



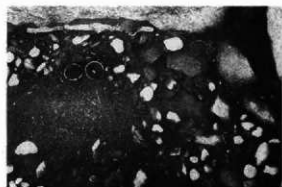
第2号墳棺床面



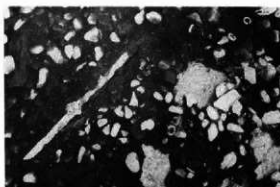
第2号墳人骨出土状況



第2号墳人骨出土状況



第2号墳遺物出土状況



第2号墳遺物出土状況



第2号墳棺床面玉砂利除去後



第2号墳掘り方(南より)



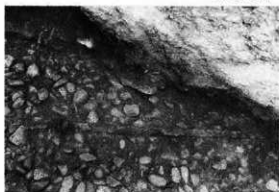
第3号墳調査前（南より）



第3号墳墳丘及び石室（南より）



第3号墳閉塞石（奥壁より）



第3号墳鉄刀出土状況



第3号墳遺物出土状況



第3号墳鏡目出土状況



第3号墳棺床面玉砂利除去後



第3号墳掘り方（南より）



第4号墳調査前（南より）



第4号墳丘(南より)



第4号墳石室(南より)



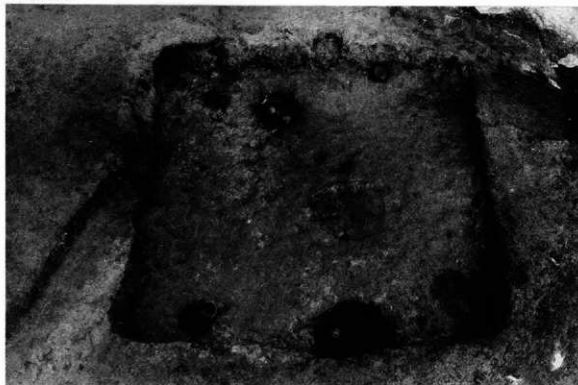
第4号墳石室(北より)



第4号墳石室内遺物出土状況



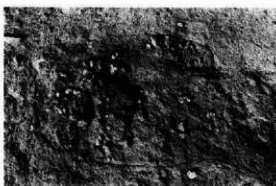
第4号墳入り口部遺物出土状況



第1号住居址



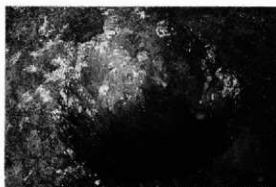
第1号住居址F.P.堆積状況



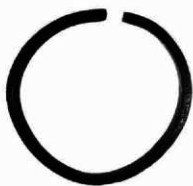
第1号古墳南東部スラグ出土状況



第1号土壇調査前



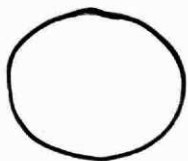
第1号土壇調査後



2-1



2-2



2-3



2-4



2-5



2-6



2-7



2-8



2-9



2-10



2-11



2-12



2-13



2-14



2-15



2-16

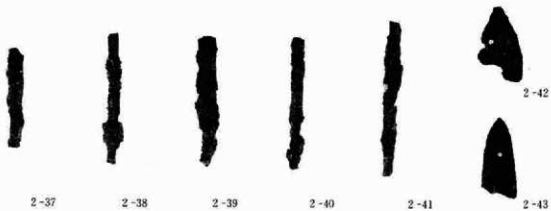


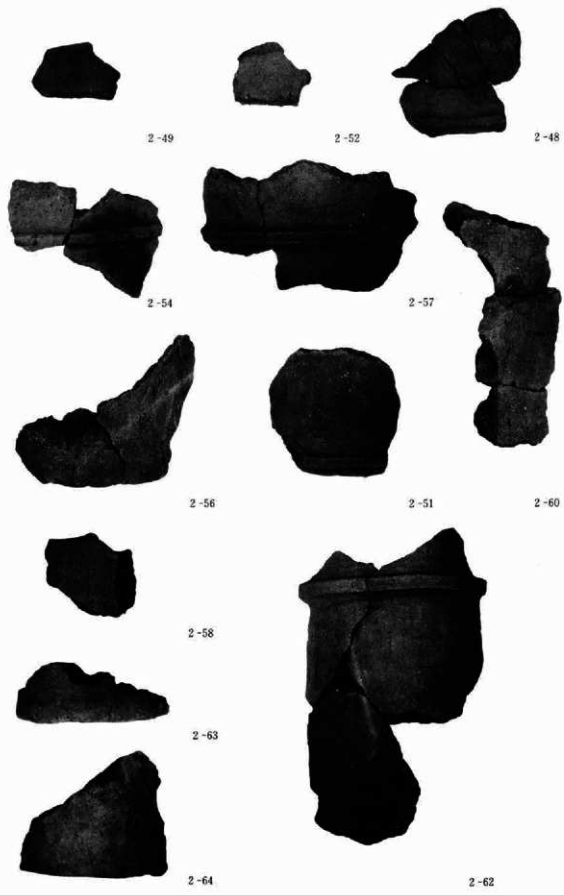
2-17



2-18









3-1



3-2



3-3



3-4



3-5



3-6



3-7



3-9



3-10



3-8



3-11



3-12



3-13



3-14



3-15



3-16



3-17



3-18



3-19



3-20



3-21



3-22



3-23



3-24



3-25



3-26



3-27



3-28



3-30



3-29



3-31



3-32



4-1



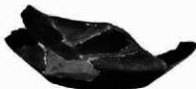
4-2



住-7



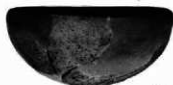
4-3



4-4



住-11



住-6



住-4



住-5



住-8



住-12



住-13



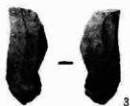
住-14



住-15



住-16



1





1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



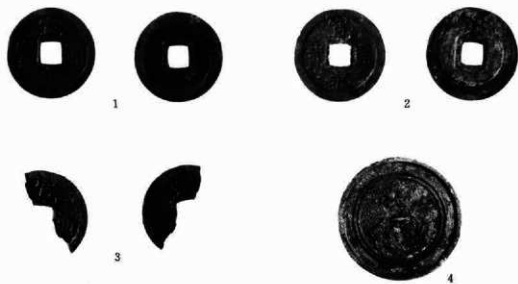
34



35



36



第2号古墳出土人骨





—関越自動車道（新潟線）地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第7集—

## 大釜遺跡・金山古墳群

---

印刷 昭和59年9月28日  
発行 昭和59年11月1日

編集 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
電話(0279)52-2511(代表)

発行 群馬県考古資料普及会  
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
電話(0279)52-2511(代表)

印刷 株式会社 前橋印刷所

---

大釜遺跡・金山古墳群 正誤表

頁	誤	正
4頁 第3図	1 8号住居址	1 5号住居址
	1 5号住居址	1 6号住居址
	1 6号住居址	1 7号住居址
	1 7号住居址	1 8号住居址
	3 0号住居址	2 9号住居址
	2 9号住居址	3 0号住居址
170頁 21行目	(4)	(4 7)
圖版 61	2—3 3	2 2—3 3